

# 桑原地区の遺跡

樽味立添・樽味高木・樽味四反地  
桑原西稲葉1・2次・桑原田中  
経石山古墳・枝松3次

——本文編——

1992

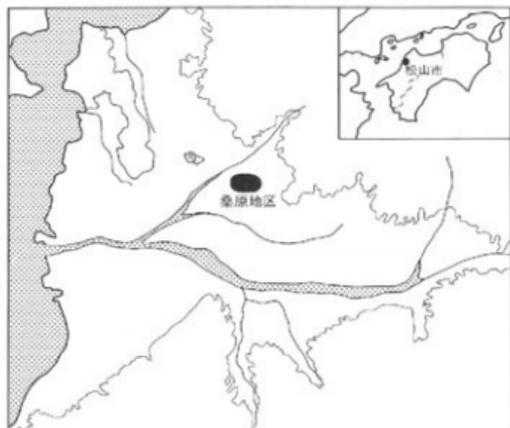
財松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

# 桑原地区の遺跡

樽味立添・樽味高木・樽味四反地  
桑原西稲葉1・2次・桑原田中  
経石山古墳・枝松3次

——本文編——



1992

(財)松山市生涯学習振興財団  
埋蔵文化財センター



樽味立添遺跡出土の「貨泉」

## 序

平成3年10月1日財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが、埋蔵文化財発掘調査の迅速化と円滑化を図るため発足しました。

この報告書は、その財団法人となって第一弾となるものです。

ここ桑原地区の遺跡は、松山平野東部にあり、西流する石手川左岸の沖積扇状台地上に位置し、近年実施された発掘調査結果によると、縄文時代から奈良時代、さらには中世にまたがる幾つもの関連遺構のあることが確認されています。

今回報告する遺跡のなかで特筆すべきものとして、古墳期前期の一括遺物資料が得られた樽味高木遺跡、前方後円墳として知られる経石山古墳周溝を検出し墳墓の規模に新事実を記すことのできた同古墳1次調査、中四国初となる「貨泉」を出土した樽味立添遺跡等、古代桑原地区の様子を彷彿させる遺構・遺物が数多く発見され貴重な成果を得ることができました。

このように内容の充実した報告書を刊行できますのも、事業者及び地権関係者の埋蔵文化財に対するご理解と、ご協力のたまもであります。また、調査指導をいただいた愛媛大学下條信行教授の外、ご協力いただきました関係各位の皆様に対し厚くお礼申し上げます。本報告書が広く文化財の保護、学術研究、さらには教育文化の向上の一助になれば幸いです。

平成4年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団

理事長 田中 誠一

## 例 言

1. 本書は、松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センターが昭和63年～平成2年に樽味2丁目58番地、樽味4丁目204番地1・2、桑原1丁目981番地1・2、982番地1・2、桑原2丁目971番地2、桑原6丁目499番地1、桑原4丁目10番地1、枝松3丁目310番地1で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺構・遺物の実測・製図は、調査担当者の責任のもと、水口あをいを中心に愛媛大学の学生他の援助を受けた。
3. 遺構は呼称を略号で記述する場合がある。竪穴式住居址：S B、溝：S D、土壇：S K、自然流路：S R、欄列：S A、柱穴：S P、掘立柱建物：掘立、性格不明：S Xである。
4. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケールドに記した。
5. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
6. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本書の執筆は、松村淳（第8章）、田城武志・高尾和長・真木潔（第7章）、田城武志・大森一成（第9章）、山之内志郎（第2章）、梅木謙一・宮内慎一（第1、3、4、5、6、10、12章）が分担し行った。浄書は、高橋恒が行った。
8. 写真図版では、遺構写真の作成、遺物写真の撮影・作成を調査担当者の指示のもと大西朋子が行った。
9. 自然科学的分析は、早田 勉氏（古環境研究所）の協力と寄稿をまた、考察として重松佳久氏（松山市教育委員会文化教育課）から寄稿を頂いた。記して感謝申し上げます。
10. 編集は、調査担当者が協議の上、梅木謙一が行った。校正においては、田城武志・宮内慎一・水口あをいの協力を得た。

# 本文目次

第1章	はじめに……………(田城武志・梅木謙)……………	1
	1 調査に至る経過 2 組織	
第2章	立地と環境……………(山之内志郎)……………	4
	1 地理的環境 2 歴史的環境	
第3章	樽味立添遺跡の調査……………(梅木謙一・宮内慎一)……………	15
	1 調査の経過 2 層位 3 調査の概要 4 小結	
第4章	樽味高木遺跡の調査……………(梅木謙一・宮内慎一)……………	79
	1 調査の経過 2 層位 3 調査の概要 4 小結	
第5章	樽味四反地遺跡の調査……………(梅木謙一・山之内志郎)……………	105
	1 調査の経過 2 層位 3 調査の概要 4 小結	
第6章	桑原西稲葉遺跡(1次)の調査……………(梅木謙一・宮内慎一)……………	121
	1 調査の経過 2 層位 3 調査の概要 4 小結	
第7章	桑原西稲葉遺跡(2次)の調査……………(田城武志・高尾和長)……………	135
	1 調査の経過 2 層位 3 調査の概要 4 小結	
第8章	桑原田中遺跡の調査……………(松村 淳)……………	153
	1 調査の経過 2 層位 3 調査の概要 4 小結	
第9章	経石山古墳の調査……………(田城武志・大森一成)……………	211
	1 調査の経過 2 層位 3 調査の概要 4 小結	
第10章	枝松遺跡(3次)の調査……………(宮内慎一)……………	227
	1 調査の経過 2 層位 3 調査の概要 4 小結	
第11章	松山市桑原地区におけるテフラ分析調査……………(早田 勉)……………	236
第12章	石手水系に於ける旧石器文化……………(重松佳久)……………	239
第13章	桑原地区の調査成果と課題……………(梅木謙一)……………	243

## 挿 図 目 次

第1図	松山周辺の地形分類 (縮尺1/50000).....	5
第2図	松山平野の主要遺跡分布図 (縮尺1/50000).....	7
第3図	桑原地区の遺跡分布図 (縮尺1/15000).....	9
樽味立添遺跡		
第4図	調査区位置図 (縮尺1/2500).....	18
第5図	基本層位図 (縮尺1/20).....	19
第6図	調査地区割図 (縮尺1/400).....	20
第7図	遺構配置図 (縮尺1/100).....	21
第8図	S B13測量図 (縮尺1/60).....	23
第9図	S B13出土遺物実測図 (1) (縮尺1/4).....	24
第10図	S B13出土遺物実測図 (2) (縮尺1/4).....	25
第11図	S B4 測量図 (縮尺1/60).....	27
第12図	S B4 出土遺物実測図 (縮尺1/4).....	
第13図	S B1 測量図 (縮尺1/60).....	28
第14図	S B1 出土遺物実測図 (縮尺1/3).....	29
第15図	S B3 測量図 (縮尺1/60).....	30
第16図	S B3 出土遺物実測図 (縮尺1/4).....	
第17図	S B7・12測量図 (縮尺1/60).....	31
第18図	S B7 出土遺物実測図 (縮尺1/4).....	32
第19図	S B6 測量図 (縮尺1/60).....	34
第20図	S B6 出土遺物実測図 (1) (縮尺1/4).....	35
第21図	S B6 出土遺物実測図 (2) (縮尺1/4).....	36
第22図	S B8 測量図 (縮尺1/60).....	37
第23図	S B9 測量図 (縮尺1/60).....	38
第24図	S B9 出土遺物実測図 (縮尺1/4).....	39
第25図	S B5 測量図 (縮尺1/60).....	40
第26図	S B5 出土遺物実測図 (縮尺1/4).....	41
第27図	S B10出土遺物実測図 (縮尺1/4).....	42
第28図	S B11測量図 (縮尺1/60).....	43
第29図	S B11出土遺物実測図 (1) (縮尺1/4).....	44
第30図	S B11出土遺物実測図 (2) (縮尺1/4).....	45

第31図	S B 2 測量図 (縮尺 1/60) .....	46
第32図	掘立 1 ~ 4 測量図 (縮尺 1/80) .....	47
第33図	掘立 5 ~ 8 測量図 (縮尺 1/80) .....	48
第34図	掘立 9 ~ 10 測量図 (縮尺 1/80) .....	49
第35図	掘立 11 ~ 14 測量図 (縮尺 1/80) .....	50
第36図	掘立 15 ~ 17 測量図 (縮尺 1/80) .....	51
第37図	掘立 18 測量図 (縮尺 1/80) .....	52
第38図	S K 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4) .....	53
第39図	S K 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4) .....	54
第40図	S X 2 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4) .....	55
第41図	S X 2 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4) .....	56
第42図	S X 3・4 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	57
第43図	貨泉実測図 (縮尺 1/1)	
第44図	包含層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4, 1/2) .....	58
第45図	包含層出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4) .....	59
樽味高木遺跡		
第46図	遺構配置図 (縮尺 1/100) .....	83
第47図	調査区位置図 (縮尺 1/1000) .....	85
第48図	基本層位図 (縮尺 1/20)	
第49図	S B 6 測量図 (縮尺 1/60) .....	86
第50図	S B 6 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	87
第51図	S B 5 測量図 (縮尺 1/60) .....	88
第52図	S B 5 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4) .....	89
第53図	S B 5 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4) .....	90
第54図	S B 5 埋土・S K 5 上面出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	91
第55図	S K 5 測量図 (縮尺 1/60) .....	93
第56図	S K 5 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	94
第57図	S K 5 埋土・S K 5 関連出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	95
第58図	S K 7 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	96
樽味四反地遺跡		
第59図	西壁土層図 (縮尺 1/40) .....	109
第60図	遺構配置図 (縮尺 1/400) .....	111
第61図	S D 1 測量図・S D 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/40, 1/3) .....	112
第62図	S D 3 測量図・S D 3 出土遺物実測図 (縮尺 1/40, 1/3) .....	113

第63図	旧河川・包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/3, 1/4).....	114
第64図	第Ⅲ層・落ち込み出土遺物実測図 (縮尺 2/3).....	115
第65図	第Ⅲ層出土遺物実測図 (縮尺 2/3).....	116
桑原西稻葉遺跡1次調査		
第66図	調査地位置図 (縮尺 1/2000).....	123
第67図	基本層位図 (縮尺 1/20).....	124
第68図	遺構配置図 (縮尺 1/300).....	125
第69図	掘立柱建物測量図 (縮尺 1/80).....	127
第70図	出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4).....	129
第71図	出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4).....	130
桑原西稻葉遺跡2次調査		
第72図	調査地位置図 (縮尺 1/2500).....	138
第73図	調査地測量図 (縮尺 1/2000).....	139
第74図	基本層位図 (縮尺 1/20).....	140
第75図	調査地区割図 (縮尺 1/200).....	141
第76図	遺構配置図 (縮尺 1/200).....	142
第77図	S K 1 測量図 (縮尺 1/40).....	143
第78図	S K 1 遺物出土測量図 (縮尺 1/20).....	144
第79図	S K 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/4).....	145
第80図	出土遺物実測図 (縮尺 1/4).....	147
第81図	1・2次調査地形測量図 (縮尺 1/600).....	148
桑原田中遺跡		
第82図	桑原田中遺跡周辺の主要遺跡分布図 (縮尺 1/5000).....	158
第83図	調査地区割図 (縮尺 1/200).....	159
第84図	南壁(W-E)層位図 (縮尺 1/80).....	161
第85図	西壁(N-S)層位図 (縮尺 1/80).....	
第86図	D列(N-S)層位図 (縮尺 1/80).....	163
第87図	E列(N-S)層位図 (縮尺 1/80).....	
第88図	遺構配置図 (縮尺 1/150).....	167
第89図	土壌配置図 (縮尺 1/200).....	168
第90図	溝状遺構配置図 (縮尺 1/150).....	169
第91図	掘立柱建物配置図 (縮尺 1/75).....	170
第92図	S K 1 測量図 (縮尺 1/20).....	171
第93図	S K 1 遺物出土測量図 (縮尺 1/20).....	172

第94図	S K 2 測量図 (縮尺 1/30).....	173
第95図	S K 3 測量図 (縮尺 1/30).....	174
第96図	S D 1 ~ 4 測量図 (縮尺 1/100) .....	175
第97図	S D 7 ~ 9 測量図 (縮尺 1/100) .....	176
第98図	S D 5・6・柱穴群測量図 (縮尺 1/100) .....	177
第99図	S B 1 測量図 (縮尺 1/100) .....	179
第100図	S B 2 測量図 (縮尺 1/100)	
第101図	S K 1 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4).....	181
第102図	S K 1 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4).....	182
第103図	S K 1 出土遺物実測図 (3) (縮尺 1/4).....	183
第104図	S K 1 出土遺物実測図 (4) (縮尺 1/4).....	184
第105図	S K 1 出土遺物実測図 (5) (縮尺 1/4).....	185
第106図	S K 1 出土遺物実測図 (6) (縮尺 1/4).....	186
第107図	S K 1 出土遺物実測図 (7) (縮尺 1/4).....	187
第108図	S K 1 出土遺物実測図 (8) (縮尺 1/4).....	189
第109図	S K 2・3 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	
第110図	S D 2・3・5・包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/4).....	191
第111図	S D 2・5・6・7・9 出土遺物実測図 (縮尺 1/4).....	192
第112図	S D 2・3・5・6・9・包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/4).....	193
第113図	S D 3・5・8・包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/4).....	194
第114図	S D 2・S X 2 出土遺物実測図 (縮尺 1/4).....	195
第115図	S D 2・3・包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/4).....	196
第116図	包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	
第117図	S D 5・包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/3).....	197
第118図	S D 3・5・S X 2・包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/3, 1/6).....	199
第119図	S D 5・包含層出土遺物実測図 (縮尺 1/4).....	200
<b>経石山古墳</b>		
第120図	調査地位位置図 (1) (縮尺 1/2500).....	214
第121図	調査地位位置図 (2) (縮尺 1/400) .....	215
第122図	基本層位図 (縮尺 1/20).....	216
第123図	層序図 (縮尺 1/40).....	217
第124図	遺構配置図 (縮尺 1/1500).....	218
第125図	S A 1 測量図 (縮尺 1/60).....	219
第126図	地形測量図 (縮尺 1/1500)	

第127図	出土遺物実測図(1) (縮尺1/4).....	221
第128図	出土遺物実測図(2) (縮尺1/4).....	222
第129図	出土遺物実測図(3) (縮尺1/2).....	223
枝松遺跡3次調査		
第130図	調査地位置図(縮尺1/5000).....	229
第131図	南壁土層図(縮尺1/40).....	230
第132図	調査地測量図(縮尺1/800).....	231
第133図	遺構配置図(縮尺1/100).....	
第134図	S B 1 測量図(縮尺1/60).....	232
第135図	出土遺物実測図(縮尺1/4).....	233
第12章		
第136図	石手川扇状地及び周辺の地形分類図と遺跡立地(縮尺1/15000).....	241

## 表 目 次

表1.	調査地一覽.....	1
表2.	桑原地区の試掘一覽.....	11
表3.	桑原地区の発掘調査一覽.....	12
樽味立添遺跡		
表4.	竪穴式住居址一覽.....	63
表5.	竪穴式住居址の型一覽	
表6.	溝一覽	
表7.	土壇一覽.....	64
表8.	掘立柱建物址一覽	
表9.	S B 13出土遺物観察表(土製品).....	65
表10.	S B 4出土遺物観察表(土製品).....	66
表11.	S B 3出土遺物観察表(土製品)	
表12.	S B 7出土遺物観察表(土製品)	
表13.	S B 6出土遺物観察表(土製品).....	67
表14.	S B 9出土遺物観察表(土製品).....	68
表15.	S B 5出土遺物観察表(土製品).....	69
表16.	S B 10出土遺物観察表(土製品)	

表17. S B 11出土遺物觀察表 (土製品) .....	69
表18. S K 出土遺物觀察表 (土製品) .....	72
表19. S X 2 出土遺物觀察表 (土製品) .....	73
表20. S X 3 出土遺物觀察表 (土製品) .....	74
表21. S X 4 出土遺物觀察表 (土製品)	
表22. 包含層出土遺物觀察表 (土製品) .....	75
表23. 包含層出土遺物觀察表 (石製品) .....	76
表24. 包含層出土遺物觀察表 (土製品)	

#### 樽味高木遺跡

表25. 竪穴式住居址一覽.....	98
表26. 溝一覽	
表27. 土壙一覽	
表28. S B 6 出土遺物觀察表 (土製品) .....	99
表29. S B 5 出土遺物觀察表 (土製品)	
表30. S B 5 埋土出土遺物觀察表 (土製品).....	100
表31. S K 5 上面出土遺物觀察表 (土製品).....	101
表32. S K 5 出土遺物觀察表 (土製品).....	102
表33. S K 5 埋土出土遺物觀察表 (土製品)	
表34. S K 5 闕連出土遺物觀察表 (土製品).....	103
表35. S K 7 出土遺物觀察表 (土製品)	

#### 樽味四反地遺跡

表36. 溝一覽.....	118
表37. 自然流路一覽	
表38. 土壙一覽	
表39. 旧河川・包含層出土遺物觀察表 (土製品) .....	119
表40. Ⅲ層・落ち込み出土遺物觀察表 (石製品) .....	120

#### 桑原西稻葉遺跡1次

表41. 溝一覽.....	132
表42. 土壙一覽	
表43. 掘立柱建物址一覽	
表44. 出土遺物觀察表 (土製品).....	133

#### 桑原西稻葉遺跡2次

表45. 溝一覽.....	150
表46. 土壙一覽	

表47. S X (不明遺構) 一覽	150
表48. S K 1 出土遺物觀察表 (土製品)	151
表49. 包含層出土遺物觀察表 (土製品)	
桑原田中遺跡	
表50. 溝一覽	203
表51. 土牆一覽	
表52. S K 1 出土遺物觀察表 (土製品)	204
表53. S K 2 出土遺物觀察表 (土製品)	206
表54. S K 3 出土遺物觀察表 (土製品)	
表55. S D 2・3・5・包含層出土遺物觀察表 (土製品)	
表56. S D 2・5・6・7・9 出土遺物觀察表 (土製品)	207
表57. S D 3・5・6・8・9・包含層出土遺物觀察表 (土製品)	208
表58. S D 2・3・S X 2・包含層出土遺物觀察表 (土製品)	209
表59. 包含層出土遺物觀察表 (土製品)	
表60. S D 5・包含層出土遺物觀察表 (石製品)	210
表61. S D 3・5・S X 2・包含層出土遺物觀察表 (土製品)	
經石山古墳	
表62. 出土遺物觀察表 (土製品)	225
表63. 出土遺物觀察表 (鉄製品)	226
枝松遺跡3次	
表64. S B 1 出土遺物觀察表 (土製品)	235
表65. S B 1 出土遺物觀察表 (石製品)	
表66. 包含層出土遺物觀察表 (土製品)	
第12章	
表67. 石手川水系旧石器時代遺跡一覽	241

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

昭和61年～平成2年に、松山市榑味町、桑原町、枝松町内において7ヶ所の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会（以下、文化教育課）に提出された。

確認願いが申請された榑味2丁目58番地、榑味4丁目266-1、榑味4丁目204-1、204-4は松山市の指定する埋蔵文化財包含地の「81榑味遺物包含地」内に、桑原1丁目981-1・2、982-1・2、桑原2丁目971番2は「157桑原遺物包含地」内に、桑原6丁目499-1、枝松3丁目310-1は「83枝松遺物包含地」内に、桑原4丁目410-1は「84経石山古墳」内に当たり、周知の遺跡として知られている。各包含地内では、これまで弥生時代～古墳時代までの集落関連遺構が確認されており、特に経石山古墳は愛媛県指定の遺跡であり、重要な遺跡地帯として近年注目されてきた地域である。

文化教育課では、確認願いが申請された7地点について埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するために、昭和62年～平成2年に順次試掘調査を実施した。

試掘の結果、申請の7地点では、遺物包含層及び遺構が検出され、弥生時代～古墳時代の集落関連遺跡があることを確認した。

試掘調査の結果を受け、文化教育課と申請者は発掘調査についての協議を行った。発掘調査は、弥生時代及び古墳時代の榑味町～桑原町にかけての集落構造解明と経石山古墳の範囲確認を主目的とし、文化教育課及び松山市埋蔵文化財センターが主体となり、各申請者の協力のもと昭和63年～平成2年の間に実施した。

以下、各調査地の遺跡名、所在等を略記する。

●表1 調査地一覧

遺跡名	所 在	面積(m <sup>2</sup> )	期 間
榑味立添遺跡	松山市榑味2丁目58番地	1,691	昭和63年6月22日～同年10月15日
榑味高木遺跡	松山市榑味4丁目266番地1	430	昭和64年1月4日～平成元年2月27日
榑味四反地遺跡	松山市榑味4丁目204番地1～4	1,500	昭和63年4月11日～同年6月21日
桑原西稲葉遺跡(1次)	松山市桑原2丁目1他	2,300	平成元年4月25日～同年9月30日
桑原西稲葉遺跡(2次)	松山市桑原2丁目971番地2	1,143	平成2年7月14日～同年9月17日
桑原田中遺跡	松山市桑原6丁目499番地1	1,252	昭和63年9月19日～同年11月12日
経石山古墳	松山市桑原4丁目410番地1	567	平成2年10月17日～同年12月19日
枝松遺跡(3次)	松山市枝松3丁目310番地1	348	平成元年10月5日～同年10月28日

なお、昭和63年4月～平成3年9月30日の間は松山市教育委員会文化教育課が主体となり野外調査及び室内調査を行い、平成3年10月1日以降は財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり室内調査及び刊行事業を実施した。〔梅木〕

## 2. 調査組織

〔昭和63年度調査組織〕

調査主体／松山市教育委員会	教育長	平井 亀雄		
	参事	松原 重勝		
	教育次長	井手 治己		
	教育次長	古木 克		
調査総括／松山市教育委員会	文化教育課	課長	渡部 忠平	
		第二係長	菅野 治之	
		主任	西尾 幸則	
		主事	重松 佳久	

〔平成元年度調査組織〕

(平成元年4月1日～平成元年10月30日)

調査主体／松山市教育委員会	教育長	平井 亀雄		
	参事	井手 治己		
	教育次長	古木 克		
	教育次長	井上 量公		
調査総括／松山市教育委員会	文化教育課	課長	渡部 忠平	
		第二係長	西 伸二	
		調査係長	西尾 幸則	
		主事	重松 佳久	
		主事	栗田 正芳	

(平成元年10月31日～平成2年3月31日)

調査主体／松山市教育委員会	教育長	平井 亀雄		
	参事	井手 治己		
	教育次長	古木 克		
	教育次長	井上 量公		
調査総括／松山市教育委員会	文化教育課	課長	渡部 忠平	
	松山市立埋蔵文化財センター	所長	森脇 將	
		調査係長	西尾 幸則	
		調査主任	田城 武志	
		調査主事	栗田 正芳	

〔平成2年度調査組織〕

調査主体／松山市教育委員会	教育長	池田 尚郷
---------------	-----	-------

調 査 組 織

参 事 古本 克

教育次長 井上 量公

教育次長 一色 正士

調査総括／松山市教育委員会 文化教育課 課 長 渡部 忠平

松山市立埋蔵文化財センター 所 長 森脇 將

調査係長 西尾 幸則

調査主任 田城 武志

調査主事 栗田 正芳

〔平成3年度調査組織〕

(平成3年4月1日～同年9月30日)

調査主体／松山市教育委員会 教 育 長 池田 尚郷

参 事 古本 克 (～5月19日)

参 事 池田 秀雄 (5月20日～)

教育次長 西森 寛彦

教育次長 一色 正士 (～5月19日)

教育次長 渡部 泰輔 (5月20日～)

教育次長 日野 正寛 (5月20日～)

調査総括／松山市教育委員会 文化教育課 課 長 渡部 忠平 (～5月19日)

松山市立埋蔵文化財センター 課 長 岩本 一夫 (5月20日～)

所 長 和田祐三郎

次 長 田所 延行

調査係長 西尾 幸則

調査主任 田城 武志

調査主事 栗田 正芳

〔平成3年度刊行組織〕

(平成3年10月1日～)

刊行主体／財団法人松山市生涯学習振興財団 理 事 長 田中 誠

事務局長 池田 秀雄

埋蔵文化財センター 所 長 和田祐三郎

次 長 田所 延行

調査係長 西尾 幸則

調査主任 田城 武志

調査主事 栗田 正芳 (文化教育課職員)

(田城)

## 第2章 立地と環境

### 1. 地理的環境

松山市桑原地区は、松山平野のやや東より、標高40m前後の地域に位置する。石手川は高麗山に源を発し、平野を南西方向へ向け横断しながらやがて小野川と合流し、重信川に流れ込み、やがて伊予灘へ注ぐ。その県下最大の松山平野は、北を高麗山、南を石鐘山系に挟まれ、大小の河川が流れ込む丘陵端部には扇状地を形成している。石手川においてもまた、溝辺町周辺から川の進行方向に向け、大規模な扇状地が形成されている。

当遺跡群が所在する桑原地区とは、現在の愛媛大学農学部を中心として、樽味1～4丁目・桑原1～2丁目・東野1丁目周辺の三角地帯である。石手川はこの地区の北東から南西へ向けて流れているが、以前は流路が不安定で、上流から肥沃な土壌を運搬していたと考えられる。その河川の氾濫を幾度も受けながら、やがてその堆積物によって扇状地を形成し、安定した地盤を築いていた。当地区において最も古い遺構・遺物としては、樽味遺跡（愛媛大学農学部）の弥生時代前期前半の溝SD4と、それとともに出土した土器があげられる。それらから、その周辺地域での弥生時代前期前半における集落の存在が指摘されている（宮本 1989-1）。

地質学的には、前述した通り、この地区一帯は扇状地堆積物で形成されている。しかし、その堆積作用の時期にも2つあり、洪積世における時期の堆積と、現世におけるそれである。後者の扇状地は、上流側において前者のそれを開析しながら、やがて下流側でその上に埋没させながら発達していると指摘されている（平井 1989）。

### 2. 歴史的環境

当地区は、松山市が埋蔵文化財包蔵地に指定している「81樽味遺物包含地」「157桑原遺物包含地」を含んでいる。そのためこれまで当地区内で発掘調査された、主な遺跡についてその概要をまとめてみた。

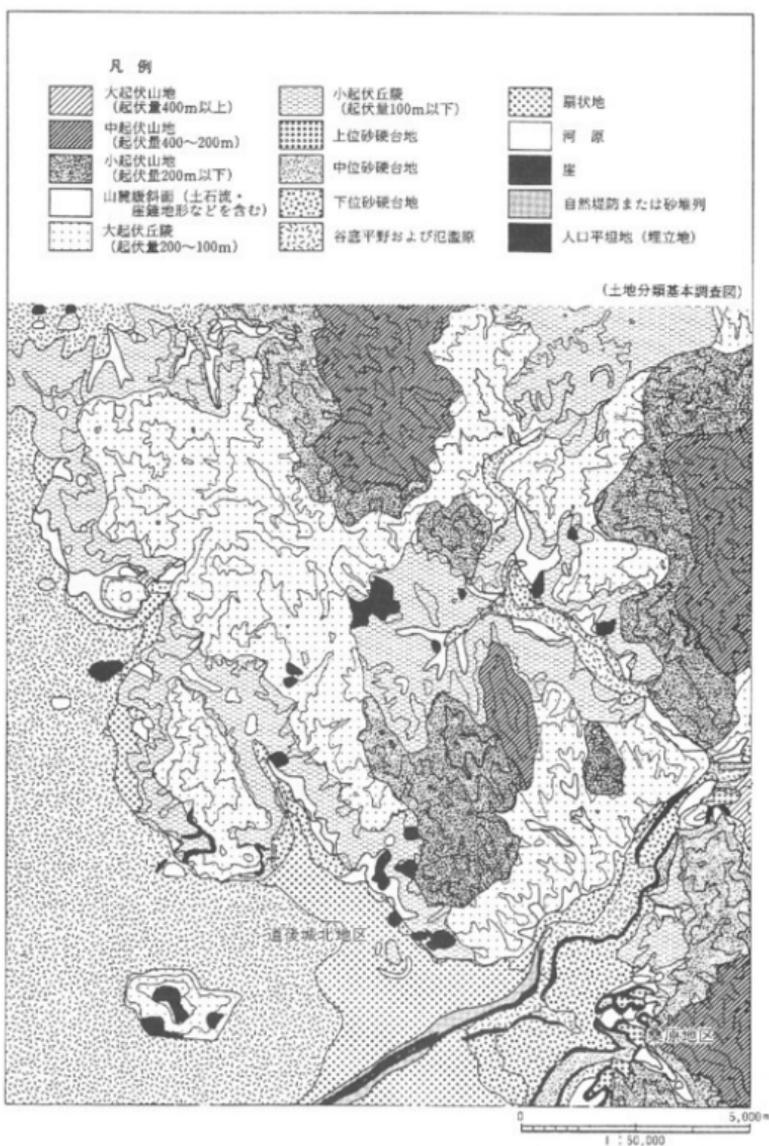
#### 旧石器時代

まず旧石器時代の遺跡は今までのところ確認されていない。ただし樽味遺跡・樽味四反地遺跡において、ポケット状に堆積したA T火山灰土を確認している。共に部分的な堆積がみられるのみであり、調査区全域に広がる安定した堆積ではないとみられる。

#### 縄文時代

次に縄文から弥生にかけての遺構は、樽味遺跡において弥生時代前期前半の溝SD4と、それに続く時期の土壌SK5が確認されている。それによると平野北部や道後城北遺跡で確認されている縄文時代晩期からの系譜を追うことができる（宮本 1989 a）。

歴史的環境



第1図 松山周辺の地形分類

## 弥生時代

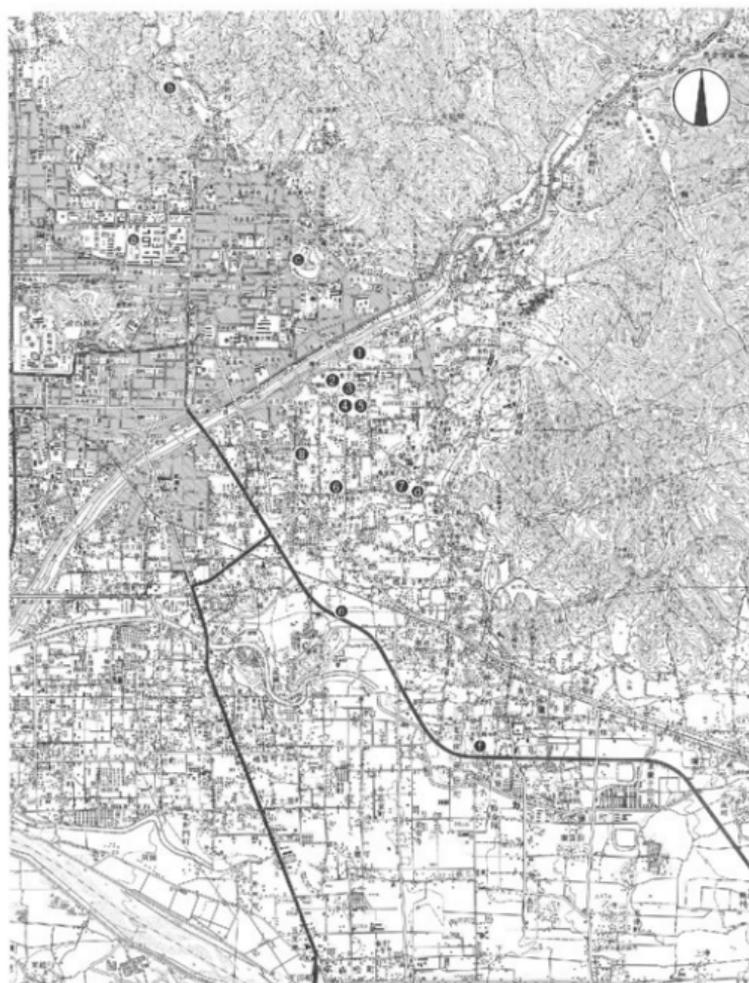
弥生時代は、桑原高井・東本遺跡をはじめとして、樽味四反地・樽味高木・樽味立浜・桑原田中・桑原稲葉・西稲葉などの遺跡が近年積極的に調査され、これまで明確ではなかったこの時代の環境や、集落形態などが徐々に解明されつつある〔梅木 1989〕。まず桑原高井遺跡では、竪穴住居跡5棟、土壇状遺構、溝状遺構などが検出されている。竪穴住居跡の平面形態は、円形と方形があり、特にS B 2はベッド状遺構を備えた多角形であった〔森 1986〕。東本遺跡は、これまで3度におわたる調査が実施されている。第1次調査区では、竪穴住居跡の一部と溝状遺構が検出されたのみであるが、第2次調査区において竪穴住居跡2棟、土壇状遺構、掘立柱建物、溝状遺構等が検出されている。特に竪穴住居跡には、円形と隅丸方形の2種類がみられ、いずれにも「T」字状の炉跡が備えつけられている〔森 1986〕。桑原稲葉遺跡では、円形と方形の竪穴住居跡がそれぞれ1棟ずつ検出されており、方形竪穴住居跡からは、後期終末の壺・甕・高坏・碗が出土している〔河山他 1990〕。

## 古墳時代

この地区には、2基の前方後円墳の存在が知られている。その一つの経石山古墳は、全長約48.5mの前方後円墳で、現在5世紀末の年代をあてている〔森 1986〕。また三島神社古墳は経石山古墳の東方約300mに存在していたが、昭和46年に宅地造成により発掘調査が実施された。その報告によると、初期畿内型の横穴式石室を内部主体に持つ全長約45mの前方後円墳であった。近年の研究により、墳丘規模や石室形態の上で奈良県の市尾藤山古墳との類似点が指摘されている。その出土遺物などから6世紀初めに比定する考え方が有力である〔森 1986、高取町教育委員会 1984、1984年度文部省科学研究費奨励研究A 1985〕。東野お茶屋台古墳群は、発掘調査時には内部主体がすでに削平されていたが、3基の古墳の周溝からは5世紀後半の須恵器が出土している〔森 1986〕。また竹ヶ谷古墳群においても同様に、5世紀後半の須恵器や直刀が周溝内から出土している。その他にも、東野周辺には古墳群が存在するとみられるが、詳細は不明である〔西尾 1986〕。集落跡関係では、桑原本郷遺跡において5世紀後半の竪穴住居跡1棟と掘立柱建物1棟が検出されている〔栗田 1987〕。

## 古代・中世

樽味遺跡のS D 1・2から14世紀後半、S D 3・S K 1から15世紀の資料的に価値の高い土師器が出土している。その中でもS D 1は、集落の境界の溝として位置づけられている。これらから、この遺跡付近も河野氏の支配範囲に入っていたのではないかと考えられる〔宮本 1989 b〕。



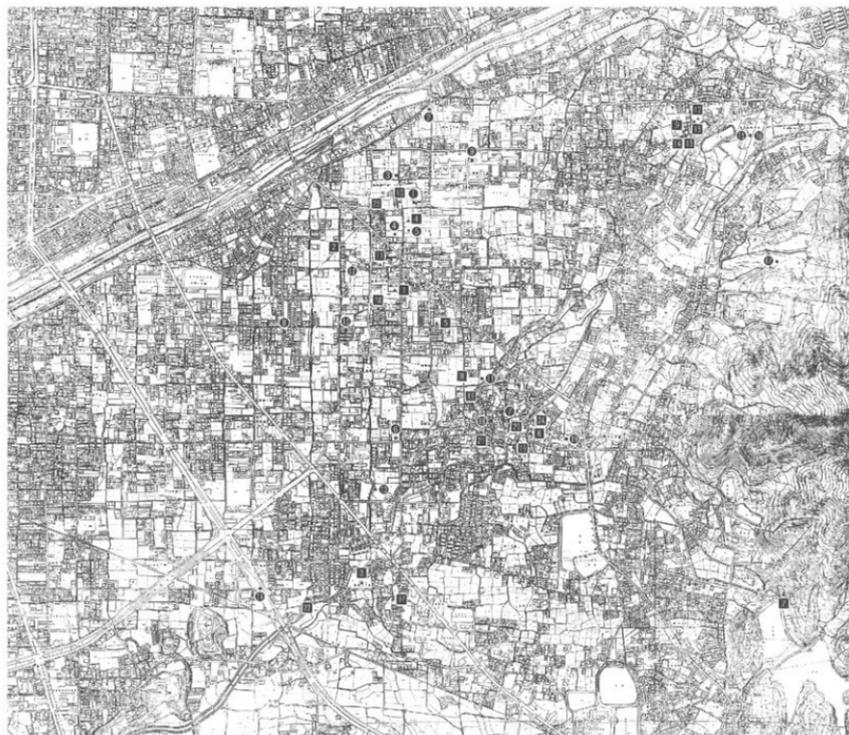
- |              |               |               |          |
|--------------|---------------|---------------|----------|
| ⑧ 文京遺跡(愛媛大学) | ⑫ 祝谷六丁場遺跡     | ⑬ 道後湯月遺跡      | ⑭ 三島神社古墳 |
| ⑨ 福音寺遺跡      | ⑬ 来住庵寺遺跡      | ① 樽味立派遺跡      | ② 樽味高木遺跡 |
| ⑩ 樽味四反地遺跡    | ④ 桑原西稻葉遺跡1次調査 | ⑤ 桑原西稻葉遺跡2次調査 | ⑥ 桑原田中遺跡 |
| ⑦ 軽石山古墳      | ⑧ 枝松遺跡3次調査    |               |          |

第2図 松山平野の主要遺跡分布図

(S=1:50,000)

【文献】

- 池田 学・松村 淳・宮崎泰好 1989「桑原田中遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- 梅木謙 1989「樽味四反地遺跡」「樽味立派遺跡」「樽味高木遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』  
松山市教育委員会
- 岡田敏彦 1990「桑原稲葉遺跡」『桑原住宅埋蔵文化財調査報告書』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 栗田茂敏 1987「桑原本郷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会
- 高取町教育委員会 1984「市尾墓山古墳」1984年度文部省科学研究費奨励研究A  
1985「横穴式石室構造の地域別比較研究 一中・四国編一」
- 西尾幸則 1986「畑寺竹ヶ谷古墳群」『愛媛県史 資料編考古』愛媛県史編纂委員会
- 平井幸弘 1989「鷹子遺跡および樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 宮本 一夫 1989 a 「道後平野における弥生時代開始期の動向」  
1989 b 「道後平野の中世土器編年—13～15世紀を中心に—」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 森 光晴 1986「桑原高井遺跡」「東本遺跡」「東野お茶屋台古墳群」「経石山古墳」「三島神社古墳」  
『愛媛県史 資料編 考古』



(注) ●-○は本格調査地 ■-□は試掘調査地

第3図 桑原地区の遺跡分布図 (9-1:15,000)

## 桑原地区の遺跡一覧（資料調査・表作成：宮内慎一 高橋 恒）

一凡、例一

- (1) 一覧表に使用した資料は、1990年12月時点のものである。
- (2) 試掘調査については、松山市教育委員会が実施したものに限った。
- (3) 試掘調査・本格調査の面積は申請（対象）面積である。
- (4) 遺構・遺物欄では一部を略号で記入した。  
遺構欄＝竪穴：竪穴式住居址、周溝：周溝状遺構、掘立：掘立柱建物址、柱：柱穴址  
遺物欄＝縄：縄文土器、弥：弥生土器、土：土師器、須：須恵器。
- (5) 実施及び期間は調査の開始時の年・月を示す。
- (6) 主体欄の略記は以下である。県教委：愛媛県教育委員会、県埋文：動愛媛県埋蔵文化財調査センター、市教委：松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- (7) 番号欄のナンバーは、「第3図 桑原地区の遺跡分布」中のもを指す。

●表2 桑原地区の試掘一覧

番号	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	幅高(m)	包含層	遺構	遺物	実施主体	備考
1	桑原1丁目809-4-6	660	36.5				'87.11 市教委	
2	桑原1丁目1010-1	400	36.0		柱	土師	'87.11 "	
3	松本2丁目79-4-6	951	26.0		柱		'88.5 "	
4	桑原2丁目966	638	38.0				'88.7 "	
5	桑原2丁目865	326	37.0		溝		'88.7 "	
6	桑原4丁目12-2-4	549	38.9				'88.9 "	
7	榎寺町乙15-13	5,863 (70.0)				須恵	'88.10 "	
8	桑原4丁目649-1	612	37.8	○	柱	土師	'88.10 "	
9	東野5丁目甲711-1, 2	1,153	57.3			須恵	'88.12 "	
10	梅味4丁目207	700	39.3	○	柱	土師・須恵	'88.12 "	
11	桑原1丁目993-5	657	37.7	○	柱	土師	'89.1 "	
12	東野4丁目甲580-3	265	61.0				'89.2 "	
13	東野5丁目711-9	8	56.0				'89.3 "	
14	東野5丁目719-6	185	55.0	○			'89.3 "	
15	東野4丁目569-3	231	58.5		落ち込み		'89.5 "	
16	桑原4丁目624-1	199	38.2				'89.9 "	
17	松本2丁目13-2, 5	472	28.0				'89.12 "	
18	桑原1丁目800-12	522	36.3	○	溝・柱	土師・須恵	'90.4 "	
19	桑原7丁目7-6, 6-4	158	38.0	○	溝	弥生	'90.5 "	
20	桑原4丁目11-1	366	34.0	○	溝	土師・須恵	'90.5 "	
21	桑原4丁目427-3	1,195	36.0	○		土師	'90.6 "	
22	松本2丁目125-14	201	25.0				'90.6 "	
23	桑原1丁目988-5	156	38.5	○		弥生	'90.6 "	
24	桑原4丁目14-1	697	35.0				'90.12 "	

立地と環境

●表3 桑原地区の発掘調査一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	遺構
1	樽味四反地遺跡	樽味4丁目204番1～4	弥～古	河川・溝・土塼・柱
2	樽味立派遺跡	樽味2丁目58	弥～古	掘立・竪穴・溝・土塼・柱
3	樽味高木遺跡	樽味4丁目266-1	弥～古	掘立・竪穴・溝・土塼・柱
4	桑原西稲葉遺跡1次調査	桑原1丁目981-1他	弥～古	掘立・柵・溝・土塼・柱
5	桑原西稲葉遺跡2次調査	桑原2丁目971-2	弥～古	溝・土塼・柱
6	桑原田中遺跡	桑原6丁目499-1	弥～古	河川・溝・柱
7	経石山古墳1次調査	桑原4丁目410-1	弥～古	溝・周溝・柱
8	枝松遺跡3次調査	枝松3丁目310-1	弥～古	竪穴・柱
9	樽味遺跡(愛媛大学構内)	樽味3丁目5番	弥～古	自然流路・溝・土塼・柱
10	桑原稲葉遺跡	桑原6丁目722番	弥～古	竪穴・溝・土塼・柱
11	桑原本郷遺跡	桑原4丁目7	古墳	掘立・竪穴・溝・柱
12	桑原高井遺跡	桑原町782番地	弥～古	竪穴・溝・土塼・土塼墓
13	東本遺跡	東本町98番地	弥～古	掘立・竪穴・土塼・柱
14	枝松遺跡	枝松5丁目・6丁目	弥～古	掘立・竪穴・溝・土塼・柱
15	東野お茶屋台古墳群1～3次	東野5丁目甲898-48	古墳	円墳・方墳・溝・周溝・土塼墓
16	" 4次	東野5丁目甲898	古墳	円墳・方墳
17	畑寺竹ノ谷古墳群	畑寺町内238-28	古墳	円墳・周溝・土塼
18	経石山古墳	桑原4丁目2-13	古墳	前方後円墳
19	三島神社古墳	畑寺町260番地	古墳	前方後円墳・周溝・配石遺構

歷史的環境

遺物	面積(m <sup>2</sup> )	期間	主体	備考	番号
弥・土・須・陶器・石甕丁	1,500	1988. 4	市教委	⑤	1
弥・土・須・石甕丁・勾玉	1,700	1988. 6	〃	⑤	2
弥・土・須・石甕丁・石鏃・種子・骨	430	1989. 1	〃	⑤	3
弥・土・須	2,300	1990. 3	〃	⑥	4
弥・土・須	1,143	1990. 7	〃	⑥	5
縄・弥・土	1,252	1988. 9	〃	⑤	6
弥・土・須・鉄斧・鉄鏃・石斧	567	1990. 10	〃	⑥	7
弥・土・須・石甕丁	348	1989. 10	〃		8
縄・弥・土・須・磁器・瓦・石鏃	684	1987. 1	愛媛大	⑦	9
弥・土・瓦・土鍬・古石・砥石	1,433	1988. 12	県教委	⑨	10
土・須・白玉	320	1986. 9	市教委	④	11
縄・弥・土	1,500	1975. 12	〃	①・③・⑧	12
弥・土	600	1978. 4	〃	①・③・⑧	13
弥・土・須	1,200	1975. 3	〃		14
弥・須・磁器・埴輪・硯	50,000	1975	〃	①・②・③	15
弥・須・鉄剣・埴輪		1978	県教委	①・②・③	16
弥・須・直刀・石鏃・石甕丁	6,400	1983	市教委	②・③	17
	2,000			①・③	18
縄・弥・土・須・管玉・白玉・ガラス玉・埴輪・鉄器	380	1971. 4	市教委	①・③	19

【参考文献】

- ① 『松山市史料集 第1巻 考古編』松山市 1980
- ② 『松山市史料集 第2巻 考古編II』松山市 1986
- ③ 『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県 1986
- ④ 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市 1987
- ⑤ 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市 1989
- ⑥ 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市 1991
- ⑦ 『鷹ノ子・梅味遺跡の調査』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室 1989
- ⑧ 『桑原高井遺跡』松山市文化財調査報告書14 松山市 1980
- ⑨ 『桑原稲葉遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1990

## 第 3 章

タルミ タチゾエ

# 樽味立添遺跡



## 1. 調査の経過

### (1)調査に至る経緯

1987（昭和62）年12月、浅川主水・曙設計より松山市榊味2丁目58番地における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「81榊味遺物包含地」内にある。周辺地域では、以前より調査が実施されており、当地一帯は周知の遺跡として知られている。同包含地内では、榊味遺跡（愛媛大学農学部構内）〔宮本一夫 1990〕、榊味四反地遺跡（第5章）〔梅木謙一 1989〕などの調査が行われており、弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落が存在していたことが明らかになりつつある。

周辺には、北は文京遺跡などを含む遺後城北遺跡群〔西山栄他 1976・古代学 1988・梅木 1991〕、南は白鳳期創建とされる米住廃寺跡〔小笠原好彦 1979〕、来住遺跡、久米高畑遺跡〔西尾・池田 1989・1991〕などを含む久米地区で、弥生時代から中世まで継続した大集落が存在する。

これらのことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1988（昭和63）年2月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層と落ち込みを検出し、当該地に弥生時代から中世に至る遺構が存在することが明らかになった。

この結果を受け、文化教育課・浅川主水氏・曙設計三者は、遺跡の取扱いについての協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から中世にかけての当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、浅川主水・曙設計両者の協力のもと、1988（昭和63）年6月26日開始した。

### (2)調査組織

調査地	松山市榊味2丁目58番
遺跡名	榊味立添遺跡
調査期間	野外調査 1988（昭和63）年6月26日～同年10月15日
調査面積	1,691㎡
調査委託	浅川主水
調査担当	調査員 梅木 謙一 調査員補 宮内 慎・山之内志郎
調査協力	曙設計 二好同二 榊 鹿島商会
調査作業員	山本 富明、吉田 智広、古屋 明寿、谷久 広之、中能 隆、宮脇 和人、

樽味立派遺跡



第4図 調査区位置図

(S = 1 : 2,500)

## 層 位

岡田 浩明、工藤 賢徳、扶川 博、森田 真司、安永 浩二、田板 嘉則、  
近松 正宏、仙波 豊子、福山 暁子、矢野 敦子、河本美代子、今井セツ子、  
山下満佐子、飛田 佳子、松岡 忠仁、北野 功人、寺岡 豊彦、立花 斉、  
中野 剛、渡部孝二郎、森田 利恵、松本美知子、越智美代子、渡部美代子、  
黒田 令子、山本 好枝

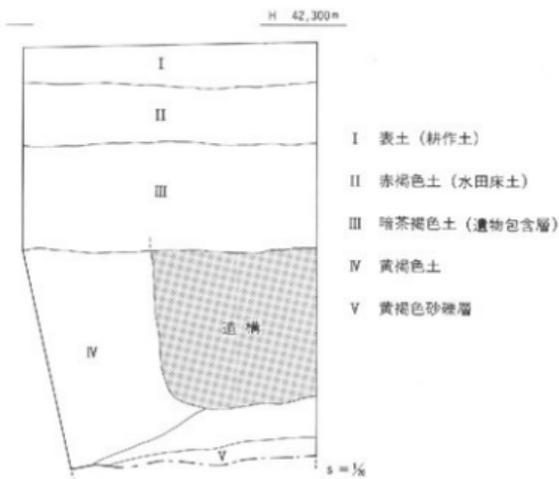
## 2. 層位 (第5図)

本遺跡は、石手川中流域南岸の微高地上、標高42.6mに立地する。

基本層位は、第I層表土(耕作土)、第II層赤褐色土(水田床土)、第III層暗茶褐色土、第IV層黄褐色土、第V層黄褐色砂礫層である。第I層及び第II層は20~40cmの厚さである。第III層暗茶褐色土は遺物包含層であり、調査区北から南へ緩傾斜堆積をなす。厚さは10~60cmを測り、弥生土器・土師器・須恵器を包含する。第IV層黄褐色土は無遺物層で、地山と呼ばれるものである。第V層砂礫層は石手川上流域の変成岩を含んでいる。地山面(第IV層上面)はその標高を測量すると北から南へ漸次低くなっている。

遺構は、第III層中及び第IV層上面での検出である。

第III層中では、竪穴住居址1棟(SB1)、土壌1基(SK13)、第IV層上面では、掘立柱建物18棟、竪穴住居址11棟、土壌14基、溝状遺構3条、柱穴302基(掘立柱建物柱穴を含む)他である。ただし、第IV層上面での検出遺構は、遺構の深さなどから判断すると、本来は第



第5図 基本層位図



第6図 調査地区割図

Ⅲ層以上から掘りこまれた可能性が高い。

遺物は、第Ⅲ層及び遺構内からの出土であり、弥生土器(前期～後期)、土師器(5～6C初)、須恵器(5C末～6C)、石器(石庖丁2点他)、勾玉1点、貨幣1点等がある。

注目されるものは、第Ⅲ層出土の『貨泉』の完形品1点である。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリッドに分けた。呼称名は、第6図に示す。

### 3. 調査の概要 (遺構と遺物)

#### (1) 竪穴式住居址

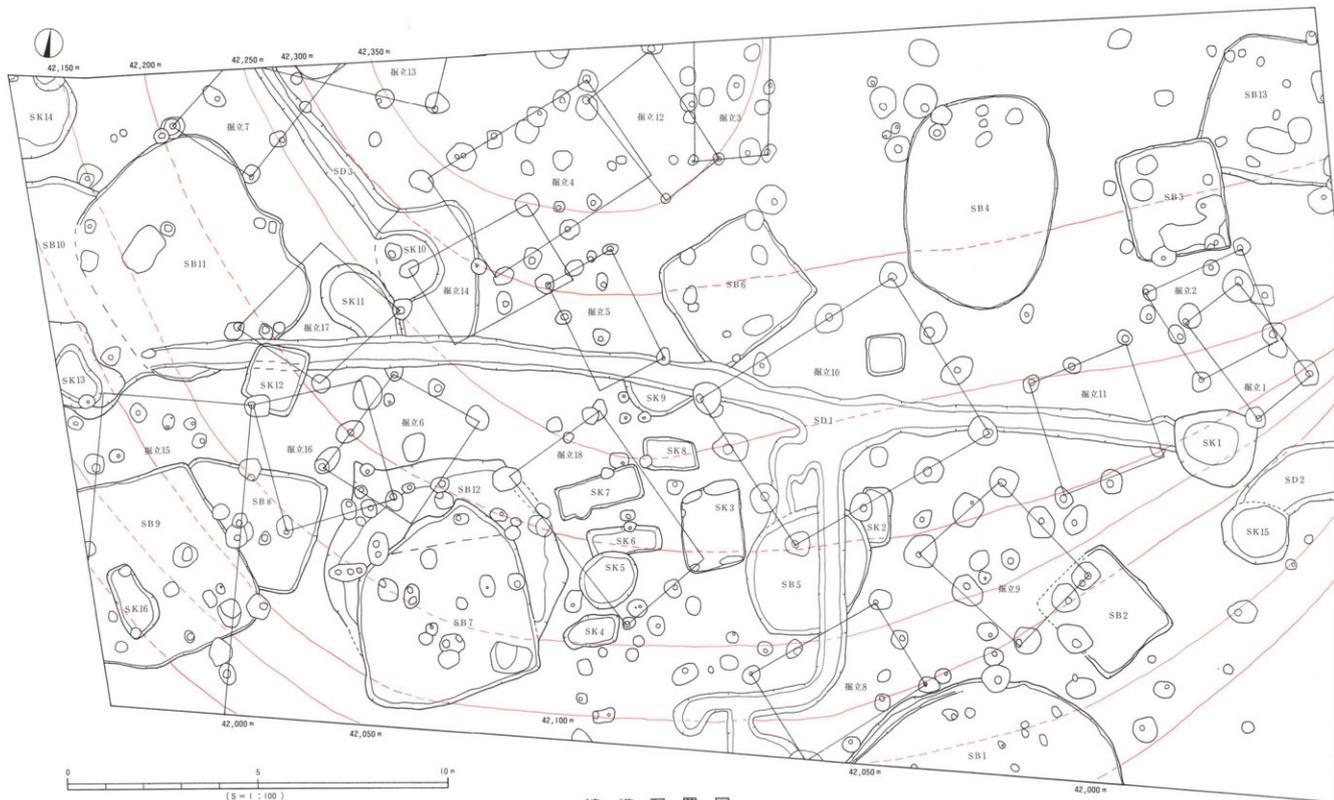
本調査区において確認された住居址は13棟である。第Ⅲ層中にてSB1を、他はいずれも第Ⅳ層上面での検出である。住居址は近現代の造成工事により、壁高が10cmをみないものがある。平面形は円形～楕円形(3棟)、方形(10棟)の2種類がある。

#### 弥生時代～古墳時代前期

##### SB13号住居址(第8図)

調査区北東隅A12区に位置する。住居址南西隅はSB3号住居址に切れ、東壁は調査区外へ続く。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、規模は現存南北幅3.9m、東西幅3.6m、壁高は32cmを測る。覆土は茶褐色シルト1層である。

主柱穴はSP-267・273の2本を検出したが、柱穴の出土状況から他に2本あるものと考えられ主柱穴は4本であった可能性が高い。柱穴は円～楕円形で径20～35cm、深さ15～20cm、



第7図 遺構配置図

## 調査の概要

柱穴間は2.6~2.9mを測る。

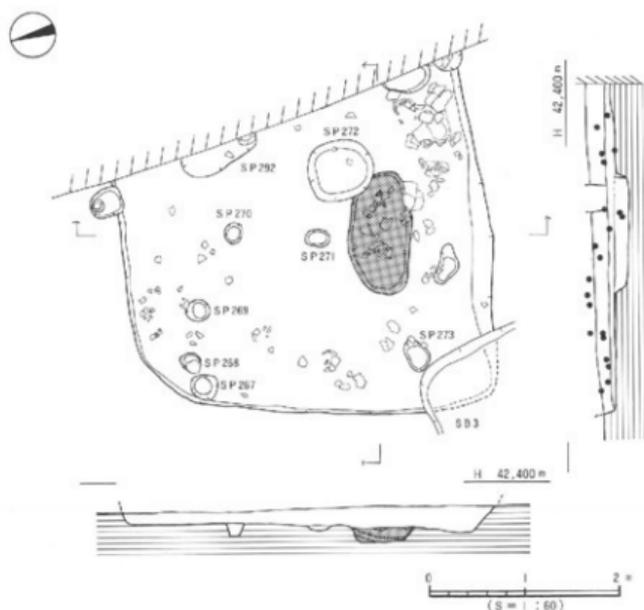
竈は住居址南側の柱穴間にある。平面形は長楕円形である。規模は長径130cm、短径70cm、断面は皿状をなし、深さ40cmを測る。竈内には焼土及び炭を確認している。

床面は比較的硬く、北から南に向けて緩傾斜をなす(比高差8cm)。床面にて主柱穴以外に大小8基の柱穴を検出したが、本住居址に伴うかどうかはわからない。

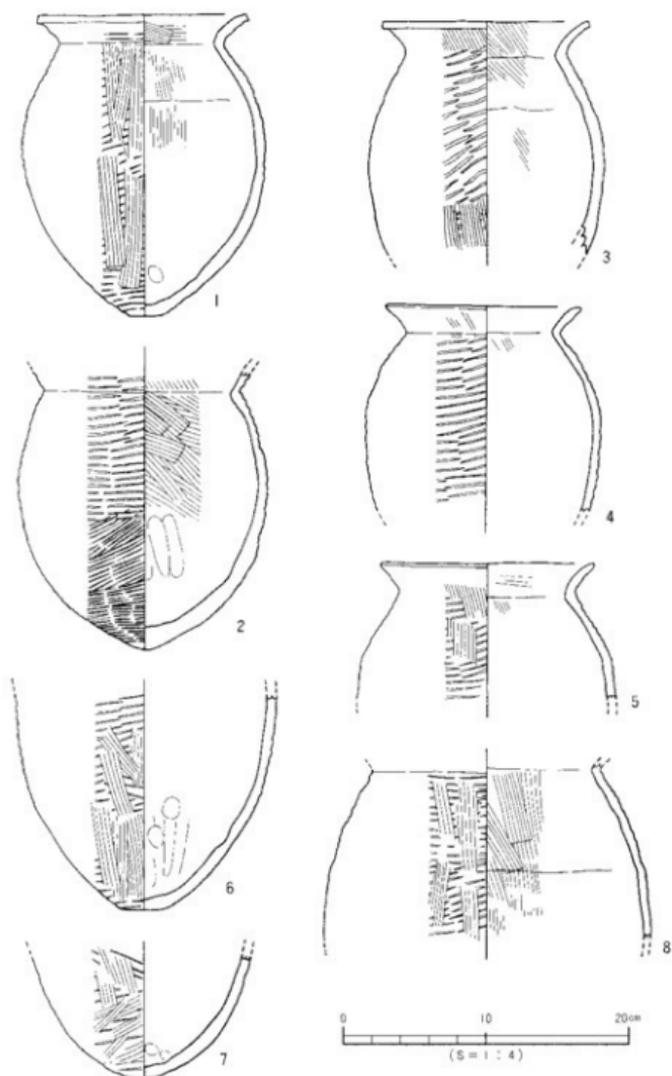
遺物は、南壁と西壁付近に集中して出土した。西壁では複合口縁の大型壺(11)が、竈址内からは甔形土器(14)が出土した。またSP268では甔形土器(1)の胴下半が柱穴に入った状態で出土した。いずれの土器も完形に近いものであり一括性の高いものである。

出土遺物(第9図・第10図)

甔形土器(1~9) く字状口縁をもち、小さい平底ないし丸底の底部を持ち、長胴であり、胴下半にふくらみをもつことが形態上の特徴である。成形・調整では、叩き技法を使用し、胴下半部を刷毛目調整することを特徴とする。内面は、刷毛目、ナデにより仕上げる。ただし、器壁は一般的に厚く、表面観察では削り技法の跡を全く看取できない。削り技法を全く使用しなかったとは判断しがたい。

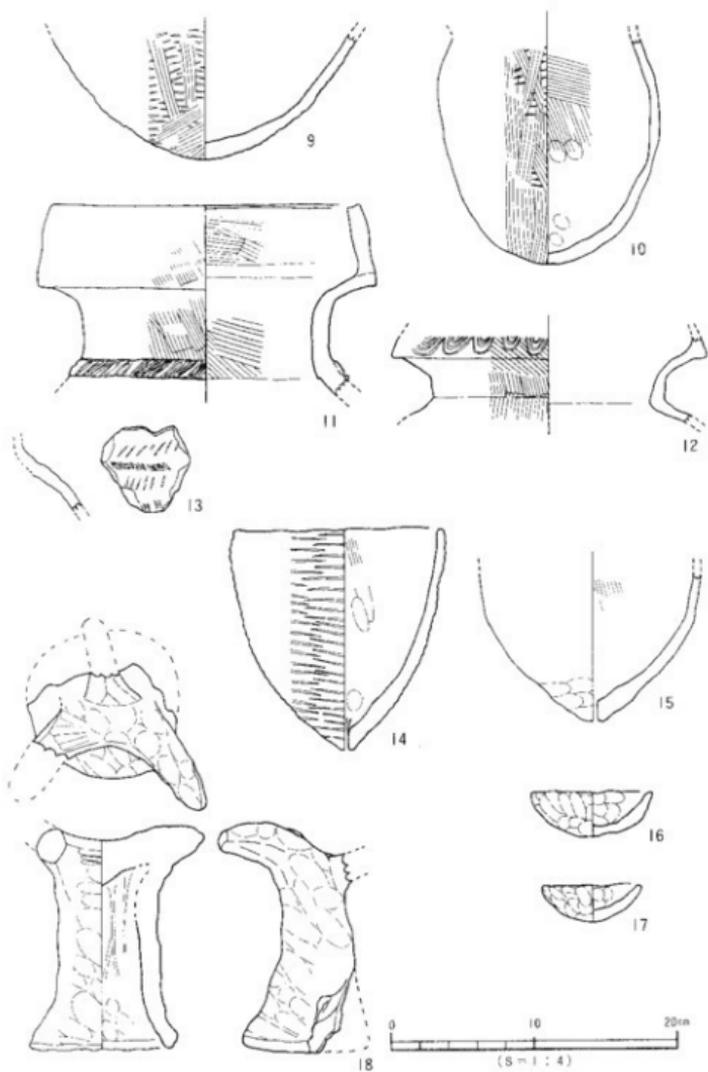


第8図 SB13測量図



第9圖 SB13 出土遺物実測図 (1)

調査の概要



第10図 SB13 出土遺物実測図(2)

1・2では口縁部外面に叩き痕を残しており、叩きの後に口縁部を折り曲げたことが知られる。口頸部と胴部形態により三分類される。

A類(1) 頸部は縮り、胴部が張るものである。

B類(2) 頸部の縮りは弱く、胴下半部が大きくふくらむものである。

C類(3～5) 頸部は縮り、胴部の張りは弱く、長胴のものである。

また、口縁端部の形態では、1・3は「コ」字状に、4・5は先細りとなる。

底部形態は、丸みのある小さい平底(1・6)と丸底(9・10)、丸みをもって突出する底部の三形態がある。完形品が希少のため口頸部、胴部、底部の関係は明確ではない。

壺形土器(11～13) 11・12はいずれも複合口縁壺である。11は直立する短い頸部に、内傾斜の弱い口縁部をもつ。頸部には帯状の凸帯を貼り、凸帯上を「ノ」の字状に刻む。12は外傾する短い頸部に、短く外反し、短く内傾する口縁部をもつ。複合口縁部には波状文(櫛4本)を施す。13は肩部の小片である。無軸の羽状文状の刻目を施す。

甔形土器(14・15) 14・15は尖底に、直口口縁をもつ甔形土器である。底部穿孔は焼成前である。外面は叩き痕、内面は刷毛目痕を顕著に残す。

腕形土製品(16・17) 手捏ねで、小型品である。内外面に指頭痕を顕著に残す。

支脚形土器(18) 受部は2本の突起によりつくられる。背部に突起1本をもつ(一部欠損)。体部下半は外開きし、体部には指頭痕を顕著に残す。

時期：出土遺物は、一括性の高い遺物であり、本住居址の廃棄時期が知れる良好な資料である。よって、本住居址の廃棄時期は古墳時代初頭に比定する。

#### S B 4 号住居址(第11図)

調査区北東部A14区に位置する。平面形は楕円形で、規模は南北5.6m、東西4m、壁高は20cmを測る。埋土は褐色シルト一層である。床面はやや軟質で、北から南にかけて緩傾斜をなす(比高差5cm)。住居址床面に6基の柱穴を検出した。柱穴埋土はいずれも茶褐色シルトである。主柱穴及び炉等は未検出である。

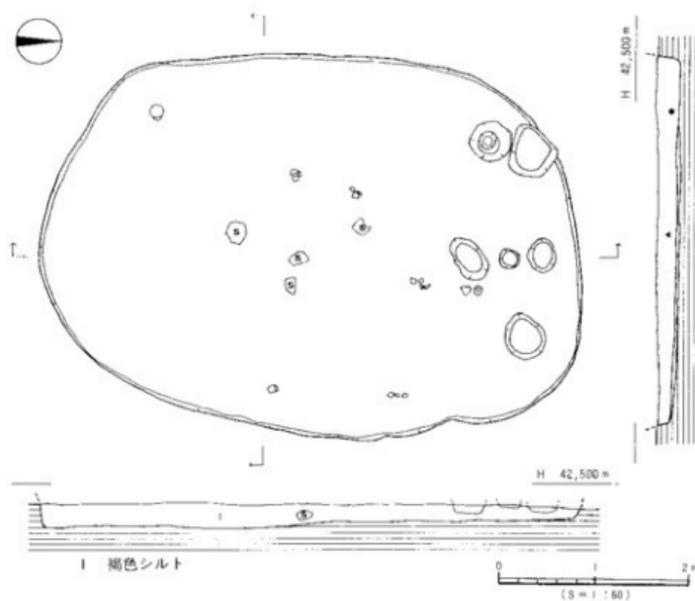
遺物は、床面よりわずかに浮いた状態で出土した。出土量は少ないものの、第11図の上器はいずれも完形に近いものである。

#### 出土遺物(第12図)

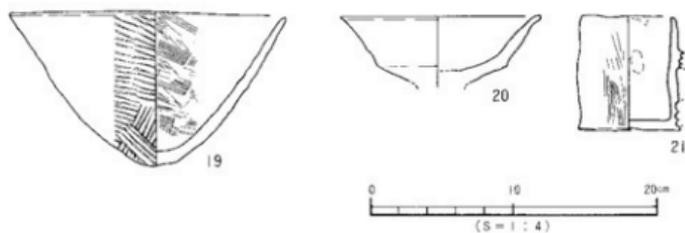
19は、丸底で外面に叩き痕を顕著に残す鉢形土器である。20は、屈曲部に稜をもち、口縁部が外反する高環形土器環部である。やや小型であるが、坏部は深い。21は、ジョッキ形土製品である。大きな平底に直立する体部をもつ。把手は欠損する。

時期：19は完形であり、20・21も一部を欠損するものの流れ込み品とは考え難い。いずれも古墳時代初頭に時期比定されるものである。本住居址の廃棄・埋没時期は出土遺物より古墳時代初頭と考える。

調査の概要



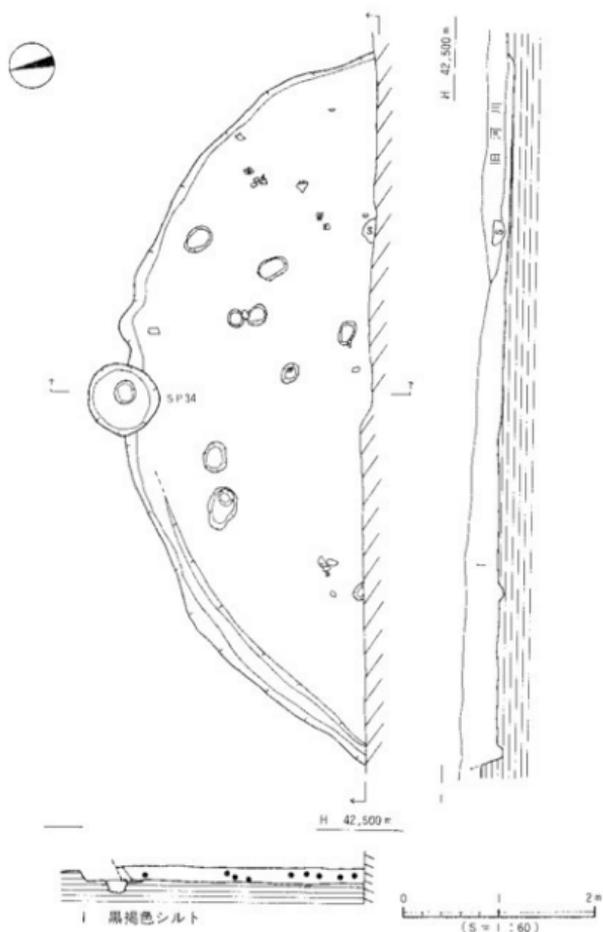
第11図 SB 4 測量図



第12図 SB 4 出土遺物実測図

S B I 号住居址 (第13図)

調査区南東隅A 2区に位置する。住居址南半部は調査区外へ続く。平面形は円～楕円形を呈すると考えられ、規模(検出値)は南北幅2.5m、東西7.5m、壁高は15cmを測る。第Ⅲ層中で検出し、掘り方最終面は第Ⅴ層砂礫層におよんでいる。埋土は黒褐色シルト一層である。



第13図 S B I 測量図

## 調査の概要

床面はほぼ平坦で比較的硬い。住居址西半部には、幅25cm、深さ8cm、断面U字状の整体溝が巡っている。床面にて9基の柱穴を検出したが、本住居址に伴うものであるかは判断できなかった。主柱穴及び炉等は未検出である。

遺物の出土状況は、埋土中に須恵器・土師器・弥生土器の小片が数点出土したが、いずれも後世の流れ込みによる遺物とみられる。

### 出土遺物 (第14図)

図化しえるものは1点である。扁平の擬宝珠状のつまみをもつ須恵器の坏蓋である。天井部は広く扁平である。奈良時代初頭に時期比定される。

時期：本住居址出土の遺物は、時期決定に有効な資料でない。あえて時期を求めるならば住居形態が円形で、規模が7m以上であることより弥生中期後半～古墳時代初頭の間に構築されたものと考えられる〔梅本謙一 1991〕。



第14図 S B 1 出土遺物実測図

## 古墳時代中期

### S B 3 号住居址 (第15図)

調査区北東部A10区に位置する。北東コーナーは13号住居址を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北3m、東西2.6m、壁高は20cmを測る。覆土は暗褐色シルト層である。主柱穴はS P-296・297・298・300が想定される。S P 300は、壁体に沿って半円形に柱穴が掘削される。S P-296・298・300を主柱穴とすると、配置、規模、埋上、柱穴間距離より壁体を切るS P 297も、本住居址の主柱穴になるものと考えた。柱穴は円形で、径25～60cm、深さ20～25cm、柱穴間は150～180cmを測る。床面は硬く西から東に向けて緩傾斜をなす（比高差5cm）。

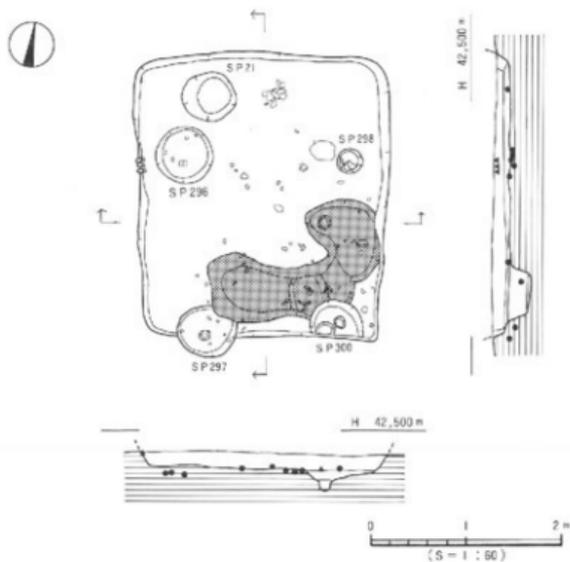
炉は、住居址南壁付近に位置する。平面形は「L」字状で、長径120cm、短径60cm、断面は皿状で深さ20cmを測る。炉内は、北及び南側中央部が円形に凹む。炉内には焼土及び炭を確認しており、特に、南半部にて炭が多く検出された。北側床面にて柱穴S P 21を検出したが、本住居址に伴うかどうかはわからない。

遺物は、床面上には少なく、床面より20cm前後の高さの埋土中より土師器片が出土した。出土遺物 (第16図)

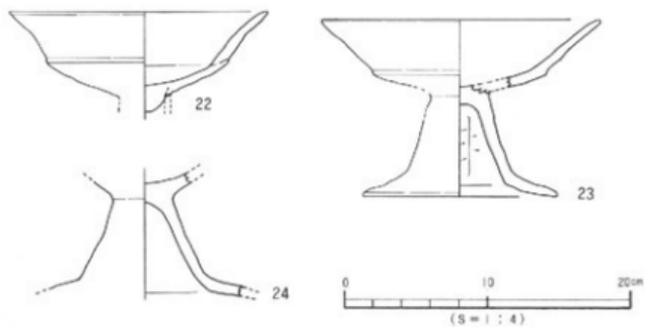
図化できたものは土師器の高坏形土器3点である。坏部は屈曲部に稜(22)と段(23)をもち、口縁部はわずかに外反する。22の底部は充墳技法である。脚部(23・24)はやや太く、柱裾部境の内面に稜をもつ。

樽味立添遺跡

時期：埋土中の出土ではあるが、高坏形土器23は完形に近く、かつ共伴する高坏形土器の形態にも大きな時期差は認められない。よって、本住居址の埋没時期は古墳時代中期と考えておく。



第15図 SB 3 測量図

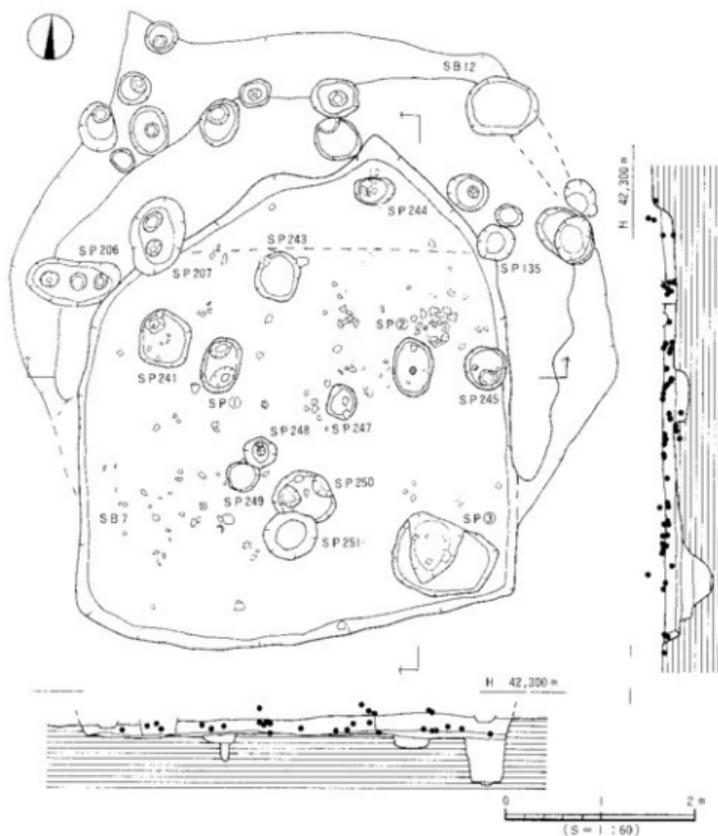


第16図 SB 3 出土遺物実測図

## 調査の概要

### SB12号住居址 (第17区)

調査区中央やや南西C6～B8区に位置する。住居址南側はSB7に切られる。また、6・16・18号掘立柱建物に切られる。平面形は隅丸多角形（五ないし六角形か）になるものと思われる。規模は北西-南東6m、北東-南西6m、壁高20cmを測る。壁高はゆるやかに傾斜する。床面は第V層の礫が露出し、凹凸が著しい。住居内に多数のピットを検出したが、本住居址に伴うかは不明である。主柱穴は特定できなかった。



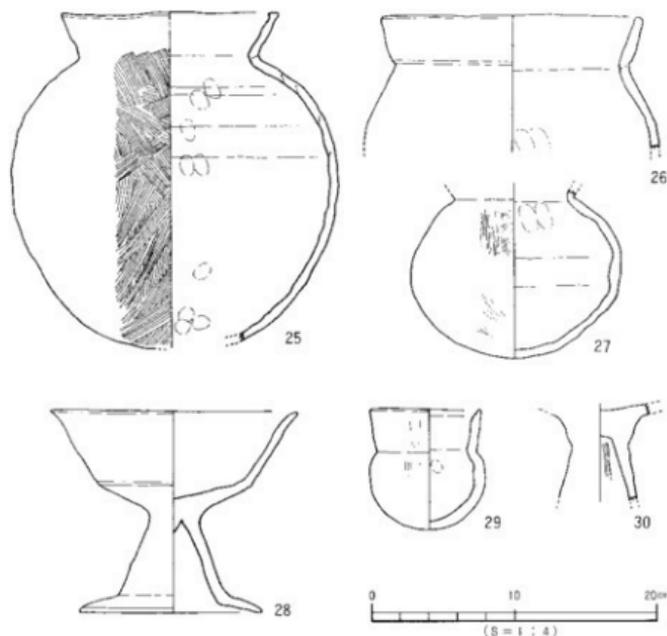
第17図 SB7・SB12測量図

遺物は、埋土中に土師器片等が検出されたが、流れ込みの可能性が高いものである。

時期：SB7号他に切られていることより、下限を古墳時代中期に認定できよう。

### SB7号住居址（第17坑）

調査区中央やや南西C5区に位置する。SB12を切り、6・16・18号掘立柱建物に切られる。北壁は検出できなかった。また、北側の三角形の突出部は本住居の施設か、SB12のものなのかは判断できなかった。平面形は隅丸方形を呈し、規模は、南北3.6m、東西4.6m、壁高は22cmを測る。埋土は暗茶褐色シルトで多数の礫を含む。主柱穴はSP①・②・③の3本を検出した。柱穴はやや楕円形を呈し、径40～60cmを測る。柱穴間は、約2mを測る。ただし、南西部に1本すえられ、本来は4本であった可能性は高い。床面は第V層の礫が露出しており、凹凸が著しい。床面では多数のピットを検出したが、本遺構に伴うものかは判断できなかった。



第18図 SB7 出土遺物実測図

## 調査の概要

遺物は、SP③中より壺形土器（第18図27）が出土した他、SP②の北側で甕形土器（第18図25）がおしつぶれた状態で出土した。遺物が多いものの、小片は埋土中の出土であり流れ込みの可能性が高いものばかりである。

### 出土遺物（第18図）

甕形土器（25・26） 25は口縁端部を肥厚し、端面がわずかに内傾するものである。外面は刷毛目、内面は粘土接合痕と指頭痕を残す。26は頸部の締りが弱いものである。口縁部はやや内湾するが、端面は肥厚せず、かつやや外傾する。

壺形土器（27・29） 27は扁半球の体部を呈する。成形・調整は25の甕形土器に似る。29は小型壺で、口径は体部最大径に延ばない。口縁端面は強く内傾する。

高環形土器（28・30） 28は環部を一部欠く。環部は深く、屈曲部は丸みのある稜をもつ。脚柱部は三角錐を呈し、裾部はゆるやかに傾斜する。柱脚部境内面には明瞭な稜をもたない。環底部は充墳技法である。30は組み合せ技法で、環脚部境の外面に粘土を貼り付ける。

時期：甕形土器の長期化、小型丸底壺の口径の縮小より、出土遺物は中期前半に比定されよう。掲載の遺物は、床面及び柱穴にて出土したものであり、本住居の廃棄・埋没時期は古墳時代中期前半と考える。

### S B 6号住居址（第19図）

調査区中央部B10区に位置する。平面形は隅丸方形で、南東隅はSD1に切られている。規模は、北西-南東で3.3m、北東-南西で3.2m、壁高は15cmを測る。埋土は暗褐色シルト層で、拳大の礫が多量に含まれる。主柱穴はSP-227・231・233・234の4本である。柱穴は円形～楕円形で、径10～50cm、深さ15～20cm、柱穴間は、170～200cmを測る。床面は比較的硬く、北から南に向けて緩傾斜をなす（比高差4cm）。また、掘り方最終面は、第IV層の礫が露出しており凹凸が著しい。調査時の土層観察等で、部分的に貼り床が行われていたことを確認した。炉は、住居址南壁中央部に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径80cm、短径50cm、断面は皿状を呈し、深さ10cmを測る。炉内にて焼土及び炭を確認している。床面にて4本の柱穴を検出したが、本住居址に伴うものであるかは判断できなかった。

遺物は、完形品を含む土器器片を多数検出した。特に高環形土器の出土は多く、壁体や柱穴、炉の周囲で完形品や完形品にちかい欠損品が出土した。高環形土器の量に比べ、甕形土器、壺形土器等の出土量はきわめて少量であった。

### 出土遺物（第20図・第21図）

甕形土器（31・32・36） 短く外反し、頸部内面に明瞭な稜をもたないものである。口縁上部は、31は内湾し、32は外反する。口縁端部は共に外傾する。36は、球状の体部で、内面は頸部下端以下を削り調整を行う。

壺形土器（33～35・37） 33・34は口縁上部がわずかに内湾する。いずれも小片である。

樽味立添遺跡



第19図 SB6 測量図

35は肩部が張り、内面に削り痕を顕著に残す。頸部内面の稜は不明瞭。37は小型品の底部片である。やや器壁が薄い。

高環彩土器 (38~52) 環部の形状により三分類できる。

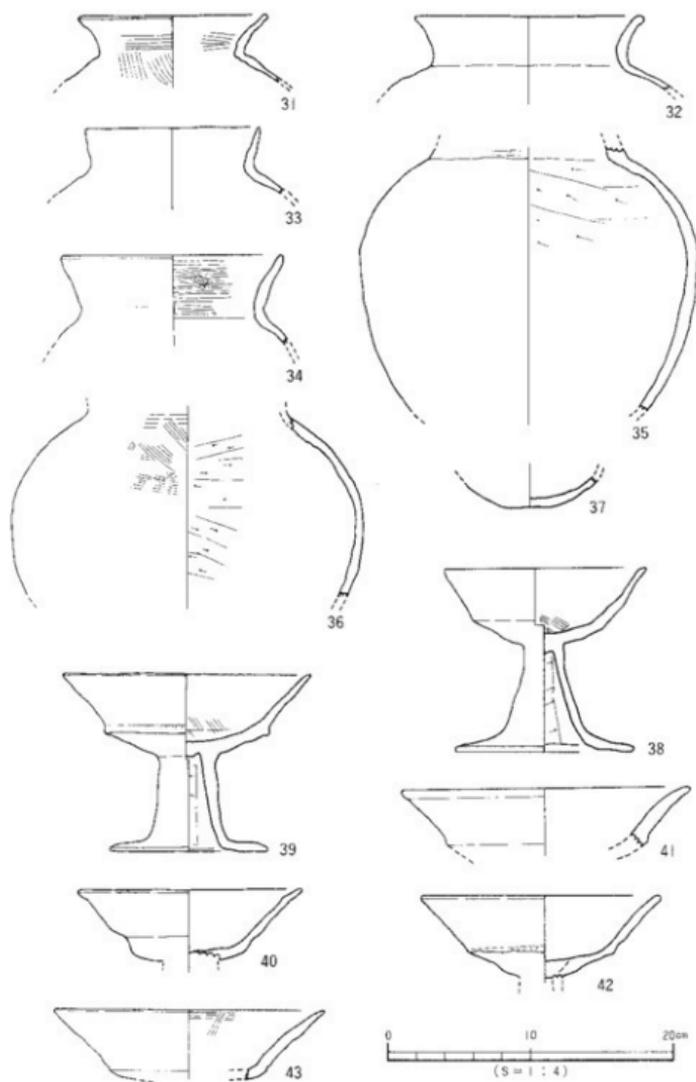
A類 (38) 口径に比べ、環が深いものである。屈曲部の稜も不明瞭で、椀状を呈する。

B類 (39~48) 口径が大きく、屈曲部に段ないし稜をもつもの。

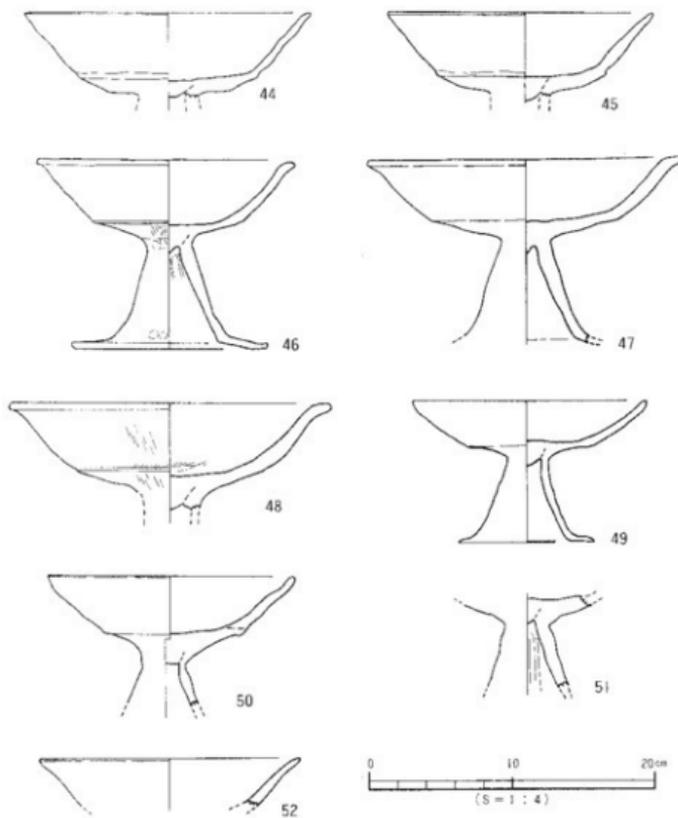
C類 (49・50・52) 口径が大きく、屈曲部に段、稜をもたないもの。ただし、接合下部に段をもつ。

A類である38は口縁端部がわずかに外反し、端面は内傾する。B類は、法量により大中小に分けられる。口径15~17cmの小型品 (39・40・42) は屈曲部に段をもつ傾向にある。屈曲部の仕上げにより段は丸みを呈することが多い。環部は口縁部が外反するが、口縁上部はナデによりわずかに内湾する。口径17~20cmの中型品 (44・45) は環底部内面が平坦となり、段が弱い。口縁上部はわずかに内湾する。口径20cm以上の大型品 (47・48) は口縁端が水平にわずかに曲げられる。端面は丸みのある三角形を呈する。C類は口径17~20cmの中型品である。口縁上部は内湾する。

調査の概要



第20図 SB 6 出土遺物実測図 (i)



第21図 SB 6 出土遺物実測図 (2)

坏部は口縁部が外反するが、ナデによりわずかに内湾することを共通とする。  
 坏底部は充墳技法を用いるものが多数をしめる (39・44・45・46・48他)。  
 脚部は裾部が大きく開き、内面の柱裾部境に稜をもつ。柱内面は削り痕を残す傾向にある。  
 時期：出土遺物は良好な状況であり、よって、本住居址の廃業時期は古墳時代中期に比定  
 されよう。

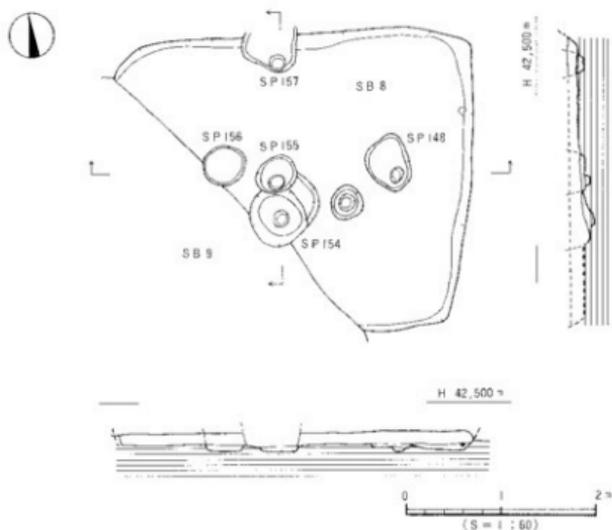
古墳時代後期

SB 8号住居址 (第22図)

調査区南西部C7区に位置する。住居址西半部はSB 9号住居址に切られている。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、規模は現存南北幅3.7m、東西幅3.2m、壁高10cmを測る。覆土は暗褐色シルト層である。床面は硬く、わずかに北から南に向けて傾斜している（比高差4cm）。床面に6基の柱穴を検出した。SP-154と、北壁中央部を切った状態の柱穴SP-157は共に15号掘立柱建物柱穴である他にSP-148は16号掘立柱建物柱穴である。他の柱穴は本住居址に伴うかどうかは不明である。

遺物は、埴土より土師器・須恵器の少片が出土した。

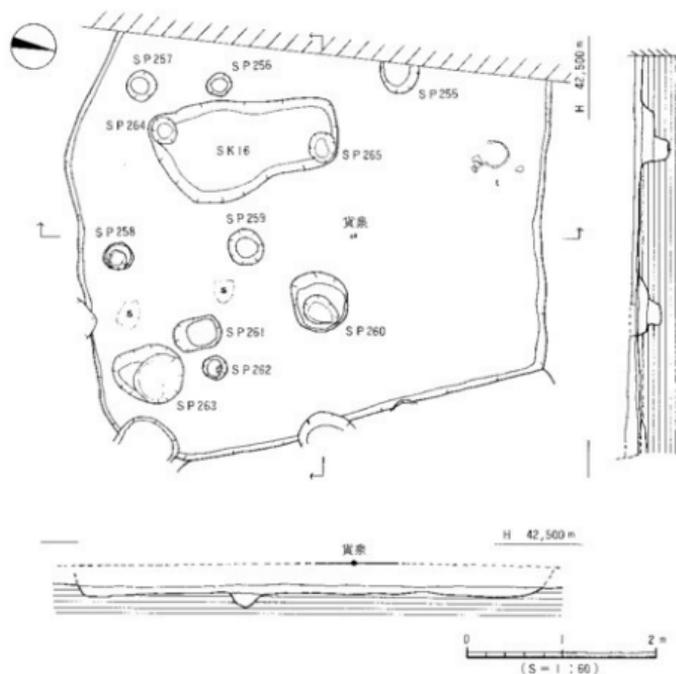
時期 本住居址を切る15・16号掘立柱建物は時期の特定ができないものである。本住居址出土遺物は、時期特定に有効な資料ではない。ただし、SB 9号は古墳時代中期後半以降のものであり、切り合い関係より、本住居址の下限を古墳時代後期後半に考えることができる。



第22図 SB 8 測量図

## SB 9号住居址 (第23回)

調査区南西隅C5区に位置する。東壁はSB8号住居址を切り、西壁は調査区外へ続く。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、規模は現存南北幅4.8m、東西幅4.5m、壁高は最深部で8cmを測る。覆土は暗褐色シルトである。床面は硬く踏みしめられており、住居址中央部がやや高くなっている。断面土層の観察と、遺物の出土状況等から、本住居址は暗褐色シルトを貼りつけた貼り床構造の可能性がある。また、住居址南西部にて長方形土壇(SK16)を検出した。規模は南北2m、東西1mでやや南側が幅広になっている。断面は皿状を呈し、深さ15cmを測る。本土壇の北東隅及び南西隅の床面に各々、柱穴1基を確認した。本土壇の覆土は、住居址と同様であるため、本土壇は本住居址の施設であると考えられる。しかしながらその性格は不明である。



第23回 SB 9 測量図

調査の概要

住居址床面にて9基の柱穴を検出した。SP-255・263は15号掘立柱建物柱穴である。他の柱穴は本住居址に伴うかどうかは不明である。また、本住居址ほぼ中央部の第Ⅲ層（本住居址埋土を覆う）より『貨泉』が検出されている。

遺物は、第24図53は床面出土、他は埋土より出土したものである。

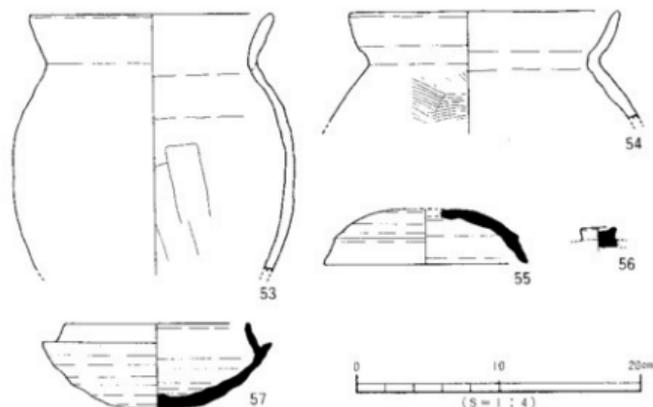
出土遺物（第24図）

53は床面直上で胴下半を欠くもので、他は埋土ないし埋土上部の包含層出土品となる。

土師器 53・54は長胴を呈する甕形土器である。53は口縁端部が外反し、端部は丸みを持つ。54は口縁部は内湾し、端面は丸みをもつ。

須恵器（55～57） 55・56は坏蓋片である。55は外傾する口縁部をもつ。56はくびれて立ち上がり、天井部が凹む珠を持つ。57は器高の高い坏身である。立ち上がりは内傾する。

時期：床面出土の長胴の甕形土器53が時期特定に有効な資料である。その特徴より古墳時代後期6世紀前葉に比定されるものであろう。よって、本住居址の廃棄・埋没時期も6C前葉と考える。



第24図 SB 9 出土遺物実測図

SB5号住居址 (第25図)

調査区中央やや南東B3区に位置する。SK2(弥生後期後葉)を切り、SD1(古墳時代中期以降)、10号掘立柱建物(古墳時代後期以降)に切られる。平面形は円形で、規模は南北3.6m、東西3m、壁高10cmを測る。埋土は暗茶褐色シルト一層である。本遺構に伴う施設は未検出である。

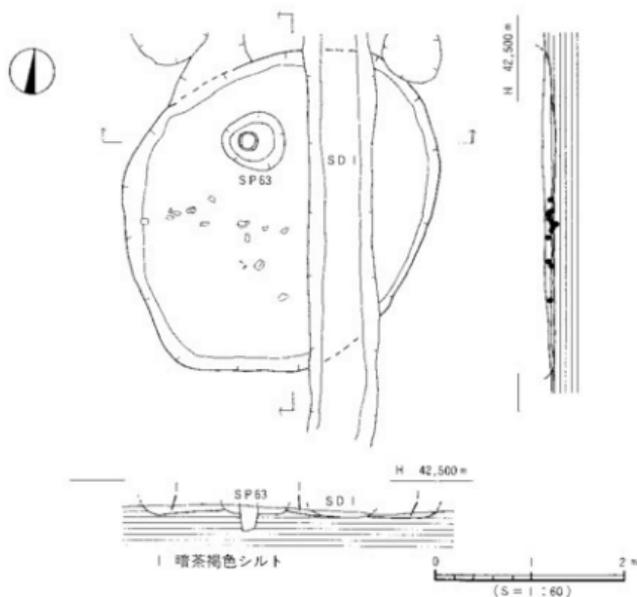
遺物は、床面より浮離した状況で出土した。埋土と本遺構を覆う包含層土埃とは判別しがたく、SB5に確実に伴うと考えられる遺物の特定はできなかった。

出土遺物 (第26図)

土師器 58は甕形土器片である。口縁端は内傾する。59は高坏形土器坏部片である。屈曲部にわずかに段をもつ。60は高坏形土器脚部である。柱内面はへら削り板、内面の柱裾部境に稜をもつ。

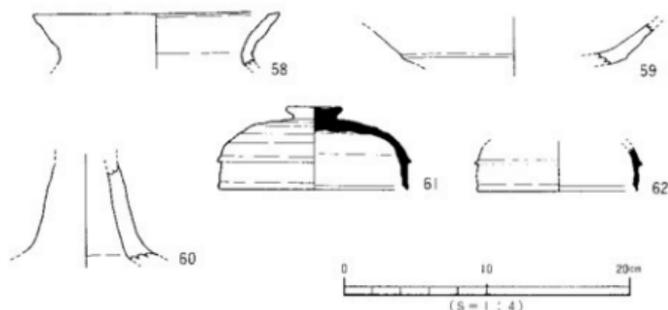
須恵器 61は口縁部が直立ぎみに垂下し、大きめの鈕をもつ。鈕上部中央は、わずかに突出する。62は丸みのある形状をもつ。口縁部は内湾して垂下する。小片である。

時期：時期特定に有効な資料はない。ただし、切り合い関係より弥生時代後期後葉～古墳時代後期の間のものであることが知れる。



第25図 SB5 測量図

## 調査の概要



第26図 SB5出土遺物実測図

### SB10号住居址 (第7図)

調査区C11区に位置する。SB11に切られる。平面形は隅丸方形状、ないし隅丸多角形になると考えるが、特定はできなかった。規模は北西-南東6.2m、北東-南西2.1m、壁高8cmを測る。SK13は本住居址の床面で検出したが伴うものであるかは不明である。さらに、床面にピットを3基検出したが本住居に伴うかは不明である。

遺物は、床面より浮離し、埋土中に破片として出土した。

### 出土遺物 (第27図)

63は甕形土器小片である。口縁端面は内傾する。64は小型の甕形土器になるものと思われる。頸部内面に弱い稜をもつ。65は壺形土器である。内面は粘土帯接合痕をのこす。66-69は高坏形土器である。66・67は充填技法を使用する。68・69は裾部が長く、内面の柱裾部に稜をもつ。

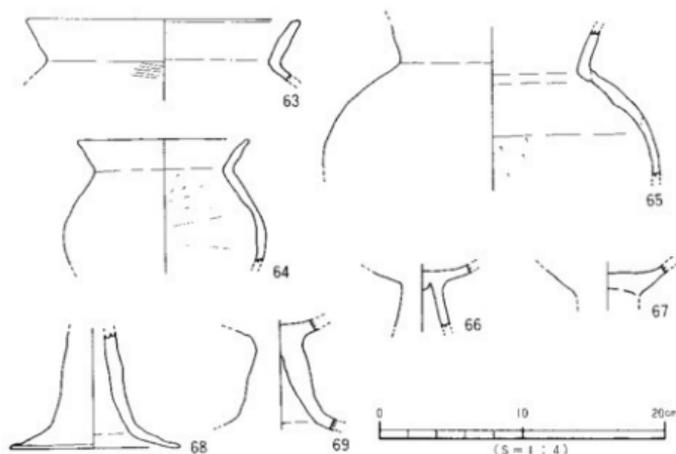
時期：出土遺物は、いずれも埋土中でかつ破片であるため、本住居址の廃棄・埋没時期を特定するだけの好資料ではない。切り合い関係他より古墳時代中期に時期比定される可能性があることを提示するにとどめる。

### SB11号住居址 (第28図)

調査区北西部C13区に位置する。住居址南壁隅は溝SD3に切れ、西壁はSB10号住居址と重複する。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、規模は現存幅北西-南東で6.1m、北東-南西で4.8m、壁高は10cmを測る。埋土は暗褐色シルト層である。

床面は比較的硬く、住居址中央部がやや高くなっており、壁体に向かって緩やかに傾斜している。炉は住居址中央やや北西よりに位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長径1.3m、

樽立立添遺跡



第27図 SB10出土遺物実測図

短径0.7m、断面は皿状をなし、深さ15cmを測る。床面に9基の柱穴を検出したが、本住居址に伴うものかは不明である。

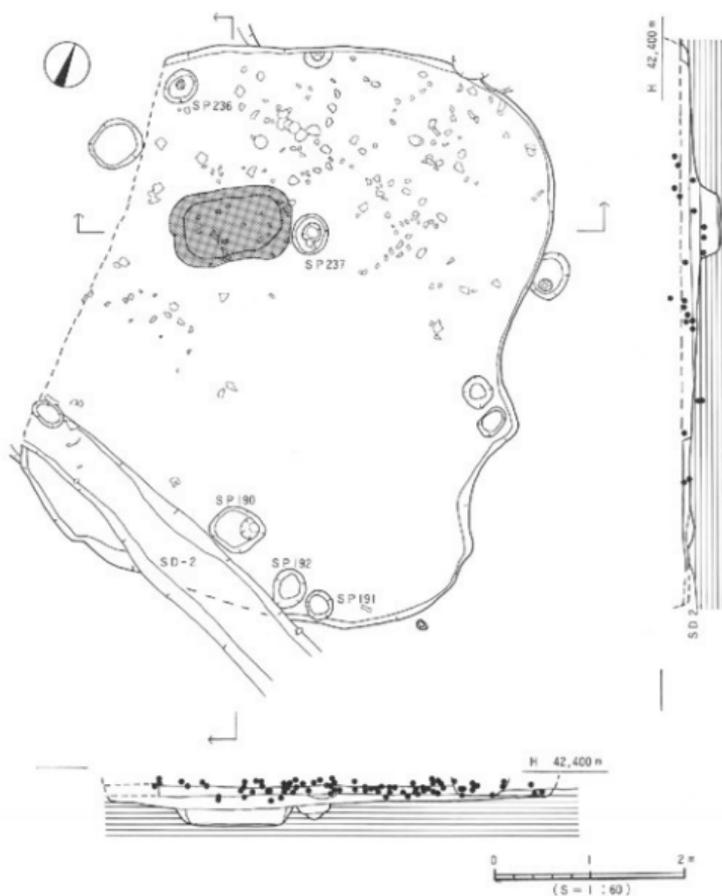
遺物は、床面直上よりのものは小量かつ小片で、大多数が床面より10数cm以上浮離した状況で出土した。特に、北半部で須恵器の坏身（完形に近いもの数点）と坏蓋片を検出した。出土遺物（第29図・第30図）

土師器（70～80） いずれも小片である。甕形土器（70～76）は口縁部がいずれも内湾して立ち上がる。70・71は端面をナデにより面（凹む）取りし、内傾させる。72～74は端面に丸みをもたせる。70・74は口縁上部を直立ぎみに立ち上がらせることを特徴とする。75・76はやや長い口縁部をもつ。口縁部はわずかに内湾させるものの、直線ぎみに外傾させたちあがる。77は高環形土器の坏部である。接合部に段及び稜はなく、丸みのある形態をとる。坏底部は充填技法を用いる。78は高環形土器の脚部片である。柱内面の削り痕は著しく、長く内湾する裾部をもつ。

須恵器（79～108） 出土数は50点を越える。

坏蓋（79～93） 小片であることが多い。79～81は珠をもつ坏蓋である。いずれも扁平で、80は中央がわずかに突出、81は凹み、79は擬宝珠状となる。82～93は珠をもたない坏蓋である。いずれも稜が退化し、丸みをおび完全に退化したものもある（88～89）。口縁部は傾斜するものがほとんどである。口縁部形態は中位が丸くふくらみを持ち、口縁端部が外方に小さ

調査の概要

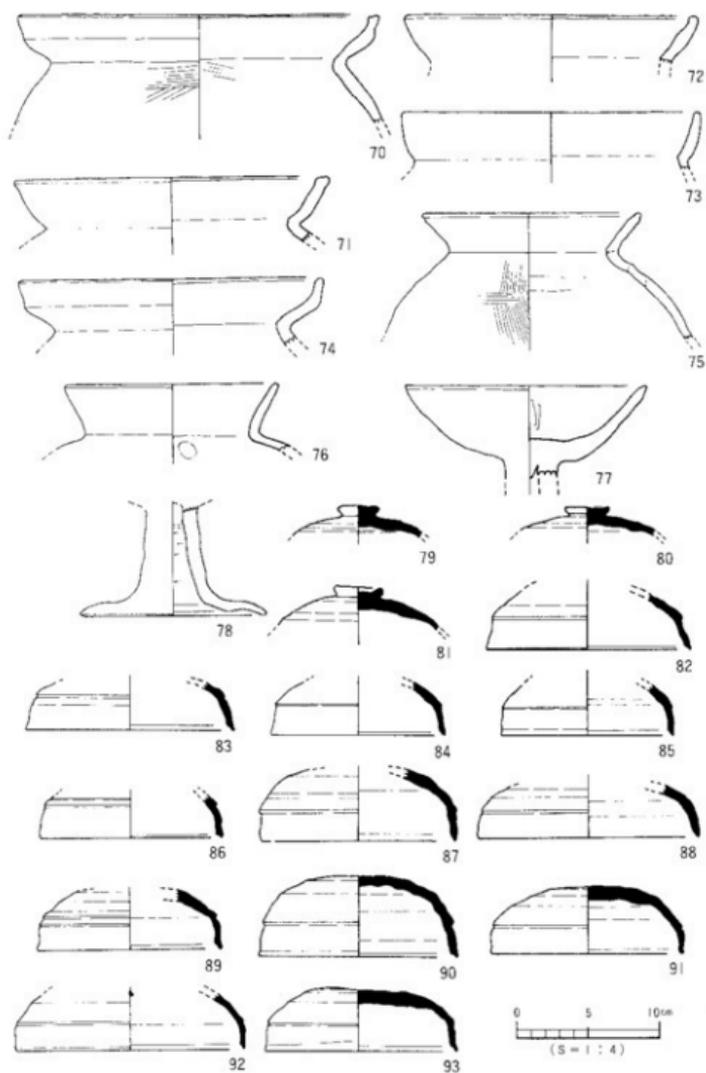


第28図 SBII 測量図

く突出するものが多くみられる(89・91他)。天井部はやや高く、丸みをもつものが多い。口縁端面は凹みないし段をもつものが多い(88は例外)。

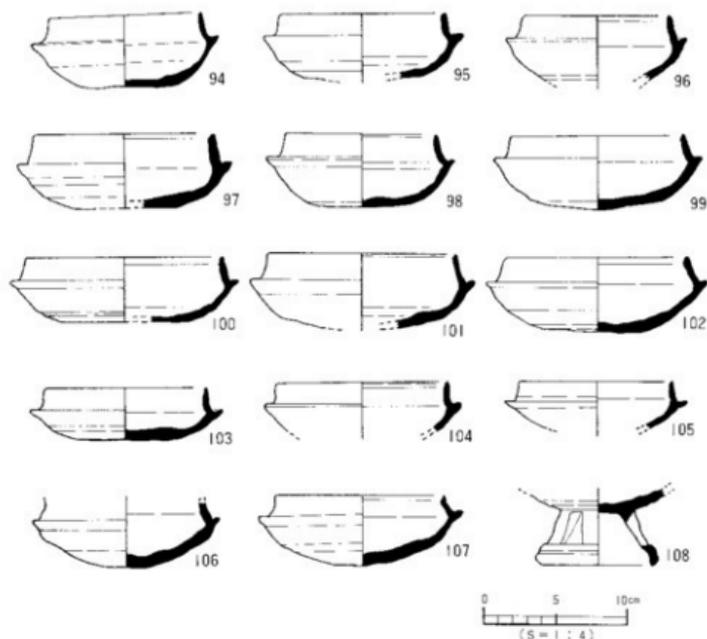
坏身(94~107) 坏身は底部が丸みを帯びて、たちあがり内傾ないし内傾のち直立するものが大多数である。95・107は例外で、内湾して直立きみに立ち上がる。口縁端面は凹みないし段をもつ。94・103・105の端面は丸みをもつ。受部は外方に立ち上がる。105は垂直となる。

樽味立添遺跡



第29圖 SBIII出土遺物実測図 (I)

調査の概要



第30図 SB II出土遺物実測図(2)

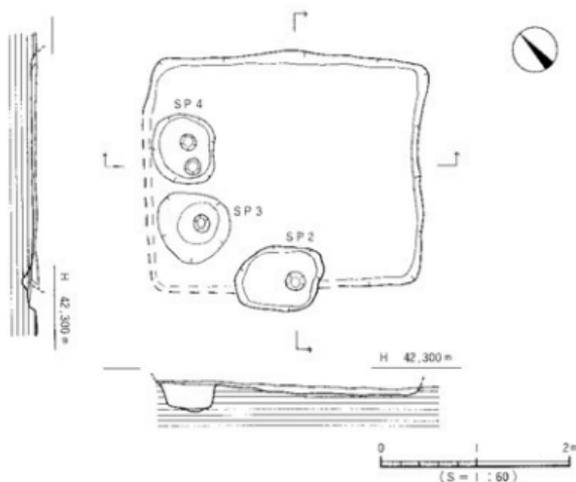
高坏 (108) 108は有蓋高坏である。長方形のスカシ窓を一方に配す。脚端は内湾して直立する。外面上部に凹みをもつ。

時期：出土遺物は、埋土が10数cm堆積した後に混入したものである。よって廃棄時に伴う資料ではなく本住居址の時期特定には有効な資料とはいえない。ただし、下限を求めるならば6C前半には既に本住居址は廃棄・埋没していたものと考えられる。

SB 2号住居址 (第31図)

調査区南東部A5区に位置する。検出面(第IV層上面)より床面までは最深度で6cmを測り、北西壁コーナーは床面が露出した状態であった。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、規模は現存長北西-南東で2.9m、北東-南西で2.5mを測る。壁高は南東隅で6cmを測る。埋土は黒褐色シルト一層である。床面は比較的硬く、西から東にかけて緩傾斜をなす(比高差13cm)。主柱穴は未検出でありSP-2・4は9号掘立柱建物の柱穴である。

樽立立派遺跡



第31図 SB2測量図

遺物の出土状況は、埋土中に弥生土器・土師器の小片が数点出土している。

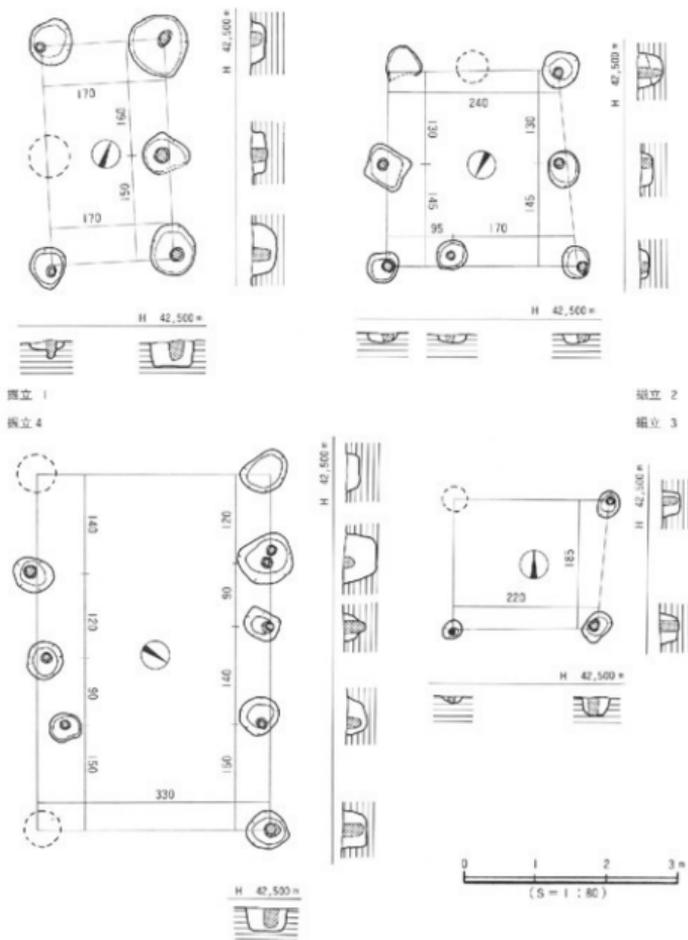
時期：出土遺物は流れ込みのものであり、時期決定に有効な資料ではない。本住居を切る9号掘立柱建物址は時期を特定できない(古墳時代後期以降)。よって本住居址の構築時期は特定できない。

(2)掘立柱建物址 (第32～37図)

本調査において確認された掘立柱建物址は18棟である。建物の柱穴からは、時期を特定するような資料の出土はない。方位・埋土等により少なくとも4グループに分類できる。第Ⅰ類は南北棟で覆土が褐色シルトの1号・3号・11号掘立柱建物址、第Ⅱ類は南北棟ではあるが、覆土が暗褐色～黒褐色シルトの2号・9号・12号・13号・16号・18号掘立柱建物址、第Ⅲ類は東西棟で覆土が褐色シルトの14号掘立柱建物址、第Ⅳ類は東西棟ではあるが、覆土が暗褐色～黒褐色シルトの4号・5号・6号・7号・8号・10号・15号・17号掘立柱建物址である。全般に、東西棟建物は調査区西寄りに、南北棟建物は調査区東寄りに多くみられた。これらのことから、掘立柱建物の造成時期には幅があることをうかがわせる。造成時期は、いずれの建物も竪穴式住居、土壇等の遺構を切っており、本遺跡中最も新しい時期の構築物であることが知れる。竪穴式住居址は遅くとも6世紀前葉には、埋没していたと想定でき、よって建物群は6世紀前葉以降に構築されていたものとする。

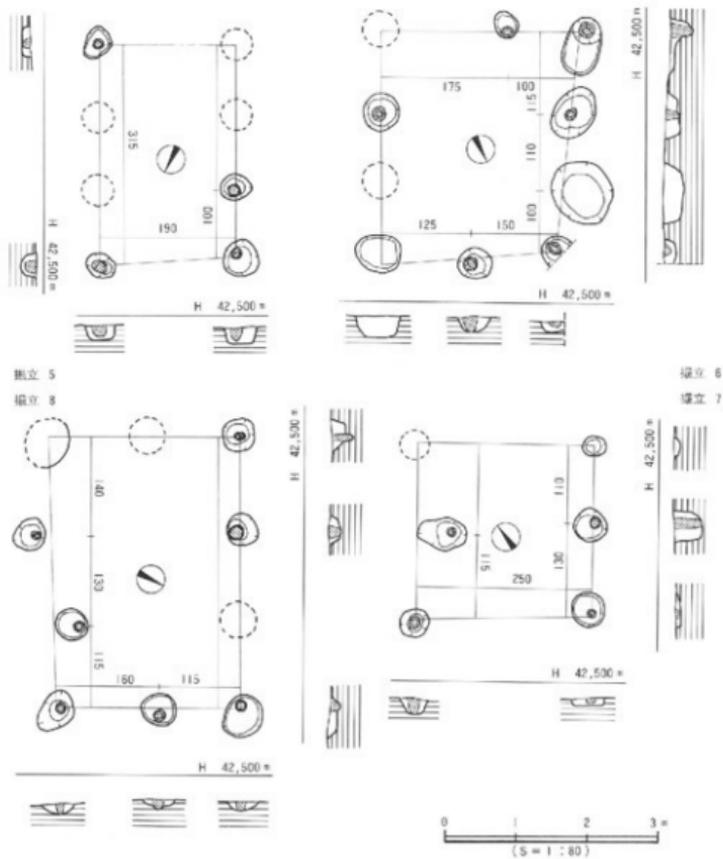
各建物に関する詳細は表8に記す。

調査の概要



第32図 柱立 1 - 4 測量図

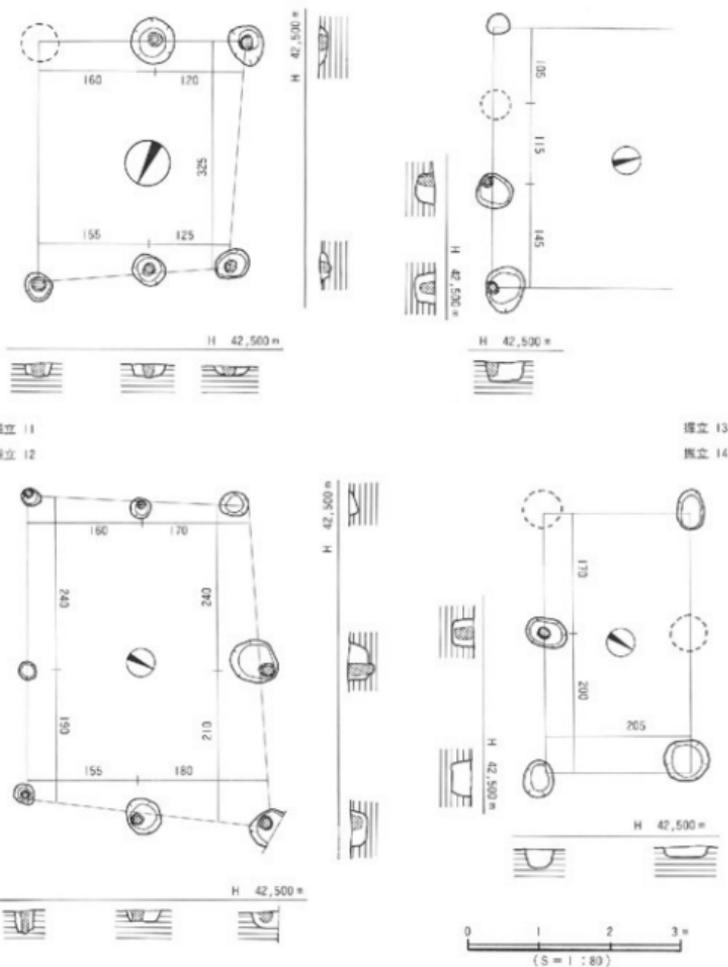
樟味立添遺跡



第33図 掘立5～8 測量図

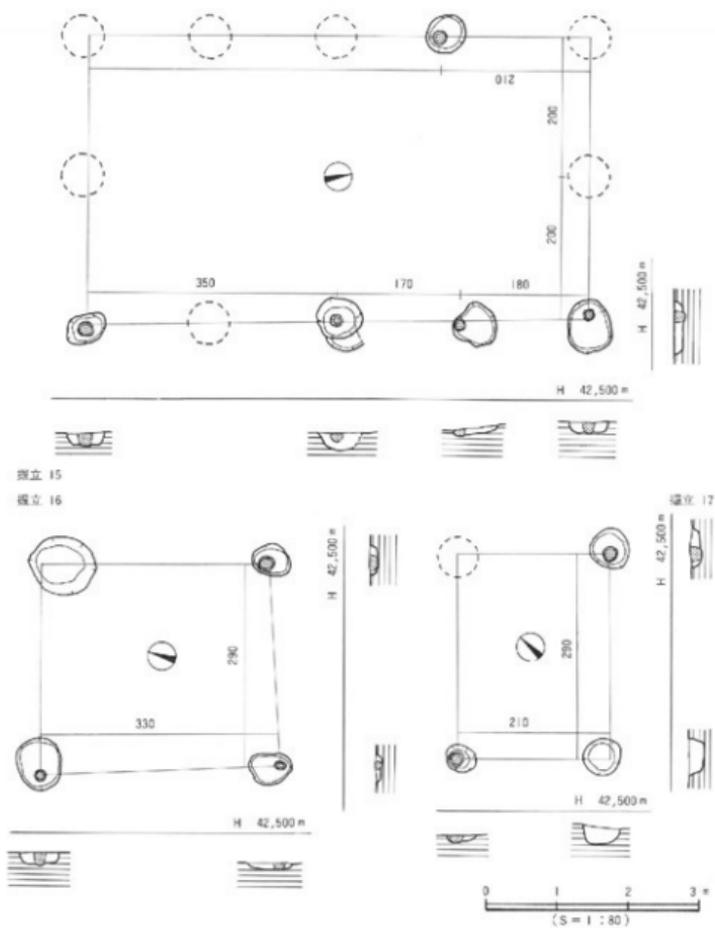


樽味立添遺跡

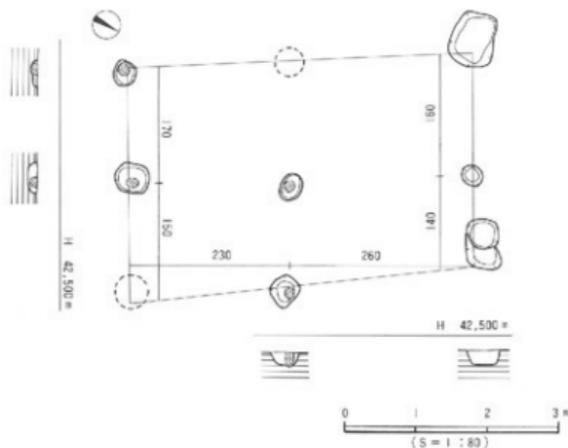


第35圖 獨立11~14測量圖

調査の概要



第36図 掘立15~17 測量図



第37図 掘立18 測量図

### (3)土壌 (表7)

本調査において確認された土壌は16基である。第Ⅲ層中にて土壌SK13を、他の土壌はいずれも第Ⅳ層上面での検出である。土壌SK16はSB9号住居址内に伴うものである。平面形で3種類に分類でき、SK1・5・9・10・11・13・14・15は円形、SK2・4・6・7・8は長方形、SK3・12は方形である。時期を知り得るものは少ないが、出土遺物を第38・39図に掲載した。出土遺物より、SK1・2・12は弥生時代後期後半、SK10・11は古墳時代中期以降のものであろう。SK13は判断しがたい。

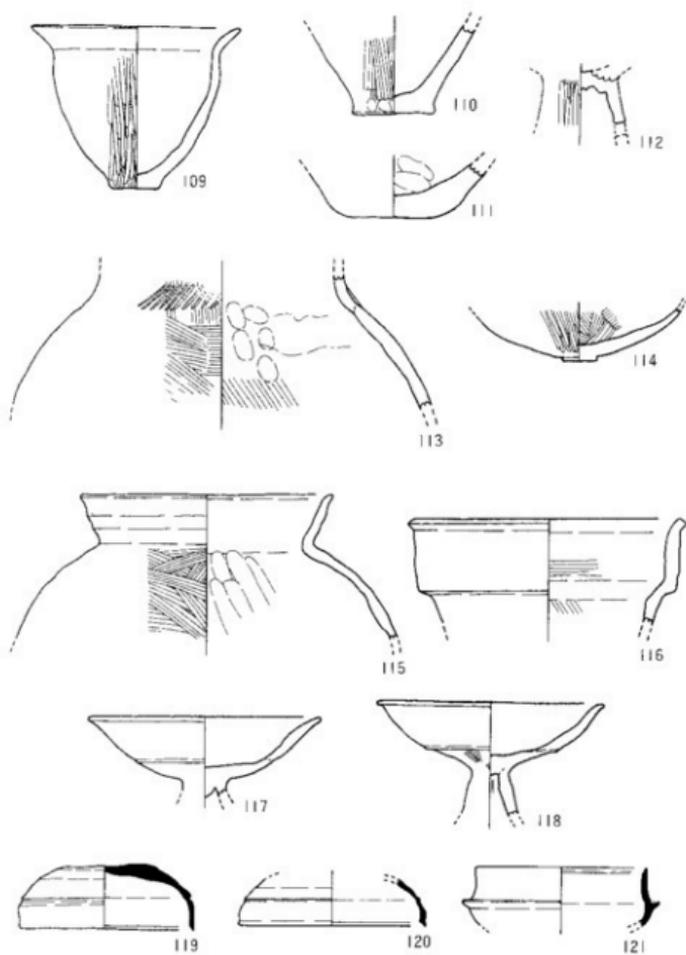
各土壌に関する詳細は表7に記す。

### (4)溝状遺構 (表6)

本調査において確認された溝状遺構は3条である。いずれも第Ⅳ層上面での検出である。調査区中央部を東西に流れる溝SD1は、溝SD3を切り東端はSK1と重複する(切り合い判断できず)。西端はSB11号住居址を切り、西端隅は消失している。南端にて2つに分かれ、分かれた西側では50cm大の石が敷かれていたが、その目的はわからない。時期は、竪穴式住居址、土壌を切るか掘立柱建物に切られることや埋土中ではあるが須恵器を含むことより6世紀以降に掘削されたものであろう。

各溝に関する詳細は表6に記す。

調査の概要

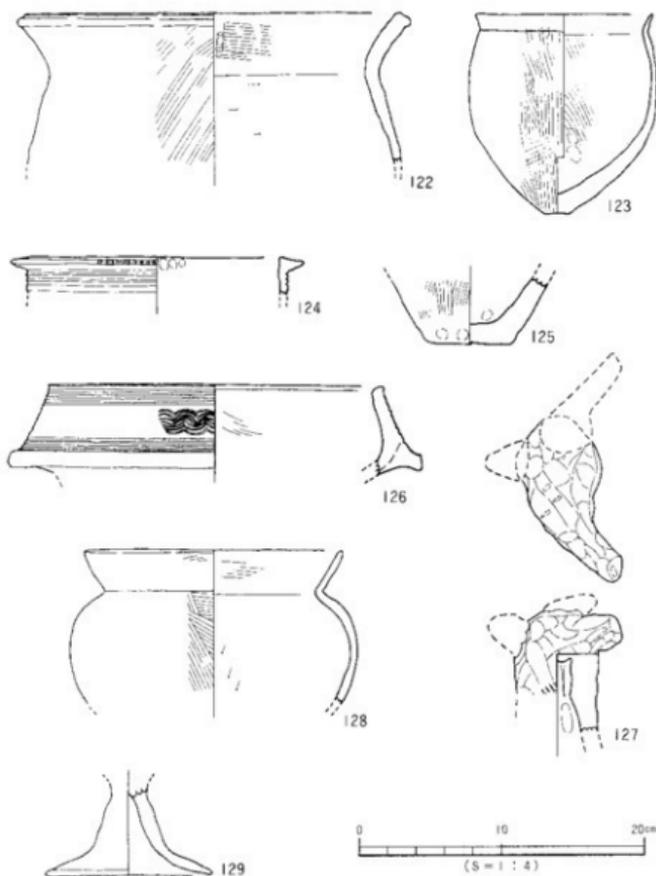


109~112 SK 1  
 113・114 SK 2  
 115~121 SK 10

0 10 20cm  
 (S = 1 : 4)

第38図 SK出土遺物実測図(1)

樽味立添遺跡



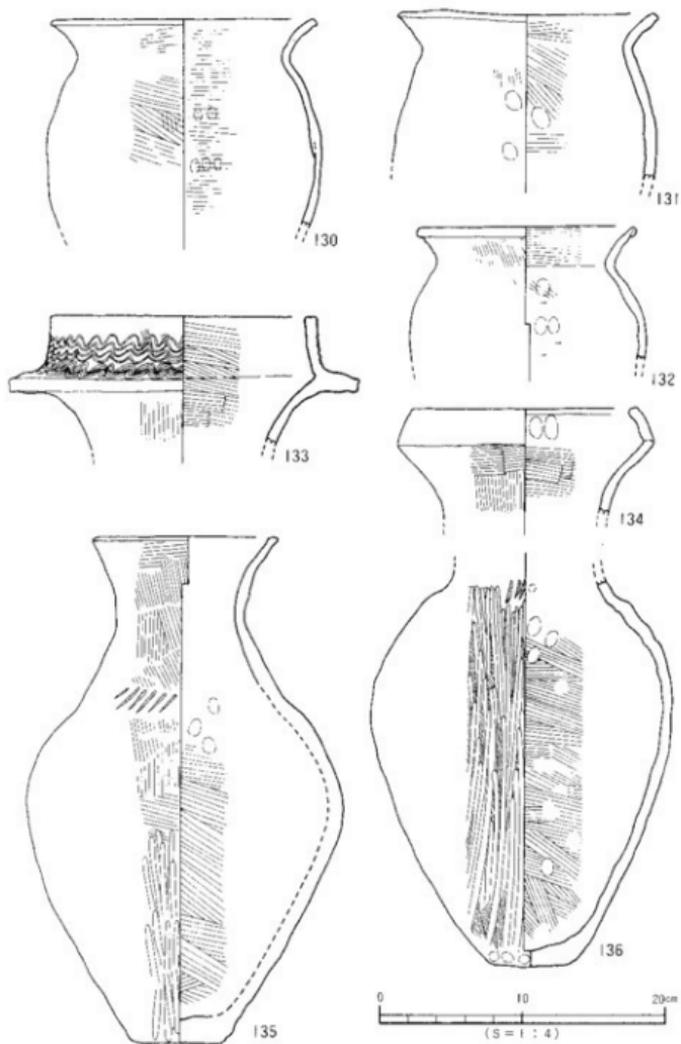
122 SK 11      123 SK 12  
124-127 SK 13

第39図 SK出土遺物実測図(2)

(5) その他の遺構と遺物

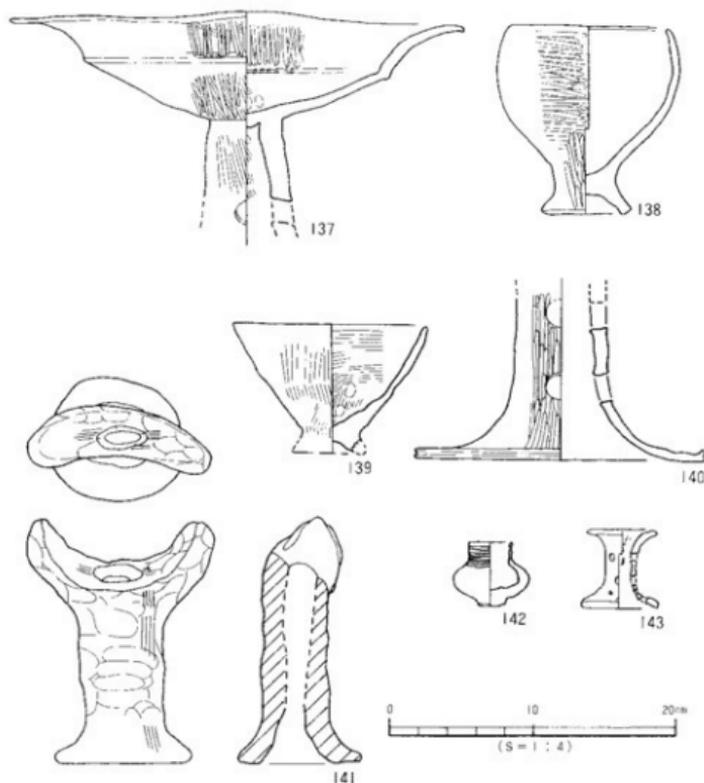
本調査区において確認された柱穴は302基（掘立柱建物柱穴を含む）である。いずれも、第IV層上面での検出である。柱穴内からの遺物の出土はあまりみられない。他に、土器溜りを確認した。A6区(SX1)・B4区(SX2・3)である。

調査の概要



第40図 SX 2 出土遺物実測図 (I)

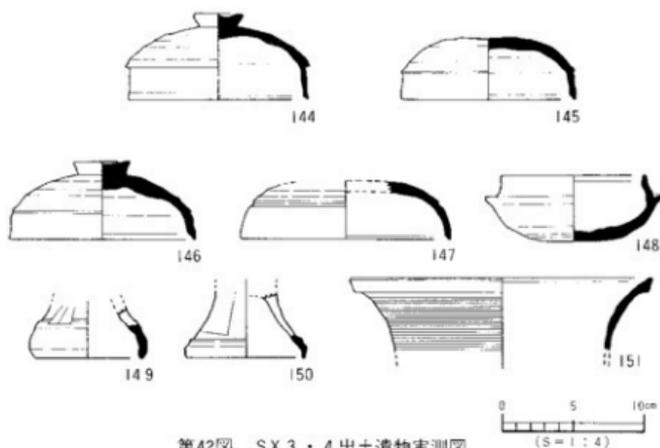
樽味立添遺跡



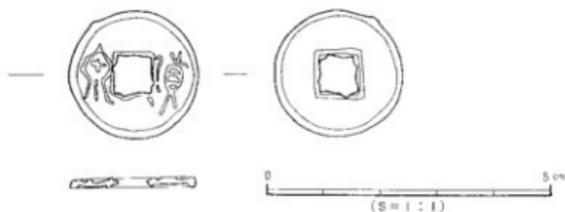
第41図 SX 2 出土遺物実測図 (2)

SX 2 調査区南側中央B 4区に位置する。明確な掘り方は検出できなかった。50×100cmの範囲で土器が多量に検出された。出土遺物は、甕形土器・壺形土器・高環形土器・器台形土器・支脚形土器・鉢形土器で一括品として資料性が高い。130・131は甕形土器である。肩部の張りが弱く、口縁部はゆるやかに折り曲がる。133～136は壺形土器である。133・134は複合口縁壺で、133は櫛状工具（1本歯）による波状文が2段に施される。135は内傾する頸部に外傾して開く口縁部をもつ。頸部下端には、板状工具の木目による「ノ」の字状文が押圧される（一部分にのみ施文）。136は長胴を早するもので、頸部下端には135と同様な施文を施す。137は高環形土器、138・139は鉢形土器である。140は器台形土器の脚部で端面には一

調査の概要



第42図 SX 3・4 出土遺物実測図



第43図 貨泉実測図

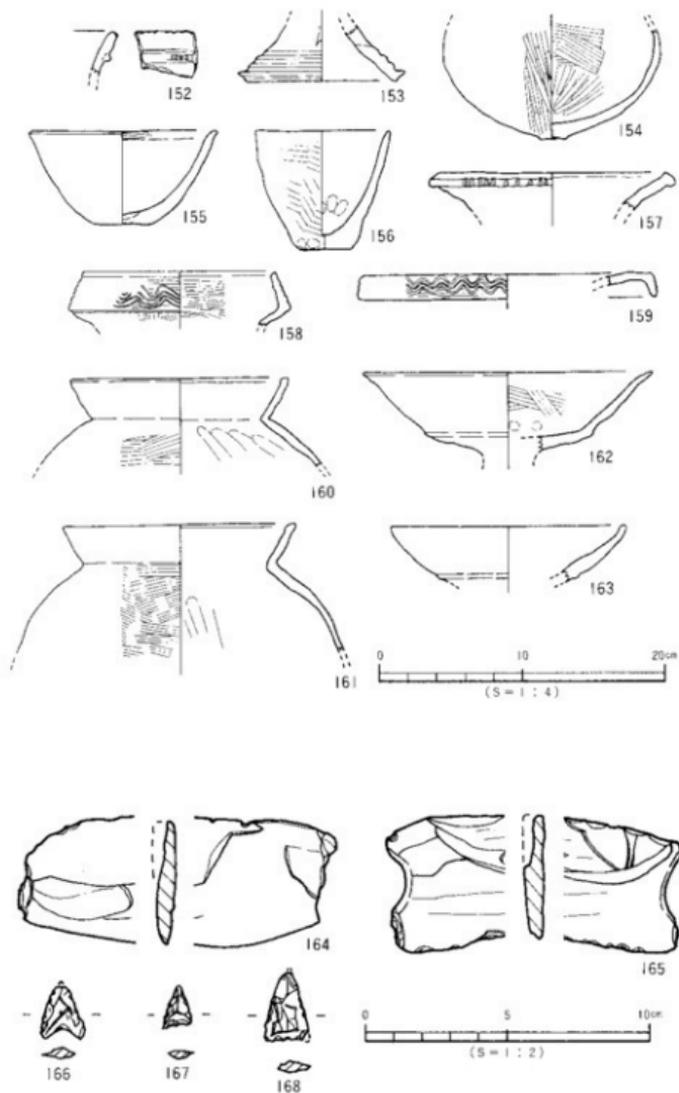
条の沈線文を施す。141は支脚形土器で、受部中央に貫通する孔をもつ。142・143はミニチュア上器で、142には沈線文と円孔が施される。時期は、弥生時代後期後葉である。

貨泉（巻頭図版1 第43図）

出土状況 SB 9を覆う包含層である基本層位第Ⅲ層中より出土した。第Ⅲ層には弥生～古墳時代までの遺物が混在しており、単純な文化上層ではない。よって、貨泉の特定な時期比定は難しい。

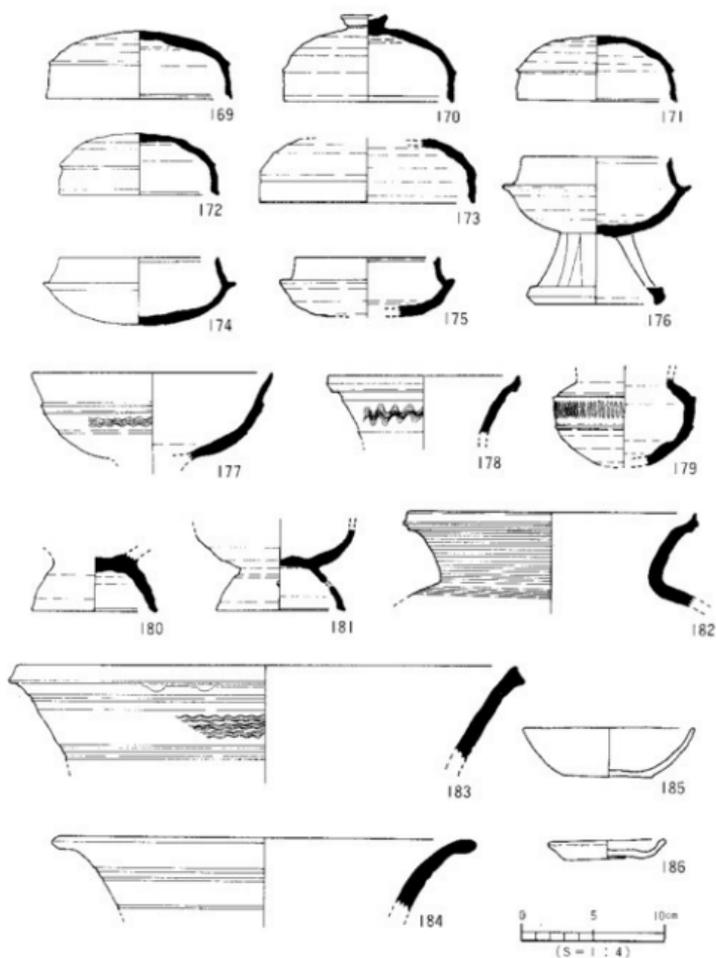
遺物 完存。直径2.2cm、重さ1.9g、方孔は0.7～0.75cmを計る。方孔には、四方に方形を呈するように欠損部分が看取される。

樽味立添遺跡



第44图 包含層出土遺物実測図 (i)

調査の概要



第45図 包含層出土遺物実測図(2)

## 4. 小結

### (1) 弥生時代

遺構 確実に弥生時代に時期比定できるのは、SK1・SK2とSX1・2・3である。いずれも後期後葉のものである。SK1・2は性格は不明で、SX2は出土状況より土器の一括廃棄が行われたことが知れる。SX1・3は人為的行為の産物であるかは不明であった。また、推論の域をでないが平面形や規模よりSB1・SB12は弥生時代後期後半～古墳時代初頭の間に築造された可能性を考えている。弥生時代遺構はSB1・12を加え、本調査地のなかでやや低い場所である南半部に散見される。このことは、当地の南及び東に後期の集落が展開されることを示唆するものであろう。

遺物 後期後葉以降の遺物が多数を占め、前期・中期後葉の遺物が数点小片として出土している。後期後葉の遺物も、SK1・SX1・2・3より出土したものが大半で、包含層出土品は少量である。このうち、SX2からは多くの土器が良好な状況で出土した。

SX2からは、甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高環形土器・器台形土器・支脚形土器が出土し、後期後葉の器種構成を知りえる好資料（一括資料）である（第40・41頁）。甕形土器は、「く」字状に長く折り曲げられた口縁部と、肩部の張りは弱く長胴の体部をもつ。壺形土器は、長頸壺と複合口縁壺がある。長頸壺は内傾する頸部と口頸部、頸胴部の境が不明瞭であることを特徴とする。複合口縁壺は中型品と大型品がある。中型品は、複合口縁接合部に稜をもち、内湾して無文の複合口縁部をもつ。大型品は、接合部をやや下方へタガ状に突出させ、複合口縁部は弓状にそりながら立ち上がる。外面には波状文を施す。高環形土器は、坏部の外反が大きく、柱部に円孔をもつ。器台形土器は、円筒形の柱部に円孔を穿つ。鉢形土器は小型品で、上げ底で坏部が内湾するものと外傾して立ち上がるものの二種類がある。支脚形土器は、受部が「U」字状を呈し、上方に伸びる二本の突起をもつ。各器種とも梅木が提示する福年試案のII-2、すなわち後期後葉に属するものである【梅木謙一 1991】。

### (2) 古墳時代

本調査検出の遺構及び出土遺物の主体をなす。

前期 SB13・4は松山平野でも数少ない前期の竪穴式住居址であり、かつSB13は初頭の土器様相が知れるものとして貴重な資料である。

SB13からは、甕形土器・壺形土器・甌形土器・椀形土器が出土した。甕形土器は、丸底ないし小さい平底、尖底を呈する底部に、長胴及び特に胴下半部にふくらみをもつ胴部と、「く」字状の口縁部をもつ。叩き技法が使用され、下半部は叩き後刷毛目調整を行う。壺形土器は、複合口縁壺があり短頸で、複合口縁部の内傾が弱い（直立化傾向が強い）。甌形土器は、尖底に焼成前の小円孔が穿たれる。器表外面に叩き痕を残す。焼成前に穿孔する甌形土器の本格的制作の時期は宮前川遺跡出土例を含め、松山平野では古墳時代初頭には始められ

ていたことが判る〔野口・大滝他 1986〕。椀形土器は小型品で手捏ね品である。これ等の土器群は、その特徴より古墳時代でも初頭に時期比定されるものとする。

中期 注目されるのはSB6である。遺物は、壁体に近い地点で同心円状に出土した。高環形土器の出土数は多く、特に維持状況の良い環部が四方より出土した。甕形土器・壺形土器は少量でかつ、破片での出土であり、高環形土器と好対照の出土状況を示す。この出土状況の差は興味深い事象である。土器相は、甕形土器は口縁端部の内傾と肥厚はない。壺形土器は、口径が胴径より小さく、頸部がやや短くなる。高環形土器は、環部形態により口径が小さく環部が深いもの、屈曲部に段をもち、口径が大きいもの。屈曲部に段をもち、口径が大きいものである。古墳時代中期後半の土器様相が知れるものとして好資料となるものである。

後期以降 時期特定はできないものの、掘立柱建物址は全て古墳時代後期以降のものであろう。9・10号建物は、掘り方・柱痕とも明確に検出できた。9号建物は総柱となり、倉庫的な施設となるものである。柱穴の規模や掘立柱建物の密集度は、鹿守や官衙関連遺構が検出された来住・久米地域や、同地の北東部にある福音寺町の遺跡に次ぐ検出数であり(註2)、古墳時代後期以降の平野内での当地の歴史的役割(位置)を考える必要があるかと思われる。

遺物は、5世紀末～6世紀前半の須恵器が出土している。須恵器の集落内出土数としては、松山平野でも多い方であり、掘立柱建物址数の多さとも同調しており興味深い資料である。

### (3)『貨泉』の出土

包含層中の出土であるが、『貨泉』が良好な維持状況で出土した。包含層は、40cmにおよぶ堆積を測り、弥生～中世の遺物が混在するも、分層は不可能であったことより、時期特定ができなかった。発掘調査出土品としては四国では初例であり、その点においては貴重な資料である。時期を特定できないものの、『貨泉』を入手できた集落が当地域に存在していたことは間違いなく、当地を含めたこの地域の重要性は認めなければならないだろう。

### (4)竪穴式住居址の概要

13棟の竪穴式住居址を検出した。時期を特定できる資料が少ない。弥生時代として断定できるものはない。古墳時代に比定されるものは、前期SB4・13、中期SB3・6・7・9である。他の住居址については時期特定が推論の域をでないため論述をさける。

古墳時代の住居址 本調査地検出の古墳時代竪穴式住居址は全て四角形プランをとることが判る。(SB4は、南側壁が弧を描き突出するものの、四角形プランに属するものと考えられる)。主柱穴数は、四本柱(四本柱と推定されるものを含む)であるものがSB13・3・6・7、不明なものがSB4・9である。SB3の主柱穴は、南壁部に接する位置と壁面を切っ立柱させる。平野内では、文京遺跡10次調査SB2・4(弥生後期)に類例がある〔愛媛大学 1991〕。伊は、SB13・3・6で検出され、主柱穴間に配置される。この他住居址に土壇をもつものにSB7・9がある。以上のことより、SB13・3・6・7は形態・規模・施

設等において平野内検出の古墳時代竪穴式住居址と同じ様相を示し〔梅木謙一 1991〕、SB 4・9 はやや異相であるといえる。

この他に注目されるものでは、SB12の形態と、幾つかの住居址にみられた凹凸の著しい床面、主柱穴壁の未検出住居の存在である。

SB12は、一辺6m前後の多角形（六角形を推定）を呈するものと考えられる。多角形住居址は、平野内では桑原高井遺跡SB2（弥生末～古墳時代初頭）に類例がある〔森光晴 1980〕。桑原高井遺跡SB2では高床部を設置している。今回の調査では断定できなかったが、SB7北壁（消失）とSB12北壁との間にSB12を切るL字状の構築物がある。桑原高井遺跡検出例より本例がSB12の高床部であった可能性を考えている。

SB3・6・7・10・11・12の掘り方最終面は、下部層である第V層の礫が露出し凹凸が著しい。SB9は全面貼り床（改築時における床の貼りかえの可能性もあり）で、SB6では貼り床にしたと思われる部分を検出している。SB3・7・10・11・12は貼り床であったかは判断できなかった。松山大学構内遺跡2次調査〔梅木 1991〕の竪穴式住居址では、掘り方最終面に露出する礫上に完形に近い土器が検出された例もあり、竪穴式住居址の床面使用法について課題を提示するものである。

以上、簡単に調査の報告を行った。貨泉の出土は、本遺跡だけでなく、松山平野の原始・古代を考える上には、時期特定はできなかったが貴重な資料になるものと考ええる。竪穴式住居址と記述したものなかで、SB2・5は規模が小さい。居住は可能ではあるが、大型のものとは、役割に差異があるものと考えerがどうだろうか。また、掘立柱建物址の柱穴の特定と判断については、調査の度に悩ませられる。今回は、規模・埋土・距離等から判断し、報告においては、現場で判断したものを全て掲載した。ただし、図化すると違和感がある建物もある。

（梅木）

#### 〔文献〕

- 梅木謙一 1989 「梅味四反地遺跡」 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』 松山市教育委員会  
 梅木謙一 1991 「松山大学構内遺跡」 松山大学・松山市教育委員会  
 梅木謙一・宮内慎一 1991 「遺後今市6次調査地」 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』 松山市教育委員会  
 大滝雅嗣・野口光比古 1986 『宮前川遺跡。柳屋塚埋蔵文化財調査センター』  
 古代学協会四国支部 1988 「遺後城北遺跡をめぐって」 シンポジウム資料  
 西田 栄・森 光晴・大山正風 1976 「文京遺跡」 愛媛大学・松山市教育委員会  
 宮本一大 1989 「梅味・鷹子遺跡の調査」 愛媛大学考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室  
 森 光晴 1986 「浮穴・西石井荒神堂・東木Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡」 松山市教育委員会

遺構一覽

遺構・遺物一覽（遺構一覽：宮内填一、遺物観察表：梅木謙一・水口あをい）

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覽である。

(2) 遺構の一覽表中の出土遺物欄の略号について。

例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ): 復元推定地

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( )中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1~4)多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表4 竪穴式住居一覽

竪穴(SB)	時期	平面形	規 長さ×幅×深さ(m)	横	主柱穴 (本)	内部施設			周壁溝	備考
						高床	土壇	炉 カマド		
13	古墳初期	隅丸方形	2.9×3.6×0.32		2(2)			○		SB3に併せられる
4	古墳初期	楕円形	3.6×4.0×0.70		6					
1	弥生中～古墳初	円形	7.3×2.5×0.15						溝	
3	古墳中期	隅丸方形	3.0×2.6×0.20		4			○		SB12を切る
12	古墳中期	隅丸多角形	6.0×6.0×0.20							SB7に併せられる
7	古墳中期	隅丸方形	4.6×3.6×0.22		3(1)					SB12を切る
6	古墳中期	隅丸方形	3.3×3.2×0.15		4			○		SD1に併せられる
8	古墳後期	隅丸方形	3.7×3.2×0.10							SB9に併せられる
9	古墳後期	隅丸方形	4.8×4.3×0.08					○		SB8を切る
5	弥生後～古墳後	円形	3.8×3.0×0.10							SK2を切る
10	古墳中期	隅丸方形	6.2×2.1×0.08					○		SB11に併せられる
11	古墳後期	隅丸方形	6.1×6.8×0.10					○		SB10と重複
2	前期不明	隅丸方形	2.9×2.3×0.06							

表5 竪穴式住居の炉・カマド一覽

竪穴(SB)	時期	炉	カマド	位置	平面形	規 長さ×幅×深さ(m)	横	備考
13	古墳初期	○		遺構中央南寄り	長楕円形	1.3×0.7×0.40		焼土・炭
3	古墳中期	○		南壁中央	L字状	1.2×0.8×0.20		焼土・炭
6	古墳中期	○		遺構中央	楕円形	0.8×0.5×0.10		焼土・炭
11	古墳後期	○		遺構中央やや北寄り	隅丸方形	1.3×0.7×0.15		

表6 溝一覽

溝(SD)	地区	断面形	規 長さ×幅×深さ(m)	横	埋土 (シルト)	出土遺物	備考	時期
1	A7-C7	舟底状	27.0×0.6×0.30		黒褐色	磁器器	SD3を切る	古墳後期以降
2	A3	舟底状	2.0×1.2×0.20		出包色			古墳後期以降
3	C6-C13	皿状	9.6×0.8×0.10		暗褐色		SD1に併せられる	古墳後期以降

梅味立添遺跡

●表7 土壌一覧

土壌(SK)	地区	平面形	断面形	規 長さ×幅×深さ(m)	横 埋土 (シルト)	出土遺物	備考	時期
1	A6	円形	舟底状	1.9×1.9×0.55	暗茶褐色	弥生		弥生後期後半
2	B6	長方形	皿状	1.8×0.8×0.08	暗茶褐色	弥生	S B 5に併せられる	弥生後期後半
3	B7	方形	皿状	2.2×1.6×0.15	暗茶褐色			
4	B4	長方形	皿状	2.2×1.3×0.10	暗茶褐色			
5	B5	円形	皿状	1.8×1.3×0.07	暗茶褐色		S K 6を切る	
6	B4	長方形	逆梯状	2.2×0.8×0.20	暗茶褐色		S K 5に併せられる	
7	B6	長方形	皿状	2.3×0.9×0.06	暗茶褐色			
8	B7	長方形	舟底状	1.5×0.8×0.15	暗茶褐色			
9	B7	円形	皿状	1.8×0.7×0.12	暗茶褐色		S D 1に切られる	
10	C9	円形	皿状	2.0×1.6×0.10	黒褐色	土師・硬塞		古墳中期以降
11	C6	円形	円レンズ状	1.9×1.7×0.08	暗茶褐色	土師・硬塞	S D 1に切られる	古墳中期以降
12	C7	方形	皿状	1.7×1.6×0.10	暗茶褐色	弥生	S D 1に切られる	弥生後期後半
13	C8	円形	逆舟形状	2.4×1.7×0.30	黒褐色	弥生	S B 10に露出	
14	C14	円形	逆舟形状	2.0×1.5×0.35	黒褐色			
15	A3	円形	皿状	1.7×1.7×0.30	黒褐色			
16	C5	長方形	皿状	2.0×1.0×0.15	暗茶褐色		S B 9号内	

●表8 掘立柱建物址一覧

建物 番号	規模(間)	桁		梁		床面積 (㎡)	時期	備考
		実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			
1	2×1	310 (10.3)	5・5.3	170 (5.7)	5.7	3.27	古墳後期以降	
2	2×2	275 (9.2)	4.3・4.9	265 (8.8)	3.7・3.1	7.29	古墳後期以降	
3	1×1	220 (7.3)	7.3	165 (5.2)	6.2	4.07	古墳後期以降	
4	4×1	500 (16.7)	4.7・4・3・5	330 (11)	11	16.50	古墳後期以降	
5	4×1	320 (10.7)	3.3	190 (6.3)	6.3	6.08	古墳後期以降	
6	3×2	325 (10.8)	3.3・3.7・3.8	275 (9.2)	4.2・5	8.91	古墳後期以降	
7	1×2	250 (8.3)	8.3	240 (8)	4.3・3.7	6.00	古墳後期以降	S B 6を切る
8	3×3	385 (12.8)	4.7・4・4.1	275 (9.2)	5.3・3.9	10.58	古墳後期以降	
9	2×2	335 (11.2)	5・6.1	265 (8.8)	5.5・3.2	8.88	古墳後期以降	柱礎
10	3×3	600 (20)	6.7・6.3・7	490 (16.3)	6.3・4・6	39.40	古墳後期以降	S B 5を切る
11	1×2	225 (10.8)	10.8	280 (9.3)	4.2・5.1	9.10	古墳後期以降	
12	2×2	450 (15)	7・8	335 (11.2)	6・5.2	15.07	古墳後期以降	
13	3×6	365 (11.8)	3.5・3.8・4.5				古墳後期以降	
14	2×1	370 (12.3)	5.7・6.6	305 (9.8)	6.8	7.58	古墳後期以降	
15	4×2	790 (23.4)	6・5.7・6・5.7	400 (13.3)	6.7・6.6	28.00	古墳後期以降	
16	1×1	330 (11)	11	290 (9.7)	9.7	11.38	古墳後期以降	S B 6を切る
17	1×1	290 (9.7)	9.7	215 (7.2)	7.2	6.34	古墳後期以降	
18	2×2	490 (16.3)	7.7・8.6	320 (10.7)	5.8・6.4	15.68	古墳後期以降	S B 6を切る

## 遺物観察表

●表9 SB13出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
1	罍	口径14.0 器高21.1 底径7.2	丸みのある小さい罍。 甲斐の縁口縁部を折り返す。 口部底縁に横。	①→タタキ→ヨコナテ ②→タタキ(右ナリ)→ タテハク(6-7本/1cm)	①→ハケ→ヨコナテ ②→ハケ→ナテ ③→ナテ	石・長(1-5) 全 ○	痕	22
2	壺	口径13.6	丸い小さい壺。胴下半に よく丸みをもつ。口縁部 縁に横。	①→タタキ(10-11本/5cm) ②→タタキ ③→タテハク(7本/1cm)	①→ハケ ②→ハケ(7-8本/1cm) ③→ナテ上げ	石・長(1-5) ○	黒 痕	22
3	罍	口径14.25	腹郭内面に横をもつ。 口縁部に甲斐折り返し出さ る。	①→ハケ(7-8本/1cm) ②→タタキ ③→タタキ→ハケ	①→ハケ(7本/1cm) ②→ハケ(一部ナテ)	石・長(1-3) ○	黒 痕	23
4	罍	口径13.6	口縁部縁に先折り返し、大き き甲斐の折返し、口部底縁に ゆるやかな横。	①→ハケ→ヨコナテ ②→タタキ(右ナリ) (10-11本/5cm)	③→ハケ→ナテ	砂粒 ○	黒 痕	23
5	罍	口径15.0	口縁部縁に先折り返し、甲斐 折返し口部底縁を折り返す。 口縁部縁に横。	①→ハケ→ヨコナテ ②→タタキ(9本/5cm)→ タテハク(7本/1cm)	③→ハケ→ヨコナテ ④→ハケ→ナテ	石・長(1-4) ○		23
6	罍	口径7.8	丸みのある小さい罍。 底郭内面は固み、平につ く。器壁厚い。	①→タタキ(9-10本/5cm) →タテハケ ②→ハケ	③→ナテ ④→ナテ上げ ⑤→ハケ	石・長(1-6) ○	黒 痕	22
7	罍	口径8.8	小さい丸罍。器壁は厚い。	タタキ→ ハケ(6-7本/1cm)	ナテ	砂粒 ○		
8	罍	口径14.25	胴部の折り返し折返し、胴部 内面に横合痕を残す。	タタキ(13-14本/5cm)→ ハケ(8-9本/1cm)	ハケ(8-9本/1cm)	砂粒 ○	痕	
9	罍	口径8.5	丸い丸罍。器壁は厚い。	タタキ(12-13本/5cm)→ ハケ(7-8本/1cm)	ハケ(7-8本/1cm)→ ナテ上げ	砂粒 ○		23
10	罍	口径15.8	丸罍。底郭内面に固み、 やや平になる。胴部下半 にくびれ部をもつ。	タタキ→ タテハク(8-9本/1cm)	③→ハケ ④→ナテ	砂粒 ○	痕	22
11	壺	口径22	内湾する口縁部。胴部に 悪状の凸部をもつ。凸部 には板状工具による刻印。	①→ヨコナテ ②→ハケ→ヨコナテ ③→ハケ(5本/1cm)	④→ハケ ⑤→ハケ→ナテ ⑥→ハケ(5本/1cm)	石・長(1-5) ○		22
12	壺	口径16	短い頸部をもつ。口縁外 面に4本の指環き波状文 を残す。	①→ハケ→板文 ②→ハケ(5本/1cm)	ナテ	砂粒(石・長)全 ○		23
13	壺	口径6.1	小片。内面折痕。 板状工具による施文。	③→ハケ→ナテ	折れハケ→ナテ	石(1-3) ○		23
14	罍	口径14.4 器高15.3	胴部下半で急激にすぼま る。底郭に横成郭の小円 孔(5mm)を穿つ。	タタキ	ナテ(一部ハケ)	石・長(1-6) ○	黒 痕	22
15	瓶	口径10.3	底郭が突出する。底郭に 成郭前的小円孔(5mm)を 穿つ。	フメツ底郭指環上成郭蓋	③→フメツ(ハケあり) ④→ナテ	石・長(1-3) ○		23
16	罍	口径8 器高2.2	平型小品。外面を指環蓋 を被せに残す。	指環平底蓋	指環上成郭蓋	石(1-3) ○		

樽味立添遺跡

SB13出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
17	碗	口径 6.9 器高 2.3	口縁端部以外方に絞筋。	横線瓦状磨着	指板瓦状磨着	砂粒 ○		22
18	支脚	器高 15.9 口径 10.0	中空。突起は「日」字状に 2つと背部に1つ施す。	横線瓦状磨着	レビリ状 ナテ	石・灰(1-4) ○	図解	22

●表10 SB4出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
19	鉢	口径 18.8 器高 10.3 底径 2.0	小さい丸底。器縁は滑い 叩き技法顕著。	タタキ(13→15本/5cm)	ハケ(7→10本/1cm)	灰 ○	図解	24
20	高杯	口径(13.9)	組み合せ式。脚部さし込み。 耳意部は縦口縁。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒 ○	図解	24
21	2つ1組	口径 6.3 器高 8.0 底径 9.0	円柱状の体部。大きな平 底。把手はタテにつく。	タテハケ(6本/1cm)	①ハケ→ココナテ 磨→ココナテ ②ナテ	砂粒 ○		24

●表11 SB3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
22	高杯	口径 18	丸底存。口縁部外反。支 取技法。器曲部にわずかに 絞あり。	ココナテ	①ココナテ ②ナテ	灰 ○	図解	24
23	高杯	口径(19.6) 底径 13.4	耳部欠。口縁部外反。 器曲部に段をもつ。	①ココナテ ②ナテ ③ココナテ	④ココナテ ⑤ハケ→ラズリ ⑥ココナテ	砂粒 ○		24
24	高杯	器高 8.5	脚部未完存。やや太めの 柱をもつ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・灰(1-3) ○		24

●表12 SB7出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
25	甕	口径 25.1	内湾する口縁部。口縁端 部は内側に肥厚し、内湾 する。	①ココナテ ②ていねいなハケ (16本/1cm)	①ココナテ 磨→指板瓦状磨着	石・灰(1-4) ○		25
26	甕	口径 18	直立ぶみに立ち上げる口 縁部。口縁端部は、一部 で内湾する。	①ココナテ ②磨滅の為不明	①ココナテ 磨→ナテ上げ	石・灰(1-3) ○		25
27	甕	残高 11.8	残部の側部は、胴中段に 最大径をもつ。内面には 指板磨着痕が顕著。	①ハケ ②下) ハケ→ナテ	①ナテ上げ ②ナテ	石・灰(1-3) ○		25

## 遺物観察表

SB7 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	量量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
28	高杯	口径 17 器高 14.2 底径 12.6	口縁端はわずかに内湾する。口縁部は丸みのある段をもつ。	① ハツ・ココナ(横) ココナテ ② ヨコナテ ③ ナテ	①-ココナテ ②-ハツ・ココナテ ③-ハケ→ヨコナテ ④-ケズリ	密 ○		25
29	小型丸底盃	口径 7.6 器高 8.4 底径 1.0	口縁と胴大側径がほぼ同径。口縁端部は斜めに面を切る。	① ハケ→ココナテ ②-ハケ	①-ヨコナテ ②-ナテ	密 ○	出典	25
30	高杯	残高 6.8	片断と胴部を結合した後残存部に粘土層を貼りつける。	磨滅の為不明	ナテ	密 ○		25

●表13 SB6 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	量量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
31	甕	口径(12.7)	口縁上部はわずかに内湾する。口縁端部は「コ」字状。	①-ハケ→ココナテ ②-ハケ(6本/1cm)	①-ハケ ②-ナテ	密 ○		26
32	甕	口径(15.0)	口縁上部が大きく外反する。口縁端部は丸い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒 ○		
33	甕	口径(12.0)	内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部は先削りする。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密 ○		
34	甕	口径(15.2)	口縁上部はわずかに内湾し外反する。胴部以下をへう削りする。	①-ナテハケ→ココナテ	①-ヨコナテ(6本/1cm) ②-ヘラケズリ	砂粒 ○		26
35	甕	残高 18.9	胴部の通る体部は、全体的に丸い。胴部端部に接合痕を帯び、器壁厚い。	①-ハケ ②-ナテ	①-ヨコナテ ②-ヘラケズリ ③-ナテ	密 ○		
36	甕	残高 15.1	丸く張る器部。器壁は削るが、やや厚いものである。	ハケ(8本/1cm)→ナテ	ヘラケズリ	行・表(1-4) 全 ○	出典	
37	甕	残高 2.2	片断の器部。器壁はやや厚い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒 ○		
38	高杯	口径(13.7) 器高 13.0 底径 12.2	口縁部は口縁に対し深い体部をもつ。口縁部の幅はあまり。	①-磨滅の為不明 ②-ナテ ③-ココナテ	①-ハケ(6本/1cm) ②-ヘラケズリ ③-ヨコナテ	砂粒 ○		26
39	高杯	口径(17.2) 器高 12.4 底径 11.0	片断と胴部をわずかに欠く。胴部は明確に段をもつ。	①-ハツ(10本/1cm)→ココナテ ②-ココナテ ③-ココナテ ④-ナテ	①-ハツ(10本/1cm)→ココナテ ②-ヘラケズリ ③-ヨコナテ	密 ○		26
40	高杯	口径 15.3	胴部には接合時の段を残す。口縁上部は外反する。	ココナテ	磨滅の為不明	砂粒(1-3) ○		26
41	高杯	口径(19.2)	片断小片。口縁部に段をもつ。口縁端部は丸く、器壁を帯びる。	ココナテ	ココナテ	密 ○		
42	高杯	口径 16.2	片断片断。片断部は、口縁部の上下に凹凸痕がわずかに残る。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒(1-2) ○		26

樽味立添遺跡

S B 6 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
43	高杯	口径 18.7	写の残存。胴部は腰口縁を要す。口縁上部がわずかに外反する。	ココナテ	ハケ→ココナテ	砂粒 ○		
44	高杯	口径 (19.5)	口縁部を欠く。胴部部の段に丸みをもつ。口縁部わずかに外反。	①-腰減の丸み不明 ②-ココナテ	①-ココナテ ②-ナテ	砂粒 ○		
45	高杯	口径 (18.1)	胴部部の段の上部に腰口縁がわずかに残る。口縁部外反。	①-同転ココナテ ②-ナテ	①-同転ココナテ ②-ナテ	密 ○		27
46	高杯	口径 17.8 器高 (13.2) 器高 13.2	胴部部はわずかに段をもつ。口縁部は外反する。	①-ココナテ ②-ハテ (10本/1cm) ③-ナテ	①-ココナテ ②-ナテ ③-ココナテ	石+長 (1-2) ○		27
47	高杯	口径 21.6	脚部部を欠く。光澤残存。胴部部には、かすかに段がある。	①-ハケ→ココナテ ②-ココナテ ③-ナテ	①-ココナテ ②-ハテ→ナテ	砂粒 (1-2) ○	出表	27
48	高杯	口径 (22.0)	写証完全。光澤技法。胴部部はかすかに段を残す。	ハケ→ココナテ	①-ココナテ ②-ハテ→ナテ	砂粒 ○		黒斑
49	高杯	口径 16.1 器高 10.0 器高 9.4	写証の欠く。口縁部は内傾して立ち上る。光澤残存。	調減の不明	調減の不明	砂粒 ○		27
50	高杯	口径 (17.0)	口縁部は内傾して立ち上る。光澤技法。胴部部はかすかに段をもつ。	①-ココナテ ②-ナテ ③-ナテ	①-ココナテ ②-ナテ ③-ヘラケズリ	砂粒 (1-2) 全 ○	黒斑	27
51	高杯	器高 6.4	光澤技法。写証は口縁を要す。	①-ココナテ ②-ナテ	①-ナテ ②-カキ取り	密 ○		
52	高杯	口径 (18.1)	写残存。胴部部は腰口縁を要する。口縁部は外反する。	ココナテ	ココナテ	砂粒 ○		

●表14 S B 9 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
53	甕	口径 16.7	外傾する長い口縁部の口縁部内面はゆるやかな段をもつ。口縁部は丸い。	①-ココナテ 脚-腰減の丸み不明	①-ココナテ ②-ヘラケズリ→ココナテ ③-ヘラケズリ	石+長 (1-2) ○		
54	甕	口径 23.6	写残存。内傾して立ち上る口縁部。口縁部部は丸い。	①-ココナテ ②-ハテ (3-6本/1cm)	①-ココナテ ②-ハテ→ナテ ③-ヘラケズリ→ナテ	石+長 (1-2) ○		
55	坏蓋	口径 (14.0)	内傾する口縁部。口縁部は丸く細くなる。やや異形。	①-同転ココナテ ②-同転ヘラケズリ	同転ココナテ	砂粒 △		
56	坏蓋	器高 1.5	大きく開つたつまみ	同転ココナテ		密 ○		
57	坏身	口径 12.8 器高 5.9 器高 3.6	写残存。内傾する口縁部。口縁部はかすかに内傾して面をもつ。	①-同転ココナテ ②-同転ヘラケズリ	同転ココナテ	砂粒 ○		

遺物観察表

●表15 S B 5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
58	甕	口径(16.8)	片残存。内面する口縁部。口縁部裏は内側におずかに肥厚し、外縁する。	磨減の為不明	磨減の為不明	砂粒 △		
59	高坏	残高 2.8	片残存。器底部に段をもつ。	磨減の為不明	磨減の為不明	赤 ○		
60	高坏	残高 6.8	片残存。23の筋部が。器底部は、内面の柱一帯境に段をもつ。	磨減の為不明	ナデ	赤 ○		
61	甕	口径 13.2 器高 5.8	口縁部は写を欠く。口唇部は大きく円形。	①△-ヨコナデ ②△-写同傾ヘラクスリ ③△-ヨコナデ	同傾ヨコナデ	赤(白・赤) ○		
62	灰皿	口径(10.0)	小片。口縁部は内湾して立ち上がる。口唇部は大きく圓む。	同傾ヨコナデ	同傾ヨコナデ	赤 ○		

●表16 S B 10 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
63	甕	口径(19.0)	片残存。わずかに内湾する口縁部。口縁部裏は内傾する。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ○		
64	甕	口径(11.8)	片残存。外縁。外反する口縁部。口縁部は光面りする。	①△-ヨコナデ ②△-ヨコナデ ③△-ハケ	④△-磨減の為不明 ⑤△-ヘラクスリ	赤・長(1-2) △		
65	甕	残高(13.1)	片残存。外縁内面は突いたケズリ。器壁が厚い。	①△ヨコナデ ②△一枚ナデ ③△ハケ・一枚ナデ	④△-ヨコナデ ⑤△ヨコナデ ⑥△ケズリ	赤・長(1-4) ○		
66	高坏	残高 4.5	組み合せ式。完備技法。器壁が厚い。	磨減の為不明	磨減の為不明	赤 ○		
67	高坏	残高 2.4	組み合せ式。縦口縁を器壁。	磨減の為不明	磨減の為不明	赤 ○		
68	高坏	底径 11.0	組み合せ式。縦柱中心がふくらむ。器壁が厚い。	①△ナデ ②△-ヨコナデ	③△-ヘラクスリ ④△ヨコナデ	赤・長 ○		
69	高坏	残高 7.7	組み合せ式。器壁が厚い。	わずかにハケあり	ナデ	砂粒 ○		

●表17 S B 11 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
70	甕	口径(24.7)	内面する口縁部。口縁部上部に同曲部をもつ。口縁部裏は内傾する。	①△-ヨコナデ ②△-ハケ(5-6本/1cm)	③△-ヨコナデ ④△ハケ	赤・長(1-3) ○		28

樽味立添遺跡

S B11出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	流量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
71	甕	口径(21.8)	内湾する口縁部。口縁部はやや内傾する。	ココナテ	ココナテ	砂粒 ○		28
72	甕	口径(20.0)	内湾する口縁部。口縁部は内側に突出する。断面は丸い。	ココナテ	ココナテ	砂粒 ○		28
73	甕	口径(20.4)	内湾する口縁部。口縁部は丸みをもち、	①ココナテ ②一筋線の高不明	ココナテ	石・真(1-2) ○		28
74	甕	口径(20.8)	内湾する口縁部。口縁部上部に唇部をもつ。口縁部は丸い。	ココナテ	ココナテ	砂粒 ○		28
75	甕	口径(14.6)	外反する口縁部。口縁部は丸く仕上げ、内面は磨き加減著。	①-ココナテ ②-ハク(6cm/1cm)	①-ココナテ ②-ナテ	石・真(1-2) ○		28
76	甕	口径(12.4)	外反する口縁部。口縁部は丸く仕上げ、小片。	ココナテ	① ココナテ ②-ナテ	砂粒 主 ○		
77	高杯	口径(16.8)	唇部は鋭角及び段は消滅。口縁部はわずかに外反する。	ナテ	ナテ	白金 ○		29
78	高杯	口径 15.0	広く内湾する唇部をもつ。組み合わせ式。	ココナテ	① ヘラクスリ ②-ココナテ	密 ○		29
79	高杯	口径 2.5	大きく扁平な梨実状つまみ。ヘラクスリ痕。小片。	①-ココナテ ②-細粒ヘラクスリ	ココナテ	密 ○		29
80	高杯	口径 2.0	大平部外面ヘラクスリ痕。扁平な梨実状つまみ。小片。	①-ココナテ ②-回転ヘラクスリ	ココナテ	光 ○		29
81	高杯	口径 2.9	大きく凹凸つまみ。浅い大唇部。小片。	①-ココナテ ② 回転ヘラクスリ	ココナテ	密 ○		29
82	甕	口径(14.2)	口縁部先端はやや外反する。口縁部は、やや内面で見え、小片。	ココナテ	ココナテ	砂粒 ○		
83	甕	口径(14.2)	内湾して、外湾する口縁部。口縁部は浅い内面で見え、小片。	ココナテ	ココナテ	密 ○		
84	甕	口径(12.2)	内湾して、垂下する口縁部。口縁部は浅い内面で見え、小片。	ココナテ	ココナテ	密 ○		
85	甕	口径(11.1)	内湾して垂下する口縁部。口縁部は浅い内面で見え、小片。	ココナテ	ココナテ	砂粒 ○		
86	甕	口径(12.5)	内湾して、外湾する口縁部。口縁部は内面で見え、小片。	ココナテ	ココナテ	砂粒 ○		
87	甕	口径(13.2)	互残存。焼成不良。内湾して垂下する口縁部。口縁部は平らで内傾。	ココナテ	ココナテ	砂粒(6+6) △		

遺物観察表

SB11出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
88	円蓋	口径(13.2)	外縁する口縁部、口縁増部は丸い。小片。	ヨコナテ	ヨコナテ	砂粒 △		
89	円蓋	口径(12.6)	口の残存。口縁増部は平直で、内面は縁部より小さい段をもつ。2本の筋線。	㊶-㊶口縁ヘラケズリ ㊷-ヨコナテ	ヨコナテ	青(G-1) ○		
90	円蓋	口径 14.0 器高 5.6	大きく高い大弁部。丸みをもって垂下しわずかに外反する口縁部。与残存。	㊶-㊶口縁ヘラケズリ ㊸-ヨコナテ	ヨコナテ	砂粒 ○	29	
91	円蓋	口径 13.2 器高 4.7	口の残存。丸みをもって垂下し、端部は外反する。筋線は平直で外縁。	㊶-㊶口縁ヘラケズリ ㊸-ヨコナテ	ヨコナテ	砂粒 ○	29	
92	円蓋	口径(13.8)	垂下して、やや外反する口縁部。口縁増部は、おすかに筋線で内縁。小片。	ヨコナテ	ヨコナテ	青 ○		
93	円蓋	口径 13.2 器高 4.5	口の残存。垂下して、端部は外反する口縁部。端部は筋線で内縁する。	㊶-㊶口縁ヘラケズリ ㊸-ヨコナテ	ヨコナテ	砂粒 ○	29	
94	円身	口径(10.5)	内縁するたちあがり。端部は平直。受部は上外方。与残存。	ヨコナテ	ヨコナテ	青 ○	30	
95	円身	口径(11.4)	内縁するたちあがり。端部は平直。受部は大きく上外方。	㊸-ヨコナテ ㊶-㊶口縁ヘラケズリ	ヨコナテ	青 ○	30	
96	円身	口径(10.0)	外反して内縁するたちあがり。端部は平直。受部は上外方。	㊸-ヨコナテ ㊶-㊶口縁ヘラケズリ	ヨコナテ	青 ○	30	
97	円身	口径(12.6) 器高 5.2	連続的に内縁するたちあがり。端部は段を有し内縁。受部は上外方。	㊸-ヨコナテ ㊶-㊶口縁ヘラケズリ	ヨコナテ	青 △		
98	円身	口径 10.5 器高 5.1	内縁し外反するたちあがり。口縁部は丸いが、内面部に段を有する所あり。	㊸-ヨコナテ ㊶-㊶ヘラケズリ	ヨコナテ	青 ○		
99	円身	口径 11.9 器高 5.1	内縁し、やや外反するたちあがり。口縁増部は丸い。	㊸-ヨコナテ ㊷-ツメツ	㊸-ヨコナテ ㊷-ツメツ	青 ○	30	
100	円身	口径(13.6)	内縁するたちあがり。端部は段を有し、内縁。受部は上外方。与残存。	㊸-ヨコナテ ㊶-㊶口縁ヘラケズリ	ヨコナテ	砂粒 ○	20	
101	円身	口径(13.1)	内湾して内縁するたちあがり。端部は平直で内縁。受部は上外方。与残存。	㊸-ヨコナテ ㊶-㊶口縁ヘラケズリ	ヨコナテ	青 ○		
102	円身	口径 12.6 器高 3.2	内縁し、蓋縁さみにたちあがり。受部はやや上外方。	㊸-ヨコナテ ㊷-㊷口縁ヘラケズリ	ヨコナテ	青 ○	20	
103	円身	口径(11.1) 器高 3.7	内縁するたちあがり。端部は光細りで丸い。受部は上外方。与残存。	㊸-ヨコナテ ㊶-㊶口縁ヘラケズリ	ヨコナテ	砂粒 ハ		
104	円身	口径(11.8)	直交さみのたちあがり。端部はおすかに段を有し内縁。受部は上外方。小片。	ヨコナテ	ヨコナテ	青 ○		

樽味立添遺跡

S B11出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
105	坏身	口径(10.0)	外反し、高さ5mのちあがり。幅部は丸い。受部は上外方。小片。	ヨコナテ	ヨコナテ	赤 ○		
106	坏身	残高 4.5	内傾するちあがり。受部は上外方。与残存。	①-ヨコナテ ⑤-片割部ヘラケズリ	ヨコナテ	赤 ○		
107	坏身	口径 11.7 器高 5.0	ひずみ品。内傾し、直立するちあがり。ちあがりは短い。	①-ヨコナテ ⑤-ヘラケズリ	ヨコナテ	赤 ○		30
108	高坏	底径 7.4	有段の細底部。1束の内傾。斜断状の遺し3ヶ。	①-ヨコナテ ⑤-ヨコナテ+スカーン	ヨコナテ	砂粒 ○		30

●表18 SK出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
109	鉢	口径(14.0) 器高 11.3 底径 5.2	突出する小さい平底。ゆるやかに外反する。やや長い口縁部。	ハテ→ヘラミガキ	①-ヨコナテ ⑤-ナテ	砂粒 ○		
110	罎	底径 5.8	突出し、やや凹む平底。	①-ハテ(9本/1cm) ⑤-ナテ	ナテ	石・長(1-2) ○		
111	罎	底径 6.3	やや突出する丸みのある平底。大型品の底部か。	磨滅の角割型不明	ナテ	石・長(1-3) ○		
112	高坏	残高 3.7	詰め合わせ式。柱内面上部はカキ取り痕を露骨に残す。	ハテ→ヘラミガキ	ヘラケズリ	赤 ○		
113	壺	残高 9.0	胴部の張りが弱い。胴部底部に杖状上縁による「ノ」字状の痕目。	⑤-タテハテ+施文 ⑥-ハケ(5-6本/1cm)	⑤-ナテ(磨滅/痕跡) ⑥-ナテ(5-6本/1cm)	石・長(1-3) ○		
114	壺	底径 2.5	突出するボタン状の小さい平底。胴部長径部の底部か。	ヘラミガキ	ハテ(8本/1cm)	石・長(1-4) ○		裏面
115	罎	口径(17.0)	内傾し、口縁上部はわずかに外反する。口縁端部は肥厚せず。内傾。	①-ヨコナテ ⑤-ハテ(8本/1cm)	①-ヨコナテ ⑤-ナテ上げ	石・長(1-2) ○		
116	罎	口径(19.0)	外傾する胴部に、直立する口縁部がつく。口縁端部は外反する。	①-ヨコナテ ⑤-ヨコナテ ⑥-ヨコナテ	ハテ→ヨコナテ	石・長(1-3) ○		裏
117	高坏	口径(15.0)	外傾。外反する口縁部。器底部におすかに縁をもつ。完整残片。	ヨコナテ	ヨコナテ	砂粒 ○		
118	高坏	口径(16.0)	内傾外傾し、外反する口縁部。口縁端部は丸く肥厚。完整残片。	①-ヨコナテ ⑤-ハテ ⑥-磨滅の角不明	①-ヨコナテ ⑤-ハテ→ナテ	砂粒 ○		
119	牙重	口径(12.0) 器高 4.5	内傾して直下する口縁部。端部は凹面で内傾。	①-ヨコナテ ⑤-片割部ヘラケズリ	ヨコナテ	赤 △		

遺物観察表

S K 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
120	坏壺	口径(13.0)	内面して垂下する口縁部。縁部は外傾し、端面は四面で内傾。小片。	ヨコナデ	ココナデ	赤 ○		
121	坏舟	口径(11.8)	高さの長い立ち上がり。端部は段を有し内傾。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	赤 ○		
122	甕	口径(26.0)	ゆるやかに外反する口縁部。口縁部は十字両方外方に小さく突出。	①②—ヨコナデ ③—ハケ(6本/1cm)	④—ハケ(6本/1cm)・ココナデ ⑤—磨減の跡不明	石・長(1-8) クンモ ○		
123	鉢	口径(15.6) 高さ 14.0 底径 (2.1)	外傾する口縁部。端部は外傾し、器壁が薄い。	①—ヨコナデ ②—ハケ(6本/1cm)	①—ヨコナデ ②—ハケ(6-7本/1cm)	石・長(1-2) ○	黒染	
124	甕	口径(17.1)	粘土線を貼り付け口縁部をつくる。口縁部はヘラ筋。ヘラ洗痕(条)。小片。	ヨコナデ→施文	ヨコナデ	石・長(1-2) クンモ ○		
125	甕	底径 (5.6)	平底の底部。	ハケ(8本/1cm)	ナデ	赤(粉) ○	黒染	
126	甕	口径(24.2)	指輪状施文と直線文。幅は7本。小片。	①②—ヨコナデ ③—磨減の跡不明	ヨコナデ	砂粒(1-3) ○		
127	支那	高さ 8.6	底部に二本の突起。後面に小さい突起1本。	タタキ ナデ(指輪状直線型)	ナデ上?	砂粒(1-4) ○	黒染	
128	甕	口径(17.7)	わずかに内傾する口縁部。口縁部は太い。肩部が鋭く張る。	ハケ	①—ハケ→ナデ ②—ヘラケズリ	石・長(1-4) ○		
129	高坏	口径 11.3	短い柱に長い唇部。柱一断面端に凹座を有し小さい。	①—板ナデ ②—ヨコナデ	ナデ	石・長(1-2) ○		

●表19 S X 2 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
130	甕	口径 17.8	ゆるやかに曲がる「く」字状口縁。唇部内面に指輪状を施すに残る。	ハケ(8本/1cm)→ナデ	ハケ(8本/1cm)・ナデ	石・長(1-5) ○	黒染	31
131	甕	口径(19.0)	ゆるやかに曲がる「く」字状口縁。唇部の張りが弱い。	①—ヨコナデ ②—磨減の跡不明	ハケ(8本/1cm)	石・長(1-3) ○		31
132	甕	口径(14.8)	唇部がやや張る。口縁部は小さく下方に突出する。	ハケ(8本/1cm)	①—ハケ(10本/1cm) ②—ケズリ	石・長(1-4) ○		
133	甕	口径(18.6)	口縁部外面に波状文を二段に施す。幅は4本。	①—ヨコナデ→ハケ→施文 ②—ハケ(13本/1cm)	①—ハケ(5本/1cm) ②—ハケ(13本/1cm)	砂粒 全クンモ ○		31

樽味立添造鉢

S X 2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
134	壺	口径(15.4)	「く」字状の複合口縁。口縁部は丸みのある「コ」字状。	① ヨコナテ ② ハケ(10~12本/1cm)	① ヨコナテ ② ハケ(10本/1cm)	石・灰(1-3) ○		31
135	壺	口径 12.4 器高 35.3 底径 6.0	口縁部縁がしぼまる。口縁、頸部、腹部の境が不明瞭。板状の圧痕。	① ハケ ② ハケ→板文 ③ ヘラミガキ	① ヨコナテ ② ナテ ③ ハケ(4本/1cm)	石・灰(1-3) ○	異状	31
136	壺	口径 5.8	長筒で、頸部が狭る。腹部は丸みのある厚底。胴部に板状の圧痕文。	① ヨコナテ→板文 ② ハケ(7本/1cm)→ヘラミガキ	ハケ(10本/1cm)	石・灰(1-4) 異ウツロ ○		31
137	高杯	口径 31.4	大きく外反する杯部口縁。頸部は小さく下方に曲れる。光線放射、内孔。	① ハケ→ヘラミガキ ② ハケ→ヘラミガキ ③ ハケ	① ハケ→ヘラミガキ ② ハケ→ヘラミガキ ③ ナテ	灰 ○	異状	32
138	高杯鉢	口径 11.0 器高 6.2 底径 13.4	内湾する口縁部。調整はヘラにより丁寧に仕上げられる。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	石・灰(1-4) 土 ○		32
139	内付鉢	口径 13.4	口縁部はわずかに内湾する。	① ハケ(4本/1cm) ② ハケ(10本/1cm)	① ハケ(8本/1cm)→ヨコナテ ② ハケ(14本/1cm)	石・灰(1-4) ○		32
140	高杯	口径(20.2)	杯部の口縁は4つで2段。頸部は、上方にわずかにナテによる拡張。	① ヘラミガキ ② ヨコナテ	① ナテ ② ヨコナテ	密 ○		32
141	支脚	口径 8.8 器高 17.2	支脚は突起が2つ。突起→底部まで貫通する孔をもつ。	ハケ(指紋)→板状	ナテ	砂粒 ○	異状	32
142	壺 (ニョウブ)	口径 3.0 器高 4.5 底径 1.9	突起するボタン状の唇部。唇部は(4本)の横線文2組。小門孔2ヶ。	① ナテ→板文 ② ナテ 指紋→板状	ナテ 指紋→板状	密 ○		異状
143	器台 (ハチア)	口径 5.4 器高 5.3 底径 5.0	唇部が口縁を成す。小門孔が4ヶ組穿たれる。	ナテ 指紋→板状	ナテ 指紋→板状	密 ○		

●表20 S X 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
144	壺	口径(12.5) 器高 6.1	中央やや突出する大きなつまみ。垂下して外反する口縁部。	① 指紋→ヘラケズリ ② ヨコナテ	ヨコナテ	密 ○		
145	杯蓋	口径(12.1) 器高 4.4	垂下する口縁部。口縁部は、丸みのある段をもつ。	① 指紋→ヘラケズリ ② ヨコナテ	ヨコナテ	密 ○		

●表21 S X 4 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
146	壺	口径 10.7 器高 5.6	口縁部は丸みをもつ。他のものに比べ重量が重い。	① 指紋→ヘラケズリ ② ヨコナテ	ヨコナテ	灰(4) ○		

## 遺物観察表

S X 4 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
147	坏皿	口径(15.4)	口縁部丸い。段は丸みをもち、下部は円む。	㊸一回転ヘラケズリ ㊹一ヨコナテ	ココナテ	石・長(1) ○		
148	坏舟	口径(10.1) 器高 4.6	内縁し、直立するたちあがり。口縁部は、段をもつ。	㊸一ヨコナテ	ココナテ	密 ○		
149	高杯	口径 (8.1)	通しを2ヶ所取、唇部は丸みをもってたちあがる。	ヨコナテ	ココナテ	密 ○		
150	高杯	口径 (8.1)	唇部は、段をもち、端部は内縁してたちあがる。	ヨコナテ	ココナテ	密 ○		
151	甕	口径(20.8)	口縁部は一角形を呈する。端部は丸い。	㊸ ココナテ ㊹一薄紙(9本/1cm)		密 ○		

●表22 包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
152	甕	口径 5.1	口縁部面と凸縁文上に割目を施す。	ナテ	ナテ	石・長(1-2) ○		34
153	高杯	口径(10.4)	口縁部は大きく窪む。一帯の凹縁文とミツの矢形模透し。小片。	㊸一ヘラミガキ ㊹一ヨコナテ	ナテ上げ	石・長(1-2) ○		
154	甕	口径 1.9	小さく突出するボタン状の平底。唇部はやや高く仕上げられている。	ヘラミガキ	ハテ ヘラミガキ	石・長(1-2) ○		
155	鉢	口径(12.0) 器高 6.6 器径 4.0	平底。わずかに外縁する口縁部。口縁部はやや細くなる。	㊸一ハケーナテ ㊹ ナテ	㊸一ハケ ㊹一ナテ	砂粒 ○		35
156	鉢	口径 9.3 器高 8.4 器径 3.7	やや大きな平底。直口口縁。外側に甲き飯を踏葉に施す。	㊸ 甲き + ナテ ㊹一ナテ	ナテ上げ	石・長(1-2) ○		34
157	甕	口径 16.0	口縁部はナテによりわずかに拡張される。端部は丸い。小片。	ヨコナテ	ヨコナテ	石・長(1-2) ○		
158	甕	口径(12.2)	磨耗き凹状文(4本)。口縁部は外方に拡張。小片。	㊸ ハテ・施文 ㊹ ハテ(6本/1cm)	ハテ	砂粒 金 ○		
159	甕	口径(19.9)	下方に大きく窪下する口縁部口縁外側に磨耗きの凹状文(3本)。小片。	ハテ・施文	ハテ→ヘラミガキ	密 ○		
160	甕	口径(15.2)	内縁する口縁部。端部は内側に肥厚し、やや内縁する。小片。	㊸一ヨコナテ ㊹ ハテ(11本/1cm)	㊸一ヨコナテ ㊹ ケズリ + ナテ	砂粒 ○		
161	甕	口径(16.4)	内縁する口縁部。端部は内側に肥厚し、やや内縁する。	㊸ ココナテ ㊹一ハテ(11本/1cm)	㊸ ココナテ ㊹一ケズリ + ナテ	石・長(1-2) ○		

## 梅味立添遺跡

包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
162	高杯	口径 (20.0)	外脣し、外反する口縁部。底部は丸い。裏面は丸みのある段をもつ。	ワコナテ	㊦ ワコナテ ㊧ 一ナテ	砂粒の		
163	高杯	口径 (16.4)	内脣してたちあがる口縁部。口縁部は丸い。	ワメツ	ワメツ	赤		

●表23 包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
164	石版丁	1/2は欠形	緑泥片岩	16.0	4.4	0.56	37.8		31
165	石版丁	1/2は欠形	緑泥片岩(雲母片岩)	8.2	4.3	0.7	39.8		34
166	石 槌	1/2は欠形	サヌカイト	1.8	1.5	0.4	0.7		
167	石 皿	完 形	サヌカイト	1.5	1.0	0.3	0.3		
168	石 皿	完 形	サヌカイト	2.4	1.6	0.4	1.3		

●表24 包含層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
169	杯蓋	口径 12.8 器高 4.8	内脣して垂下する口縁部。底部は凹面を有し内縁、小片。	㊦ 河原崎ヘラケズリ ㊧ 一ヨコナテ	ワコナテ	赤 赤		
170	蓋	口径 11.7 器高 6.0	凹みをもつつまみ。垂下する口縁部。底面は、ゆるやかな段をもつ。	㊦ 一ヘラケズリ ㊧ 一ヨコナテ	ワコナテ	赤 赤		33
171	杯蓋	口径 11.0 器高 4.5	内脣して垂下する口縁部。口縁部は凹面をなす。	㊦ 一河原崎ヘラケズリ ㊧ 一ヨコナテ	ヨコナテ	赤 赤		33
172	蓋	口径 11.0 器高 4.4	内脣し、外反する口縁部。片方は丸みをもつ。	㊦ 一ヘラケズリ ㊧ 一ヨコナテ	ワコナテ	赤 赤	石・長(1-2)	
173	杯蓋	口径 (15.0)	内脣する口縁部。底部は丸い。所と平凹な面がある。小片。	㊦ 一河原崎ヘラケズリ ㊧ 一ヨコナテ	ワコナテ	赤 赤		
174	杯身	口径 11.0 器高 4.7	内脣するたちあがり。底面は凹み。	㊦ 一ヨコナテ ㊧ 一河原崎ヘラケズリ	ワコナテ	赤 赤		
175	杯身	口径 (10.0)	たちあがりにおおむかに外反する。底部は段を有し、内縁、底部は1/2方、小片。	㊦ 一ヨコナテ ㊧ 一河原崎ヘラケズリ	ワコナテ	赤 赤		

遺物観察表

包含層出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
176	高杯	口径(13.0) 器高 9.0 底径 10.0	胴部に短楕形の造し3ヶ。 厚帯のたし上りは、外反して長い。杯部写欠。	①-ヨコナテ ② 写筒転ヘラケズリ ③-ヨコナテ	ヨコナテ	赤 ○		33
177	高杯	口径(16.8)	1条の凸帯、凸帯下はナテ凹み。6条の波状文。浅い凹線1条も残存。		ヨコナテ	赤 ○		33
178	皿	口径(17.3)	口縁上部は内凹してたれあがる。波状文6条。小片。	ヨコナテ	ヨコナテ	赤 ○		33
179	皿	残高 6.2	6条の帯による刺突文。刺突文帯の上下に凹線文。写残存。	①-ヨコナテ ②-ヨコナテ→施文 ③-ヘラケズリ	ヨコナテ	赤 ○	自然粘	33
180	鉢	底径 (8.7)	内湾する筒部。端部は、わずかに外反。通眼は、凹部で内傾。	ヨコナテ	ヨコナテ	赤 ○	自然粘	
181	高杯	底径 9.2	内湾する筒部。端部は外反する。端部に平頂で内傾。小凹孔3ヶ。	ヨコナテ	ヨコナテ	赤 ○	自然粘	33
182	甕	口径(20.0)	外反する頸部に、内湾する口縁部。端部は段をもつ。底面ウキメ状。写残。	①②-ヨコナテ	ヨコナテ	砂粒(1~2) ○		33
183	甕	口径(31.5)	口縁端部は断面へ三角形。横筋波状文(12本)。波状文帯上に凹線3本。	①② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ヨコナテ ⑬-ヨコナテ→施文	ヨコナテ	赤 ○	粘密	
184	甕	口径(29.3)	大きく外反する口縁部。端部は丸みをもつ。頸部に3条の凹線。小片。	ヨコナテ	ヨコナテ	赤 ○		
185	序	口径(11.7) 器高 3.3 底径 6.2	凹縁ヘソ切り。やや深い厚帯が端部は先端り。杯部も残存。	①-ヨコナテ ② ナテ	割製の為不明	赤 ○		
186	皿	口径 (7.9) 器高 1.3 底径 (5.1)	小皿。凹みの浅しい底部。ツメツクのため折り難し法意不明。	割製の為不明	ヨコナテ	赤 ○		



## 第 4 章

タル ミ タカ キ  
樽味高木遺跡



## 1. 調査の経過

### (1) 調査に至る経緯

1988(昭和63)年6月、森 儀三郎氏より、松山市樽味4丁目266-1における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「81樽味遺物包含地」内にあたり、以前より周辺地域で多くの調査が行われ周知の遺跡として知られている。同包含地内では、弥生時代中期～古墳時代にかけての樽味四反地遺跡〔梅木謙一 1989〕、樽味立添遺跡〔梅木謙一 1989〕、弥生時代前期から中世までの生活関連遺構と遺物を検出している樽味遺跡(愛媛大学農学部構内)〔宮本一夫 1990〕などが確認されている。当該地周辺には、弥生時代の拠点集落である文京遺跡〔西田栄他 1976〕、道後今市遺跡〔岡田敏彦他 1985〕、弥生時代から古墳時代の小坂釜の口遺跡〔岸・長井・大山 1973〕、東野お茶屋古墳群〔森光晴 1986〕、経石山古墳〔森光晴 1986〕(前方後円墳)が知られている。

これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1988(昭和63)年8月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層と落ち込みを検出し、当該地に弥生時代～中世の集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・森 儀三郎氏・鹿島商會三者は、遺跡の取扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は弥生時代から中世までの当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、森 儀三郎氏・鹿島商會の協力のもと1989(平成元年)年1月4日に開始した。

### (2) 調査組織

調査地 松山市樽味4丁目266番1

遺跡名 樽味高木遺跡

調査期間 野外調査 1989(平成元年)年1月4日～同年2月27日

調査面積 430.23㎡

調査委託 森 儀三郎

調査担当 梅木 謙一 宮内 慎一

調査協力 鹿島商會

作業員 谷久 弘之、森田 真司、古屋 明寿、古田 智広、工藤 賢稔、扶川 博、  
 亀山 健一、安永 浩二、田中 英樹、古山 智也、月原 敏、仙波 観子、  
 福山 暎子、河本美代子、今井セツ子、森田 利恵、松本美知子、越智美代子、  
 渡部美代子、山本 好枝、森田 晶子、栗林 千恵、藤沢 真美、他

## 2. 層位 (第48図)

本遺跡は、石手川左岸の洪積世扇状地上、標高40.5mに立地する。

基本層位は、第Ⅰ層表土(耕作土)、第Ⅱ層水山床土、第Ⅲ層黒褐色土、第Ⅳ層明褐色土、第Ⅴ層暗褐色砂礫層である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は30～35cmの厚さを測る。第Ⅲ層黒褐色土は調査区ほぼ全域でみられ、厚さは50～60cmの堆積で弥生土器・土師器・須恵器を包含する。第Ⅳ層明褐色土は無遺物層であり、地山と呼ばれるものである。第Ⅴ層暗褐色砂礫層は拳大の円礫を含んでいる。地山面(第Ⅳ層)はその標高を測量すると、調査区北東部が高く南西部に向けて漸次低くなっている。

遺構は第Ⅲ層中及び第Ⅳ層上面での検出である。

第Ⅲ層中からは、竪穴住居址2棟(SB1・SB4)を、第Ⅳ層上面では、竪穴住居址7棟、土壌7基、溝状遺構2条、柱穴270基(掘立柱建物柱穴を含む)他である。

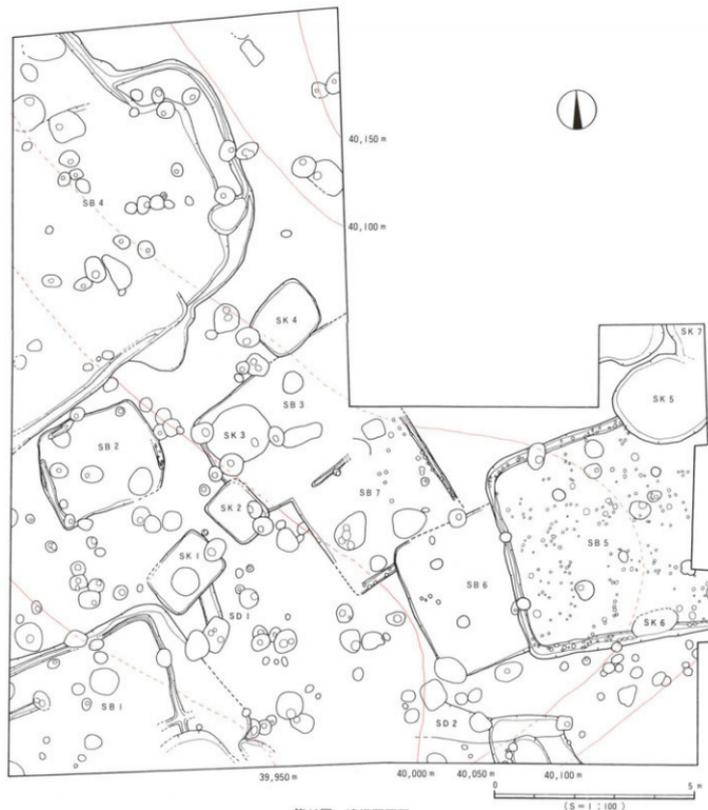
遺物は、第Ⅲ層及び遺構内からの出土であり、弥生土器(中期～後期)、土師器(古墳時代中期他)、須恵器、石器(石庖丁2点、石鏃1点他)、植物種子1点、動物骨2点他である。

なお調査にあたり、調査区内を4m四方のグリットに分けた。4mグリットは北から南へA・B・C・D・Eとし、西から東へ1・2・3・4・5としてA1・A2……E5といったグリット名を付した。廃土置場の都合上、A・B両区とC3・D3・E3の一部までを西区、C3・D3・E3区の一部とC4・5区、D4・5区、E4・5区を東区として分区して調査を行った。

## 3. 調査の概要 (遺構と遺物)

### (1)竪穴式住居址

本調査において確認された住居址は7棟である。第Ⅲ層上面にてSB1・SB4を、他の住居址は第Ⅳ層上面での検出である。住居址のなかには近現代の造成工事により壁高が10cmにみえないものもある。平面形はいずれも方形～長方形であり、SB3・SB6を除き、すべてに壁体溝がみられる。SB4においては、住居址が重複しており、少なくとも4棟の切り合いが認められる。特筆すべきは、古墳時代中期の資料がまとまって出土したSB5と、他にSB6があげられる。

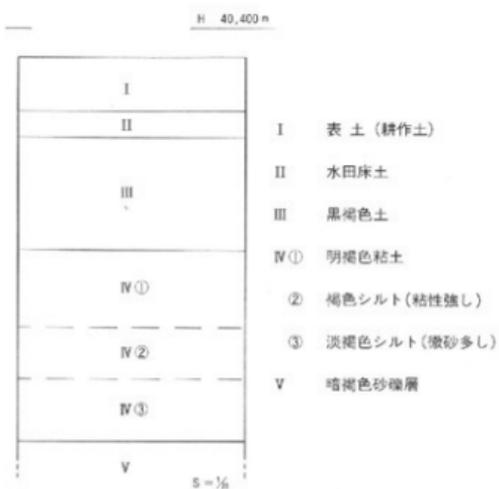


第46回 遺構配置図

調査の概要



第47図 調査区位置図



第48図 基本層位図

SB 6号住居址 (第49図)

調査区南東部D4区に位置する。東壁はSB5号住居址に切られ、北壁はSB7号住居址を切っている。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は現存南北幅3.5m、東西幅2.5m、壁高7cmを測る。覆土は暗褐色シルト一層である。

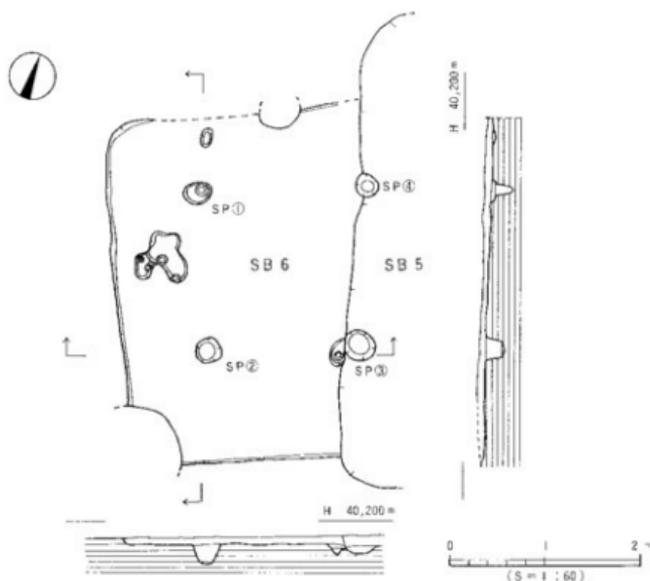
支柱穴はSP-①・②・③・④の4本であり、東側の2本はSB5号住居址に切られている。柱穴は円～楕円形を呈し、径20～30cm、深さ18～22cm、柱穴間は140～170cmを測る、床面は硬く、西から東に向けて緩傾斜している。炉、壁体溝等の内部施設は未検出である。

遺物は、土師器片が床面より出土している。

出土遺物 (第50図)

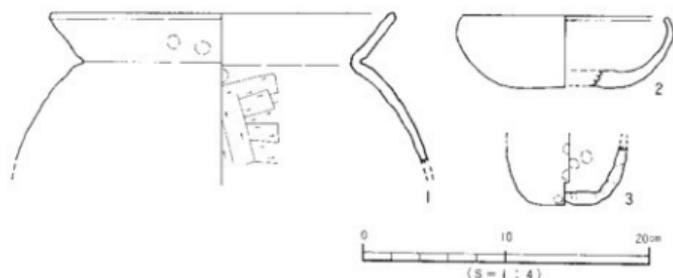
1は甕形土器である。内面をへら削りし、頸部内面に弱い稜をもつ。口縁部は外傾するがわずかに内傾する。口縁端部は丸みをもつ。2は椀形土器の破片である。内湾する口縁部は、端部が丸い。3は手捏ね品である。やや大きめの平底をもつ。

時期：甕形土器と椀形土器より古墳時代中期と考える。



第49図 SB 6 測量図

調査の概要



第50図 SB 6 出土遺物実測図

SB 5号住居址 (第51図)

調査区東隅C 4～D 5区に位置する。西壁はSB 6号住居址を切り、東壁は調査区外へ続く。北東隅は土境SK 5と重複するが、その切り合い関係は明確にはしえなかった。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は現存南北幅5.4m、東西4.9m、壁高15cmを測る。覆土は無褐色シルト1層である。床面は比較的硬く平坦である。壁体に沿って幅15cm、深さ5cm、断面U字状の溝が廻り、溝内にて径8～15cm、深さ3～10cmの小ピットが不規則な間隔で並ぶ。

上柱穴はSP-①・②・③・④の4本である。柱穴は円～楕円形を呈し、径22～30cm、深さ22～50cm、柱穴間は220～250cmを測る。この他、床面に多数の小ピットを検出したが、その性格は不明である。また、南壁中央部に楕円形土境SK 6を検出した。規模は長径1.1m、短径0.5m (推定)、断面形は皿状を呈し、深さ20cmを測る。覆土は住居址のものと同様であり、本土壁は、本住居址の施設である可能性が高い。

遺物は、床面上より完形品を含め多量に出土した。特に、北壁部と南東部のSK 6とその周辺からの遺物は良好な状況で出土した。ただし、北東部のSK 5の地点で本住居址床面と同レベルのもの(38～46)は、SK 5との切り合いが判断できなかつたため、本住居址に伴うものであるかは若干の疑問もあるため、資料操作にあたっては注意を要する遺物群である。出土遺物 (第52～54図)

床面直上の遺物、埋上中遺物、SK 5上面出土の遺物に分けて解説する。

床面直上遺物 (4～28)

壺形土器 (4～6) 肩部がやや張る球形の胴部に、短く外傾する口縁部をもつ。4・5は口縁上部がわずかに内湾し、6は外反する。口縁端部内傾及び著しい肥厚はしない。内面は頸部屈曲部下端以下をへら削りする。頸部内面は弱い稜をもつ。

樽味高木遺跡

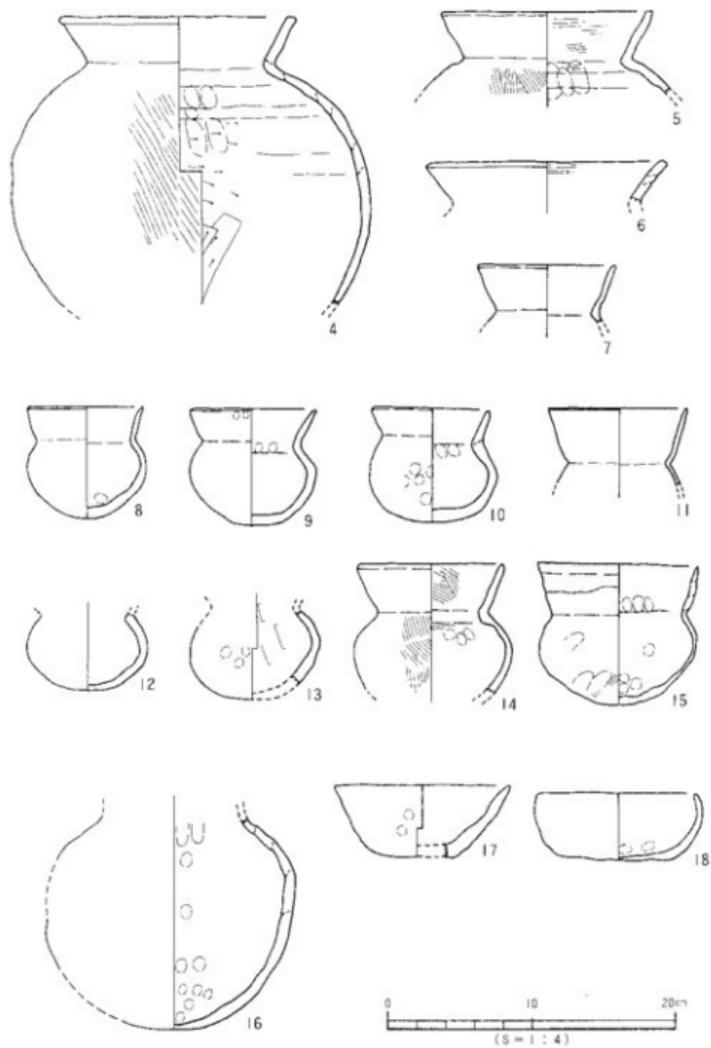


第51図 SB5 測量図

壺形土器 (7~16) 小型品は、胴下半部が縮まるものと(8)、胴部がふくらみをもつもの(9・10・11・13・15)がある。口径は、胴部最下径に近い値をとる。中型品は、肩部がわずかに張る球形状の体部をもつ16がある。

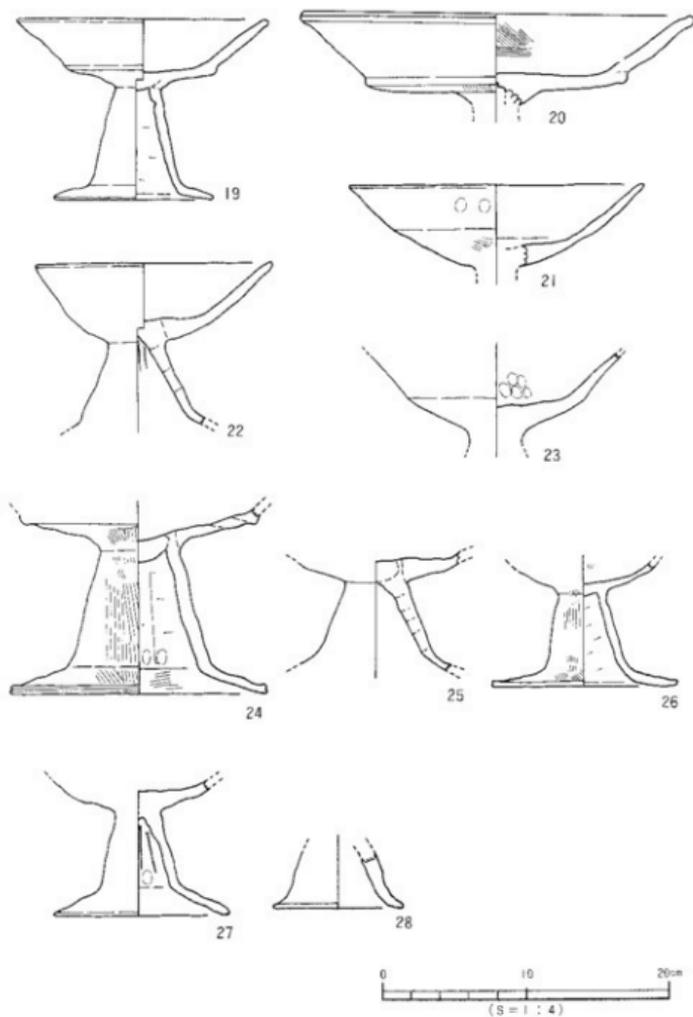
鉢・椀形土器 (17・18) 17は鉢形土器小型品である。外傾して立ち上がり、口縁部は先細りする。18は椀形土器である。内湾して立ち上がる体部と口縁部をもつ。底部外面に葉脈の痕が残る。

調査の概要



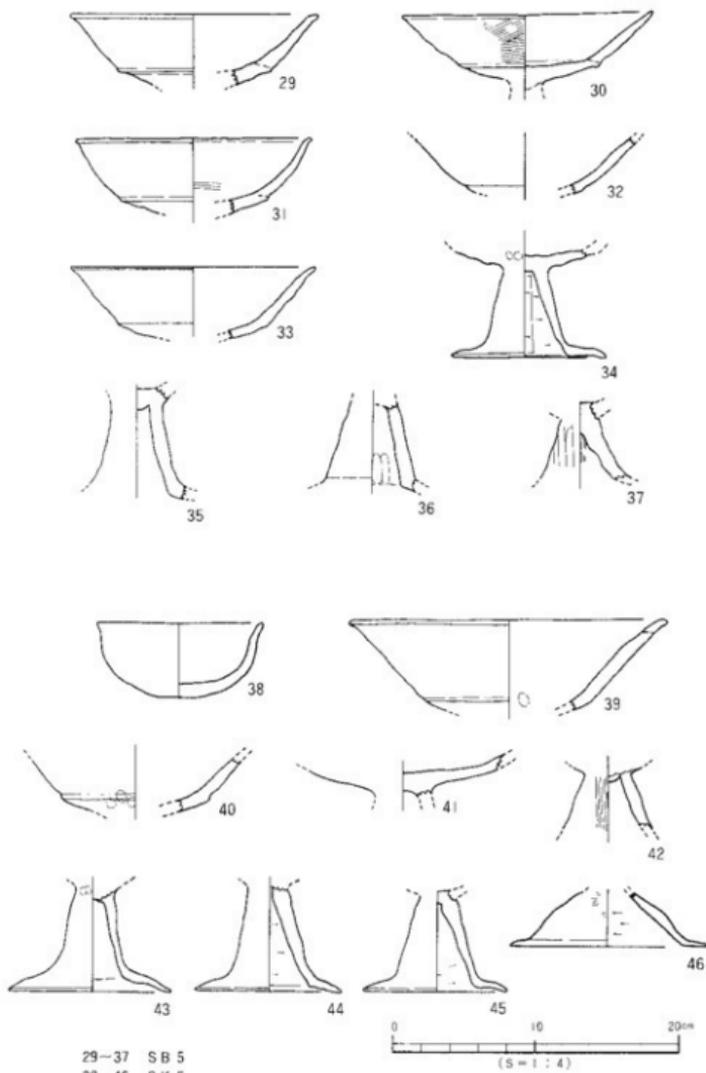
第52図 SB 5 出土遺物実測図 (1)

樽味高木遺跡



第53圖 SB 5 出土遺物実測図 (2)

調査の概要



第54図 SB 5埋土・SK 5上面出土遺物実測図

高環形土器 (19~28) 環部は、底部と体部の接合部 (以下、接合部と記す) の形状により三分類できる。A:接合部が段となるもの19・20 B:接合部で屈曲するもの21・22 C:環底部よりゆるやかに外傾外反して立ち上がるもの23である。口縁上端部内面は、ナデによりわずかに内湾する。環底部には充填技法が使用されるものがある19・20・24。

脚部は、低脚で柱部が三角錐を呈する。裾部は長い。裾部は外反して開くもの24・26と内湾して開くもの27がある。28は小型品の小片である。三角錐を呈する柱部に、短く外反する裾部がつく。

#### 埋土出土遺物 (29~37)

高環形土器 (29~37) 環部は、接合部が有段の29~32、接合部が稜の33がある。29・31・33は口縁端部が外反し、30は外傾する。環底部は充填技法が30・35にみられる。脚部は、三角錐を呈し、大きく開く裾部をもつ。内面の柱裾部境に稜をもつ。

#### SK5上面出土遺物 (38~46)

椀形土器 (38) 38は丸底の小さい底部に、わずかに外反する口縁部をもつ。

高環形土器 (39~46) 環部は、接合部に丸みのある段をもつ40。39はSK5(53)と同一個体の可能性がある。脚部は、細身の三角錐を呈し、内湾して開く裾部をもつ。内面の柱部と裾部境には稜をもち、柱部内面はヨコヘラ削りである。42は充填技法である。44は柱天井部が貫通している。46は扁平な三角錐を呈する柱部に、短く開く裾部をもつ。

時期:出土遺物は、全体的に古墳時代中期の範囲に入るものである。出土状況より、特に、床面出土品は、本住居址の廃棄時に伴う可能性が高い。よって、本住居址の時期は、古墳時代中期(中葉か)と考える。

## (2)溝状遺構 (表26)

本調査において確認された溝は2条である。両者とも第IV層上面での検出である。各溝に関する詳細は表26に記す。

## (3)上墳 (表27)

本調査において確認された土墳は7基である。SK1・2・4・5は第IV層上面での検出であり、SK3はSB3内、SK6はSB5内に伴うものである。SK1・2・4は覆土は異なるが、ほぼ同規模の長方形土墳である。特筆すべき土墳はSB5号住居址と重複するSK5である。

#### 土墳SK5 (第55図)

調査区北東隅C5区に位置する。南半部はSB5号住居址と重複するが、その切り合い関係は判断しえなかった。平面形は円形を呈するものと考えられ、規模は径1.1m、深さ10cmを測る。断面形はU字状を呈している。床面は硬く、ほぼ平坦である。覆土は黒褐色シルト・

## 調査の概要

層である。

遺物は、出土地点より二群に分かれる。床面直上ないし床面付近で出土したものと、埋土中であるがS B 5の床面レベルに近い地点で出土したものである。後者のなかの53は、S B 5第54図39と同一個体の可能性があるものである。

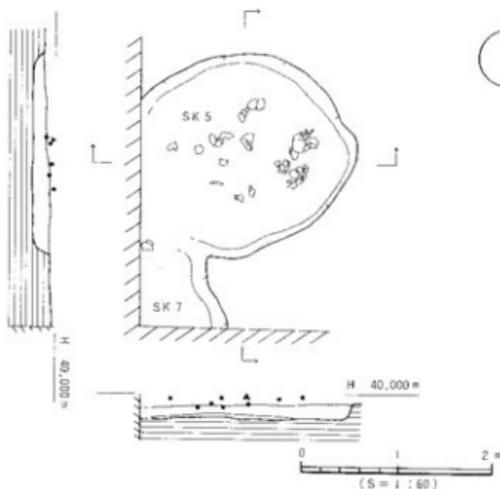
### 出土遺物 (第56・57図)

#### 床面直上ないし床面付近出土遺物 (47~52)

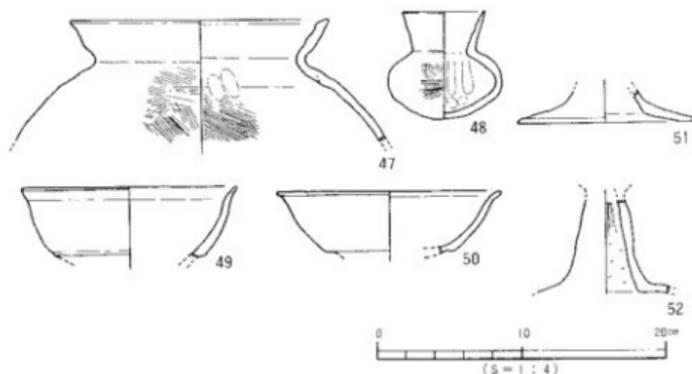
甕形土器 (47) 47は肩の張りが弱く、内湾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は内傾する。内面は、削りの後ナデと刷毛目調整である。外面は雑な刷毛目調整である。

壺形土器 (48) 48は小型品である。麗平な体部に外傾して長く伸びる口縁部をもつ。

高環形土器 (49~52) 49は床面直上のもので、50~52はやや浮離した地点の出土である。環部は丸みをもって内湾して立ち上がる体部に外反する口頸部をもつ。49・50は接合部に段をもつ。52は脚部片である。細く縮まる柱部に、水平近く曲がる内湾する裾部をもつ。



第55図 SK 5 測量図



第56図 SK 5 出土遺物実測図

## 埋土上部出土遺物 (53～62)

甕形土器 (53～57) 53・54は大型品である。内湾する口縁部と内傾する口縁端部をもつ。53は内面に指頭痕を、54は刷毛目を残す。55はやや器壁が薄く、内面にケズリ痕を顕著に残す。56・57は中型品である。胴部が長胴となるものである。口縁端部は丸みのある「コ」字状に仕上げる。

壺形土器 (58) 58は小型品である。扁平な体部は、内面にナデ痕を残す。

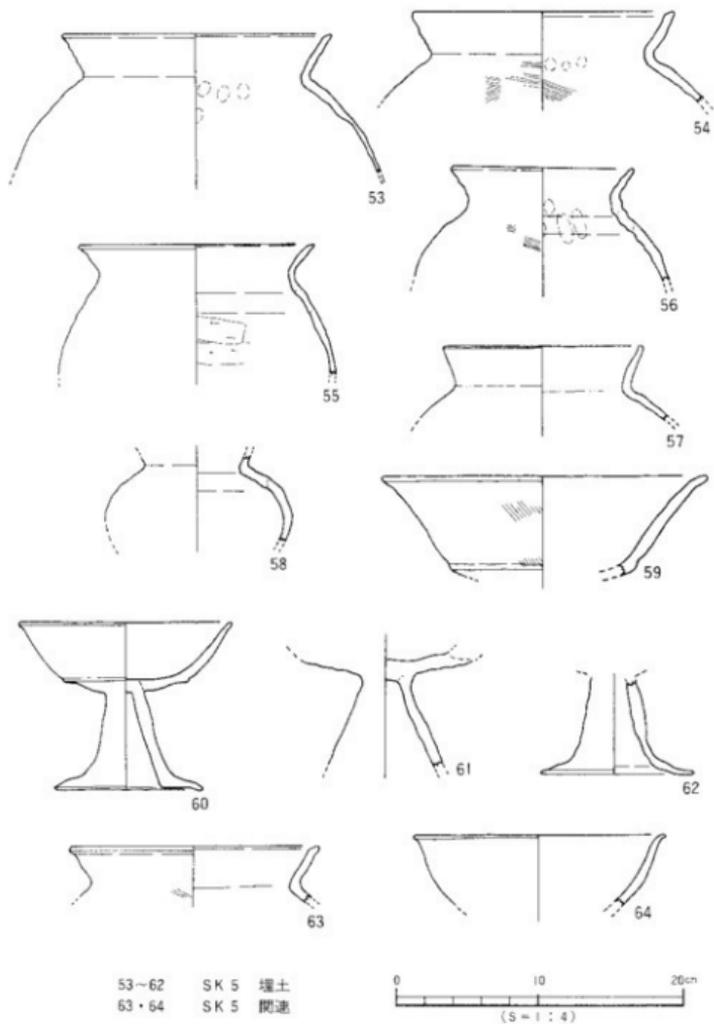
高坏形土器 (59～62) 59は大型品の破片である。屈曲部に丸みのある段をもち、外反する口縁部をもつ。60は一部を欠くが、完形に近いものである。屈曲部に段をもち、内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。61・62は脚部片である。

## SK 5 関連遺物 (63・64)

63は埋土から出土した甕形土器片である。内湾して立ち上がる口縁部は、端面が内傾する。64は、SK 5 と SK 7 の境で出土した高坏形土器片である。三角錐を呈した柱部に、短く内湾して開く裾部をもつ。

時期：床面出土の遺物と埋土中出土の遺物に、大きな時期差はないと考える。出土遺物は5世紀中～後葉に比定されるものであり、本遺構の廃棄・埋没時期も5世紀中～後葉に考えておく。

調査の概要



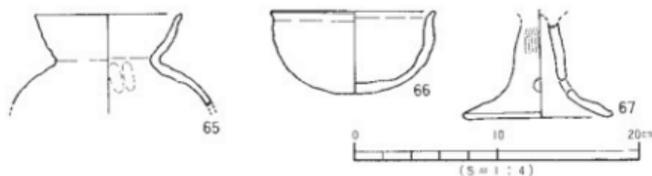
第57図 SK 5埴土・SK 5関連出土遺物実測図

土壌SK7（第58図）

遺物は、床面上より完形に近いものが3点出土した。

出土遺物（65～67） 65は壺形土器である。内湾して立ち上がる頸部に、外反する口縁部をもつ。肩部は張り、内面はケズリと指頭痕を残す。66は碗形土器である。内湾して直立ぎみに立ち上がる体部に、外反する口縁部がつく。67は内湾する細い柱部に、外反する長い裾部をもつ。円孔を3ヶ所に穿つ。本遺跡出土の上師器の高環形土器では唯一の円孔を穿つ高坏脚部である。

時期：出土遺物が床面上で、完形に近いことより、出土遺物の特徴より5世紀後半に廃棄・埋没したものと考えられる。



第58図 SK7出土遺物実測図

(4)その他の遺構と遺物

本調査において確認された柱穴は270基である。いずれも第IV層上面での検出である。柱穴中からの遺物の出土はあまりみられない。他に調査区南東隅にて不定形土壌（SX1）を検出した。規模は、現存南東幅1.2m、東西幅2m、深さ25cmを測る。内部は2段掘りになっており、覆上は粘性の強い褐色シルト一層である。遺物の出土はまったくなく、時期やその性格は不明。

4. 小結

(1)弥生時代

弥生時代と特定できる遺構はない。出土遺物は少量で中期中葉、後期後葉の破片が包含層と遺構埋上より出土した。これ等の資料は、当地周辺に同時期の生活関連遺構が存在していたことを示唆する資料である。

(2)古墳時代

竪穴式住居址は全て古墳時代の築造と考えられた。確実に時期を特定できたのは、SB2・3・5で中期のものである。他は、前期の遺物の出土はないため、中期以降の可能性が高い。

## 調査の概要

竪穴式住居址を概観すると、平面形は四角形プランで、主柱穴はSB5・6では四本柱、他は柱穴が未検出であった。壁体溝は、SB1・2・5・7で検出された。このうちSB2・5・7は溝中に小ピットが検出された。さらにSB5では、床面に無数の小ピットが検出された。壁体内側を巡る小ピットは、松山大学構内遺跡2次調査(梅木謙一 1991)、道後今市遺跡6次調査(梅木・宮内 1991)等、松山平野の竪穴式住居址に散見できる構築物である。

出土遺物として注目されるのは、SB5・SK5出土の土器群である。

SB5では、小型丸底壺は口径が体部径と等しいかやや小さくなる形態をとる。高環形土器は直線的に外傾し、坏屈曲部に明瞭な稜をもち、脚部は短く三角錐形を呈するものがある。

SK5は、小型壺は長頸で、口径が体部径より小さいものである。高環形土器は、丸みをもって内湾して立ち上がり、小さく折り曲げる口縁部をもつ形態をとる。

SB5とSK5出土品を比較するとSB5がSK5よりも型式学的に古いことが知れる。

SB5・SK5出土品は、括性が高い資料であり、松山平野の土器研究の好資料になるものである。

以上、簡単に調査の報告を行った。SB5・SK5は調査時に何度も切り合い関係を検索したが判断できなかった。また、SB4も幾つかの切り合いなし改築が行われていた可能性を部分的に確認したものの、その全様を把握することができなかった。

周囲にある榑味四反地遺跡、榑味立添遺跡、桑原西稲葉遺跡との関連は第13章にて行うが、本調査とも共通することは、弥生時代遺物は出土するが遺構が未検出であることがあげられる。いずれの遺跡とも弥生土器は少量・小片の出土状況にあることより、東方域である畑守・東野の山麓～榑味遺跡(愛媛大学農学部構内)地域に弥生時代集落が存在していた可能性が高いと考えている。同地域は、近年宅地開発が激化してきた土地でもあり、十分な調査が必要とされるだろう。

### 【文献】

- 梅木謙一 1989「榑味四反地遺跡」「榑味立添遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会  
梅木謙一 1991『松山大学構内遺跡』松山大学・松山市教育委員会  
梅木謙一・宮内慎一 1991『道後今市6次調査地』『松山市埋蔵文化財調査年報III』松山市教育委員会  
岡田敬彦・中島博文・小林一郎・若谷倫郎 1985『道後今市遺跡』創愛媛埋蔵文化財調査センター編  
岸 郁男・長井敬秋・大山正風 1973『釜ノ口遺跡』松山市教育委員会  
西川 栄・森 光晴・大山正風 1976『文京遺跡』愛媛大学・松山市教育委員会  
宮本 大 1989『榑味・鷹子遺跡の調査』愛媛大学  
森 光晴 1986『東野お茶屋古墳群』『鉢石山古墳』『愛媛県史 資料編』愛媛県史編纂室

遺構・遺物一覧（遺構一覧：室内偵一、遺物観察表：楠木謙一・水口あをい）

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。  
例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。
- (3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1~4)多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。  
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表25 竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規 長さ×幅×深さ(m)	樫 標	主柱穴 (本)	内部施設				調査済	備考
						高床	土壇	炉	カマド		
7	古墳中期	隅丸方形	3.5×2.9×0.05							○	S B 3・6に覆られる
6	古墳中期	隅丸方形	3.6×2.3×0.07		4						S B 5に覆られS B 7を穿る
5	古墳中期	隅丸方形	5.4×4.9×0.15		4		○			○	S B 6を穿る S K 3と重複
2	古墳中期	隅丸方形	2.9×2.3×0.10							○	
3	古墳中期	隅丸長方形	4.7×2.9×0.05				○				S B 7を切る
1	古墳後期	隅丸方形	4.0×3.7×0.15								誤
4	不明	不明									誤

●表26 溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規 長さ×幅×深さ(m)	樫 標	埋土	出土遺物	備考	時期
1	D 2	溝状	0.80×0.40×0.10		褐色シルト			不明
2	E 3-E 4	溝状	1.50×0.60×0.13		褐色シルト			不明

●表27 土壇一覧

土壇(SK)	地区	平面形	断面形	規 長さ×幅×深さ(m)	樫 標	埋土 (シルト)	出土遺物	備考	時期
1	D 2	隅丸長方形	溝状	1.7×1.3×0.45		均褐色			不明
2	D 2	隅丸長方形	皿状	1.4×1.0×0.15		均褐色			不明
3	C 2	円形	礎状	1.3×1.3×0.25		均褐色		S B 3内	不明
4	C 2	隅丸長方形	皿状	1.7×1.3×0.20		均褐色			不明
5	C 5	円形	〜字状	1.1×1.1×0.10		均褐色	土師	S B 5と重複	古墳中期
6	D 5	隅四角形	皿状	1.1×0.5×0.20		均褐色	土師	S B 5内	古墳前期
7	C 3	円形	皿状	0.4×0.4×0.20		均褐色	土師	S K 5と重複	古墳中期

遺物観察表

●表28 S B 6 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
1	釜	口径(24.1)	わずかに内湾する口縁部。肩部は丸みのある「コ」字状。	①-ヨコナテ ②-磨滅の為不明	①-ヨコナテ ②-ヘラケズリ	石・長(1-6) 黒クワンモ ○		
2	鉢	口径(14.2) 器高 5.0 底径 (5.4)	内湾する口縁部。肩部は丸い。丸みのある平底。足の残存。	ナテ	ナテ	石・長(1-5) ○		
3	鉢	口径 1.6	平底。粘土色の巻き上げによる成形。巻き上げ痕顕著。	削削(底)底露著	削削(底)底露著	石・長(1-3) ○		黒底

●表29 S B 5 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
4	甕	口径(15.4)	強く歪む形部。口縁部はわずかに内湾。肩部は外方におわずかに突出する。	① ココナテ ②-ハケ	①-ヨコナテ ②③-ケズリ→ナテ ④⑤-ケズリ	砂粒(1-2) 全 ○		44
5	釜	口径(14.4)	内湾して立ちあがる口縁部。肩部は丸く、一部やや内をもち内傾。互気残存。	①-ヨコナテ ②-ハケ(6本/1cm)	①-ヨコハケ→ヨコナテ ②-ナテ	石・長(1-3) 全 ○		44
6	甕	口径(15.6)	内湾して、外反する口縁部。肩部は一部内側に肥厚する。小片。	ココナテ	ハケ	石・長(1-3) 全 ○		
7	小型丸底釜	口径 (9.5)	口縁部はわずかに外反する。肩部は丸い。外面に接合痕を残す。	ヨコナテ	ヨコナテ	赤 ○		
8	小型丸底甕	口径 7.8 器高 7.9	肩部が強く張り、肩部は実感状になる。口縁部はやや内湾し、肩部は丸張り。	① ココナテ ②-磨滅の為不明	ココナテ	石・長(1-4) ○		44
9	小型丸底甕	口径 8.8 器高 8.2	実形。口縁部は内湾し外反する。肩部は丸張り。	①-ヨコナテ ②-磨滅の為不明	①-ヨコナテ ②③-ヨコナテ ④⑤-板ナテ	石・長(1-3) ○		44
10	小型丸底甕	口径 7.05 器高 8.0	実形。胴下半部が歪む。内湾する口縁部。肩部は丸い。器壁厚い。	①-ココナテ ②-磨滅の為不明	①-ヨコナテ	砂粒(1-2) 黒クワンモ ○		黒底 44
11	小型丸底甕	口径 9.6	内湾する長い口縁部。肩部は丸張り。器壁薄い。	ヨコナテ	ヨコナテ	赤 ○		
12	小型丸底甕	残高 5.5	胴部大径以下ヘラ削り。削り後水浸乾。器壁厚い。	① ナテ ②-ケズリ ナテ	ナテ	赤 ○		
13	小型丸底甕	残高 6.0	肩部が強く歪む。器壁厚い。内面に水口痕。	①-ヨコナテ ②-ナテ	板ナテ	赤 ○		44
14	小型丸底甕	口径 9.6	肩部が強く歪む。口縁部は長く内湾する。肩部は丸い。器壁厚い。	①-ヨコナテ ②-ハケ	①-ハケ ②-ナテ	赤 ○		45
15	小型丸底甕	口径 10.9 器高 10.8	肩部は強く張り、胴下半部は丸まる。口縁部は長く内湾。肩部は丸張り。	① ココナテ ②-板ナテ	①-ヨコナテ ② ナテ	赤 ○		黒底 45

樽味高木遺跡

S B 5 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
16	甕	底高 15.0	唇部が張り、底部はやや広めの丸底。内面は指痕痕が少な面に残る。	磨滅の為不明	ナデ	赤 ○		45
17	鉢	口径 10.0 唇高 5.1 底径 (4.3)	口縁部はわずかに外傾する。唇部は平直な部分と丸い部分がある。	ココナテ	ココナテ	石・灰(1~2) 白	33頁	43
18	鉢	口径 10.8 唇高 4.8 底径 6.0	内湾する口縁部。唇部は丸い。底部は広い平状で本量の痕がつく。	①-ココナテ ①-ナデ ⑧ 葉状痕跡	① ココナテ ⑧ ナデ	赤 ○	33頁	45
19	高杯	口径 16.8 唇高 12.8 底径 10.7	底部で唇部は段をもつ。口縁部はわずかに内湾。唇部丸い。	① ココナテ 他は磨滅の為不明	① ココナテ ⑧-ヘラズリ 他は磨滅の為不明	石・灰(1~5) ○		46
20	高杯	口径 26.8	唇部曲部は段をもつ。口縁部はわずかに外反。底部丸みのあるコ字底。	①-ハケ-ココナテ ⑧-ハケ(9本/1cm)	⑧ ハケ ⑧-ナデ	石・灰 ○	33頁	46
21	高杯	口径(20.2)	唇部曲部は強くナデられた面となる。口縁部はわずかに外反。写残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・灰(1~2) 白 ○		46
22	高杯	口径(16.0)	唇部曲部は段をもたない。口縁部外反。内湾。唇部丸い。柱は太い。	磨滅の為不明	⑧-磨滅の為不明 ⑧ ナデ	石・灰(1~2) ○	33頁	46
23	高杯	口径 6.7	唇部一帯部の積層部より下位に唇部をもつ。発色は、やや暗む。	①-ココナテ 赤 ナデ	①-ココナテ ⑧-ナデ	石・灰(1~2) 赤 ○		
24	高杯	口径 17.5	人型口。唇部は広く、面は縁を覆う。唇部は太く唇部は丸い。光澤。	⑧ ハケ(9本/1cm) ⑧-ハケ(9本/1cm)	⑧-ヘラズリ ⑧-ハケ(9本/1cm)	石・灰(1~3) 赤 ○		46
25	高杯	口径 8.5	押し込み技法。完成後には粘土のよき上げ。杯一帯磨滅不明。	磨滅の為不明	ナデ	石・灰(1~2) 全 ○		
26	高杯	口径(12.8)	唇部曲部が丸い。柱部はよくらみ。やや広い部をもつ。光澤。	⑧-磨滅の為不明 ⑧ ハケ(9本/1cm)	⑧-ナデ ⑧-ヘラズリ ⑧-ココナテ	石・灰(1~3) 赤 ○		
27	高杯	口径 12.0	唇部は丸い。唇部は非常に長く内湾する。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・灰(1~3) 赤 ○		46
28	高杯	口径(8.8)	脚台の可能性もある。短く、厚い唇部。小丸。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・灰(1~2) 赤 ○		

●表30 S B 5 埋土出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
29	高杯	口径(15.4)	唇部曲部に段。内湾して外反する口縁部。唇部は丸く細い。小片。	ココナテ	ココナテ	赤 ○		
30	高杯	口径 17.2	唇部曲部は指痕痕が残り段をもつ。口縁部はやや内湾する。底部光澤あり。	① ハケ(9本/1cm) ⑧ 葉状痕跡の為不明	磨滅の為不明	赤 ○	33頁	47
31	高杯	口径(15.3)	唇部曲部は、わずかに段となる。口縁部は外反する。口縁部は丸く細い。	ココナテ	ココナテ	赤 ○		47

遺物観察表

S B 5 埋土出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
32	高杯	残高 4.0		磨減の為不明	磨減の為不明	石・長(1-2) ○		
33	高杯	11径(16.9)	坏面曲部は段となる。口縁部は外反する。磨減は丸磨り。一弘次。	磨減の為不明	磨減の為不明	石・長(1-3) ○		47
34	高杯	底径 10.7	59の写部が同一製作か。組み合わせ技法。輪部は内磨する。	磨減の為不明	①ヘラケズリ ②ヨコナテ	赤 ○		47
35	高杯	残高 7.7	組み合わせ技法。柱・帯地の内面に段をもつ。磨減は厚い。	磨減の為不明	磨減の為不明	石・長(1-5) 全 ○		
36	高杯	残高 6.4	二角部状の柱部。柱一帯地の内面に段あり。シボリ痕。指し込み技法。	ナテ	ナテ	赤 ○		出現
37	高杯	残高 5.5	指し込み技法。なだらかに磨削する柱部。小片。	ヘラミガキ		砂粒 ○		

●表31 S K 5 上面出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
38	鉢	口径 11.4 器高 5.3	丸底でやや広い口部。口縁部はゆるやかに外反。磨減は大きい。	①ヨコナテ ②ナテ	①ヨコナテ ②ナテ	赤 ○		
39	高杯	11径(12.4)	坏面曲部は指押痕が残っておりわずかに段をもつ。口縁部は外反。写の残存。	磨減の為不明	磨減の為不明	赤 ○		
40	高杯	残高 4.0	坏面曲部は丸みある段。坏底部は丸みあり。写の残存。	磨減の為不明	磨減の為不明	砂粒(1-2) 全 ○		
41	高杯	残高 2.9	坏面曲部はわずかに段をもつ。大形品の小片。	ヨコナテ	ハケヨコナテ	砂粒 ○		
42	高杯	残高 4.4	指し込み技法。完成。	ハケ	ナテ	石・長(1-2) ○		
43	高杯	口径(11.2)	瓶部は長く、内磨する。柱外面上部に放射状の節目あり。	磨減の為不明	①ヘラケズリ ②ヨコナテ	赤 ○		47
44	高杯	器高 10.1	短く、やや内磨し、帯地の裾部。柱大身部に径3mmの地成或小平孔1ヶ。	磨減の為不明	①ヘラケズリ ②ヨコナテ	石・長(1-4) ○		47
45	高杯	底径 9.8	短く、やや内磨し、帯地の裾部。	ナテ	①ヘラケズリ ②ヨコナテ	石・長(1-2) 全 ○		
46	高杯	器高(13.6)	太く、大きく内磨する柱部。短く、内磨し、やや厚い唇部。写の残存。	ハケナテ	①ヘラケズリ ②ヨコナテ	石・長(1-2) ○		47

梅味高木遺跡

●表32 SK5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		胎土焼成	備考	図版
				外面	内面			
47	甕	口径(17.8)	内湾する口縁部。肩部は内湾する。口と同一一体の可能性あり	①-ヨコナテ ②-ハケ(7本/1cm)	①-ヨコナテ ②-ハケ(7本/1cm)	石・灰(1-2) 金 ○		48
48	甕	口径 5.6 器高 7.6	扁平な体部。口縁部は長く外傾。肩部は光線入り。帯を欠く。	ハケ(7本/1cm)	ナテ	砂粒 金 ○		48
49	高杯	口径(14.6)	杯部肩部はわずかに段となる。外反する口縁部帯は丸く離る。	ヨコナテ	ヨコナテ	石・灰(1-2) ○		
50	高杯	口径(15.3)	杯部肩部は杯部帯が凹んで段となる。口縁は外反し、丸く離る。片焼。	ヨコナテ	ヨコナテ	石・灰(1-2) 金 ○		
51	高杯	口径(12.2)	長く外反する杯部。杯一部帯部境の内面に割れ帯あり。小片。	ナテ	②-ハケ→ナテ	石・灰(1-2) ○		
52	高杯	残高 6.5	直立多みの柱部。短く内湾する厚い杯部。	磨滅の為不明	ヘラケズリ	灰 ○		

●表33 SK5 埋土出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		胎土焼成	備考	図版
				外面	内面			
53	甕	口径(18.4)	内湾する口縁部。肩部は内湾する。内面は指紋状磨擦。	①-ヨコナテ ②-ナテ	①-ヨコナテ ②-ナテ	石・灰(1-2) 金 ○		48
54	甕	口径(17.8)	内湾する口縁部。肩部は内湾する。杯部に段をもたない。片の残存。	①-ヨコナテ ②-ハケ	①-ヨコナテ ②-ハケ	石・灰(1-2) 黒ウソモ ○		
55	甕	口径(16.2)	磨滅著しい。外反する口縁部。肩部はわずかに外方に突出する。片焼存。	磨滅の為不明	②-ナテ ③-ヘラケズリ	石・灰(1-1) ○		48
56	甕	口径 12.4	外反する口縁部。肩部丸く一部平帯部あり。内面被合痕あり。	①-ヨコナテ ②-ハケ(5本/6cm)	①-ヨコナテ ②-ナテ ③-ヘラケズリ	石・灰(1-2) 金 ○		48
57	甕	口径(17.6)	磨滅著しい。内湾する口縁部。肩部はコ字状で、やや内傾。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・灰(1-2) ○		
58	甕	残高 6.0	肩部が強く折る。胴部割りの可能性もある。内面は被合痕が残る。	磨滅の為不明	ナテ	灰 ○		48
59	高杯	口径(22.4)	杯部肩部は丸みのある段。深い杯部。帯部ややうすく丸い。	ハケ→ヨコナテ	ハケ→ヨコナテ	灰 ○		
60	高杯	口径 15.1 器高 11.7 器径 10.2	杯部肩部はわずかに段を全す。帯部はやや長く、内湾する。	①-ヨコナテ	①-ヨコナテ ②-ナテ	石・灰(1-2) ○		48
61	高杯	残高 8.2	杯部はやや大きい。帯部は角縁状を呈す。器壁が厚い。	②-ヨコナテ ③-磨滅の為不明	②-ナテ ③-ヘラケズリ	灰 ○		
62	高杯	口径 10.4	直立多みの柱部。やや長い杯部。組み合わせ式。	磨滅の為不明	①-ナテ上げ ②-ヨコナテ	石・灰(1-2) ○		48

遺物観察表

●表34 S K 5 間瀬出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
63	鉢	口径(17.0)	ぐぐ内開する口縁部。 縁部は内開する。腹部に 紐をもたない。6段存在。	ヨコナテ	ヨコナテ	石・灰(1~3) 土 ○		
64	高杯	口径(17.1)	杯下處に接合の跡の開口 縁を有す。外反する口縁 部。口の浅さ。	ヨコナテ	ヨコナテ	石・灰(1~4) 土 ○		

●表35 S K 7 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
65	壺	口径 10.0	頸部が表裏。内開する長 い口縁部。縁部先開り。	㊦-ヨコナテ ㊧-調整の為不明	①-ヨコナテ ②-ナア1.5 ③-ヘラケズリ	石・灰(1~4) 土 ○		48
66	鉢	口径 10.7 器高 5.9	ぐぐかに外開する口縁部。 縁部は先開り。先底。	調整の為不明	調整の為不明	石・灰(1~3) 土		48
67	高杯	口径 9.0	直径さみの柱部。大きく 長い器部。柱下部に径1 cm大の円孔3ヶ。	調整の為不明	調整の為不明	土 ○	出土	48



## 第 5 章

# 樽味四反地遺跡



## 1. 調査の経過

(1)調査に至る経緯 1987(昭和62)年12月、川添政子氏より、松山市榊味4丁目204番1・204番4における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「81榊味遺物包含地」内にあり、これまでも周辺の地域で調査が実施されており、周知の遺跡として知られている。同包含地内では、榊味遺跡(愛媛大学農学部構内)〔宮本一夫 1989〕があり、弥生時代前期から中世までの集落関連遺構と遺物を確認している。

周辺には、弥生時代の石手川以北の拠点集落である文章遺跡〔西田栄他 1976〕、弥生時代から古墳時代の小坂釜の口遺跡〔岸・長井・大山 1973〕、桑原遺物包含地、5C後半とされる前方後円墳の経石山古墳(第9章)〔森光晴 1986〕、同じく6C代の前方後円墳である三島神社古墳〔岸・森・長井 1972〕、6C代前半東野お茶屋台古墳群〔森光晴 1986〕などが知られている。

これ等のことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1987(昭和62)年12月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、土師器・須恵器を含む遺物包含層と落ち込みを検出し、当該地に古墳時代から中世に至る遺構・遺物の存在が明らかになった。

この結果を受け、文化教育課・川添政子・越智住宅産業株式会社二者は、遺跡の取扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は古墳時代から中世における当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、川添政子・越智住宅産業株式会社両者の協力のもと1988(昭和63)年4月1日に開始した。

### (2)調査組織

調査地 松山市榊味4丁目204番1・204番4

遺跡名 榊味四反地遺跡

調査期間 野外調査 1988(昭和63)年4月1日～同年6月21日

調査面積 1,500㎡

調査委託 川添政子 調査協力 越智住宅産業株式会社

調査担当 調査員 梅木 謙一

調査補助員 宮内 慎一、山之内志郎

作業員 川井 正、高岡 二郎、田中 国広、玉井 光重、松岡 文一、三江 正則、  
山本 富明、古屋 明寿、吉田 智宏、谷久 広之、森田 利恵、松本美知子、  
越智美代子、渡部美代子、黒山 令子、山本 好枝

## 2. 層位 (第59図)

本調査地は、南北幅75mに及び、北辺の微高地端部から南へ向け緩やかに傾斜している。

基本層位は、地表から順に、第Ⅰ層が水田耕作土層、第Ⅱ層が水田床土層である。第Ⅲ層が黒褐色シルト層で、第Ⅲ層上面が遺構面となる。第Ⅳ層が黄褐色シルト層、第Ⅴ層が砂礫層である。第Ⅳ層より下位の層は、土層図に示す通りである。第Ⅰ層・第Ⅱ層は、約40cmの厚さを測り、第Ⅲ層が約20～30cmの遺物包含層であった。第Ⅲ層は、弥生時代以前に形成されており、少なくとも弥生時代から中世まで連続した遺構面であると推定される。第Ⅳ層以下は無遺物層で、土層堆積は安定しておらず、正確な時期は判断しにくい。弥生時代以前に堆積したものと推定される。また、(1)地理的環境で前述した通り、調査区北西隅においてA T火山灰土を検出した。検出地点は、調査区北西隅の土層観察用に深掘りした地点である。層位的には、第Ⅳ層と第Ⅶ層及び第Ⅸ・Ⅹ層の間の、地表から80～90cm、90～110cmの二層にわたって確認した。それ以外の地点では確認していないことから、樽味遺跡と同様に安定した堆積ではないと考えられる。

## 3. 調査の概要 (遺構と遺物)

主要な遺構は、落ち込み、旧河川、溝状遺構3条、土墳1基、ピット74基などがあげられる。全て第Ⅲ層から掘り込まれ、第Ⅳ層に及んでいる。

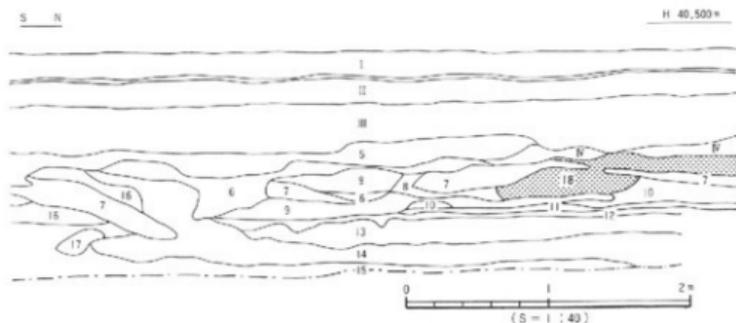
### (1) 落ちこみ (第60図)

落ち込みは調査区北端で検出され、検出された部分だけでも東西方向に16mを越えるものである。当初は南側のみを検出していたが、調査区北西隅を拡張することによって、幅約2mを測ることが明らかになった。ほぼ東西方向を上軸にもち、淡黄色粘土が堆積していた。本遺構からは須恵器片が少量出土している。

### (2) 旧河川 (第60図)

この遺構は、一時的な氾濫というよりは、数回の氾濫によって堆積した河川の跡であると推定している。底面はほぼ平坦であるが、中央部付近はやや深くなる。堆積土層は、粗砂を含む砂礫層と黒褐色粘質土の互層で形成されている。東西方向へ流れるこの旧河川からは、主に七師器・須恵器の流入がみられた(第63図4～10)。須恵器の種類には、坏壺・無蓋高環・壺・高環脚部・高台付坏身・甕口頸部などがあり、これらの陶器編年Ⅱ～Ⅲ型式段階に併行する須恵器が広い時期幅をもって堆積している様子がうかがえた。

## 調査の概要



- I 耕作土 II 床土 (ミンチ状の土器を含む) III 濃黒褐色シルト (炭・鉄分含む) IV 淡黄色シルト  
 5 灰色砂 6 濃黄色シルト+砂レキ土 7 黄灰色砂 8 淡黄色砂質土 9 淡茶褐色砂質土 (微砂)  
 10 淡黄灰色シルト 11 灰色砂 12 淡黄灰色砂 13 淡茶褐色粘土 (鉄分含む) 14 明黄灰色砂  
 15 黄灰色砂 (5-10cm大の礫多し) 16 黄灰色砂 17 淡黒褐色砂 18 AT火山灰

第59図 西壁土層図 (東より)

### (3)溝状遺構

#### SD-1 (第61図・図版52)

溝SD-1は、調査区やや南寄りに検出した溝である。ほぼ東西に主軸をもち、長さ4.3m、幅1.3m、深さ0.35mを測り、断面形は凹レンズ状を呈している。溝の東端は検出されているが、西端は調査区範囲外まで伸びている。溝の東端から約5m西のところで一段浅くなり、また西へ向かってゆるやかに深くなる。溝内の堆積は単層で、微砂を含む暗茶褐色粘質土で埋没している。土層の堆積状況から、ほぼ一時期の堆積であると思われる。

遺物は、土師器片が溝のやや上層から一点出土したのみで、それ以外の出土遺物は認められなかった。このため、この溝の時期は、土器が示す時期と同一であると考えられ、10世紀代に位置づけられる。

第61図1は、口径13.2cm、器高4.3cmを測るほぼ完形品である。形態は、底部より直線的に立ち上がり口縁部に至るもので、口縁端部を丸く仕上げ上げる。成形手法は、ロクロ成形し、底部は回転ヘラ切りによる。内面は、回転ナデ調整が施され、内面口縁直下に凸面がみられる。口縁部外面は回転ヘラ削り調整される。色調は暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。

#### SD-3 (第62図・図版54)

調査区最南端の溝SD-3は、規模確認に努めたが、両端共に調査区外である。この溝は、わずかに円弧を描くように南側を内側にして曲がり、東から南西へ曲がるに連れてやがて幅に広がりを持っている。東北東から西南西方向に主軸をとり、長さ11.5m、幅2.8m、深さ0.

25mを測る。溝の幅に対して深さは浅く、その底部はなだらかにレンズ状を呈しているが、西へ向かいやや深くなる。溝は第Ⅳ層を掘削しており、灰色粗砂を主体とした薄い層が、黒褐色粘質土層の底部付近に堆積している状況が確認された。調査区南西隅の床面には、握り拳大～人頭大の円礫の累積がみられた。これらの状況から判断して、ほぼ一時期の堆積による旧河川ともとれ、埋土は河川堆積層と考えられる。

遺物は、土師器・須恵器などが溝のやや上層から出土している。これらの中で実測可能な種類として、土師器杯と土師器皿とがあげられる(第62図2・3)。2は土師器の杯である。口径13.0cm、器高4.0cmを測る。形態は底部より外方へ向かって広がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は丸く仕上げられる。全体の約3分の1を欠失している。成彩手法は、ロクロにより成形し、底部は回転ヘラ切りによって切り離されたのち、ヨコナデ調整が施されている。また内外面共にヨコナデによる調整が施され、内面口縁部直下にはススが附着している。底部外面には粘土巻き上げ痕跡がみられる。色調は、内面が明褐色、外面が淡黄褐色をしている。胎土は密で、焼成は良好である。

3は土師器の皿である。口径12.6cm、器高2.0cmを測る。形態は、器高に比して径の大きな底部から、浅く斜め外方へ開く体部を呈する。口縁端部は丸く仕上げられる。全体の約半分を欠失している。成形手法は、ロクロにより成形した後、底部に回転ヘラ削りを行った後、ヨコナデ調整が施されている。また内外面共に、ヨコナデによる丁寧な調整が施されている。色調は淡黄色、胎土は密で、焼成は良好である。

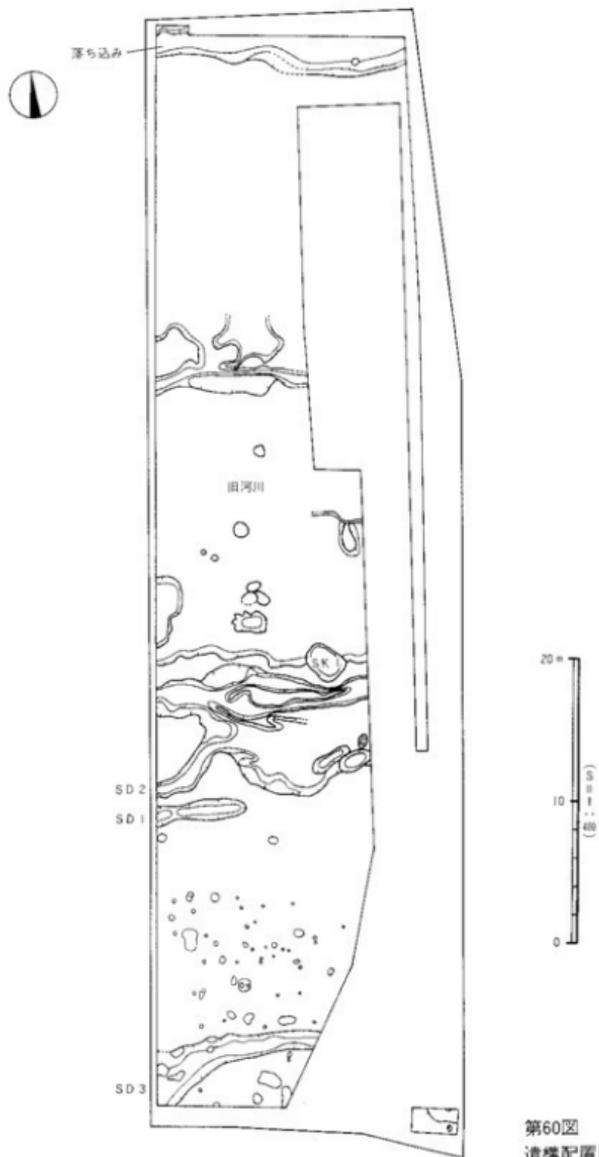
上述した2点の土師器以外にも、同様の皿や杯が出土している。しかし県内における、中世土器の時期差による形態や法量の確定化が不十分であるため、同一時期の資料として取り扱ってよいものかどうかは不明である。愛媛県の中世土器研究を積極的に行っている中野良一氏の研究では、愛媛県では、11世紀後半代の上師器碗に、(底部)糸切りが一部採用されていることを確認していることより、本遺跡出土品が、11世紀後半以前に製作されたことが判る。ただ土師器杯の形態のみでいえば、石井幼稚園遺跡と同時期の10世紀代に比定してよいものと思われる〔中野 1988〕。

#### (4)包含層出土遺物

遺構に伴わない包含層出土の遺物のうち、特筆すべきものとして、有孔円板・銭貨・緑釉陶器他がある。

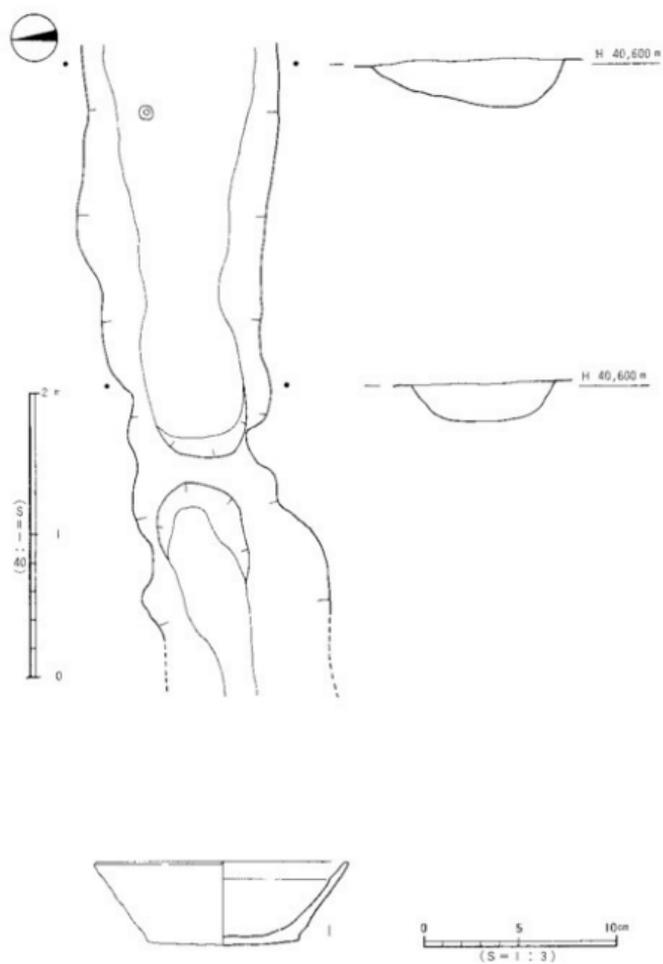
有孔円板(16) 3.0×2.8cmの楕円形で、厚みは0.3cmを計る。円孔は、径0.1～0.2cmの小孔を約1.2cmの間隔を空けて2ヶ所に穿っている。なお、表面を丁寧に研磨し、側面を面取りした痕跡がみられる。重さは6.6gで、石材は滑石である。調査区の落ち込み下層から出土した。

調査の概要



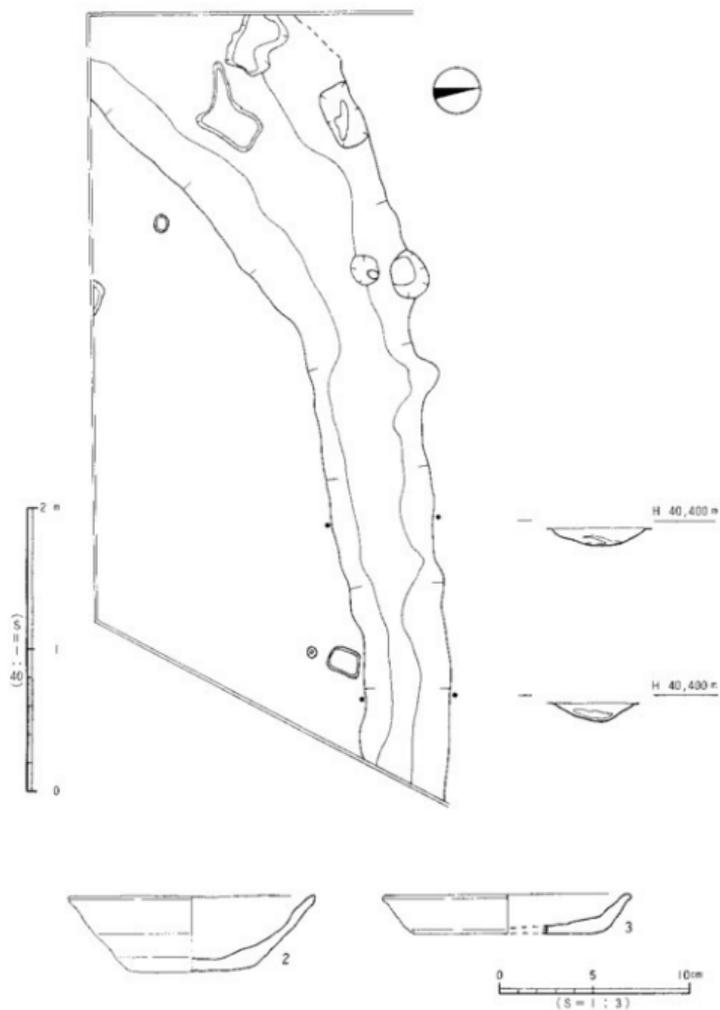
第60図  
遺構配置図

樽味四反地遺跡



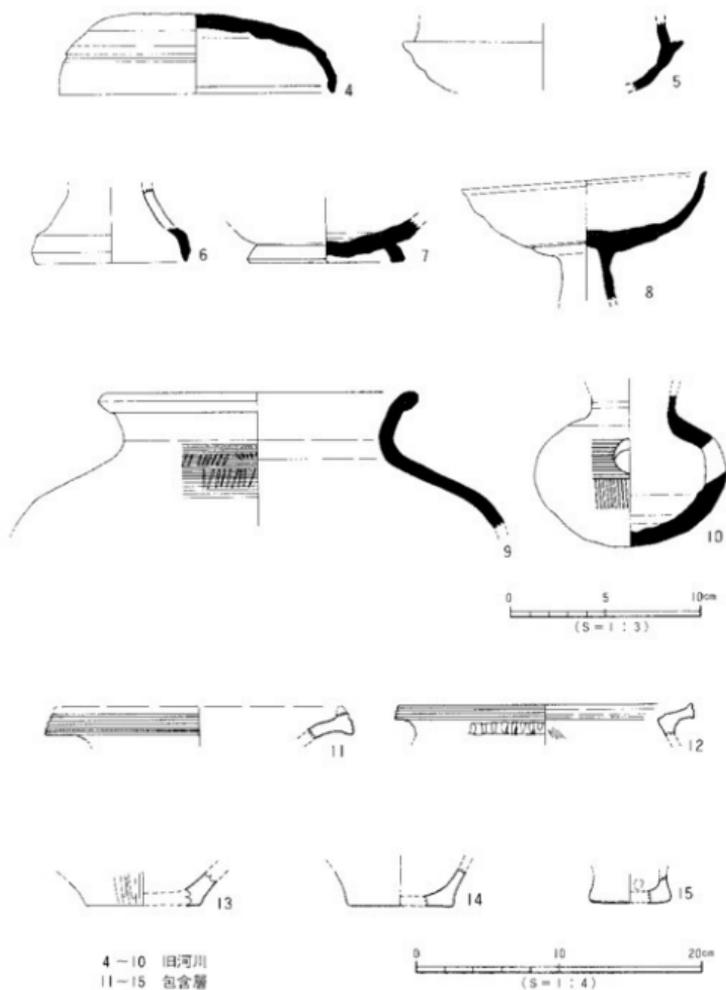
第61図 SDI測量図・出土遺物実測図

調査の概要



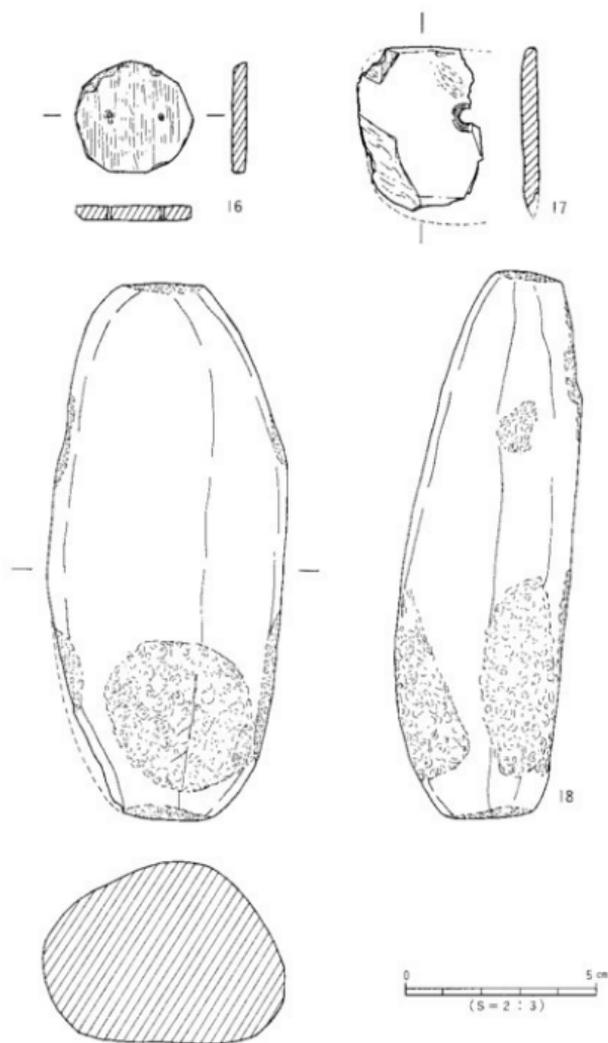
第62図 SD 3 測量図・出土遺物実測図

梅味四反地遺跡

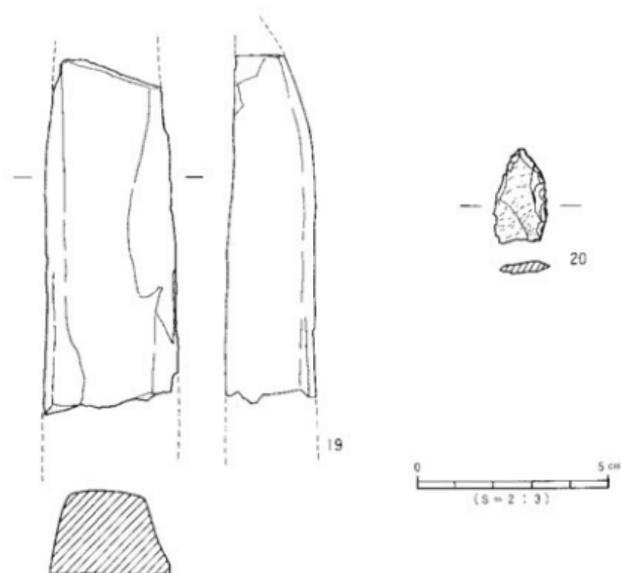


第63図 旧河川・包含層 出土遺物実測図

調査の概要



第64図 第三層・落ち込み出土遺物実測図



第65図 第三層出土遺物実測図

銭貨 (図版56) B11区の第IV層上面より、3枚の銭貨が重なった状態で出土した。そのうち種類が判別できるのは、開元通寶1枚と熙寧元寶1枚の合計2枚である。初鑄年代は、唐時代の開元元(713)年、北宋時代の熙寧元(1068)年である。前者の径が2.3cm、内方形一辺0.7cm、厚みが0.1cm、後者は2.3cm、0.6cm、0.1cmを計る。

緑釉陶器 (図版56) B O区第III層下層より出土した緑釉陶器片は、底径約9.2cm、残存器高3.5cmを計り、鉢の形状をもつものと推定される。底部は張りつけによる輪状高台である。その形態から、平安時代に製作されたものと推定される。

石庖丁 (17) 包含層である第III層出土品である。4分の1の残存である。石材は緑泥片岩である。刃部を磨きだしている部分がわずかに残る。

敲打具 (18) 包含層である第III層出土品である。ほぼ完存している。上下端部は平坦で、側面に敲打痕を残す。長さ14.1cmで、重さ625gを計る。

石斧 (19) 包含層である第III層出土品である。刃部と基部を欠く。柱状片刃石斧であろう。石材は緑色片岩である。

石鏃 (20) 包含層である第III層出土品である。わずかに基部を欠く。

## 4. 小 結

本調査では、(1)古墳時代—中世の遺構と遺物、(2)A T火山灰を確認した。

(1)調査区中央を東から西に流れる自然流路の検出は、当地が古墳時代において未だ安定した土地でなかったことを示す資料となる。また、北及び南で検出した溝状遺構も古墳時代以降のものであり、当地が古墳時代において水理に深く関係した土地であったことが知れる。これ等は、竪穴住居址を含め人工的構築跡の検出が少ないことと呼応するもので、当地が集落の生産地ないし集落の境界地域であることを想定させる資料ではないだろうか。

この他、注目される遺物には、包含層出土の双孔円板と緑釉陶器片の出土があげられる。双孔円板は松山平野では5例(当遺跡出土品を含む)と少なく、貴重な資料といえる〔相田則美 1991〕。緑釉陶器片は底部の小片であるが、平野内での出土例が少なく、双孔円板と同様貴重な資料である。

(2)第Ⅳ層下で検出した火山灰は、分析の結果A T火山灰であることを確認した。A T火山灰は調査地の北端部に検出が限られ、かつ小角礫や砂粒が混合された状況であることより2次堆積のものであることが知れる。また、この検出状況は榊味遺跡(愛媛大学農学部構内)のものと同様であり〔宮本一夫 1990〕、今後、周辺地域の調査が進めば検出事例は増加するものと考えられる。

## 〔文献〕

- 松山市教育委員会 1989『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
- 岸部 男・森 光晴・長井数秋他 1972『三島神社古墳』松山市教育委員会
- 岸部 男・長井数秋・火山正風 1973『釜ノ口遺跡発掘調査報告書』松山市教育委員会
- 相田則美 1991『近後平野における古墳時代の集落内祭祀』『松山大学構内遺跡』松山大学・松山市教育委員会
- 西田栄他 1976『文京遺跡』松山市教育委員会
- 宮本一夫 1990『恵子・榊味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 森 光晴 1986『経石山古墳』・『東野お茶屋台古墳群』『愛媛県史 資料編』愛媛県史編纂委員会

遺構・遺物一覧（遺構一覧：宮内慎一、遺物観察表：梅木謙一・山之内志郎）

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。  
例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。
- (3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。 例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。 例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( )中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。 例) 砂・長(1~4)多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。 焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表36 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	A10・B10	凹レンズ状	4.30×1.30×0.35	暗茶褐色シルト	土師		10世紀
2	A9・A10	皿 状	6.10×1.30×0.30	灰褐色シルト	土師・須恵		不 明
3	A・B・C14	レンズ状	11.50×2.50×0.25	黒褐色シルト	土師・須恵		10世紀

●表37 自然流路一覧

流路 (SR)	地区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	A3-C8	レンズ状	22.0×15.0×0.30	砂礫+灰褐色土	土師・須恵		古墳以降

●表38 土境一覧

土境 (SK)	地区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	C9	積円形	皿 状	2.0×1.8×0.22	灰褐色シルト			不 明

遺物観察表

●表39 旧河川、包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
1	杯	口径(13.2) 器高 4.3 底径 7.8	口ロ成形。 回転ヘラ切り。	㊸-ヨコナテ ㊹- 回転ヘラ削り	ナテ	砂粒(1-2) ○	SD 1	56
2	杯	口径(12.0) 器高 4.0 底径 6.8	口ロ成形。 回転ヘラ切り。	㊸-ヨコナテ ㊹-回転ヘラ削り→ヨコナテ	ヨコナテ	素 ○		SD-3 図
3	盃	口径(12.0) 器高 3.0 底径(9.4)	口ロ成形。 回転ヘラ削り。	㊸-ヨコナテ ㊹-回転ヘラ削り→ヨコナテ	ヨコナテ	素 ○	SD 3	56
4	杯蓋	口径 14.1 器高 4.2	口縁部は内側に重下する。 口縁部は丸く、内側に厚い。	㊸-ヨコナテ ㊹-回転ヘラ削り	㊸-ヨコナテ ㊹-一部タタキ板	素 ○	旧河川	56
5	杯身	残高 3.5	内側すたるちあがり。	ヨコナテ ㊹-回転ヘラ削り	ヨコナテ	素 ○	旧河川	
6	高杯	底径(7.7) 残高 3.9	胴縁部は、長くたあがり。 差し孔を1ヶ置設。	ヨコナテ	ヨコナテ	素 ○	旧河川	
7	杯	底径(8.0) 残高 2.3	ヘラ削りの後、高台を貼 り付ける。高台は八字状 を呈する。	㊸-ヘラ削り・胴縁付	ナテ	素 ○	旧河川	
8	高杯	口径(12.7) 残高 6.4	内側すたるちあがり口縁 部は、端部がわずかに外 反する。	㊸-ヨコナテ ㊹-ヘラ削り ㊺-ヨコナテ	ヨコナテ	素 ○	旧河川	
9	盃	口径(16.6) 残高 7.0	口縁端部は、肥厚し、丸 みのある方形を呈す。	㊸-ヨコナテ ㊹-平行タタキ→回転タタキ	㊸-ヨコナテ ㊹-円盤タタキ	素 ○	旧河川	56
10	盃	残高 8.0	底部はヘラ削り残ナテ割 裂。円孔(直径1.6cm)。	㊸-ヨコナテ ㊹-回転タタキ(縦・横方向) ㊺-ナテ	ヨコナテ	素 ○	旧河川	56
11	盃	口径(19.4)	口縁端部に3条以上の割 裂文。	ヨコナテ	ヨコナテ	素 ○	旧河川	
12	盃	口径(20.3)	口縁端部に2条の割裂文。 頂部に前後押圧しナテら れた凸帯文。	ヨコナテ	ヨコナテ	素 ○	旧河川	
13	盃	底径(8.0)	平底。	㊸-ヘラミダキ ㊹-ナテ	磨減の為不明	砂粒 ○	旧河川	
14	盃	底径(7.2)	わずかにすたるちあがり平底。		ナテ	素 ○	旧河川	
15	盃	底径(5.5)	厚みのある、くびれた平 底。		磨減の為不明	砂粒 ○	旧河川	

栲味四反地遺跡

●表40 III層・落ち込み出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
16	双孔門瓶	ほぼ完形	滑石	3.0	2.9	0.33	6.60	落ち込み	56
17	石甕丁	互	緑泥片岩	3.2	4.3	0.4	11.75	III中層	
18	瓶打具	ほぼ完形		14.1	6.2	4.6	652.15	III下層	
19	石 芥	互	緑泥片岩	9.1	3.3	2.2	159.50	III下層	
20	石 盤	ほぼ完形	サヌカイト	2.4	1.3	0.3	1.18	III中層	

第 6 章

クワバラニシイナバ  
桑原西稲葉遺跡

— 1 次調査 —



## 1. 調査の経過

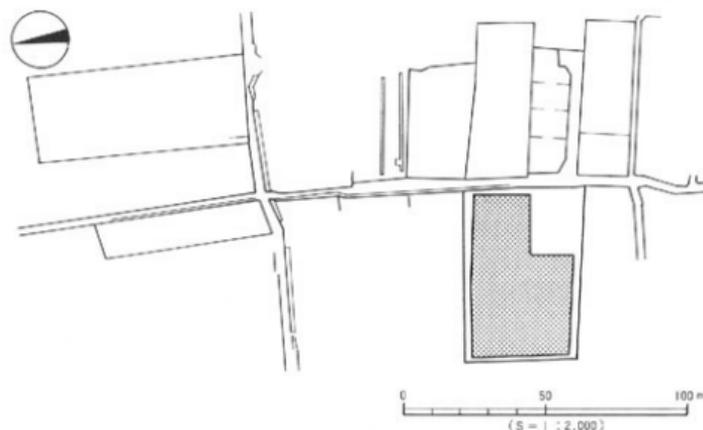
### (1) 調査に至る経緯

1989（平成元）年1月、松山上建株式会社より、松山市桑原1丁目981-1・2、982-1・2に東雲短期大学学生寮を建設するに当たり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の『81樽味遺物包含地』内にあたり、これまでも周辺の地域で多くの調査が実施され、周知の遺跡として知られている。同包含地内では、弥生時代から古墳時代の複合遺跡である樽味四反地遺跡・樽味立添遺跡・樽味高木遺跡（梅木謙一 1989）、弥生時代から中世までの生活関連遺構を検出している樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）〔宮本一夫 1989〕などがある。周辺には東～南東部の丘陵地に経石山古墳（前方後円墳）、三島神社古墳〔岸・森・長井 1972〕、東野お茶屋台古墳群〔森光晴 1986〕、畑寺竹ヶ谷古墳群がある。このほか、近年の調査により桑原・樽味地域において弥生時代から中世までの集落関連遺構を多数確認している。

これらのことなどから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1989（平成元）年3月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、土師器・須恵器を含む古墳時代の遺物包含層と土壇4基、溝状遺構2条、柱穴5基を検出し、当該地の古墳時代の集落関連遺構の存在が明かになった。

この結果を受け、文化教育課・松山上建株式会社二者は遺跡の取扱いについて協議を行い、学生寮建設によって失われる遺構について、記録保存のため発掘調査を実施することとな



第66図 調査地位位置図

た。発掘調査は、古墳時代を主とする当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、松山土建株式会社の協力のもと、1989（平成元）年4月25日に開始した。

(2)調査組織

調査地 松山市桑原1丁目981-1・2、982-1・2

遺跡名 桑原西稲葉遺跡1次調査

調査期間 野外調査 1989（平成元）年4月25日～同年9月30日

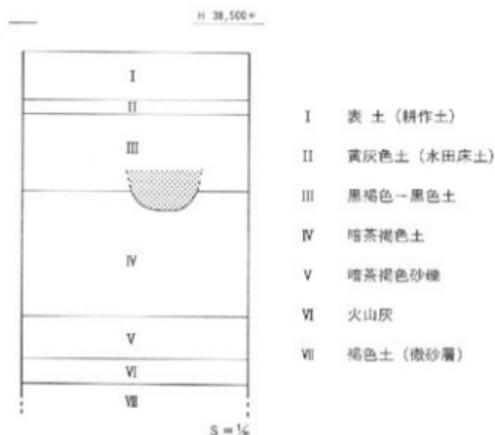
調査面積 2,300.96㎡

調査委託 松山土建株式会社 田之内 隆

調査担当 松山市教育委員会文化教育課 調査員 梅木 謙一

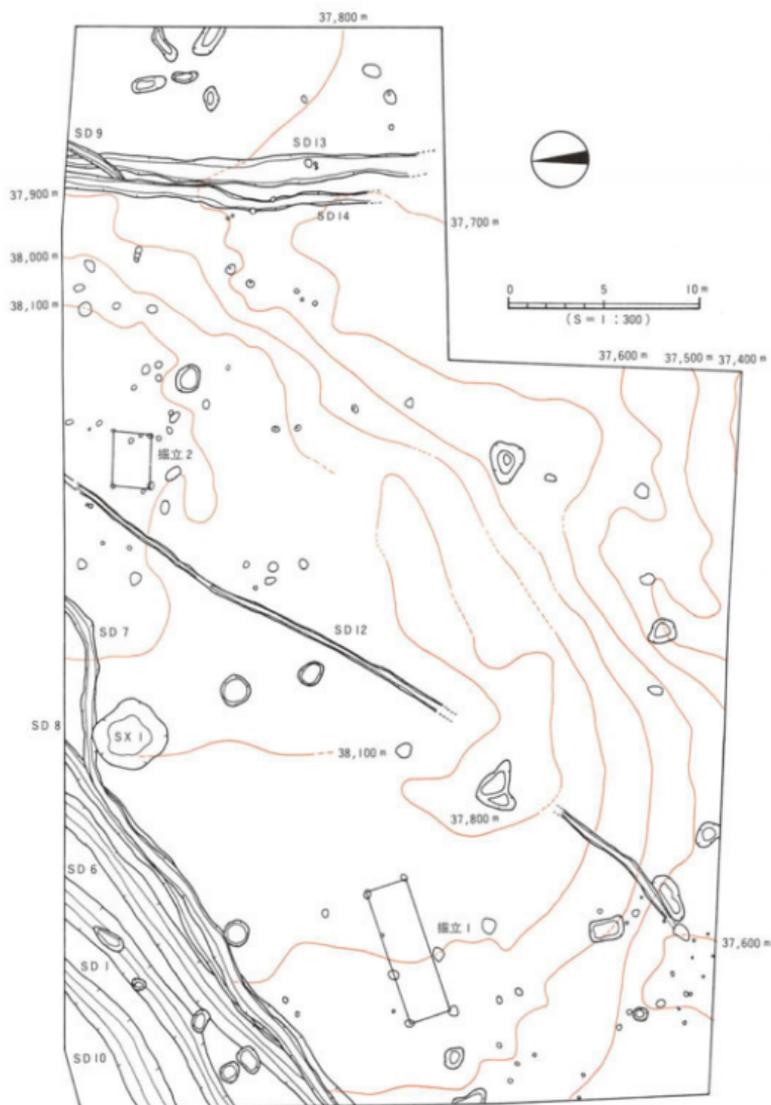
調査補助員 木下公一・谷久広之・宮内慎一

作業員 工藤 賢徳、扶川 博、吉田 智広、古屋 明寿、亀山 健一、亀山 泰昌、  
森水 純司、宮脇 和人、志賀 夏行、原田 英則、鎌田 譲二、梅本 正則、  
堤中 健仁、山本 圭、藤村 英樹、笠井 啓一、横山 茂、佐藤 健二、  
高橋 恒、仙波 豊子、福山 暁子、河本美代子、今井セツ子、向井 一成、  
波辺 竜二、森田 利恵、松本美知子、越智美代子、黒田 令子、水口あをい、  
山本 好枝、立木 佳代、西野 貴子、森田 品子、栗林 千恵、藤沢 真美、  
中川 寛也、田村 雅愛、田坂 嘉則、松岡 忠仁、中野 剛、渡部孝二郎、  
岸 武弘、森田 真司、濱田 哲夫、岡田 浩明、安永 浩二、上岡 光彦



第67図 基本層位図

調査の概要



第68図 遺構配置図

## 2. 層位

本遺跡は、石手川左岸の沖積扇状地上の標高38mに立地する。

基本層位は(第67図)、第Ⅰ層表土(耕作土)、第Ⅱ層黄灰色土(水田床上)、第Ⅲ層黒褐色～黒色土、第Ⅳ層暗茶褐色土、第Ⅴ層暗茶褐色砂礫層である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は20～25cmの厚さを測る。第Ⅱ層中には少量ではあるが、土師器片・須恵器片が含まれる。第Ⅲ層黒褐色～黒色土は調査区全域でみられ、厚さ25～30cmの堆積で、弥生土器(中期・後期)、土師器(古墳時代・古代・中世)、須恵器(古墳時代・古代)を包含する。第Ⅳ層暗茶褐色土は無遺物層で地山と呼ばれるものである。第Ⅳ層上面での地形測量では、調査区中央部が高く、南東、北西に緩傾斜をもっている。さらには、調査区西半部において、第Ⅴ層と第Ⅲ層の間に火山灰の堆積がみられた。厚さ約25cmであり、火山灰及び火山灰の上下層からの遺物の出土はない。

遺構は第Ⅳ層上面での検出である。古墳時代から中世までの遺構を確認した。掘立柱建物2棟、欄列1列、溝状遺構14条(自然流路9条を含む)、土壌27基、柱穴114基(掘立柱建物柱穴を含む)他である。遺構はいずれも近現代の造成により遺構上部は削平されており、各遺構の現存状況は深さ10cmに満たないものが大半である。また、遺構からは、遺物がほとんど出土しないために遺構の時期や性格の特定は難しい。

本調査区の中で北西隅は、第Ⅳ層暗茶褐色土堆積以前に、すでに北西に向けて緩傾斜をなしている。このため同地点の第Ⅲ層黒褐色～黒色土、及び第Ⅳ層は他の地点よりも厚い堆積となっている。この地点が傾斜地でなくなったのは、第Ⅲ層堆積以降であり、かつ現在のような平坦地を形成するようになるのは近現代の耕地整備時以降であると考えられる。この地点は第Ⅲ層堆積中及び堆積以後、自然流路6条、溝状遺構6条が形成されている。このうち最古の流路SD5からは5世紀末～6世紀前半の須恵器が溝底より出土している。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリッドに分けた。

## 3. 調査の概要(遺構と遺物)

### (1)掘立柱建物址

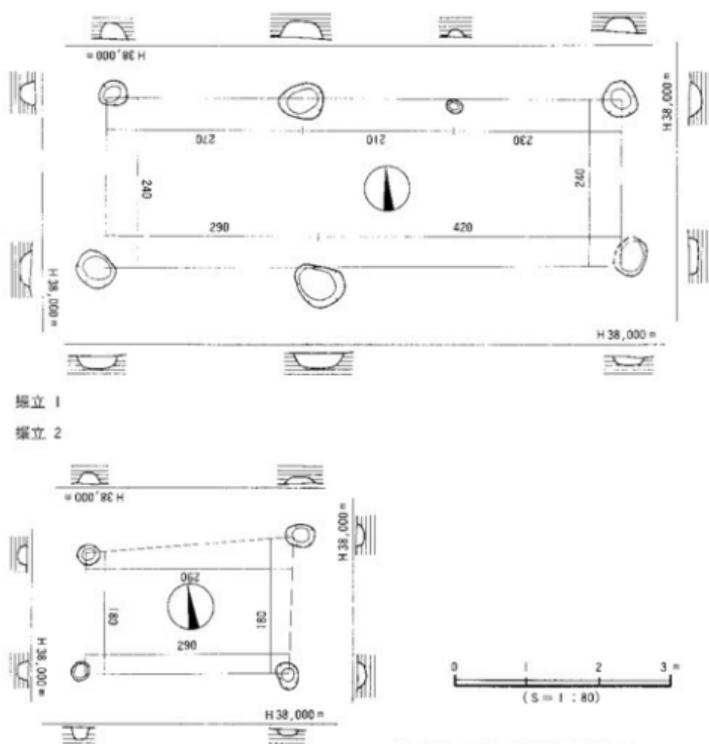
#### 1号建物址(第69図)

調査区南側中央に位置する。規模は3×1間で、桁行7.23m、梁間2.40mを測る。出土遺物はない。時期不明。

#### 2号建物址(第69図)

調査区北側中央に位置する。規模は1×1間で、桁行2.90m、梁間1.80mを測る。出土遺物はない。時期不明。

## 調査の概要



### (2)溝状遺構 (第70・71図)

溝状遺構は自然流路を含め14条を検出した。調査地北西隅は、北西方向に傾斜をもち(小谷)、自然流路が流れていたことを確認した。流路は当初は幅8mであったものが、沖積作用の後、小河川が北西部ないし南東部を流れるようになったことを確認した。北西部では少なくとも3回(SD6・10・11)、南東部では6回(SD1~5・8)の流れを確認した。SD7・12・13・14は断面形や埋土、流路位置より人工的な溝の可能性が高い。各溝からの遺物は少なく、時期決定に有効な資料ではない。

SD4出土品(12・25) 12は複合口縁壺片である。複合部が欠落し、一部に擬口縁を看取する。弥生時代後期後半。25は坏身片である。口縁端部は段をもち、受部は水平に近い。6C前葉。

SD 5 出土品 (15・23・27) 15は二重口縁壺である。二重口縁部は外傾し、口縁端部は内傾する。5世紀。23は坏蓋で1/3の残存である。ヘラ削りの痕が顕著。口縁部は外方に小さく突出する。6C。27は坏身で、小片である。内傾し、直立するたちあがりをもつ。6C後半。

SD 7 出土品 (26・29・32・33) 26は坏身片である。たちあがりは強く内傾し長い。6C。29は短頸壺ではほぼ完形品である。口縁部は丸くおさめ、体下半部はヘラ削り痕を残す。6C後半。32は台付長頸壺である。肩部は屈折し、樽描きの「ノ」字状文を施す。7世紀。33は長頸壺の体部である。扁平な体部は、肩部が丸い。7世紀。

SD 13 出土品 (9) 9は高坏形土器の坏部片である。口縁外面に凹線文を3条施す。弥生時代中期後葉。

SD 14 出土品 (30) 30は高台付の坏片である。高台は「ハ」字状を呈し、端面は水平となる。8世紀。

### (3)土壌 (第70図)

27基の上壌を検出した。SK 1・5・6・8・10には埋土中に土師器片が検出されたが、時期決定に有効な資料ではない。他の遺構は、無遺物ないし細片が少量出土したにすぎず、時期決定はできなかった。ただし、調査地北西隅のSK 1・2・5・6・7は流路が埋没した後には掘削されたものである。本調査地検出の上壌は、いずれもその性格は不明である。

SK 6 出土品 (5) 5は壺形土器の口縁部分である。口縁端部は上下拡張され、端面に凹線文を3条施す。弥生時代後期中葉。

SK 8 出土品 (17) 17は手捏品である。口縁部は指によりひねりだされる。内面に指頭痕著しい。古墳時代か。

### (4)その他の遺構と遺物

#### 包含層出土品 (第70・71図)

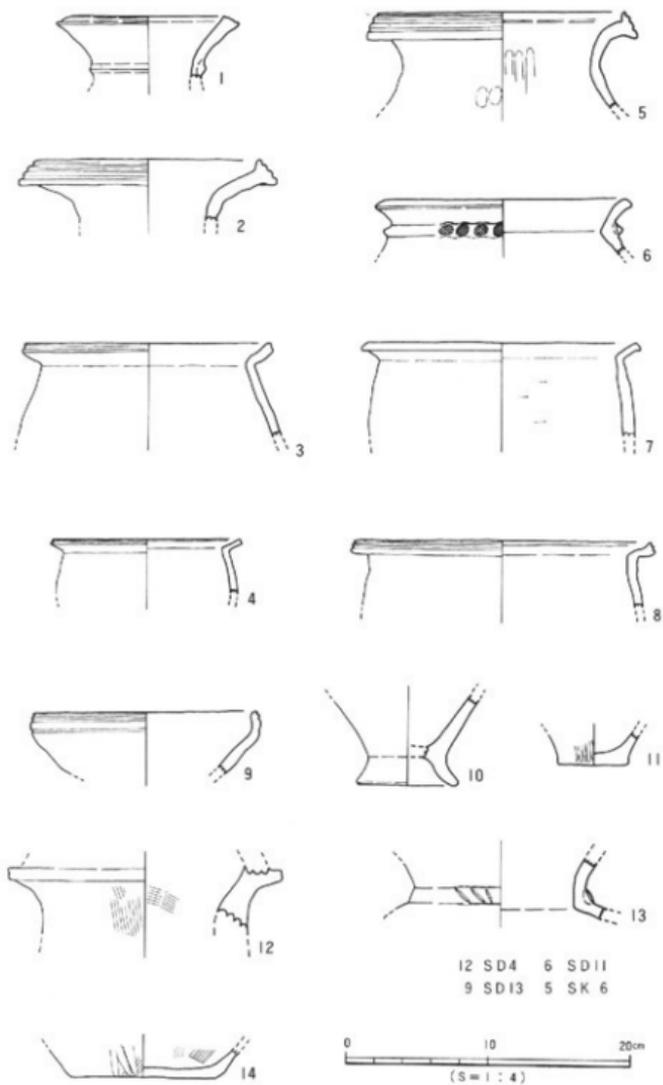
包含層 (第III層) からは、弥生時代～古代までの遺物が出土した。

弥生時代 (1・4・7・8・10・11・13・14) 13・14は弥生時代後期で、他は中期後葉のものである。

古墳時代 (16・24) 16は土師器の椀で、口縁部が内湾ぎみにたちあがる。5世紀。

飛鳥・奈良 (20~22・28・30・31・34) 高台付の坏身片が多く出土している (20~22・30・31)。脚端面が水平のもの (20~22) とわずかに外傾するもの (30・31) がある。28は底部にヘラ記号が施される (図版63)。34は長頸壺片で、肩部は丸みをもち、沈線が2条施される。

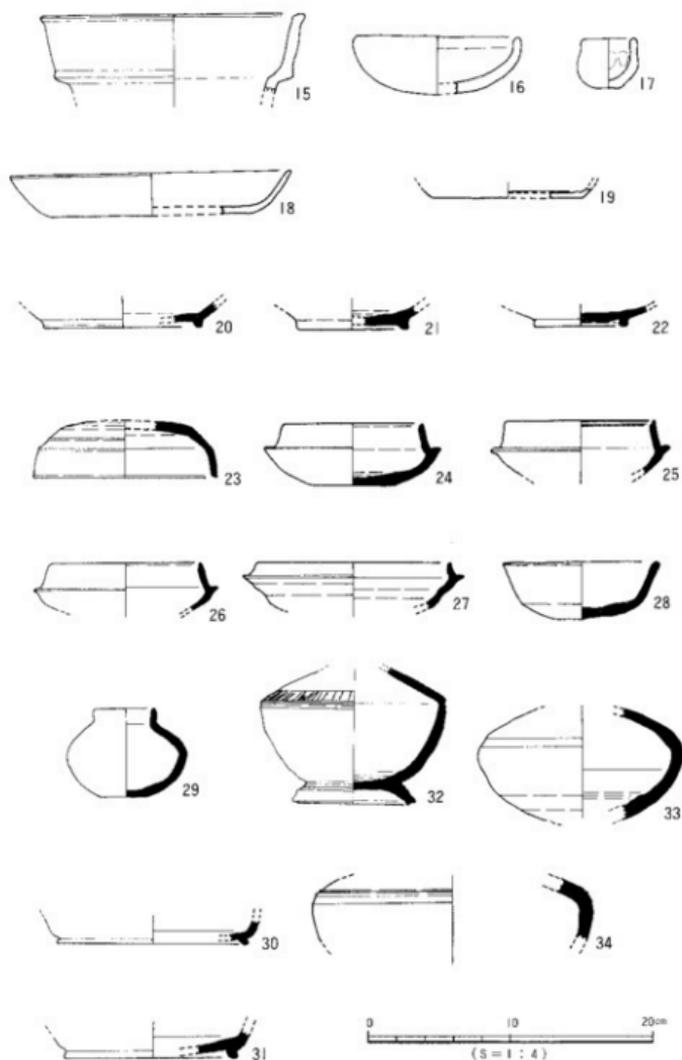
調査の概要



12 SD4 6 SD11  
9 SD13 5 SK 6

第70図 出土遺物実測図(1)

桑原西稻葉遺跡1次調査



第71圖 出土遺物実測図(2)

## 4. 小 結

本調査では、古墳時代以降の生活関連遺構と弥生時代中期～中世の遺物、A T火山灰を検出、確認した。

(1)遺構は、近現代の耕地整備のため全てその上部は削平されていた。このため、現状は深さ10cmに満たないものが多く、よって完全に削平されたものも多数あると思われる。

調査地北西隅で検出した緩傾斜地と流路は、時期特定はできなかったものの、当地の集落経営、特に水田経営に関連する可能性は高く、調査区北側地は注意を要する地域となるであろう。さらに、調査地北東700mの樽味四反地遺跡でも古墳時代の流路が検出されており、当地域は古墳時代においては十分に安定した土地ではなかったことが知れる。

(2)第Ⅲ層より弥生時代～中世の土製品が出土した。石器・鉄器の出土はきわめて少ない。遺物の出土量は少なく、これは単に包含層及び遺構が削平されていることによるものでなく、北西隅に流路が存在することより集落経営に要因がある可能性も考えている。出土品はいずれも小片で磨滅が著しい。

(3)第Ⅳ層上面の地形測量では、調査地は北東から南西に向けて尾根状の微高地が走ることを確認した。この微高地は、北東30mの調査地点でも確認されており、当地域の旧地形復元の一資料になるものである。

(4)第Ⅴ層はA T火山灰であることを確認した。A T火山灰は、樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）、樽味四反地遺跡等、近年、当地域で検出例が増加している。いずれも、砂粒を含む二次堆積層で、A T層中及び上下層に遺物を含まないことを共通とする。

以上、本調査では、時期や性格を特定する遺構が希少であったが、当地域の集落経営を考える上では一つの資料となるものである。本調査では確認できなかったが当地を含め周辺地は水田経営に適した土地であるため、今後、周辺の調査では古墳時代の水田跡が検出される可能性は高く、慎重な調査が望まれる。

## 〔文献〕

- 梅木謙一 1989「樽味四反地遺跡」「樽味立派遺跡」「樽味高木遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ」松山市教育委員会
- 梅木謙一・宮内慎 1991「道後今市6次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会
- 岸 敏男・森 光晴・長井敬秋 1972「三島神社古墳」松山市教育委員会
- 西尾幸則 1986「畑寺竹ヶ谷古墳群」『愛媛県史 資料編』愛媛県史編纂委員会
- 宮本一夫 1989「樽味・蓮子遺跡の調査」愛媛大学考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 森 光晴 1986「東野お茶屋古墳群」「経石山古墳」『愛媛県史 資料編』愛媛県史編纂委員会

桑原西稲葉遺跡1次調査

●表41 溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	備 考
1	A3-A12	舟底状	14.5×0.8×0.15	灰色砂	土師・須恵		
2	A3-A12	舟底状	14.5×1.3×0.30	暗灰色砂	土師・須恵		
3	A3-A12	舟底状	14.5×1.0×0.10	暗褐色土			
4	A3-A12	舟底状	14.5×1.3×0.25	黄灰色粗砂	弥生・土師・須恵		古墳以降
5	A3-A12	舟底状	14.5×1.1×0.30	暗灰色粗砂	土師・須恵		古墳以降
6	A5-A21	混合形状	10.5×1.4×0.60	暗褐色土	弥生・土師・須恵		
7	A5-B6	舟底状	21.5×0.8×0.15	暗灰色砂	土師・須恵		古墳以降
8	A5-B1	楕円状	24.0×0.6×0.40	暗褐色土	弥生・土師・須恵		
9	C11-C12	レンズ状	3.2×0.4×0.20	暗褐色土		SD14に切れる	弥生中期以降
10	A2-A11	混合形状	9.8×1.3×0.50	灰色砂+赤色砂	土師		
11	A2-A11	レンズ状	9.8×0.7×0.10	暗灰色新灰砂	土師・須恵		
12	A-B	レンズ状	49.0×0.2×0.15	暗褐色土			
13	C11-C14	舟底状	16.2×0.8×0.15	暗灰色砂	土師・須恵		弥生中期以降
14	C11-C15	舟底状	18.2×1.0×0.15	暗灰色砂	土師・須恵	SD9に切られる	古墳以降

●表42 土坑一覧

土坑(SD)	地区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	A3	円形	皿状	6.0×0.8×0.15	黒色土	土師		古墳以降
2	A8	楕円形	混合形状	1.1×0.6×0.15	黒褐色土			
3	D1	不定形	皿状	1.8×1.0×0.05	黒色土			
4	D12	円形	楕円状	1.1×1.0×0.10	黒褐色土			
5	A13	円形	混合形状	1.3×1.3×0.45	黒色土	土師		古墳以降
6	A12	楕円形	皿状	2.0×0.7×0.15	暗灰色粗砂	土師		古墳以降
7	A8	楕円形	舟底状	1.3×0.9×0.18	黒褐色土			
8	B3	円形	舟底状	1.6×1.6×0.30	黒色土	土師		古墳以降
9	B9	楕円形	レンズ状	1.4×1.2×0.10	黒色土			
10	A12	円形	レンズ状	1.3×1.0×0.10	黒褐色土	弥生・土師		古墳以降
11	C17	楕円形	皿状	1.6×0.8×0.10	暗茶褐色土			
12	C22	楕円形	皿状	1.8×0.6×0.10	黒色土			
13	C22	楕円形	混合形状	2.0×1.0×0.40	黒色土			
14	C18	楕円形	皿状	1.3×0.6×0.05	暗茶褐色土			
15	C16	楕円形	皿状	1.3×0.9×0.10	暗茶褐色土			
16	B22	楕円形	混合形状	1.5×1.2×0.20	黒色土			
17	D16	三角形	楕円状	2.0×1.3×0.32	黒褐色土			
18	D27	円形	楕円状	1.3×1.1×0.50	暗褐色土			
19	D44	円形	楕円状	1.3×1.2×0.52	黒褐色土			
20	D24	楕円形	舟底状	2.5×1.2×0.25	暗茶褐色土			
21	D25	長方形	舟底状	1.8×1.2×0.10	暗茶褐色土			
22	D34	円形	皿状	0.8×0.8×0.20	黒色土			
23	D15	三角形	皿状	1.3×1.5×0.30	黒褐色土			

●表43 掘立柱建物址一覧

建物番号	規模(間)	桁 行		梁 行		床面積 (㎡)	時 期
		実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)		
1	3×1	723(24.1)	7.7・7・9.4	240(8)	8	17.35	不明
2	1×1	290(9.2)	9.7	180(6)	6	5.22	不明

## 遺物観察表

●表44 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
1	壺	口径(10.5)	頸部に二角凸部を貼りつける。口縁部面に2条の縦筋施文。腹縁木口跡あり。	①(外) ヨコナテ・施文 ②(内) ヨコナテ	①(内) ヨコナテ ②(外) ナテ	石・長(1-4) ○	Ⅲ 2層	
2	壺	口径(15.6)	口縁部は上下拡張。腹面に2条の縦筋施文。小片。	①(外) ヨコナテ・施文 ②(内) ヨコナテ	①(内) ヨコナテ	砂粒 (石・長1-2) ○	Ⅲ 2層	61
3	壺	口径(17.6)	口縁部はナテにより上方に拡張。器壁薄い。写の残存。	①(外) ヨコナテ	器壁の為不明	砂粒 ○	Ⅲ 2層	
4	壺	口径(13.1)	口縁部はナテにより上方に拡張。小片。	①(外) ヨコナテ・施文 ②(内) ヨコナテ	①(内) ヨコナテ ②(外) ナテ	密 ○	Ⅲ 2層	
5	壺	口径(17.6)	口縁部は上下に拡張。腹面は凹筋施文3条。写の残存。	①(外) ヨコナテ・施文	①(内) ヨコナテ ②(外) ナテ上段	石・長(1-3) ○	S D 6	64
6	壺	口径(16.6)	く字状口縁。ナテにより口縁部を拡張。腹面に縦筋施文をもつ凸部。	①(外) ヨコナテ	①(内) ヨコハケ・ヨコナテ ②(外) ヨコナテ	密(石・長1) ○	S D 11	
7	壺	口径(17.5)	く字状口縁。口縁部にナテにより面を取る。小片。	①(外) ヨコナテ ②(内) 凹筋	①(内) ヨコナテ ②(外) ナテズリ	砂粒 ○	Ⅲ 2層	
8	壺	口径(15.5)	口縁部は上方に拡張。2条の凹筋施文。	①(外) ヨコナテ・施文 ②(内) ヨコナテ	①(内) ヨコナテ ②(外) ナテ	密 ○	Ⅲ 2層	
9	高杯	口径(17.6)	口縁外面に凹筋施文3条。口縁部は丸みをもちく字状。小片。	①(外) ヨコナテ・施文	ヨコナテ	密(石・長1) ○	Ⅲ Ⅱ S D 13	
10	罍	底径(6.6)	大きなくびれの上げ部。腹縁部はく字状で内無する。写の残存。	①(外) ナテハケ ②(内) ヨコナテ ③(底) ヨコナテ	ハケ・ナテ	石・長(1-2) ○	Ⅲ 2層	61
11	壺	底径 3.0	平底。わずかにふんばりをもつ。器壁は薄い。写の残存。	①(外) ヘラミガキ ②(内) ナテ	器壁の為不明	密 ○	Ⅲ 3層	
12	壺		二重口縁。縦口縁を有取。写の残存。器壁は薄い。	①(外) ナテハケ	①(内) ハケ (7-8cm/1cm)	石・長(1-3) ○	S D 4	
13	壺	頸径(12.8)	器壁は薄い。頸部に半段の内帯。凸部上は、木口による斜筋下段。写残存。	器壁の為不明	器壁の為不明	石・長(1-5) ○	Ⅲ 層	
14	壺	底径 10	大きい平底。内面に刷毛目状施文。	①(外) ハケ・ヘラミガキ ②(内) ナテ	ハケ	石・長(1-7) ○	Ⅲ 2層	
15	壺	口径(16.2)	内帯する口縁部。腹部は外方に突出する。腹面は内帯する。小片。	①(外) ヨコナテ ②(内) ヨコナテ	①(内) ヨコナテ ②(外) ヨコナテ	密 ○	S D 5	61
16	壺	口径(11.4)	内帯する口縁部。腹部は丸い。器壁は薄い。写の残存。	①(外) ヨコナテ ②(内) ナテ	①(内) ヨコナテ ②(外) ナテ	密 ○	Ⅲ 2層	61
17	ヒナチア	口径 3.5 器底 3.6	わずかにしなる頸部。口縁部は丸い。手挽ね。内面に産毛状施文。	ナテ	ナテ	石・長(1-2) ○	Ⅲ Ⅱ S K 8	61

桑原西稲葉道跡1次調査

出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
18	皿	口径(17.1) 器高 3.0 底径(12.2)	磨滅、外縁し外反する口縁部、口縁部は丸い。写の残存。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 △	Ⅲ 3層	
19	皿	底径(10.4)	小片、ヘラ切りか。	ヨコナテ ④一木周整	ヨコナテ	密 ○	Ⅲ 層	
20	坏身	底径(10.8)	高台付。脚部は外方におずかに突出する。底面は水平。小片。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ○	砂 層	
21	坏身	底径(7.4)	高台付。脚部は面を取る部分と丸く仕上げる部分がある。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ○	砂 層	
22	坏身	底径(6.4)	高台付。脚はやや内傾する。底面は水平。脚部糸切りでナテ。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ○	Ⅲ 2層	
23	坏身	口径(12.9) 器高 3.0	口縁部は外傾する。底面は平坦で、内傾する。写の残存。	④一ヨコナテ ⑤⑥一写回転ヘラケズリ	ヨコナテ	密 ○	SD 5	
24	坏身	口径 9.6 器高 4.3 底径 5.5	内傾するたちあかり。脚部はやや内傾する。ヘラ記号あり。	④一ヨコナテ ⑥一写回転ヘラ切り	ヨコナテ		Ⅲ 3層	62
25	坏身	口径(10.1)	内傾する口縁部。底面は内方内傾。受部は上外方。写の残存。	ヨコナテ	ヨコナテ	密(抜2) ○	SD 4	
26	坏身	口径(10.5)	内傾する口縁部。底面は丸い。受部は上外方。写の残存。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ○	SD 7	
27	坏身	口径(13.4)	内傾、外反する口縁部。底面は丸い。受部は三角形。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 □	SD 5	
28	碗	口径(10.8) 器高 4.0 底径 5.0	底面にヘラケズリ痕跡。口縁部は平坦。底面にヘラ記号。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ○		62
29	小型 壺	口径(4.1) 器高 6.1 底径 2.7	点文さみにヤツ口縁部。底面は丸い。脚部下縁はヘラケズリ。	④一ヨコナテ⑥一木周整 ⑤⑥一ヨコナテ ⑦⑧一ヘラ切りヨコナテ	ヨコナテ	密 ○	自然焼 SD 7	62
30	坏身	底径(13.3)	高台付。脚部外傾。底面は丸く字。小片。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 △	SD 14	
31	坏身	底径(11.4)	高台付。脚部外傾。底面は内傾し、凹みをもつ。小片。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ○	Ⅲ 層	
32	壺	底径 7.6	台付瓦蓋部。器身部は線をもつ。クシ痕のノ字状文。器身部に同線文。	④⑤一ヨコナテ⑥一ヨコナテ ⑦⑧一ヨコナテ ⑨⑩一写回転ヘラケズリ	ヨコナテ	砂粒 ○	自然焼 SD 7	62
33	壺	残高 7.8	同線部は線がなく丸い。ヘラケズリは底部分だけに残る。写の残存。	④⑤一写ヨコナテ ⑥⑦一写回転ヘラケズリ	ヨコナテ	砂粒 ○	SD 7	
34	壺	残高 4.5	器身部に線をもつ。同線部上に太比線文1条。器身部に同線1条。小片。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ○	Ⅲ 層	

第 7 章

クワバラニシイナバ  
桑原西稻葉遺跡

— 2 次 調 査 —



## 1. 調査の経過

(1)調査に至る経緯 1989(平成元)年12月、松元幸利氏より、松山市桑原2丁目971番2号地内における宅地開発に当たって、当該地の埋蔵文化財確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当該地は、松山市が指定している埋蔵文化財包蔵地「157桑原遺物包含地」内に位置し周辺地域には、弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡である樽味遺跡・樽味四反地遺跡・樽味立添遺跡・樽味高木遺跡・桑原田中遺跡、また平成元年に行われた当地西側隣接地の西稲葉遺跡第1次調査地など多数の遺跡が散在しており、近年の宅地開発による発掘調査の事例により注目されてきた地域に存する。これらの遺跡からは、竪穴式住居址・土壌・溝などの集落に係わる遺構を多数検出している。また南には経石山古墳・二鳥神社古墳、東には東野お茶屋台古墳群・畑寺竹ヶ谷古墳群などの遺跡が確認されている。

よって、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1990(平成2)年1月25日から27日までの間、文化教育課によって試掘調査を実施した。その結果、弥生土器・土師器・須恵器及び遺物包含層(2層)、溝状遺構1条などを検出し弥生時代から中世に至る遺跡があることを確認した。

この結果を受けて、文化教育課と松元幸利氏の二者は、宅地開発によって失われる遺跡の取り扱いについて協議を行い、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から中世にかけての周辺地域と当該地との集落構造の解明を主目的とし、文化教育課(松山市立埋蔵文化財センター)が主体となり、松元幸利氏・株式会社リビング樺の協力のもと1990(平成2)年7月14日に開始された。

### (2)調査組織

調査地 松山市桑原2丁目971番2号

遺跡名 桑原西稲葉遺跡2次調査

調査期間 野外調査 1990(平成2)年7月14日～同年9月17日

室内整理 1990(平成2)年9月18日～同年10月24日

調査面積 1,143㎡

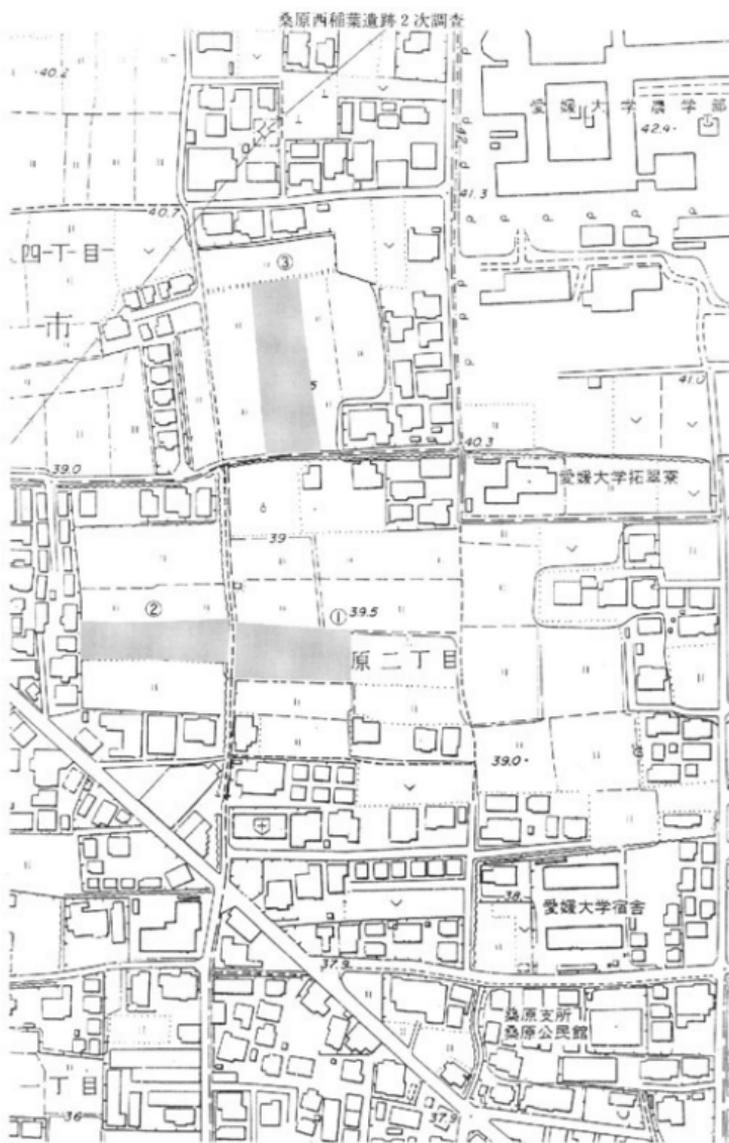
調査委託 松元 幸利 調査協力者 松元幸利 株式会社リビング樺

調査主体 松山市教育委員会 教育長職務代行者 井上 量公

調査担当 調査員補 高尾 和長

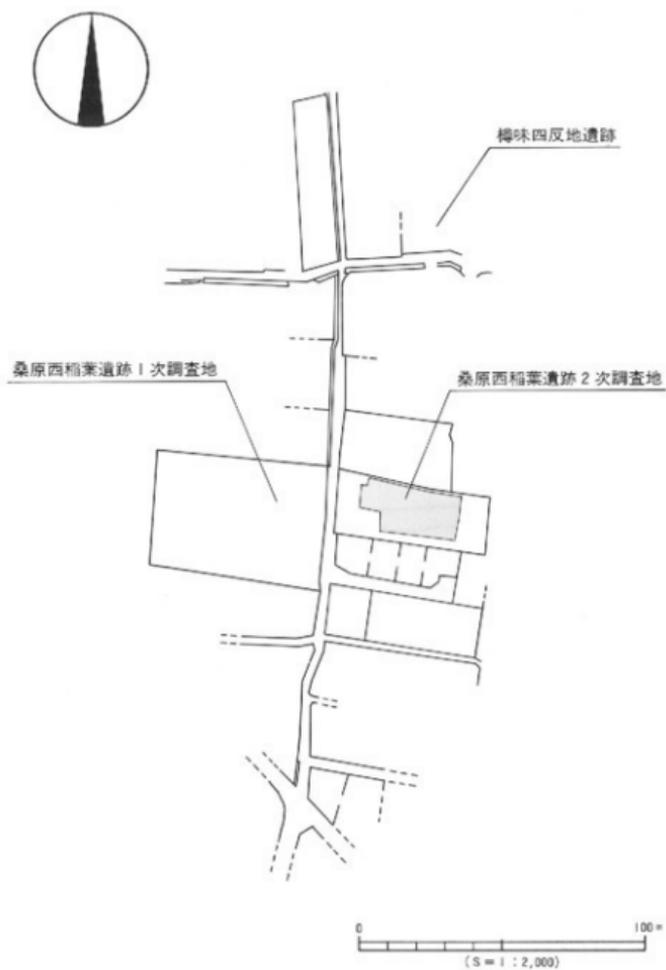
” 真木 潔

作業員 高市 英治、山邊 進也、肌野 祐治、志賀 夏行、原田 英剛、増元 忍、  
仙波ミリ子、仙波 千秋、乃万富美子、池内カヨ子、白井あさ子、田頭 まき、  
金子 育代、高尾 久子、猪森しげ子



第72図 調査位置図 (S=1:2,500)

調査の経過



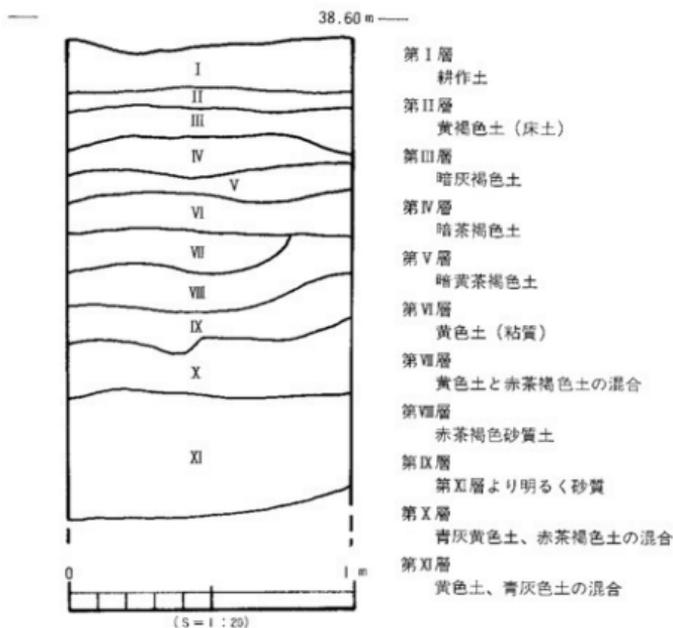
第73図 調査地測量図

## 2. 層位 (第74図)

本遺跡は、松山平野を流れる石手川左岸の沖積扇状地上 (38m) に立地している。

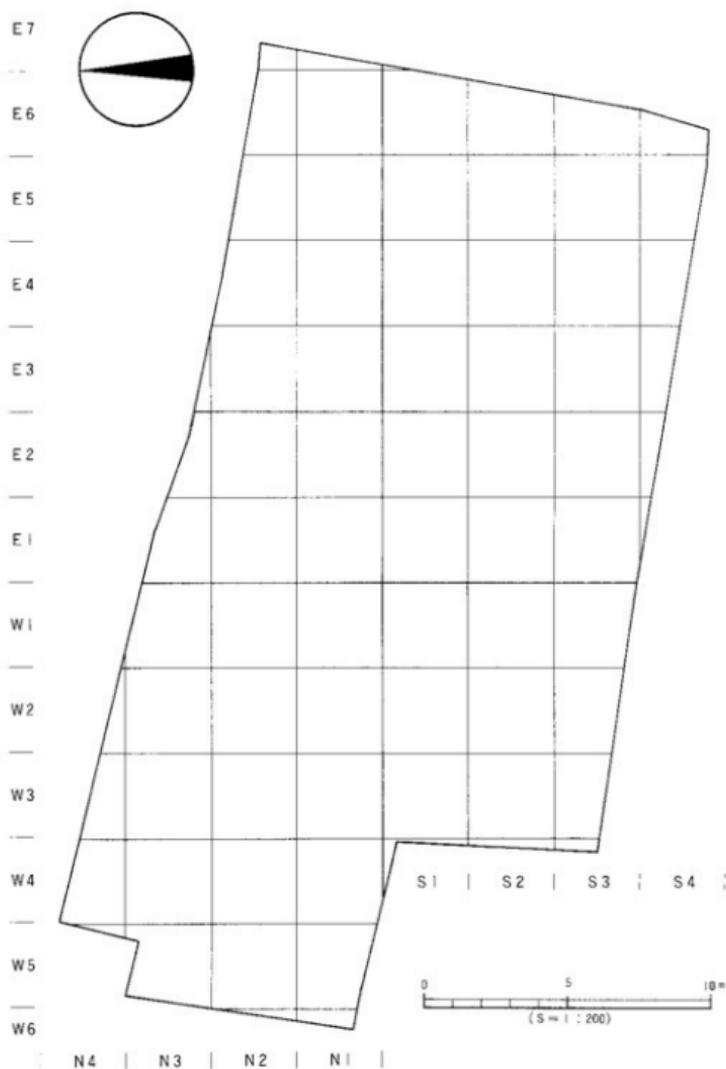
基本層位は、第I層表土(耕作土)、第II層水田床土、第III層暗灰褐色土、第IV層暗茶褐色土、第V層暗黄茶褐色土、第VI層黄色土(粘質)。第I層及び第II層は地表下20cm~40cmまで開発が行われている。第III層、第IV層、第V層は調査区の北西にしか確認されなかった。この第IV層、第V層は包含層であり遺物は、弥生土器・土師器・須恵器を検出し厚さは、西側の厚い所で40cmである。第VI層~第XI層は無遺物層であり、第VI層は火山灰と思われ調査区の南東隅以外では全面に検出された。又、本調査区は南東部が1番高く北西部に向って緩傾斜をもつ調査区である。

遺構は第VII層を切る形で検出した。土塋9基(弥生1基、時期不明8基)、溝状遺構2条(中世1基、時期不明1基)、円形特殊遺構1基(時期不明)他である。

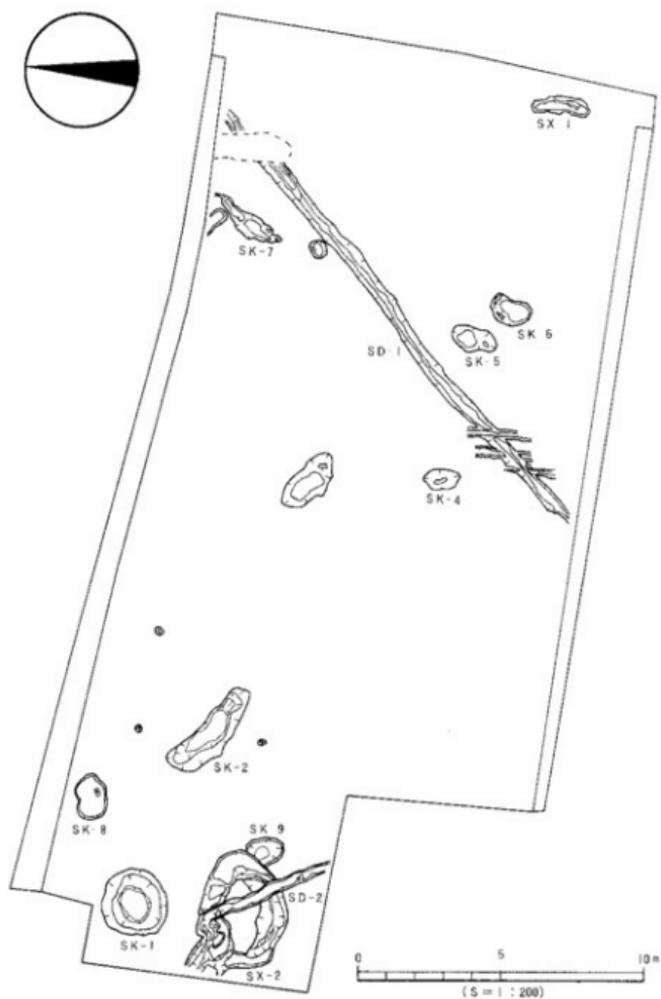


第74図 基本層位図

位 置



第75图 調査地区区画



第76図 遺構配置図

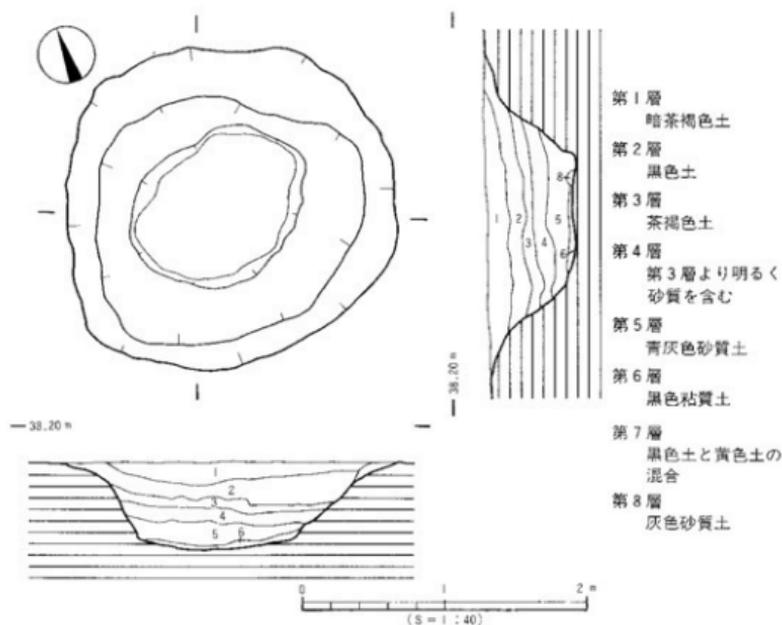
## 3. 調査の概要 (遺構と遺物)

本調査において、弥生時代、古墳時代、中世の遺物を検出した。ほとんどの遺物は第IV層第V層の中からの出土である。遺構としては弥生時代の遺構(SK-1)を検出している。また中世の遺構では溝状遺構1条を検出した。

## (1) 土壌

## 土壌SK-1 (第77・78図)

上城(SK-1)は、調査区内の最も低い北西隅(N3W5)に位置する。規模は、最も広い所で240cmで狭い所で230cmあり、西側が直線的にはなっているがほぼ円形に近い平面形である。断面形は深さ60cmの舟底状である。覆土は1層は暗茶褐色土、2層黒色土、3層茶褐色土、4層は3層より明るい砂質土、5層黄灰色砂質土、6層黒色粘質土であり、1層、2層より遺物を検出している。



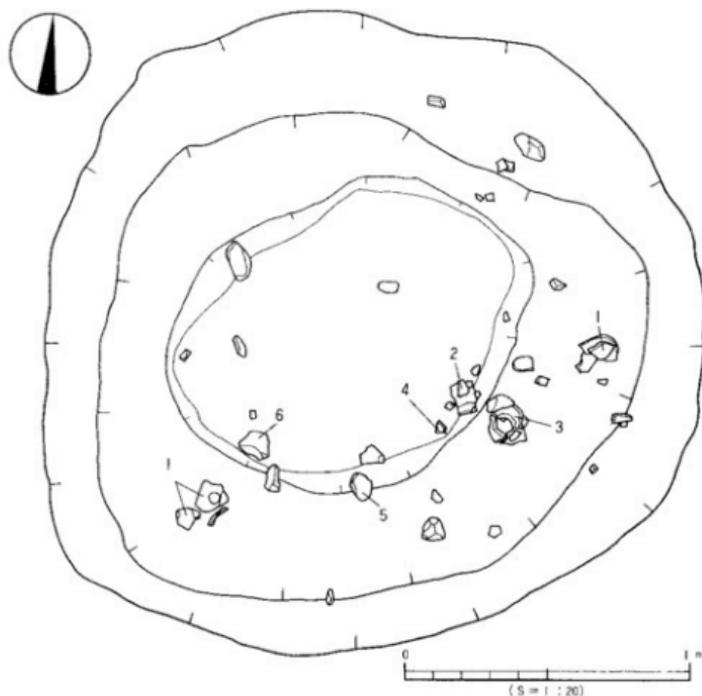
第77図 SK-1 測量図

(2)出土遺物

土壌 (SK-1) 出土遺物 (第79図)

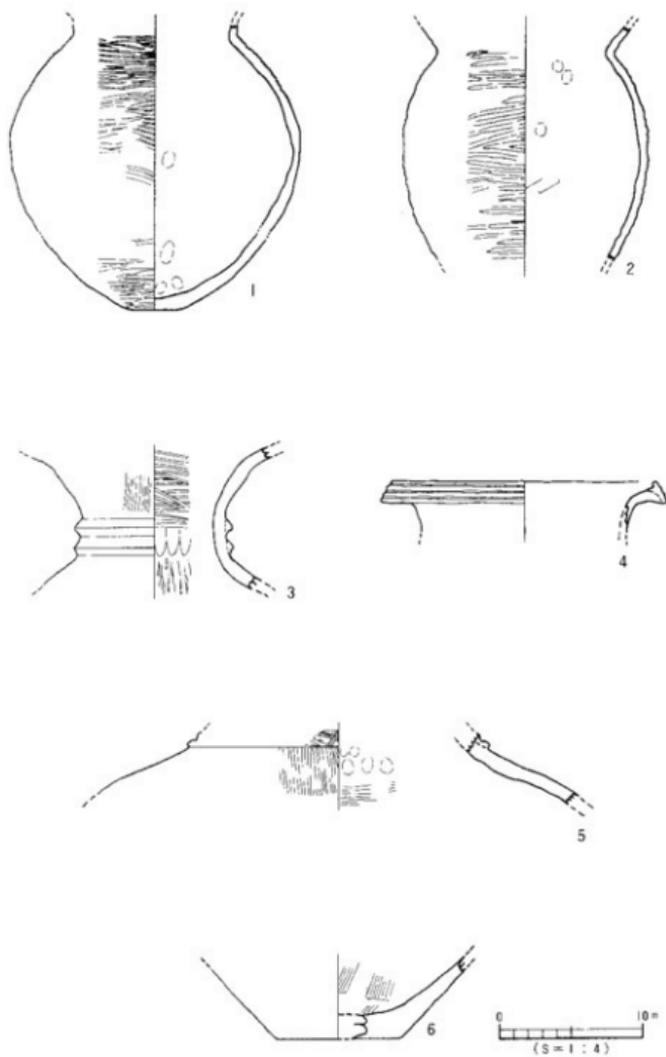
甕形土器 (1・2) 1は頸部径11.2cm、胴部径20.0cm、底部はコイン大の平底であり胴部は球形状である。口縁端部は欠損している。外面口頸部と底部にヨコナテが見られそれ以外の外面にはタキキ痕が顕著に残っている。内面に指頭圧痕が見られナテ仕上げである。2は口頸部から胴部にかけての破片である。頸部径は12.2cmである。外面口頸部にヨコナテが見られる以外はタキキ痕が全面に残っている。内面に指頭圧痕が見られ口縁部にヨコナテ、胴上にナテ、胴下に板ナテが見られる。

変形土器 (3・4・5・6) 3は口縁端部を欠損している頸部片である。頸部径が11cmで頸部に断面三角状凸帯を2条施している。外面上部と頸部にヨコナテ、口縁部にヘラミガキ、内面口縁にヘラミガキ、頸部にナテ、しほり痕が見られる。4は口縁部片である。口縁



第78図 SK-1 遺物出土測量図

調査の概姿



第79図 SK-I 出土遺物実測図

部は粘土紐を貼り付け上方に拡張し、擬凹線を3本施している。内外面ともヨコナデである。5は頸部片である。頸部に凸帯を貼り付け器面調整用の木口で斜格子紋を1条施す。内外面ともナデ・ハケの仕上げである。6は底部片である。底部に手の上で調整を行ったと思われる3ヶ所の凹みが見られる。内面はハケである。

他の出土遺物 (第80図)

甕形土器 (7~9・11~13) 7・8・9は口縁部片である。口縁部を「L」字状に折り曲げて端部をわずかに拡張している。頸部に指頭圧痕を施した突帯を1条持つ。9は口縁端部の拡張部に凹線紋を2条施している。内外面ともにヨコナデ仕上げである。11は底部であり、底径6.2cm、残高3.4cmでありゆるやかに内湾し上げ底である。内面に指頭圧痕が見られる。12は底部であり1/2の残存で端部が欠損している。やや内側にくびれ浅い上げ底である。内面に指頭圧痕が見られ外面に黒斑があり、胎上は、石英・長石を多く含み焼成も不良である。13は底径5.8cm、残高5.8cmの底部片で1/2の残存である。形態はくびれて上げ底であり外面くびれ部に指頭圧痕が見られ底部にナデ仕上げが見られる。

壺形土器 (10・14~18) 10は頸部片である。頸部に貼り付け凸帯の押圧紋を1条施している。内面は指ナデである。14は底部片であり底径7.8cm(推定)であり平底より外に立ち上がる。外面はヘラミガキである。15は底径3.2cm、残高5.0cmである。底部が少しつぶれた平底より、内湾しながらゆるやかに立ち上がる。内面に指頭圧痕と指ナデが見られ外面はハケ調整である。16は底部片である。少し丸みをおびた底部を持ちゆるやかに立ち上がる。17は底部片である。18も底部片であり底径は7.4cm(推定)である。内面と外面上部、底部にナデ仕上げが見られ、外面下部は指ナデである。

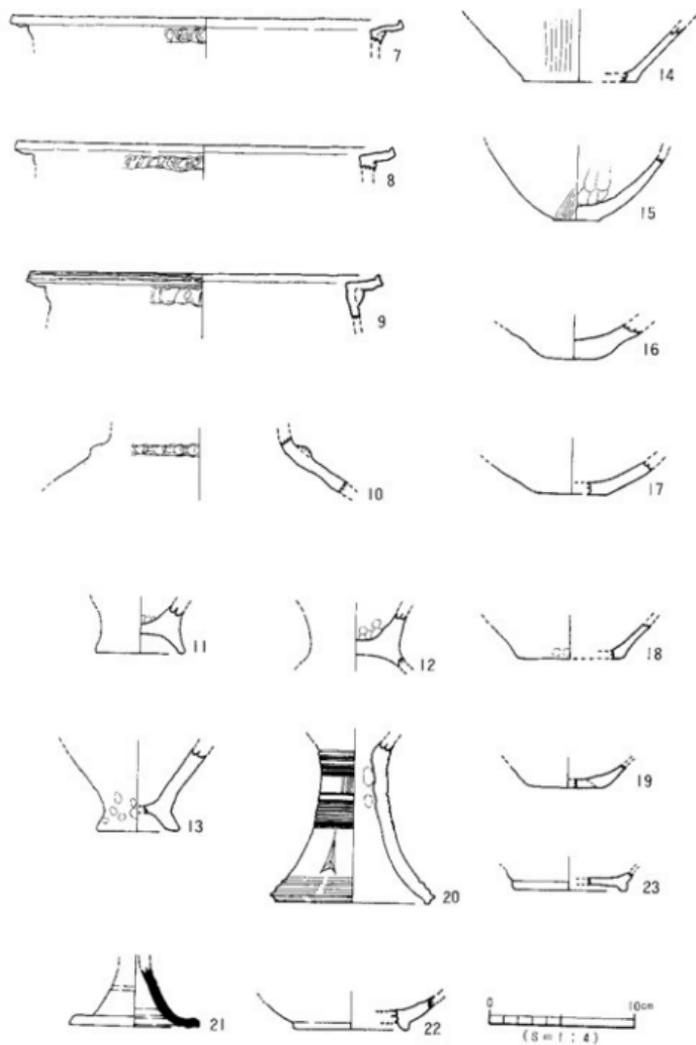
高環形土器 (20) 20は脚部である。脚柱部外面の施文は3区画されており1/2の所に10本の沈線上部に7本の沈線を施し、その間に縦掃の沈線3本を7方行に施している。裾部に3条の凹線紋があり、その間に矢羽根状の透かしを6方行に切り取られているが貫通はしていない。裾部端面にも1条の凹線紋が見られ、裾部はすこし内側に肥厚している。内側に指頭圧痕、しぼり痕が見られ、内外面の調整はナデ仕上げによるものである。

21は高環形土器の須恵器の脚部である。底径9.2cm、残高4.0cmであり脚端内面に凹面がみとめられ脚端部がひずんでおり少し外反している。内外面ともにナデ調整が行われている。軸回転は逆時計回りである。

環 (19) 19は土師器の坏片である。底径は5.0cm(推定)であり胎土・焼成ともに良好である。

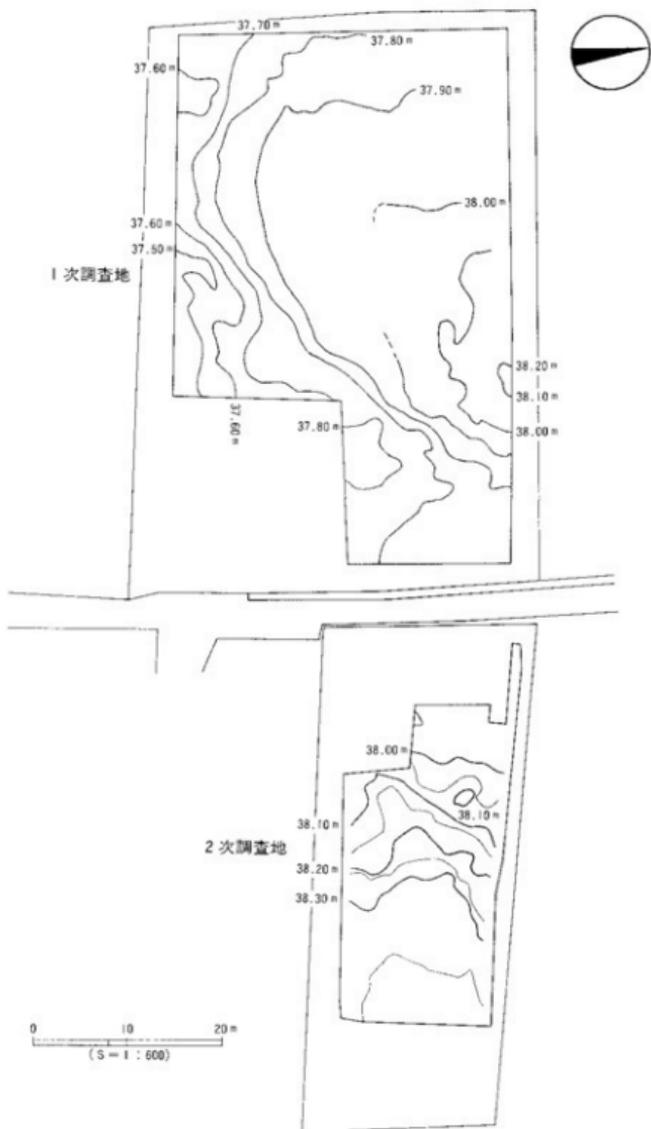
高台付碗 (22・23) 22・23は土師器の高台付碗の底部片である。22は内面に炭素を吸着させた黒色土器A類の高台付碗である。

調査の概要



第80図 出土遺物実測図

桑原西稻葉道跡 2 次調査



第81図 1・2 次調査地形測量図

## 4. 小 結

### (1) 層位

平成元年度に実施した本調査区西側に隣接する西稲葉遺跡第1次調査区は、古墳時代から中世に至る生活関連遺構と弥生時代以降の遺物が存在し、桑原地区のほぼ中央に位置する。その一次調査区の第Ⅲ層に対応する2次調査区の層位が、第Ⅳ層の遺物包含層と考えられる。また、本調査区の第Ⅵ層から確認された火山灰は、樽味遺跡、樽味四反地遺跡、桑原遺跡、そして桑原西稲葉遺跡第1次調査区などに認められるものと同様の火山灰と思われる、松山平野における火山灰の分布形態、堆積状態などを知る上で好資料になるものと確信する。なお土壌分析による詳細な考案は、今後の課題としたい。

### (2) 遺構と遺物

今回の調査において、土壌9基、溝状遺構2条、ピット状遺構4基、円型特殊遺構1基ほかを検出した。土壌9基のうち1基（SK-1）のみが弥生時代と時期設定が推測できるに止まり、他の上層については遺物が全く存しておらず時期や性格などは不明である。ただSK-1にしても遺物が遺構上層部での検出であり、さらに遺物も弥生中期～弥生後期末と時期差が広範囲に及ぶため、時期設定は非常に困難な遺構である。調査区東部にあり北東から南西へと注ぐ溝状遺構（SD-1）については、上層・出土遺物から中世のものと考えられるが、もうひとつの溝については、土壌と同様に遺物が全く検出されておらず、詳細は不明である。またSK-1の南側より検出された円型特殊遺構（SX-2）は、幅50～200cmの溝が直径100cmのドーナツ状に回っており、こうした遺構は今までに類例がなく、時代を確定する遺物も含まれないことなどから、周辺遺跡との係わりのなかで、今後、解明していきたい。遺構全般については、第81図のコンタ図からも明らかのように、本調査区は西方向に、1次調査区は東方向になだらかに落ち込みを形成しており、両調査区の間には溝状遺構が存在する可能性もあるが、現状が道路のため確認できない。これが水路ということになれば、土壌分析の結果を待たなければはっきりとしたことは言えないが、水田遺構ということも考えられる。

検出された遺物は、ほとんどがSX-2周辺の低地に集中しているが、下層部、即ち床面直上からの出土遺物は発見できず、遺構に直接関係した遺物とは考えにくく、自然の流込みにより堆積した土器溜りを形成したものと思われる。

また、調査区S3E3グリット（第75図参照）の第Ⅵ層上面において、旧石器を1点検出したことは、今回の調査に於て特筆すべき事柄として付記しておく。

遺構・遺物一覧（遺構、遺物一覧：高尾和長・真木潔）

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。  
 (2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。  
 例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。  
 (3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1~4)多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。  
 焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表45 溝一覧

溝(S0)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	S3-E1-N2-E5	竪状	18.00×0.55×0.10	堆積砂質土	弥生		奈良以降
2	N1-W4-N2-W5	皿状	6.50×0.30×0.05	黒包土	弥生	SX2を切る	不明

●表46 土壇一覧

土壇(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	N3-W4-W3	円形	舟底状	2.30×2.30×0.60	暗茶褐色土	弥生		弥生中～後葉期
2	E2-W2-W3	不定形	舟底状	2.55×1.15×0.75	暗茶褐色土			不明
3	N1-E1	不定形	舟底状	2.00×1.30×0.60	褐色土			不明
4	S2-E1	不定形	皿状	1.25×0.70×0.10	灰色土			不明
5	S2-E3	不定形	皿状	1.60×0.40×0.10	灰褐色土			不明
6	S2-S3-E3	不定形	皿状	1.50×0.83×0.20	暗茶褐色土			不明
7	N1-N2-E4	不定形	皿状	2.50×0.80×0.20	黒色土			不明
8	N3-W3-W4	円形	皿状	1.50×1.05×0.10	褐色土			不明
9	N1-W4	円形	皿状	1.00×0.90×0.10	暗茶褐色土		SX-2に切られる	不明

●表47 SX 一覧

土壇(SX)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	S3-E6	不定形	皿状	2.10×0.60×0.25	灰色土	弥生・須恵		不明
2	N1-W5	円形	舟底状	3.50×3.00×0.40	暗茶褐色土	弥生・須恵	SX1に切られる	不明

遺物観察表

●表48 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
1	甕	筒形 19.8	胴部の鉢形	タタキ(5cm-16cm) 器底-ナデ	ナデ	石・長(1-5) ◎	黒曜	67
2	甕	残底 16.5	口部部がく字で白線部は胴部よりは外反しない	タタキ(5cm-9cm)	口縁 ココナテ 器底 ナデ	石・長(1-4) 黒ウソモ ◎		67
3	甕	胴部底(11.8)	断面へ角状凸部を二本施している。	ココナテ ヘラミダキ	ヘラミダキ 指ナテ しばり痕	石・長(1-2) ◎		67
4	甕	口縁(18.1)	口縁部に3本の(糸)の沈線を施す。	ココナテ	ココナテ	底 ◎		67
5	甕	器底底(10.8)	凸部紋を一施す。	ハタナテ(1cm-7cm)	ナデ 微点痕 ハタ (1cm-9cm)	石(1-2) 長(1-4) 金ウソモ ◎		67
6	甕	器底 (8.4)	口の上で調整をしたと思われる。指の痕(3ヶ所)の深み有り。	ヘラミダキ	磨滅のため不明	石・長(1-2) 多量に含む	黒曜	

●表49 包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
7	甕	口縁(18.2)	口縁部を「E」字状にあり歯け口縁を拡張している。底部に押印痕。	ココナテ	ココナテ	石・長(1-2) ◎		68
8	甕	口縁(25.8)	口縁部を「E」字状にあり歯け口縁部に押印痕を施す。	ココナテ	ココナテ	黒 砂質 石(2) ◎		68
9	甕	口縁(23.8)	口縁部に2本の凹線、口縁部に押印痕。	ココナテ	ココナテ	黒 砂質 長(2) ◎		68
10	甕	瓶底 4.0	口縁部に押印痕。	磨滅のため不明	指ナテ	石・長(1-4) ◎		68
11	甕	瓶底 (6.2)	上付痕	磨滅のため不明	指印痕が見られる	石・長(1-6)	黒曜	68
12	甕	残底 3.8	上付痕	磨滅のため不明	指印痕が見られる	石・長(1-3)	黒曜	68
13	甕	瓶底 (5.8)	上付痕	ナデ 微点痕が見られる	磨滅のため不明	石・長(1-1)		68
14	甕	器底 (7.8)	字遣	ヘラミダキ	磨滅のため不明	石・長(1-5) ◎		68
15	甕	瓶底 (3.2)	底面が少しつぶれる。	磨滅のため不明	指印痕が見られる	石・長(1-3) 器底を含む ◎	黒曜	67

桑原西稲葉遺跡 2次調査

包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器量	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 土	備考	図版
				外 面	内 面			
16	甬	残高 2.0	丸 底	磨滅のため不明	磨滅のため不明	有・灰 (1-3) 鉄 ○	3層	68
17	甬	底径 (4.7)	平 底	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・灰 (1-5) 金雲母を含む ○	内面に 黒 点	67
18	甬	底径 (7.4)	平 底	ナ・ア	ナ・ア	白・石 灰印 砂粒 ○		68
19	環	底径 (5.0)	平 底	磨滅のため不明	磨滅のため不明	白(砂粒)		68
20	高杯	器高 11.3 底径 (4.8)	7本の沈没とヘラによる 10本の沈没。矢羽根スラ シ、凹線状。	ナ・ア	ナ・ア 凹線状、しほり痕	緑砂 ○	黒点	68
21	高杯	器高 4.0 底径 (9.2)	底面が少し外反する。 縦軸沿って回り。	ナ・ア	ナ・ア	灰 (1-2) ○		68
22	碗	底径 (6.0)	高台付	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石印 ○		68
23	碗	底径 (7.7)	高台付	磨滅のため不明	磨滅のため不明	○		68

第 8 章

クロバラ タナカ  
桑原田中遺跡



## 1. 調査の経過

### 〔1〕調査に至る経過

昭和63年3月、松山市桑原5丁目1-10、木村正則氏が所有する桑原6丁目499-1に、共同住宅建設の申請が出された。当地域は、松山市が指定する『83枝松遺物包含地』内にあたり、昭和51年度以来数々の調査が行われている地域である。これまで弥生時代後期を中心に、中世に至るまでの主要な遺跡が周知されている。

松山市教育委員会は、昭和63年3月22日に申請に基づいてトレンチ調査を行った。その結果、東西4条の試掘溝の内、南端部より2条目の試掘溝より多量の土器が検出された。52年度に松山市教育委員会が調査した桑原高井・桑原小石原・東本の各遺跡は、当該地より半径500m内に位置しており、ベッド状を備える住居址・河川遺構・祭祀的濃厚な集会的遺構などが確認されており、様々な形態の変化がみられる地域性の主要性から、歴史的解明や資料収集を図ることの重要から、本調査を実施することとなった。

### 〔2〕調査組織

調査期間 昭和63(1988)年9月19日～同年11月12日

調査面積 409.71㎡

調査委託 株式会社ディック不動産部

調査協力 一条工務店松山支店

調査担当 調査員 池田 学

松村 淳

調査補助員 大森 一成

福田 宏志

山本 健一

作業員 松友 利夫

松岡 欣弘

松本 正義

近藤 茂

藤家 厚美

高岡 義綱

森 隆

西山 竜一

兼久 一郎

佐川 正行

## 〔2〕遺跡の概要

## (1)遺跡の立地と歴史的環境

桑原田中遺跡は、松山城の南を流れる石手川の上流岩堰から、南西一帯に広がる西傾斜した緩斜面に位置している。緩斜面は、四国山地の石鐘山より分岐した山系端部にあって、分岐山系は、観音山・杉立山の各峰をすぎ起伏を減じながら芝ヶ峠・淡路峠へと下り、東野お茶屋台地へと続き、洪積台地の山麓地帯を形成している。台地より更に南へ延びる丘陵は、南端部で東西に分岐し、東の分岐丘陵の微高地には、6世紀前葉の三島神社古墳が知られ、さらに西の丘陵先端の舌状台地には、5世紀中葉の前方後円墳経石山古墳が存在している。

東野台地丘陵部には、東野古墳群、溝辺古墳群、東野お茶屋台古墳群がある。丘陵部の南西方向に開いた南に緩傾斜の地形をなす扇状地には、樽味遺跡群、中村遺跡群、桑原遺跡群、東本遺跡、小坂釜ノ口遺跡、枝松・松末の遺跡群などが知られる。このように当地域は、聖域、墓域、集落域に分けられる政治色の強い地域性がうかがえる。扇状地に立地する多くの遺跡のうち桑原田中遺跡より北へ1.5km、石手川左岸の樽味遺跡群内には昭和62年10月、愛媛大学埋蔵文化財調査室が調査を行った愛媛大学農学部構内、さらには、62～63年度に松山市教育委員会（松山市立埋蔵文化財センター）が調査を行った、樽味四反地遺跡、樽味立添遺跡、樽味高木遺跡などがある。また桑原遺跡群に含まれる田中遺跡の周辺部は、桑原高井遺跡、桑原小石原遺跡、東木1・II遺跡などが昭和50年以降現在まで松山市教育委員会の調査によって確認されている。

これらの扇状地に立地する集落は、当地域が古くより集落を形成するにあたって、自然的立地条件が作り出されていた背景がうかがえる。弥生時代中期から中世に至るまでの生活址が営まれた地域社会の中に、桑原田中遺跡は存在している。さらに南西に緩傾斜する山麓部に広がる洪積台地は南端部で、川付川によって境がつくられ、海岸部には、広く集落の存続がみられる。中でも釜ノ口遺跡は、松山平野の南東部における主要な位置にあり、弥生時代後期を主体とする遺跡群である。このような状況に囲まれた東部のやや高い位置に、桑原田中遺跡は立地している。

## (2)調査の経緯

調査地は、住宅街にあって、南面する東西道路には、小売店の並ぶいわゆる町はずれの商店街の一角の角地に位置している、従って道路に面する東西、南北線は調査地を控える結果となった。トレンチ調査によって、ある程度の焼土容量の計測や、立地条件との兼ね合いもあって、焼土置場を広く確保する結果となり、調査面積も400㎡余となった。

## 発掘調査日誌抄

昭和63年9月19日、木日より重機により表土削除を行う。21日、削除終了後平均地なら

## 調査の経過

しをし、基準点などのポイントを設置する。22~24日、上層観察用畦を残し、第III層灰褐色土の削土をする。26~30日、続いて第IV層黄褐色土の掘り下げを行う。遺物出土し始める。

10月1~5日、S1~E1区、S1~W1区に溝状遺構(SD1・2・3)を検出、上層面に出土の遺物実測及び溝の検出面の平板測量をする。S1~W1区グリット北位置に遺物の小片の堆積を検出。5日、雨天により表採土器の洗浄をする。6~11日、出土遺物の測量S1/20、S1~W1に、溝状SD-2の延長部を検出。12日、N2~E1区に土壙状検出SK-1とし掘り下げる。13~15日、N1~E1に浅い溝状遺構(SD-4)掘り下げ、周辺部に小柱穴群を検出。N2~E1に更に溝状検出(SD-6)とする。N2~W1に小溝を検出(SD-7)とする。N2~W2・3の掘り下げを行い北東方向の溝状(SD-9)及び、土壙状(SK-2)を検出。更にW3区で、SD-9と合流する東西溝(SD-8)を検出。21~25日、各遺構の掘り下げ、及び出土遺物の測量をする。【池山】10月26日当日より、調査地は松村が担当する。SD-2・5・7・8の掘り下げをする。27日~31日、S1~E1区のSD-2とSD-3の合流する地点に、SK状を検出SK-3として掘り下げる。SK-1及びSD-7・8の出土遺物の測量、SK-1の遺物取り上げ(弥生後期の二重口縁壺、高環など)S1~W1とN1~W1区にかかるSD-2とSD-5の接点に遺物の堆積が著しい。D列、E列の南北十層畦の断面層序の計測を始める。

11月1日~5日、SD-5とSD-6の間に有段を検出、SD-5の2とする。各上層の掘り下げ、出土遺物の測量、断面層序の計測、土層観察畦の撤去。4日、Dベルトにて土製紡錘車出土。N1~W2区にて、SD-5~2は消滅し段落ちとなる。これらの溝の端末周辺に柱穴群を検出。一部の柱穴内より獣歯出土。6日~10日、N1~W2の落ち込みの掘り下げ、出土遺物の測量。N2~W2のSD-7・9の切り合い部の測量、南壁断面の計測、ともにS1/20。全面測量開始S1/50、西壁断面の計測S1/20。出土遺物整理をし搬出に備える。11日、晴。各遺構の補定測量、出土遺物及び、発掘諸材料を搬出し、当遺跡調査を完了した。

当調査区の地区割は第83図に示すように東端部より西へ6m隔てた南北軸と南端部より北方向に6m隔てた東西軸の両主軸線が交わる点を基準点とした。基準点より放射状の東西南北区をさらに、6m×6mのグリットに小区分し数字を付し、方位は磁北を採用した。また上層観察用の畦をE1列とW1列の西側に、最長径が計測できる2条を残した。

調査区の南面及び東面は、当地域における主要枝線であり、したがって調査区域を北と西方向にせびめる形となった。さらに調査地の北部は廃土置場に使用したため確認はされていない一画である。〔松村〕

桑原田中遺跡



第82図 桑原田中遺跡周辺の主要遺跡分布図

調査の経過



第83図 調査地区割図

## 2. 層位

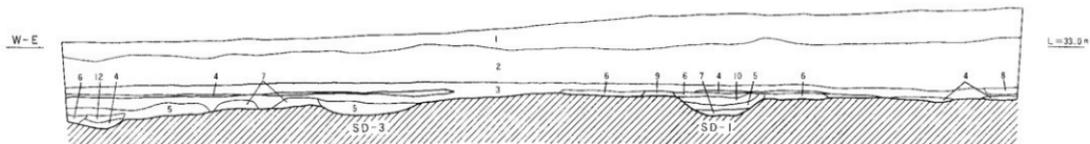
調査地の地形は、図84・図85に示すように、東から西へ緩傾斜し、また南から北へも緩傾斜の傾向がみられる。従って調査区の南東部から北西部に向かい緩傾斜する台地の微高地が考えられる。層位は、上から、第1層造成土、第2層耕作土、第3層灰褐色土、第4層黄色土、第5層暗褐色土、第6層地山の順に堆積している。第1層の造成土は厚さ50cmが測られ、数次に亘る造成がみられる。第2層の耕作土には、上面の耕作土、下面における床土の分層が困難で、攪乱がみられ厚さ70cmが測られる。発掘調査例から観案すると、耕作土20cm、床土5～10cm、残厚40cmが表土と推定される。第3層の灰褐色土は粘質で厚さ20cmが測られるが調査区南西部では、下層第4層の黄色土下面にもみられ氾濫がみられる層である。従って第3層は、A・Bの2層に分けられ、A層は無遺物層、B層は遺物包含層とするのが妥当と考えるが、包含遺物は僅少である。第4層の黄色土は薄く厚さ5～10cmで若干の遺物が含まれている。第5層の暗褐色土は調査区中央よりにみられ、扇状に北西へ拡がり北西端部で20cmが測られる。遺構の内部、または南東隅にもみられる遺物包含層である。基盤面となる地山も、東から西へさらには南から北への緩傾斜を呈しており、遺構は地山面に掘りこまれたもので、洪積台地に被覆された沖積層の下部に検出されている。

遺構内部の堆積土は、

- |                  |                          |
|------------------|--------------------------|
| 南側の3溝 (SD-1～3)   | 暗灰色、青灰色、灰褐色の砂質土の堆積がみられる。 |
| 中央の3溝 (SD-4～5の2) | 暗褐色、黒色、暗褐色の砂質土。          |
| 北側の4溝 (SD-6～9)   | 暗褐色土が多い。                 |

というように簡略されるが、氾濫の様相が随所にみられるものが多い。この様相が最も顕著にみられる溝に、SD-5がある。検出された溝のうち最大のもので、全長24m、幅1.6mが検出され東端部の落ち込み部(N3E1)より端を発している。このSD-5の堆積土の中位に前述の南側の3溝にみられる灰褐色のしかも粗砂混じり土がみとめられる。またSD-1の北壁、図84にみる南壁の南端部、図85にみるSD-5の北壁や、SD-8の周辺の基盤面における黄色土は、反転がみられる。

これらから察すると、あきらかにこの調査地は、氾濫による攪乱をうけた地域が考えられる。



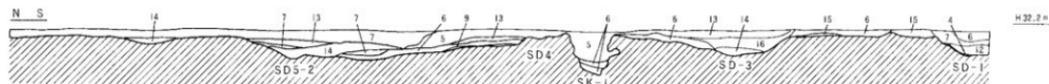
第84図 西壁 (N-S) 層位図



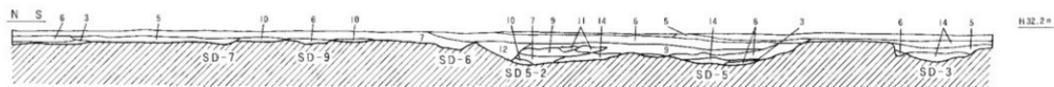
- 1 遺成土 2 耕作土 3 灰褐色粘性土 4 黄色粘性土 5 暗褐色粘性土 6 黒色土  
 7 灰褐色砂質土 8 青灰色粘性土 9 暗灰色土 10 暗黄灰色微砂 11 灰色粗砂 12 黄褐色ブロック粗砂  
 14 暗褐色砂



第85図 南壁 (W-E) 層位図



第86図 D列(N-S)層位図



- 3 灰褐色粘性土 4 黄色粘性土 5 暗褐色粘性土 6 黒色土 7 灰褐色砂質土  
 9 暗灰色土 10 暗黄灰色微砂 11 灰色粗砂 12 黄褐色ブロック粗砂 13 褐色土  
 14 暗褐色砂 15 茶褐色粘性土 16 黒色+黄色ブロック粘性土



第87図 E列(N-S)層位図【計測点は第89図に示す】

### 3. 遺構と遺物

#### (1) 遺構

本調査で検出された遺構は、図88に示すように、上壕SK3基、溝SD10条、掘立柱建物址SB2棟、柵列SA2条、落ち込みSX2基が検出された。

##### (1)土壕：SK(第88・89・92・93回)

SK1はN1E1にあって、南をSD3、北をSD4に囲まれた位置で検出された。祭祀的要素のみられる弥生後期後半に比定される土器が、一括出土した貯蔵穴である。堆積上は3層からなり、上層は遺物を包含する暗褐色土、中層は黒色無遺物土、最下層の3層は黒色と黄色のブロック層の底上げ土となる。壁体中位に有段の掘り込み(図11)がつくられている。類例には松山市教育委員会が調査した、琴ノ口遺跡第4次調査にみられるが、この土壕からは、有段下に杭穴痕跡や植物遺体の検出が報告されているが、SK1には検出されず差異がみられる。

SK2は、第88・89・94回のように、N2W2のSD9に接して検出されたもので、立地条件や伴遺物の観点から、自然掘り込みが考えられる土壕である。SK3もSK2同様の性格がみられるS1E1に検出されたものである。溝SD1とSD3に接した北下りの傾斜面に位置している。図95に示すように不整形の床面2段で構成される掘り込みである。

##### (2)溝状：SD(第88・90・96~98回)

溝状は調査地全域にみられ、図のように、南・西走向する10条が検出された(SD5-2を加算して)。SD1はSD2と切り合い、SD2はSD3と切り合いが示される。三者の内SD2が先行するが、SD1と3との先行形態は不明である。SD4はSK1の北部に位置するT字形の溝である。両端部は削平による不明の、深さ6cmの浅いものである。周辺には柵列状の小穴群がみられる。SD5はSD2を吸収する大溝である。随所に水流によるえぐりがみられる。

SD5-2は、SD5と伴走するもので、SD5に伴う泥濘原が考えられる溝である。西端は削平され自然消滅する傾向がみられる。SD6は東の延長部も考えられ、西端部は落ち込みによって削平される溝である。調査地を南北に区分する様相がみられる。調査地北部のSD7-9は図97に示すように小振りの溝である。ともに浅く自然流路が考えられ、東部からの搬入土器が混在出土している。

(3) 掘立柱建物址：SB(第91・99・100図)

建物址はN1W2区の氾濫原に位置する。SB1は桁行2間、梁行1間で、柱間2.8m～1.3m×2.8mが測られる主軸北北東の長方プラン、SB2は桁行1間、梁行1間の柱間3.8m×2.8mの主軸東北東の方形である。第91図に示す柱穴P2は併用がみられ建て替えも考えられる。立地点やプランの不整形さ等の観点から、建物址とするには疑問が残る遺構である。遺物はP3の東に位置する横列2基の柱穴から、草食動物の歯牙が検出されたのみである。

(4) 棚状：SA(第88図)

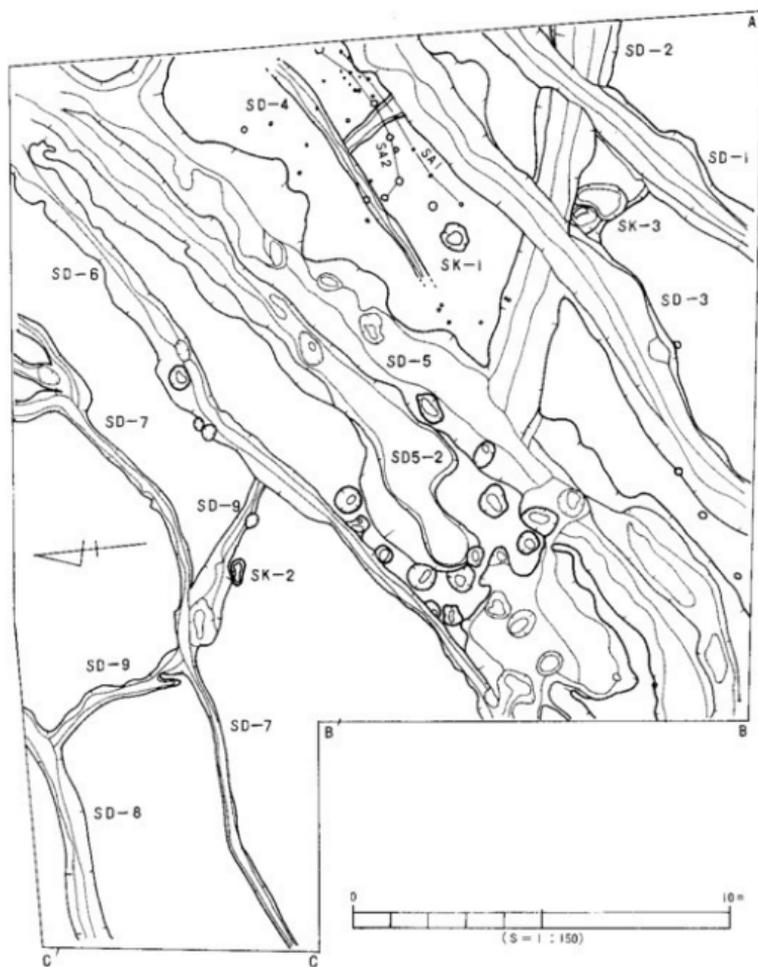
棚状はN1E1区の平坦面、SK1の周辺部の径20cmから5cmまでの小穴群である。SA1はSD3の北縁から僅か離れた位置の直線状のもの、SA2は「J」字状に弧を描くものの2条である。SA1は土留めが推定されるが、SA2は不明である。小穴群における径・深さなどの点から、線引きをこころみた。

(5) 落ち込み：SX(第88・90図)

SX1(第88図)は調査区北東隅に、SX2(第90図)はS1W2とN1W2区にまたがって検出された。SX1の全容は解明されていないもので、土器類は検出されていない。SD5及びSD5-2はこの地点より派生している。SD6の延長部が北肩部に若干みられる。SX2は調査地西端に位置する氾濫原である。SD5、SD6を寸断削平し東部は緩く下降を示し、西部に高い土堤がつくられる。

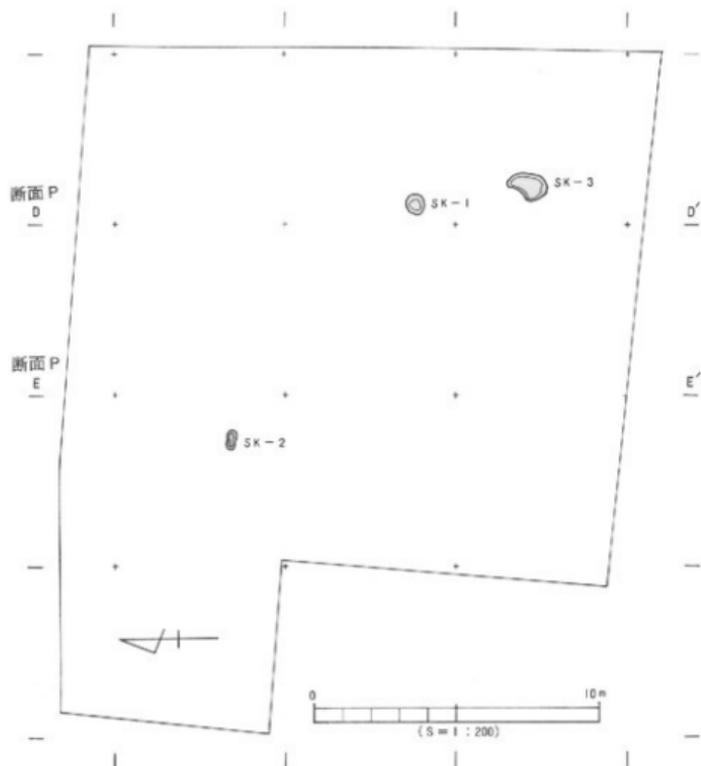
各遺構出土の土器には、SK1の複合口縁壺、甕、高環、支脚などの一括遺物、SX2、3では壺口縁、底部、須恵環などの細片がある。SK1の土器は、弥生後期後半に比定される。SD1の土器は少なくSD2には土器の堆積があり(第96図)、複合口縁、大型器台、支脚が出土している。SD3からは、複合口縁、沈線4条2段施文の壺頸部、竹管文、刺突文併用の高環屈曲部、舌状突起付支脚などがある。SD2を吸収し合流するSD5からは、須恵器樽形甕の出土があり特色される。他に石斧などが出土しており、SD2と差異が認められる。また大型器台の出土が少ない点にも異なりがみられる。SD5-2からは樽形甕の細片が出土しており、SD5と共存関係の氾濫原と解釈される。SD6には鉢形、長頸壺、支脚がみられる。SD7には複合口縁、SD8には複合口縁、高環、鉢底部、支脚、器台の細片が、SD9はSD8と類似し、他に瓶底部の底面に、×印記号がみられるものがある。SD7～9に出土する土器には、搬入物も混在するが、溝底面の土器に限定し図に示した。

調査の概要



第88図 遺構配置図

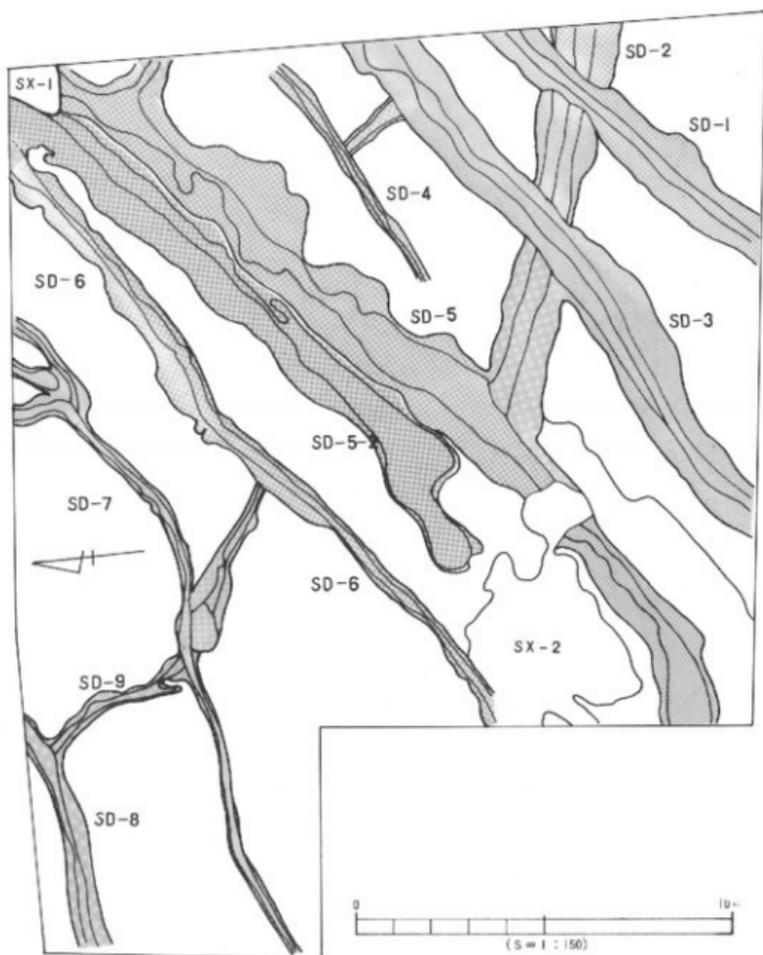
桑原田中遺跡



第89図 土壌配置図

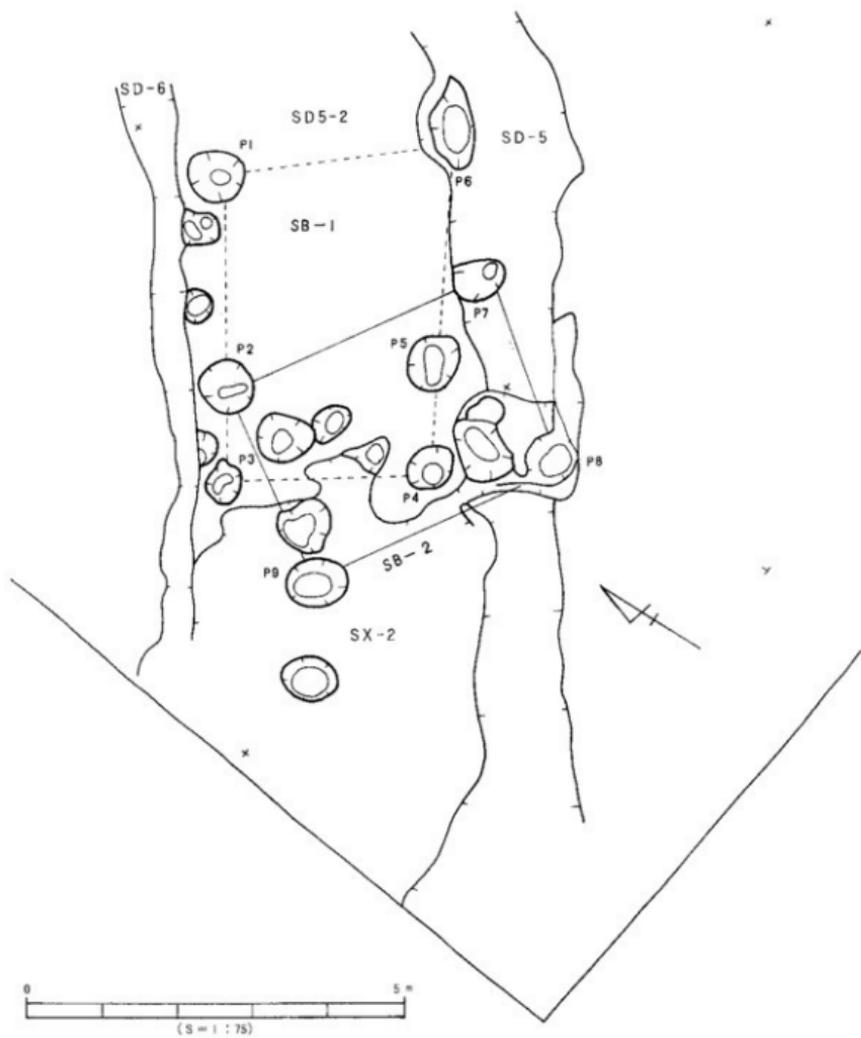
各溝における堆積土を分類すると、1、灰褐色砂質土のSD 1～3、2、暗褐色、黑色粘性土のSD 6～9、3、暗褐色砂質土のSD 4、SD 5-2とSD 5の上層部、4、黑色砂質土のSD 5下層部の4種に大別される。従って1を弥生時代後期末～古墳時代、2を弥生時代後期後半、3を後期後半、4を後期後葉～古墳時代中期と推定する。遺構・遺物の総合的感知から、弥生時代後期後半～中世13世紀頃までの氾濫遺構とするものである。

調査の概要



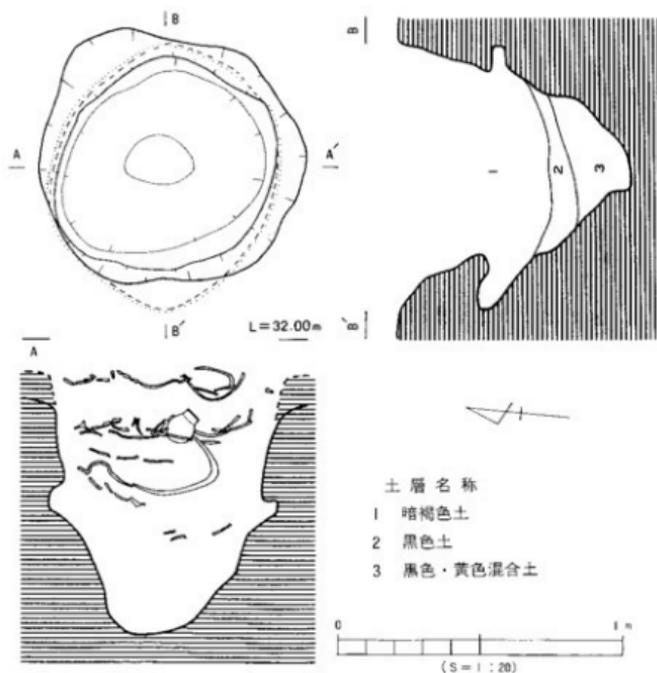
第90図 溝状遺構配置図

桑原田中遺跡



第91図 掘立柱建物配置図

調査の概要



第92図 SK 1 測量図

第92図はSK 1の平断面図、第93図は堆積する土器の平面図を明示した。

造構は、平面図でみる限りフラスコ状にみれるが、尖底丸く逆台形を示す。南北95cm、東西が中絞りの85cmのほぼ円形の土壇である。深さ90cmが測られるが、20cmの底あげがされている。壁部中位における有段は、性格不明で再検討が考えられる掘り込み部である。

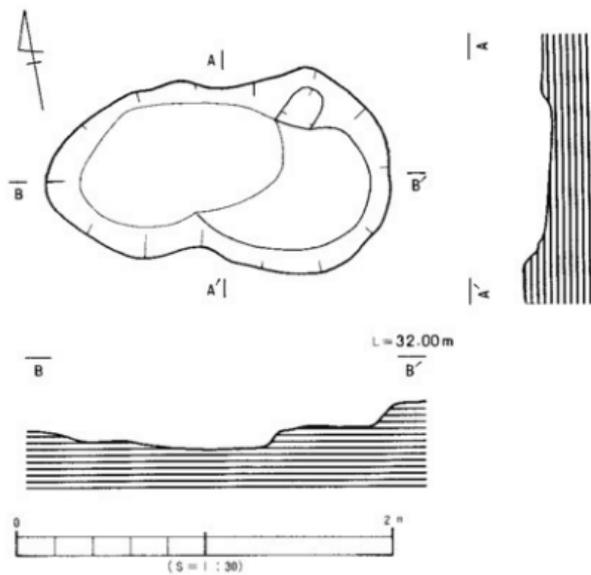
内部の堆積する密度の濃い土器は、第93図に示した。この平面図は出土土器の全てではない開引き図である。出土遺物は第101～109図のものである。図示の断面図上位に破線部分が記入されているが、当初掘り込み面の検出が、遅れた理由によるものである。破線は遺物出土面に相対して記入した。

桑原田中遺跡



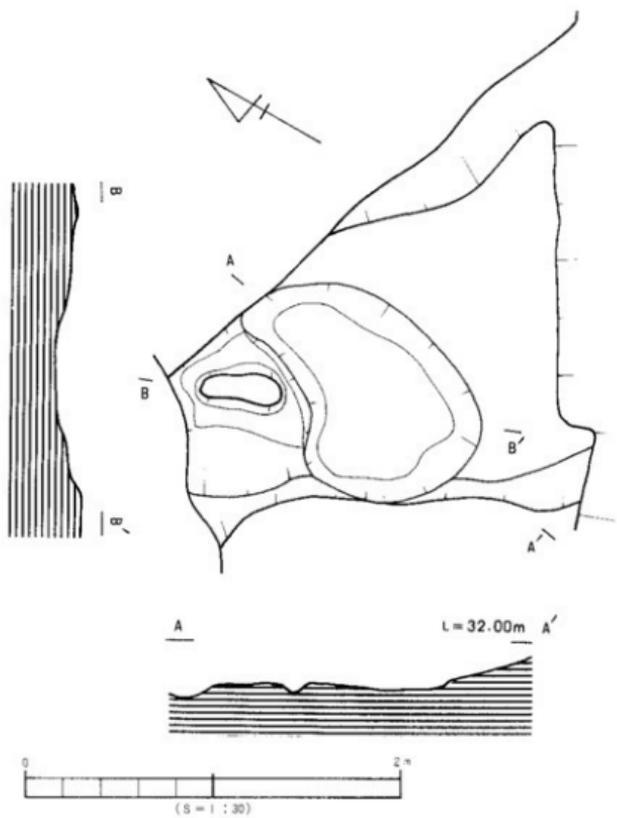
第93図 SKI 遺物出土測量図

調査の概要



第94図 SK 2 測量図

桑原田中遺跡



第95図 SK 3 測量図

調査の概要



第96図 SD1~4 測量図

桑原田中遺跡

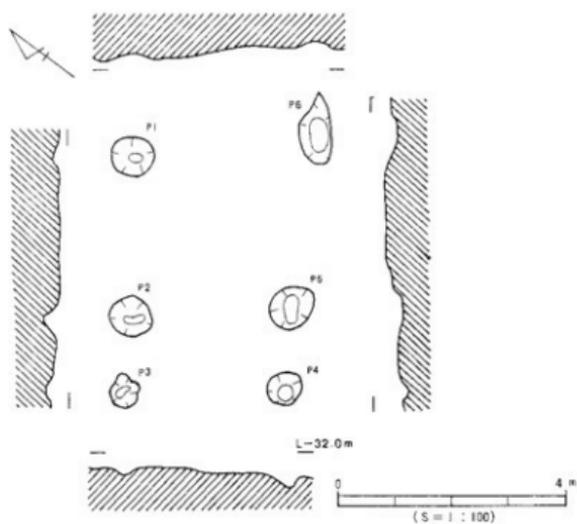


第97図 SD7~9 測量図

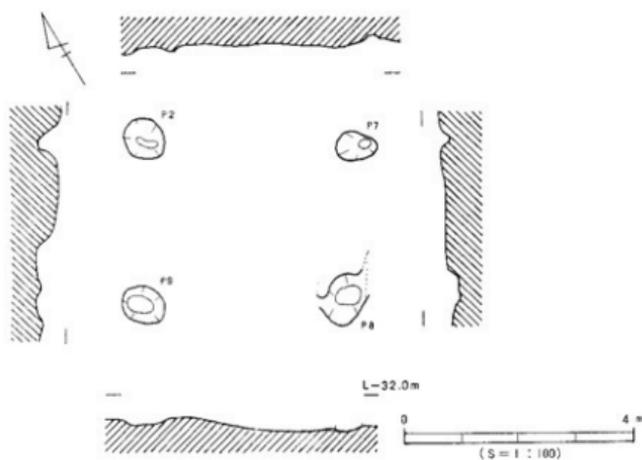


第98图 SD5·6 柱穴群测量图

調査の概要



第99図 SB1 測量図



第100図 SB2 測量図

## 〔2〕遺物

## (1)SK1出土遺物(1~32)

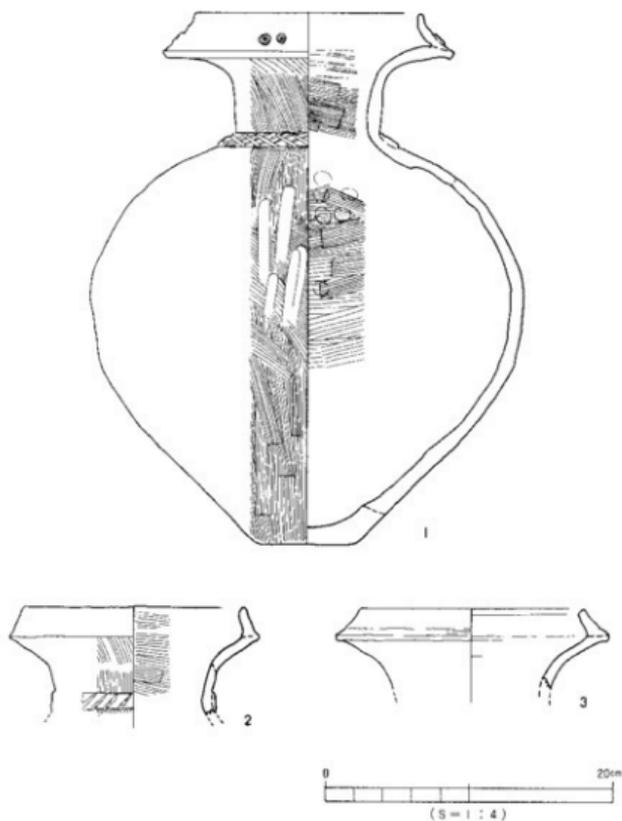
1~3は複合口縁壺である。口縁部の接合は輪積手法によるもので、接合後指撫でが施されている。口唇端部は直立し丸くおさまられている。口辺部には凹形浮文を貼り付け、頸部には凸帯が貼り付けられる。凸帯上面には指押圧による格子目文が刻まれる。内面は横方向、外面は縦方向のあらい刷毛目が施される。一部に鋭削り痕が残る。体部は球形でやや縮る下面の底面は平底を呈す。2は短形の口縁部が内傾し立ち上がる。接合部は内外面とも粗雑で、特に外面にも指圧痕がみられる。頸部に断面右形の凸帯を付し、斜行文が刻まれている。内外面異方向の刷毛が施される。3と8と同一体である。口唇端部は内傾し丸く、接合部は肉厚である。接合部外面にはつまみが施される。4は胴長で他の複合口縁壺とは体型を異にする。口唇端部は平たく内外面に凹線がみられ、内面には稜状を作り出している。接合は輪積で接合部内面は、縦方向の指圧痕が明瞭に深くい込み一巡している。頸部には断面コマボコ型の凸帯を付し、斜格子文が刻まれる。5は長頸化がみられ、口唇部はつまみが施され突出する。内面は横方向に、外面には2mm巾と4mm巾の刷毛撫で痕が顕著にみとれる。6は接合部に押圧痕が強くみられ、凹みを呈する。内外面には幅広い刷毛目が施され撫で消しがみられる。7は1より更に球形で、口唇端にはぶく丸みを呈し、内面は鋭角な面をもつ。内傾する口縁部の接合部は丁寧な撫でが施され、入念に仕上げがる。頸部凸帯には、篋による斜格子文が刻まれる。内外面とも縦・横・斜めの三方向の刷毛が施されている。球形の器表面は剝離が多くみられ、砂粒が露出し凸凹である。8は前述の3と同一体で、頸部凸帯が一段と低くみられ削り出し状に見える。凸帯上面の斜格子目文にも細い欄目跡がみられる。他の施文と異なりを見せる凸帯である。内面には指押圧痕がみられ、両面共に異走行の刷毛目が施される。器表面は7に似て凹凸面を呈する。

9~11は長頸壺、小型壺である。9はSK1出土品の内、唯一の長頸壺である。口唇面は丸く内傾させ稜をつくる。頸部内面は、外方向に膨らませ胴部との境には指圧調整が施される。口唇端には撫で消しが行われ、器表面1/2上は粗く下は細かく刷毛撫でが施される。色調はやや赤味を帯びる。10は小型壺で直立きみの頸部を呈し、口縁端部は外反し広がりをもせる。頸部と胴部の境には4条の沈線を施している。内面下部には鋭削りが施され、上部は刷毛撫でが施される。器表面は縦方向の磨きが見られる。11は土壌の堆積遺物のうち、最下位で検出した小型壺で1/4の残量である。頸部に3条の沈線が巡る。内面には、指圧痕がみられ、外面胴部より上位は丁寧な撫でが施されている。内面下部は灰白色を呈し、外面は赤褐色を呈する焼成の甘さがみられる壺である。

12~16は変形土器である。14は形態が鉢形にも似る変形土器である。

12は頸部は直立きみに立ち上がり、中位より緩く外反する。口唇端部につまみがみられ、外面に僅かに凹状がみえる。口縁内部はシャープで撫でが施される。外面には一部叩き痕が

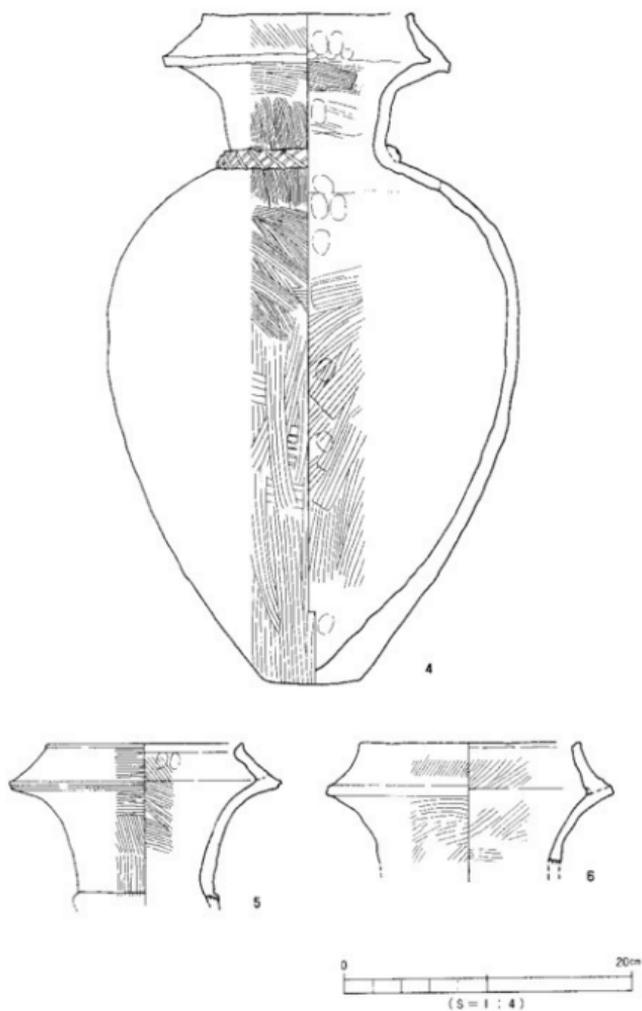
調査の概要



第101図 SKI 出土遺物実測図 (I)

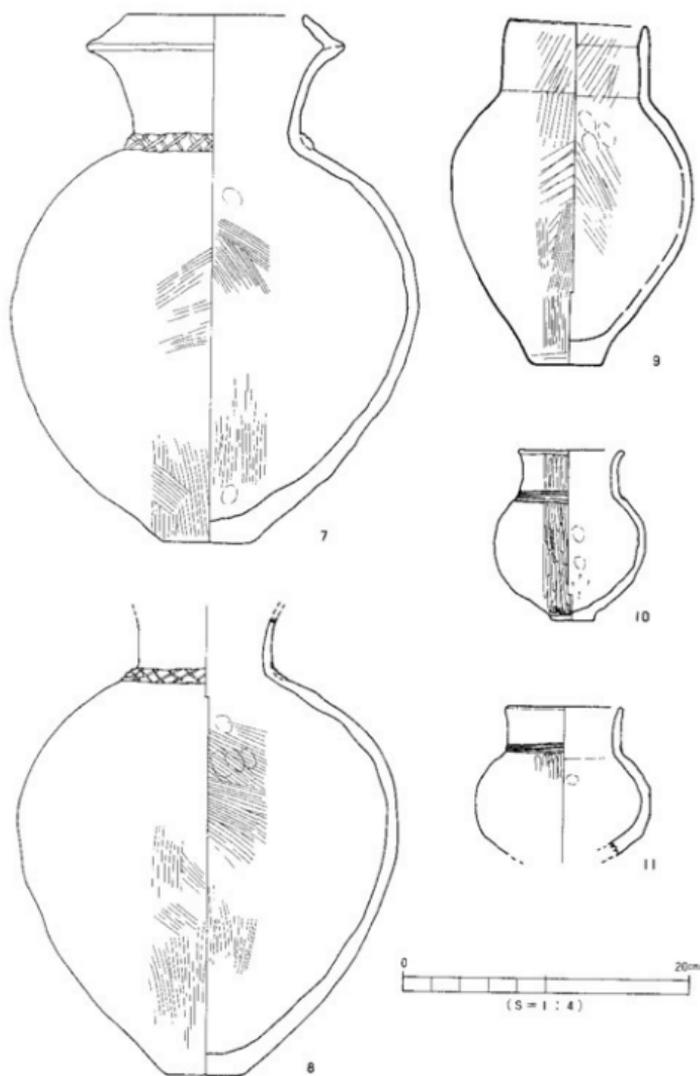
僅かに残る。13は焼成黒斑が多くみられ灰色を呈する。内面には指圧調整痕がみとられ、外面は横方向の刷毛撫でが施される。焼成の甘い口縁である。14は口縁部中位が肥厚し、口唇面両端部につまみが施される。内面は口縁部を横方向に、下部は縦方向に指押しされ、あと刷毛撫でが施される。外面には上から下に向けて撫でが施される。鉢形土器の可能性もある。

桑原田中遺跡



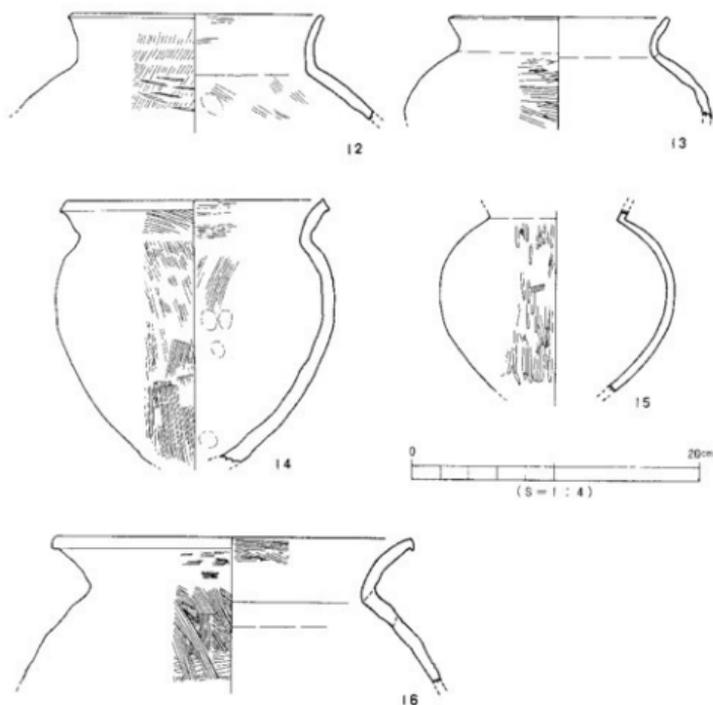
第102図 SKI 出土遺物実測図(2)

調査の概要



第103図 SK1 出土遺物実測図(3)

桑原川中遺跡

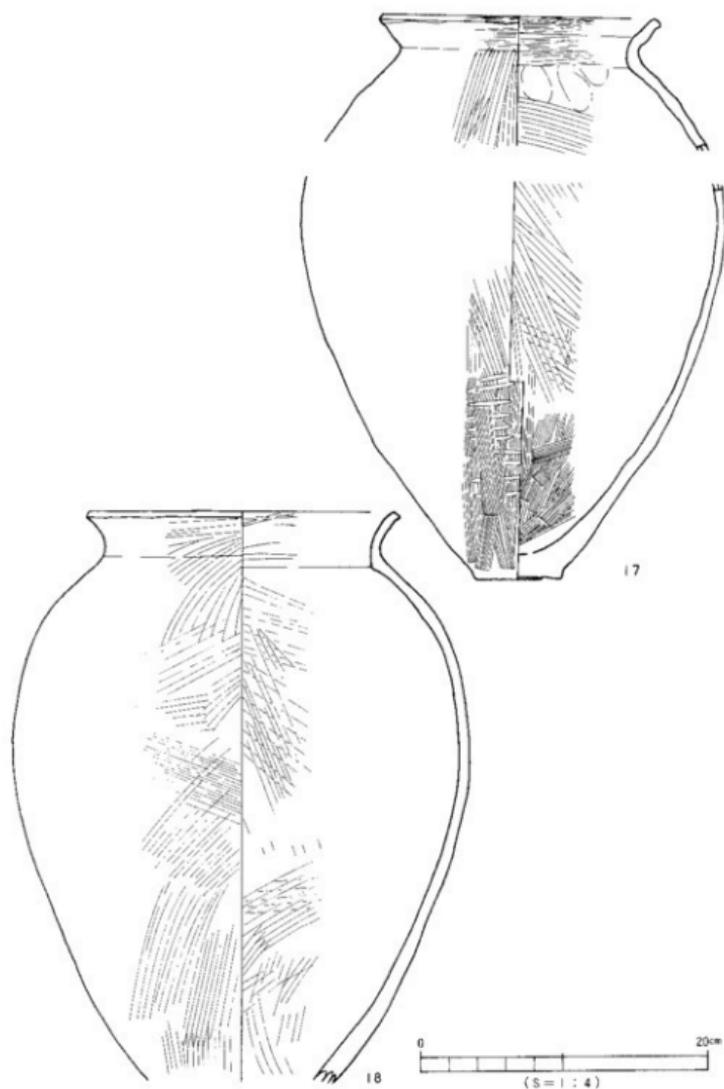


第104図 SKI 出土遺物実測図(4)

15は口縁部、底部が欠損するもので、器厚は平均し1cmさがみられる。内面は調整痕がみれず撫で消しが考える。外面は磨きが施され焼成黒斑がみられ、祭祀的要素のみえるものであり煮形土器の可能性も考えられる。16は外反する「く」の字状口縁を呈し、口唇端部を垂下させる。肩部内面には粘土帯の接合部が残り、凹凸面がみられる。粗雑である。

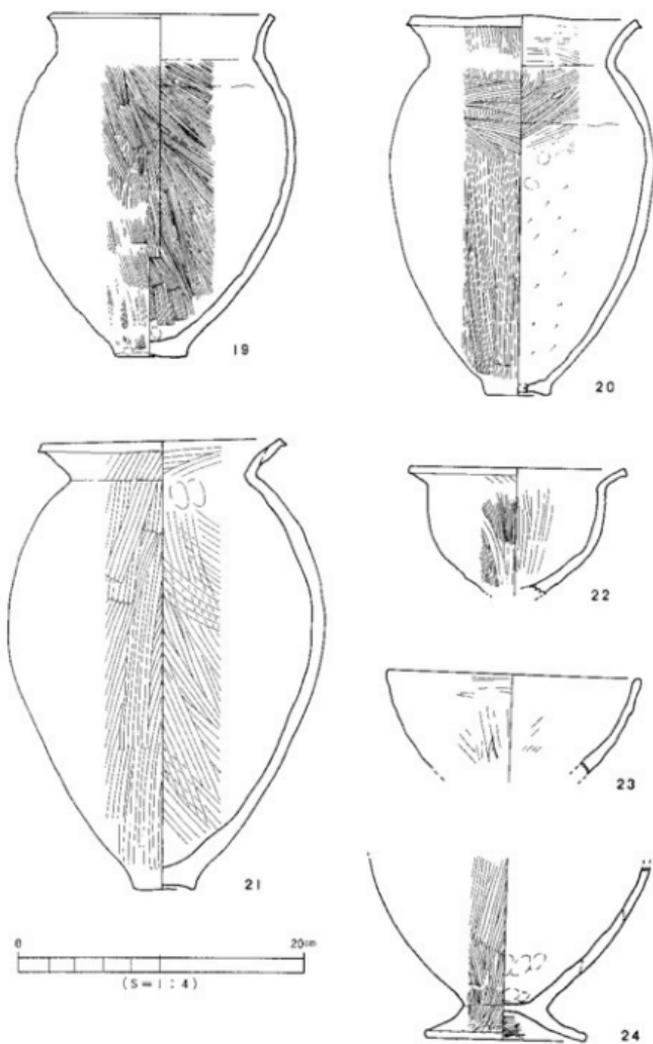
17、18は甕形土器である。最大径が器高の中位に下る傾向がみられる。よって口径が小さく感じられる。右図17の甕は、中間位が接合されないが同一個体である。「く」の字状を呈する口縁部は、肥厚し先端部を垂下させている。内面には異方向の撫でが施され、中間部は撫で消しがみられる。外面底部上には叩き目底が残る。18は更に胴に膨らみがみられ、器高にも差異がみられる胴長である。両者の器高は40cmと43cmが推定される。18の内外面には撫で消しが施されている。

調査の概要



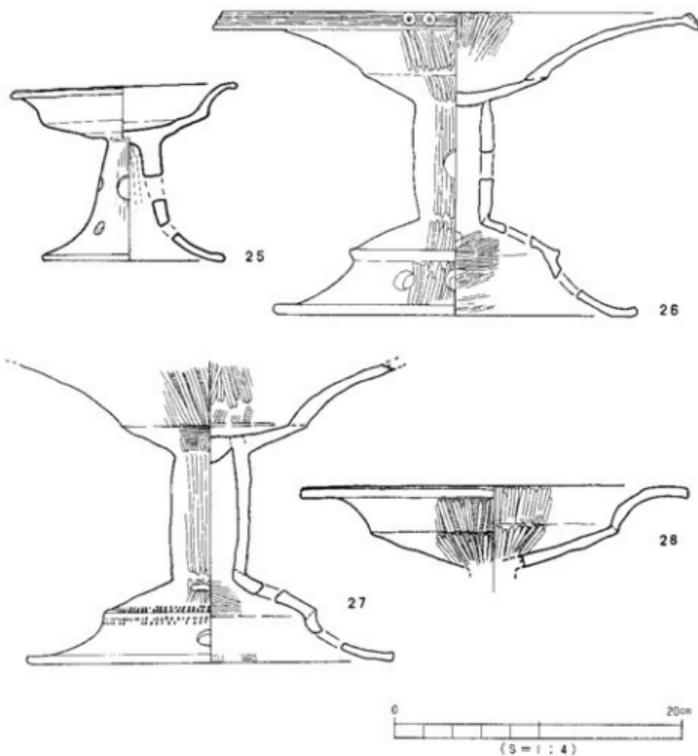
第105図 SKI 出土遺物実測図(5)

桑原田中遺跡



第106図 SK I 出土遺物実測図(6)

調査の概要



第107図 SKI出土遺物実測図(7)

19・20の甕形土器は、17、18に比して小型といえる。器高も20～30cm以内に納まる。最大径は口径を凌ぎ、20、21の口唇端には、垂下がみられる。19にはツمامミ上げがみられる。19、20の内面には、粘土帯の接合に粗雑さがみられ、つなぎ目が稜を呈している。19・20の内面は掻き上げ状に、21は粗く刷毛が施される。20の内面には砂粒がみられ整形の方向が窺える。丸底の底部には上げ底の形骸化がみられる。

22は鉢形土器、23は碗形土器、24は鉢形土器が推定される。22は口唇端面が垂下する。底部は台付も考えられるが、定かでない。23は碗形である。底部は丸底が推定される。24は形態が不明であるが、内傾した直立ぎみの口縁が考えられる。

22の内面には粗い刷毛が施され、外面は刷毛後撫でがみられる。内外面は、下に焼成黒斑が広くみられる。23は内外面に撫で消しが施されている。24は胴部内面に横方向の刷毛が施され撫で消しがみられる。色調は内面全体に黒色である。外面は縦方向に刷毛撫でが施されている。

25～30は高環形土器である。形態により分類すると円柱をもたないもの25をA類、円柱をもつもの26、27をB類に分けられる。28は接合部の状況からA類が推定される。25(A)は小型で、口唇端面は粗雑な指撫でがみられる。脚部には2段に径の異なる円孔を穿つ、上段には大小の円孔が交互に5穴が穿たれ同数でない。下段には5穴の小孔が穿たれる。脚部内面上位に絞り痕がみとれるが、全体に粗雑さが目立つ。B類26は、口唇面に3連の篋磨き沈線を巡らし、上面に円形浮文が貼り付けられる。円柱部には円孔を穿ち、屈曲する裾部が接合される。裾部中位に有段状の屈曲部がみられ、屈曲部の上下段面にも円孔が施される。細く外反する口縁部先端には膨らみがみられる。内外面とも篋磨きが施される。B類27が同形の26と異なる点は、円柱部の穿孔、屈曲部に竹管文による装飾性の2点に差異がみられる。更には屈曲部の形態にも異なりがみられる。28はA類が考えられる環受部の破片である。口縁端面は水平面状を呈し、水平の内端面に稜がみられる。内外面ともに篋磨きが施される。29・30は受部欠損の脚部で、29の脚部には3段に同径の円孔が、上段より3・4・4の比率で穿たれる。脚内面には絞りがみられ、外面には篋磨きが施される。30にも同径の円孔が2段に、上段3、下段4の比率で穿孔される。内面に絞り痕と刷毛目痕がみられ撫でが施される。外面は篋磨きが施される。器端部に29と差異がみられる脚部である。

31・32は支脚である。鼓形を呈する円筒形で、32は上部を欠損するか31と同形が考えられる。31の完形品の上下端部はつまみが施され、内面両端面には刷毛が施される。中空の内面中位は平滑に撫でられ、絞り痕がみとれない。32は31に比して肉厚で、内面は指撫でが施される。両者の外面には指押圧痕が、斜めに絞り状に顕著にみとれる。

以上32点がSK1における一括遺物で、図示されない破片も出土している。これらの土器には、複合口縁壺の長頸化(4)、鉢形土器に類する甕形土器(14)、胴張長胴の甕形土器(17・18)形態の差異がみられる。

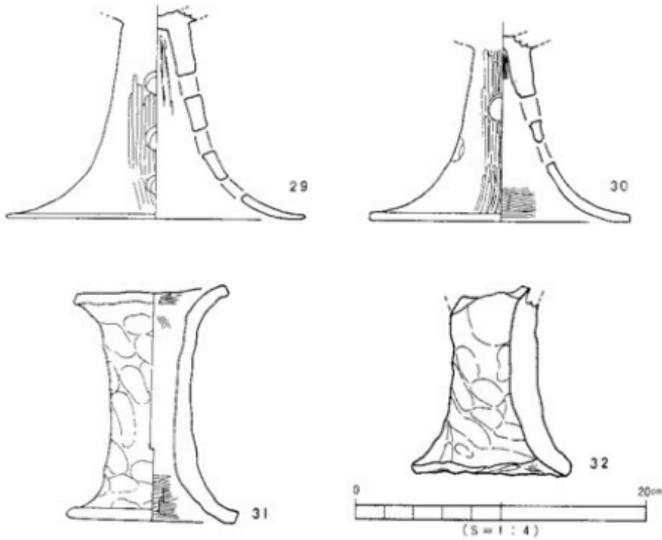
複合口縁壺の盛行期、高環形土器の円柱部の多用化等は、弥生時代後期の特徴が示され、当貯蔵穴の廃棄・埋没時期は弥生第V様式第4型式段階(後期中葉から後半)と考えられる。

## (2)その他のSK出土遺物(33～35)

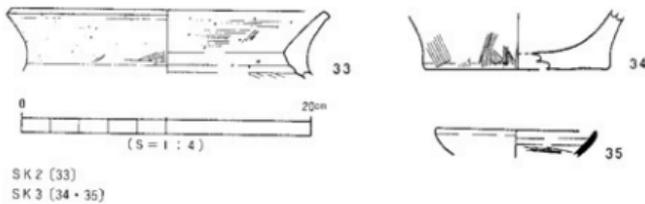
33～35は、33がSK2、34・35がSK3の図示できる破片である。

33は赤色を呈する壺口縁である。剝離摩耗が著しく調整痕はみとれない。内外面ともに砂粒の露出が著しく、焼成の甘いものである。34は大型の壺底部で内面は刷毛撫でが施される。

調査の概要



第108図 SK1 出土遺物実測図 (8)



SK2 (33)  
SK3 (34・35)

第109図 SK2-3 出土遺物実測図

底部平面はシャープさがみられる平底である。外面には縦向上に掻き上げ成形がみられる。  
35は灰色を帯びた須恵環である。

## (3) S D ・ その他の出土遺物 (36-108)

36-108は、S D ・ その他の出土である。

36・37・43・45はS D 3、38・39・41・46はS D 5、40・42はS D 2、44はS 1 W 3区の出土の複合口縁壺の破片である。36は肥厚した口縁部に5条の篋描沈線を施し波状文が刻まれる。更に縦2列の棒状浮文が貼られ、浮文上面に指頭圧痕が施される。この棒状浮文は、当平野に出土する楕円形の胴張りの長頸壺の胴部にもみられる。

37-39は口辺部に円形浮文のみられる一群である。37は口唇面はシャープに内面のやや下がった位置に稜がみられる。38の接合部内面には、強い押圧がみとれる。39は広い口径をもち、口縁部内面が肥厚される。40は頸部である。1本の凸帯が2条に分けられる特色がみられる。2条の凸帯には、篋描斜行文が施される。41-44は施文形態を图示した。41・42・44は波状文、43は粗雑な山形文である。波状文は平均して深く刻まれている。41は口径9.5cmの小型である。42は器厚で方形につくられる。43の接合部は垂下させ上面には、凹線1条が巡る。44は接合部がみとれない位入念に仕上げられる。45の頸部凸帯の斜格子文の刻み目には、櫛状の条痕がみられる。46は幅広の凸帯で、刻目も大きく施されている。

図111は、61をのぞき、壺形土器の、甕形土器の底部である。47-51は壺、57-60は甕である。47は黒斑がみられる。48は中心位に指圧による凹みがみられる。内面にヘラ刺突痕がみられ、横方向に撫でが施される。49の内外面には顕著に指頭痕が残される。50の底面に靱痕状の痕跡が残存する。51の内外面には撫で消しが施され、外面に黒斑がみられる。

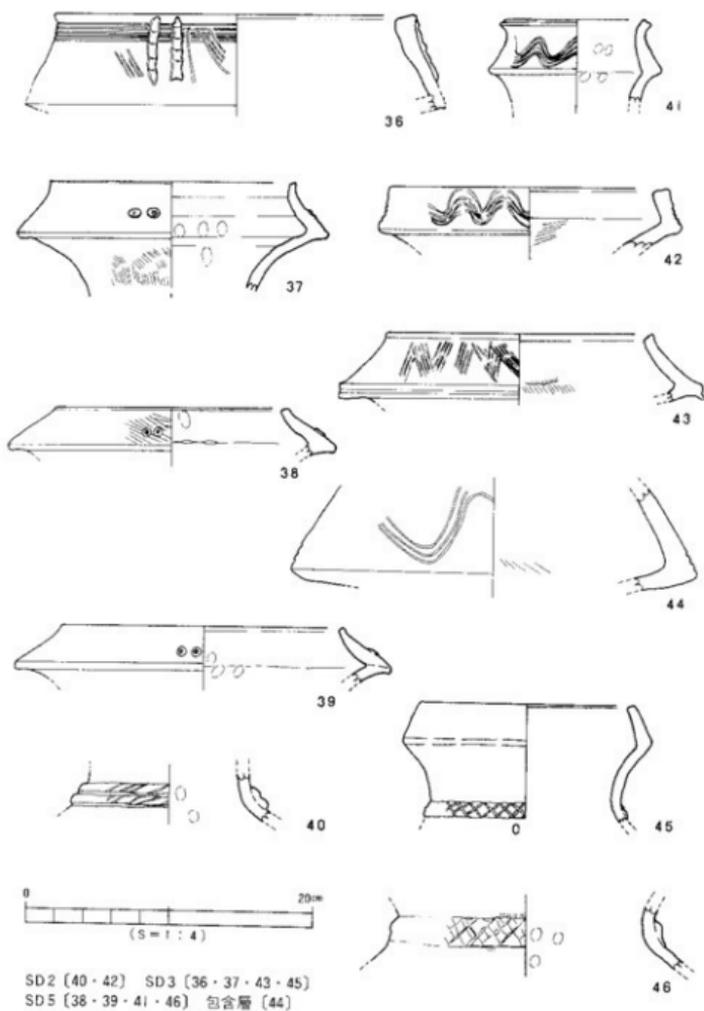
52は内外面とも撫で消しが施され、調整痕はみとれないものである。53-55は底部面に、それぞれ異なる篋記号が施されるさらに、53には焼成前の穿孔がみられる甕の底部である。

56は内外面に粗い刷毛目がみられ、底部貼付接合が考えられる器厚の底部である。57-60はあげ底、その形骸化がみられる甕底部である。59は先行形態を示す弥生中期後葉段階が考えられる底部である。61は手すくね土器で、外面下位には板状工具による叩き痕がみられる。内外面には指押圧後、撫でが施される。

## 壺形・甕形・椀形・高環形土器 (62-69)

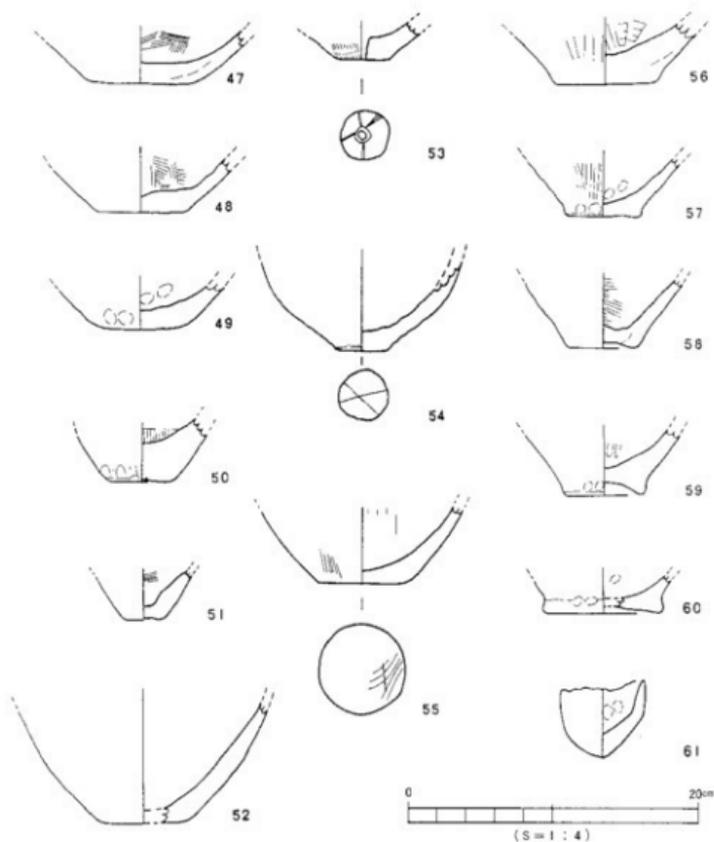
62はS D 2、63はS D 3、64・68はS D 9、65はS D 6、66はS 1 W 1区、67・69はS D 5の出土である。62は「く」の字口縁をなす甕である。口唇部に凹線が巡り有段状を呈す。63は壺口縁である。口唇部に篋描沈線を1条、頸部には4条の沈線を2段に施す。色調は茶褐色で、焼成がまあい。64は鉢形土器である。口唇にはつまみがみられ、口唇面には2条の凹線を巡らし稜状がつくられる。内面は横方向の撫でが施される。1部には指頭圧痕が残る。65は口唇面に2連の凹線が施される。凹線は不整列で口唇部も粗雑さがみえる鉢口縁である。66は鉢形土器で口唇に稜がみられる。内外面は篋磨きが施される。67は高環が考えられる。環部の充填が顕著にみとれるが粗雑である。篋状による撫でがみられるものである。外面の1部に赤色顔料様が残存する。

調査の概要



第110図 SD2・3・5・包含層 出土遺物実測図

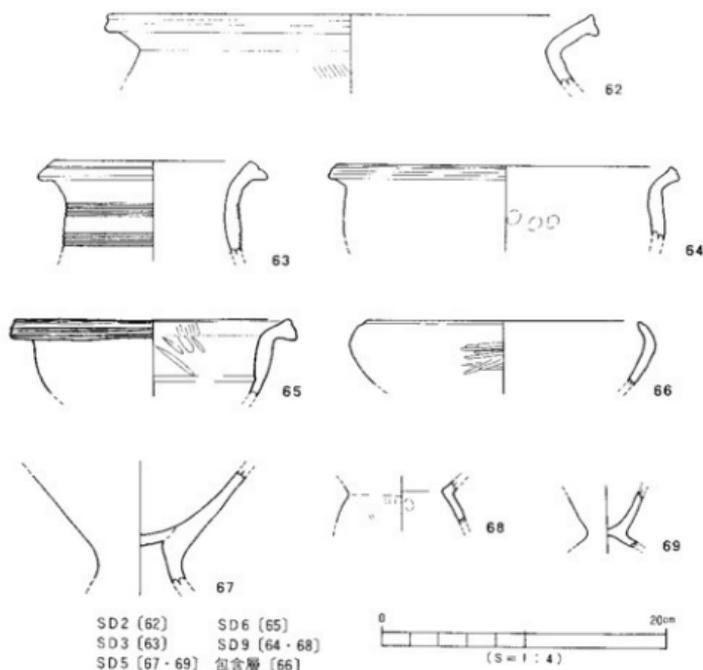
桑原田中遺跡



SD2 [47・48・49・54・55・61] SD6 [51]  
 SD5 [50・52・57・58・60] SD7 [56]  
 SD9 [53・59]

第111図 SD2・5・6・7・9 出土遺物実測図

調査の概要



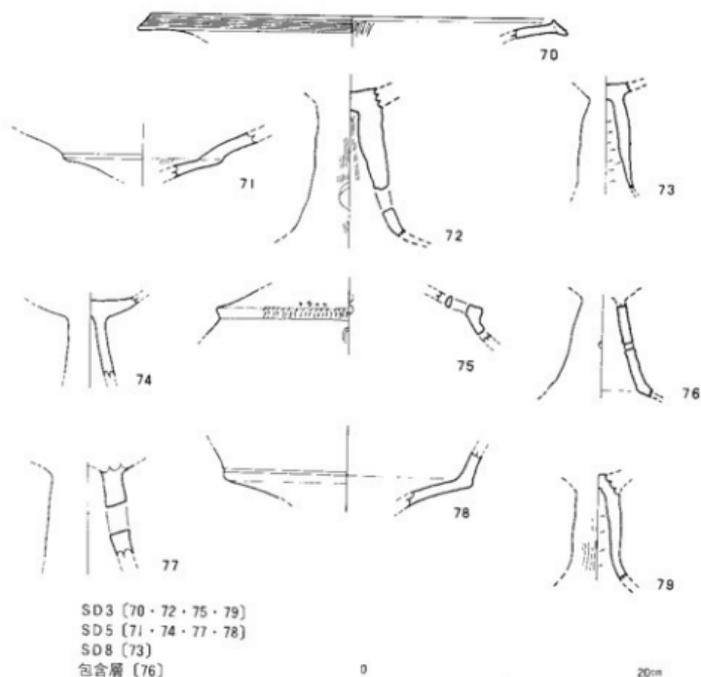
SD2 (62) SD6 (65)  
SD3 (63) SD9 (64・68)  
SD5 (67・69) 包含層 (66)

第112図 SD2・3・5・6・9・包含層 出土遺物実測図

68は小型品で、残存量 $1/4$ の破片である。内面は指頭撫でがみられる。外面縦方向の刷毛撫でが僅かにみとれる。69は台付小型鉢が考えられる。「ハ」の字に広がる裾部外面には、撫でがみられる。摩耗のため、調整痕などは不明である。

70～79は高坏形土器片である。

70・72・75・79はSD3、71・74・77・78はSD5、73はSD8、76はN1E1区の出土遺物である。70はSK1出土の26の坏口縁に類似するが、円形浮文がみられないもので、口唇部には4条の沈線がみられる。内面には縦方向に篋磨きが施される。71は坏部の破片である。摩耗によって調整痕などは不明である。72の脚部には中位の下部に4円孔が穿たれる。内面の上部に絞り痕が顕著にみられ、下部には刷毛目が施される。刷毛目は外面にもみとれる。73の脚部は接合部より裾端部に向け、極端に器厚がうすくつくられる。内面には砂粒が

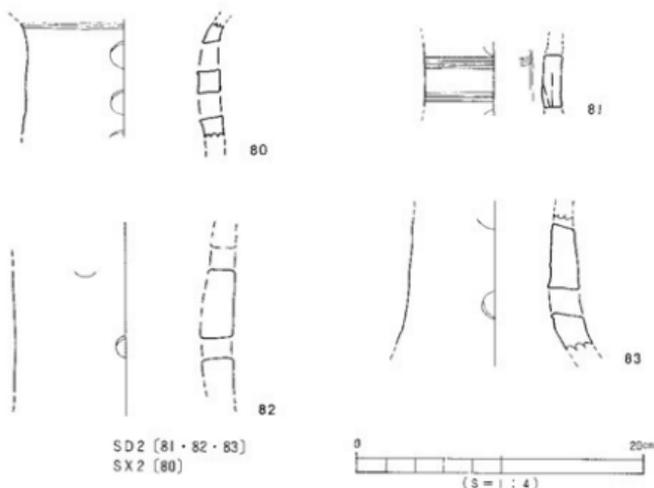


第113図 SD3・5・8 包含層出土遺物実測図

多くみられ、横方向に篋削り痕がみられる。74は赤橙色を呈し、内外面は刷毛撫でが施される。75はSK1出土の27の屈曲部に類似し、篋先による刺突文が2段に、さらに上位には竹管文が刻まれ、凹孔もみられるものである。

高環76の脚部の中位には、口径4mmの小円孔が2穴巡る。中空の内面には篋削りが施され、外面には刷毛撫でがみられる。77は肥厚する脚部に口径2cmの凹孔が穿たれる。凹孔は2段が推定される破片である。内面には指頭撫でがみられる。外面は篋磨き、刷毛撫でがみられる。78は坏部である。口縁接合外面に1連の凹線が巡る。内外面に横走向の刷毛撫でがみられる。79の脚部は中空の内面先端部が極端に狭まる。横走向の篋削り後撫でが施される。外面は刷毛撫でがみられる。

調査の概要



第114図 SD2・SX2 出土遺物実測図

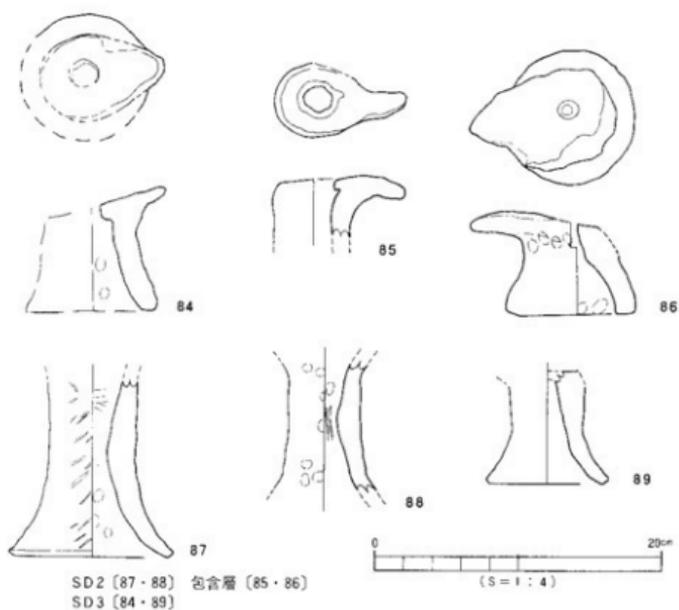
大型器台 (80~83)

80は落ち込みSX2、81~83はSD2の出土である。それぞれ破片で上下端部及び器高は不明である。体部に沈線が施される80は、篋磨きが施され仕上げは丁寧である。81~83は胎上も異なり、ザラつきがみられる。赤褐色を呈する器面は磨滅がみられる。

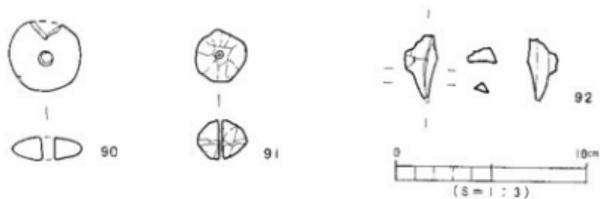
支脚 (84~89)、土製品 (90・91)、石製参考品 (92)

84、89はSD3、85はN1W2区、86はN2W1区、87・88はSD2の出土遺物である。

支脚には台形状と、円筒形がみられ、台形状のものに84~86、89があり、円筒形に87・88がある。台形の上面は平帯につくられ、傾斜角度をもつものもみられる。上面には円孔が中空部に向かい穿たれる。さらに端部より突起する舌状の支え手がつく。85は裾部、89は上面が欠損しているが同形と考える。87、88は円筒で、87の外表面には斜行の叩き目痕がみられ、底端部にはつまみが施される。88には中空内面に絞り痕がみられ、外面に指頭圧痕がみられる。90はN2W2区出土の土製紡錘車である。端面の剝離は後出の完形品である。法量、直径3.3cm、厚み1.3cm、重さ16.9gである。黒色を呈する器面中央に、径6mmの焼成前一方方向の円孔が穿たれる。一部に篋削り痕がみとれる。91はN1W1区出土の上玉である。断面形は算盤球状で法量、直径2.6cm、厚み2cm、重さ13.4gである。指圧痕がみられ、器表面は凹凸がみられる。92はN1E1区より出土したもので、参考品として図示した。石質はチャートで先端部を欠くが、石錐状を呈する。

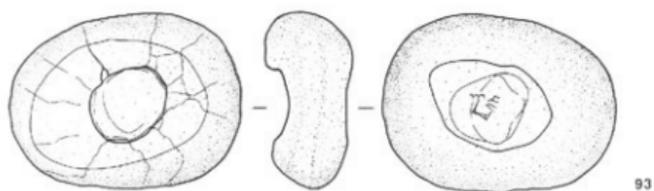


第115図 SD2・3・包含層出土遺物実測図

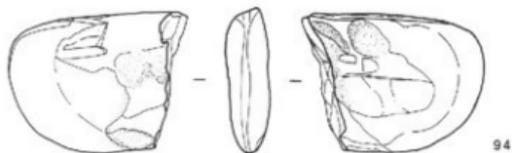


第116図 包含層出土遺物実測図

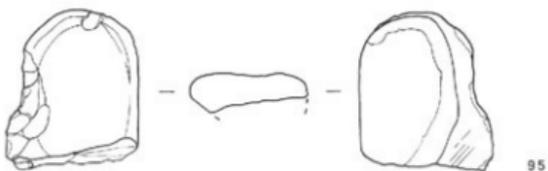
調査の概要



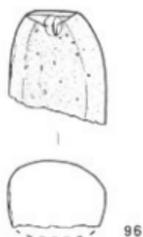
93



94



95



96



97



SD 5 [94・95]  
包含層 [93・96・97]

第117図 SD5・包含層 出土遺物実測図

## 石製品 (93~97)

93はN1E1、94、95はSD5、96はN2W2、97はN2W1の出土遺物である。

93は両面使用のもので、表面は掘り鉢用に、裏面は叩き用に使用されたと考えられる。

表面中央部には径3.7cm、深さ1cmの凹みがみられ、すりつぶし用のものと推定される。凹み周辺部には、楕円に広く研磨されている。裏面はレンズ状の凹みがみられ、使用痕がみられる。石質は凝灰砂岩で亀裂は、打撃によるものと考えられる石器である。94は石斧の折損品である。直線の背部端から、弧を描く外湾部に刃部をもつ。刃部は両面研磨され、刃部先端には傷痕が僅かにみとられる。石質は粘板岩が考えられ暗緑色を呈する。95は砥石である。石質は流紋岩とみられ、使用面は山形が推定され使用面には条痕が残存している。96、97は石斧の折損品で、石質は斑岩質の硬質で両者とも研磨仕上げがみられる。

## 須恵器 (98~103)、施釉陶磁 (104)

98は主にSD5出土の細片と、周辺部出土のものを合わせ復元した。99はSX2、100、103・104はSD5、101はNW区、102はSD3の出土遺物である。98は俵壺とも云われる樽形甕である。復元範囲において推定計を出し図示した。口縁部は欠損するが、甕の口縁部が考えられる。体部と頸部の接合は破片により、「L」の字状にみとれる。体部には、縦方向に3条の凹帯を施し、中央凹帯の左右に櫛描き波状文を縦に帯状に巡らす。文様は左右1条の凹帯に限定される。円孔注口部の破片もあるが、接合困難である。当地域における検出例も少なく、陶器窯址TK208出土を類例とした。時期は古墳時代前期5世紀末と考えられる。99は甕口縁の破片である。全体にスリムさが感じられる。内面には同心円文がみられる。外面に平行叩きしめ痕が1部残る。100、103は環である。口唇端面は丸く細く、真下に稜がみとれる。

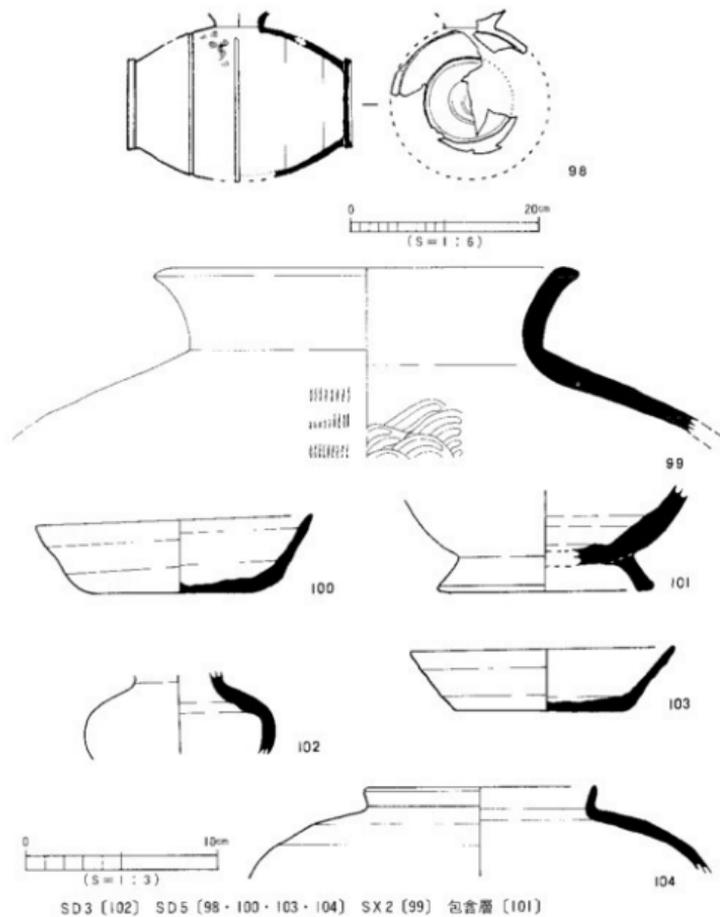
101は台付椀が考えられる。輪高台の裾端面は丸く、接地面に水平がみられる。102は甕の破片である。注口部、口縁部、底部が欠損する。内面には粘土帯接合がみられ、6世紀末が考えられる。104は短頸壺である。施釉陶器が考えられ、外面頸部、体部を限界とし体部一面に釉がみられる。

## 土師器 (105~108)

105、107はS1W2区、106はS1W1区、108はSD5の出土遺物である。

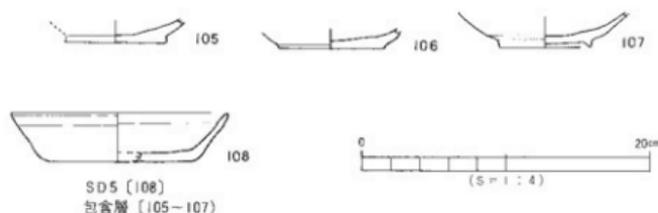
105、106、108は環、107は高台付椀が考えられる。105の底平面には、回転糸切り痕がみられる。他は磨滅が著しく調整痕などはみとれない。糸切り痕のみられるところから、12世紀代のものとする。

調査の概要



第118図 SD3・5・SX2・包含層 出土遺物実測図

#### 桑原田中遺跡



第119図 SD5・包含層 出土遺物実測図

## 4. 小結

今回の調査によって、扇状地における河川氾濫遺構が確認された。更に集落形成に適しない一面があることも判明した。北東扇頂部周辺の樹味遺跡から南西下する扇状地形に呼応するように、各自の集落が北に古く、南に新しく連続と存続している。南西面に位置するところの桑原遺跡群には弥生時代後期～古墳時代初頭の住居址の存在が知られ、東本遺跡における祭祀址などは重要性がみられる。この祭祀址の相伴遺物は非常に少ないと報告されている点も特色である。当遺跡における遺物の出土量に示される祭祀的な遺物の検知から、これにまつわる遺構が、近辺のさほど遠くない位置に存在することも裏付けられた。

また当遺跡と近接する桑原小石原遺跡の相対距離や同じ性格のみられる河川遺構の観点からすると、集落形成に不適合な地点、いわゆる度々繰り返される氾濫の流路にあたっていると推測される。つまり谷筋の周辺部に位置していると推定される。然しながら縁辺部における水田址やそれに伴う遺物も今回は検出されていない。これらから当地形の自然的条件の悪さが挙げられる。また当地域における遺跡が示すように、聖域、墓域、集落の政治行政的区画があるとするならば、大溝であるSD5はそれにあてはまる境界的な意味あいをもつものかも知れない。

松山平野（道後半野）は、重信川と石手川の二大河川によって形成された沖積平野であり両河川は度々氾濫を繰り返す荒川とされる。現在の石手川は下流において、天井川と化している。この状況からも氾濫の発生が多くみとられる。

永禄年間（1558年～70年）に灌漑用の堰や流路が、東野、桑原、畑寺（経石山古墳の東にあたる地域）に構築されたと地誌に記述されるところから、少なくともこの時代には水利に苦しんだことがうかがえる。当遺跡の出土遺物の中にも、13世紀前半代の瓦器片もみられるところから、それ以前にも洪水があったことが立証される。洪水被害に直面した桑原田中遺跡は、弥生時代後期から中世に至る氾濫河川遺跡とされる。

## 小 結

以上まとまりのない文章に終わったが、筆者の浅学の為であり反省を感じています。多くの問題点の指摘をいただく事を、喜びと致します。今後とも御教示、御指導を厚くお願いする次第であります。終わりに指針をいただいた梅本謙一君に感謝申します。

桑原田中遺跡

〔文献〕

- |              |      |  |
|--------------|------|--|
| 愛媛大学埋蔵文化財調査室 | 1989 | 『窯子・樽味遺跡の調査』                                   |
| 古代学協会四国支部    | 1990 | 『瀬川内の弥生後期土器の編年と地域性』第4回シンポジウム資料                 |
| 愛媛大学埋蔵文化財調査室 | 1991 | 『文京遺跡第10次調査』                                   |
| 平安学園考古学クラブ   | 1966 | 『陶器古窯址群Ⅰ』研究論集第10号                              |
| 愛媛県史編纂委員会    | 1982 | 『愛媛県史 原始古代Ⅰ』                                   |
| 中野良          | 1988 | 『愛媛県における古代末から中世の土器様相』『中世土器の基礎研究Ⅳ』<br>日本中世土器研究会 |
| 松山市資料集編集委員会  | 1986 | 『松山市資料集考古編Ⅱ』                                   |
| 松山市教育委員会     | 1987 | 『松山市埋蔵文化財年報Ⅰ』                                  |
| 松山市教育委員会     | 1989 | 『松山市埋蔵文化財年報Ⅱ』                                  |
| 松山市教育委員会     | 1980 | 『浮穴・西石井荒神堂・東木田一Ⅲ・桑原高井遺跡』                       |
| 松山市埋蔵文化財センター | 1991 | 『松山大学構内遺跡-第2次調査-』                              |

遺構一覽

遺構・遺物一覽 (遺構・遺物一覽：松村 淳)

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覽である。  
 (2) 遺構の一覽表中の出土遺物欄の略号について。  
 例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。  
 (3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1~4)多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表50 溝一覽

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	N1E1-S1E1	舟底状	9.5×1.50×0.35	暗褐色砂質土	弥生	S D 2を切る	弥生後期以降
2	N1E1-N1E1	舟底状	11.4×1.60×0.2~4	黄褐色砂	弥生	S D 1~3に穿られる	弥生後期
3	N1E1-S1W1	舟底状	17.0×1.50×0.45	暗褐色砂質土	弥生、土師、須恵	S D 2を切る	弥生後期以降
4	N1E1-N1W1	皿状	7.0×0.40×0.06	褐色砂質土		丁寧形	不明
5	N3E1-N1W2	舟底状	24.0×1.60×0.45	黒色砂質土	弥生、土師、須恵	S D 2を穿収	弥生後期
5-2	N3E1-N1W2	レンズ状	17.0×1.20×0.40	暗褐色砂質土	弥生、須恵	S D 5と伴発	弥生後期
6	N3E1-N1W2	舟底状	19.2×0.80×0.15	黒色土	弥生	S D 9を穿収	弥生後期以降
7	N3W1-N2W3	皿状	18.5×0.35×0.35	褐色+黒色土	弥生、土師	S D 2を切る	古墳時代
8	N3W2-N2W3	レンズ状	6.0×0.70×0.13	暗褐色土	弥生	S D 9と合流	弥生後期以降
9	N3W2-N2W1	舟底状	9.0×0.60×0.60	暗褐色+黒色土	弥生、土師	S D 7に穿られる	古墳時代

●表51 土壌一覽

土壌(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	N1E1	円形	皿字形	0.35×0.85×0.8	暗褐色土	弥生		弥生後期
2	N3W2	楕円形	皿状	1.85×0.85×0.07	褐色砂質土	弥生	S D 9に穿れる	弥生後期以降
3	S1E1	楕円形	皿状	1.40×1.20×0.13	褐色土	弥生、須恵	S D 1~3に穿られる	弥生後期以降

●表52 SK1出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調		胎土 焼成	備考	国版
				外面	内面			
1	壺	口径(16.0) 器高 37.3 底径 6.3	複合口縁。胎付凸帯。 (白)胎付凸帯(平文)。(灰) 胎付凸帯(平文)。胎付凸帯。 胎付凸帯(平文)。	①(灰)胎付凸帯 (灰)胎付凸帯(平文) 上下ハク胎ナシ	②コソコソ 筒状底縁 板状ノミナテ→胎ナシ	石(長(1-3) 良好	黒底	74
2	壺	口径(15.1) 器高 7.6	複合口縁。 (灰)胎付凸帯。斜行文。	①(灰)胎付凸帯(斜的) ②コソコソ	①コソコソ①②コソコソ ③(灰)胎付凸帯 ④(灰)胎付凸帯	石(長(1-3) 良好		
3	壺	口径(15.1) 残高 5.8	複合口縁。 胎ナリに、施文状況 不明。	増減のため不明	①コソコソ ②コソコソ	石(長(1-3) 全 良好		
4	壺	口径 14.5 器高 46.5 底径 6.5	複合口縁。 (胎)胎付凸帯。斜行文。 丸底。	①コソコソ ②コソコソ、タテハク ③④胎付凸帯	①コソコソ ②(胎)胎付凸帯③胎付 凸帯④胎付凸帯	石(長(1-3) 良好	黒底	74
5	壺	口径(13.5) 残高 11.0	複合口縁。胎付凸帯(厚縁)。 胎付凸帯(厚縁)1条。 胎付凸帯(厚縁)1条。	①コソコソ (灰)コソコソ(胎付凸帯) (灰)コソコソ(胎付凸帯)	①(胎)胎付凸帯、ハク (胎)胎付凸帯、胎付凸帯 (胎)胎付凸帯(胎付凸帯)	石(長(1-3) 良好		
6	壺	口径(15.5) 残高 8.4	複合口縁。 (胎)胎付凸帯。	①胎付凸帯、コソコソ (6本/1cm) ②ハク(胎付凸帯)	コソコソ、ハク コソコソ、ハク(胎付凸帯)	石(長(1-3) 胎付凸帯	黒底	
7	壺	口径(12.3) 器高 36.8 底径 6.1	複合口縁。 胎付凸帯(厚縁)。斜行文。 胎付凸帯(厚縁)。	①増減で不明 (胎付凸帯)胎付凸帯に現在 (胎付凸帯)胎付凸帯	②コソコソ ③(胎)胎付凸帯 (胎)胎付凸帯	石(長(1-3) 全、多 良好		74
8	壺	底径 5.4 残高 32.0	口縁部胎付凸帯。平底。	胎付凸帯、胎付凸帯 胎付凸帯	①胎付凸帯(胎付凸帯)胎付 (胎)胎付凸帯 (胎)胎付凸帯	石(長(1-4) 多 良好	黒底	74
9	壺 扁壺	口径(8.5) 器高 23.7 底径 3.0	胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯。 胎付凸帯。	①胎付凸帯 (胎付凸帯)胎付凸帯 胎付凸帯	胎付凸帯 胎付凸帯(胎付凸帯) 胎付凸帯	石(1-3) 良好		75
10	壺 小型	口径 7.7 器高 12.0 底径 2.9	丸底。 胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯。	①(胎)胎付凸帯(胎付凸帯) (胎)胎付凸帯(胎付凸帯)	①(胎)コソコソ (胎)胎付凸帯 (胎)胎付凸帯	石(長(1-3) 良好	黒底	75
11	壺 小型	口径(8.0) 残高 10.4	丸底。 胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯。	①胎付凸帯(胎付凸帯) 胎付凸帯(胎付凸帯)	胎付凸帯 (胎付凸帯)胎付凸帯	石(長(1-3) 良好		
12	壺	口径(16.3) 残高 7.2	胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯。 胎付凸帯。	①胎付凸帯 (胎付凸帯)胎付凸帯(胎付凸帯)	①コソコソ 胎付凸帯	石(長(1-2) 良好	胎付凸帯 欠損	
13	壺	口径(15.1) 残高 7.0	胎付凸帯。	①(胎)胎付凸帯 (胎)胎付凸帯	胎付凸帯のため不明 胎付凸帯	石(長(1-2) 良好	胎付凸帯 欠損	
14	壺	口径(17.7) 残高 19.0	胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯。 胎付凸帯。	胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯 (胎付凸帯)胎付凸帯(胎付凸帯) 胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯	①(胎)コソコソ ②(胎)胎付凸帯(胎付凸帯) ③(胎)胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯	石(長(1-3) 良好	胎付凸帯	75
15	壺 (?)	残高 13.0	胎付凸帯。胎付凸帯。	コソコソ 胎付凸帯	胎付凸帯	石(1-2) 良好	胎付凸帯 胎付凸帯	75
16	壺	口径(24.4) 残高 10.2	胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯。 胎付凸帯。	①(胎)胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯 (胎)胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯 胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯	①(胎)胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯 胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯	石(長(1-4) 良好	胎付凸帯 胎付凸帯	
17	壺	口径(18.0) 器高 40 底径 16.3	胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯。 胎付凸帯。胎付凸帯。 胎付凸帯。	①胎付凸帯 (胎付凸帯)胎付凸帯 胎付凸帯	①(胎)胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯 (胎付凸帯)胎付凸帯(胎付凸帯)胎付凸帯	石(長(1-3) 良好	胎付凸帯	黒底

遺物観察表

SK1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	装		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
18	罌	口径(20.5) 器高 29.5	平底。 胴径が口径を越く。 長身部が均よりやや上。	①ココナテ ②タテ、ヨコナテ ③タテウキ上げ	①ナテ染し ②ナテ染し ③ニテ、タテ、ヨコ、肌、黒ハテ	石・長(1-0) 全 良好		75
19	罌	口径(15.2) 器高 24.2 底径 5.0	平底。上部絞り。胴部右 上巻上げ残。	①ハテ、ナテ	①ココナテ ②ココナテ、黒ハテ ③ハテ	石・長(1-2) 長形		76
20	罌	口径(15.6) 器高 26.6 底径 4.4	僅か上げ残。胴部右上 巻上げ残。若干上げ残。 上部絞り。	①タテナテ ②タテ、ココナテ ③タテ、ハテナテ	①ココナテ ②ハテ、ナテ ③ハテナテ	石・長(1-0) 全 良好	黒底 煤	76
21	罌	口径(14.6) 器高 31.7 底径 (4.0)	「く」の字状に絞。若干上 げ底。上部絞り。	①上巻により縮きとり ハテココナテ、タテナテ ②ヨコハテココナテ	①ハテココナテ ②ハテ、ナテ染付 ③ハテナテ、タテ、黒	石・長(1-0) 良好		76
22	罌	口径(15.0) 器高 9.0	口縁外反。口縁部ツマミ 取。底部台付?	①ハテ、ハテハテ	①ココナテ	石・長(1-0) 良好		76
23	罌	口径(17.3) 残高 6.6	器外面に凹著しい。口縁 部丸みをもち丸底?	ハテナテココナテ	ハテ(前め)ナテ	石・長(1-0) 全 良好		黒底 煤影欠損
24	罌	底径 11.4 残高 12.0	深部「へ」の字状。	タテハテ(4-3部/器) ①タテハテ(1-5部/器) ②傾圧 黒ココナテ	「軍」ナテ、下部傾圧	石・長(1-0) 良好		黒上蓋 欠損
25	高杯	口径 15.6 器高 12.3 底径 12.3	口縁外反。上下2段に保 の異なる円孔胴部内面に 絞り残。	①ココナテ、ヨコナテ ②傾かいハテナテへり磨き	外面と同じへり磨き残が 多くみられる。	石・全 全 良好		77
26	高杯	口径 32.4 器高 21.3 底径(25.3)	口縁外反。内面浮文 彫付。同柱彫孔。胴部上 下段円卓孔。	①ココナテ ココナテ へり磨き	①上り磨き、①ナテ ①へり磨き	石・長(1-0) 良好		77
27	高杯	口径(32.0) 残高 21.0 底径(25.6)	器曲形に著文。円柱無彫。 胴部上下2段円孔。	①上り磨き ツマミ取し。ココナテ ②再へり磨き	ナテ、へり磨き 口縁欠損	石・長(1-2) 長形 全		77
28	高杯 (碎部)	口径(26.8) 残高 5.6	口縁部内平。水平。 ラッパ取に開く割部?	へり磨き	へり磨き	全・全 良好		黒底欠損
29	高杯 (器口)	口径(20.5) 残高 14.1	3段に円孔。 $(19.7 \times 3)$ 胴部内面に $\begin{pmatrix} \times 4 \\ \times 4 \end{pmatrix}$ 絞り残。	へり磨き	絞り底 タテナテ 黒ココナテ	石(1-2) 全 良好		黒底欠損
30	高杯 (陶器)	口径(17.9) 残高 13.0	円孔2段文置 $(19.9 \times 3)$ $\times 4$ 胴部内面に絞り残。	へり磨き、タテ	絞りナテ ココナテ	石・長(1-0) 全 良好		黒底欠損
31	支脚	口径 10.5 器高 15.7 底径 12.0	鼓形筒筒形。上下地彫 凹く。上部追加開口。下部 凹等。	右下り傾圧絞り残 黒部ツマミ	①タテ絞り底(ココナテ) ②タテナテ ③ココナテ	石・長(1-2) 全 良好		76
32	支脚	口径 12.7 底径 10.9	鼓形筒筒形。 平均筒厚。	右下り傾圧絞り残 黒部ハテナテ	ココナテ ①ハテナテ ②黒部ココナテ	石・長(1-2) 全 良好・粗製		黒上蓋 欠損

桑原川中遺跡

●表53 SK 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
33	煮 (118)	口径(21.3) 口縁高2.8	口縁部、内面、 頸部内面、腹内面。	部に割のナケ残る。	部にハクヨコナテ、 斜のナケ残る。	石(1-3) 良好	口縁部 厚さ0 粘土層	

●表54 SK 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
34	蓋 (28)	口径(12.6) 残高 4.4	下底シャープ	ハナ目	割破のための不明	石・灰(1-2) 良好		77
35	杯	口径(11.4) 残高 1.8	口縁部丸くつくられる。	ザツつき	ヘラ取 ハテナテ	石 良好	灰土質 高濃灰質	

●表55 SD2・3・5・包含層 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
36	壺 (118)	口径(25.0) 残高 6.4	複合口縁、5条化、波状 文。沖状凸部、縦列2条、 口縁部形内厚内腹(首下)	割破し、蓋著でない。 ◎割破	1段→2段の中1-1,2の ナケ残	石・灰(1-2) 良好	SD 3	78
37	壺 (118)	口径(16.0) 残高 7.5	複合口縁、口縁部波文、 沖形粘着文(2ヶ横列)	ヨコナテ	①ナケ ②③3段に分けてナケ	石・灰(1-3) 金 具	SD 5	78
38	壺 (118)	口径(15.5) 残高 3.3	複合口縁、沖形粘着文 (2ヶ横列)	①ナケ ②③ヨコナテ	①ナケ ②③ナケ ・高濃土質	石・灰(1-3) 良好	SD 3	78
39	壺 (118)	口径(19.5) 残高 3.8	複合口縁、口縁部縦くま い、内形粘着文(2ヶ横 列)、口縁部ツツミ。	①②ヨコナテ ③ヨコナテ	①ナケナテ	石・灰(1-2) 良好	SD 3 粗粒式 灰層	
40	壺 (28)	口径(13.0) 残高 3.5	複合口縁?粘付1条を2 条に沈着させ、凸部粘 着文。	ヨコナテ	滑ナテ 一部割破、残存。	石(1-2) G(1-2) 良好	SD 2 灰土質 欠層	
41	壺 (118)	口径(9.2) 残高 6.8	複合口縁、口径せまい、 口縁部1条沖形縦をもつ 波状文15道も。	①ヨコナテ ②ヨコナテ ③④つまみ出し状	ナケ 一部に割破	石・灰(1-2) 金 具	口縁小型 SD 5	78
42	壺 (118)	口径(9.2) 残高 3.5	複合口縁、4条波状文、 口縁部内面有残。	①②③④割破不明 ⑤⑥⑦ヨコナテ	①ヨコナテ ②③④⑤ヨコナテ ⑥⑦⑧⑨ヨコナテ	石・灰(1-2) 良好	SD 2	
43	壺 (118)	口径(18.3) 残高 4.7	複合口縁、不整形波文、 複合部外周1条内腹下葉、 口縁部ツツミ出し。	ナケ?	ハテナアアテ	石・灰(1-3) 良好	SD 2 口縁外 欠層	78
44	壺 (118)	口径(19.5) 残高 7.3	3条に大きく波状文が割 まれる。複合部は割破不 明。人型ナテ、口縁上 り内面。	割破のための不明	一部に斜めハナ目残存。	石・灰(1-3) 良好	SD 3	78
45	壺 (118)	口径(14.6) 残高 8.0	斜形凸部文(前部平文)、 斜形平文形凸部にハクヨ コナテ残る。口縁上り複 合部不明、口縁内面波状文。	①ヨコナテ 割破著しく不明 一部にヨコナテ残存。	割破著しい 一部にヨコナテ残	石・灰(1) 金 具	SD 3	

遺物観察表

●表56 S D 2・5・6・7・9 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調		胎土	備考	図版
				外 面	内 面			
46	壺 (底部)	底径(19.0) 残高 4.0	複合口縁 幅広い縁付凸帯(斜格子文)	凸帯縁付後タナナテ	指ナテ 一部損壊	石(1-4) 灰(1-5) 良	S D 5	
47	壺 (底部)	底径(6.8) 残高 3.6	平底 ゆるく外反し立上る。 内面・外面に支線がみられる。	ナテ	底面ハケボテ割の ①ハテ(7本/1cm) ヨコナテ	石・灰(1-1) 金 良好	底部 裏面 S D 2	
48	壺 (底部)	底径(5.8) 残高 3.6	平底、体部セリ器蓋 着地部は、ナテ仕上げ 中央部外に向い傾斜	ナテ	ハケ(5本/1cm) ナテ、ヨコ	石・灰(1-2) 良好	底部 S D 2	
49	壺 (底部)	底径(4.3) 残高 2.6	丸底、底縁部がえく仕上 がる。	底面ナテ (①上) 1cmまで損壊 傷破滅のため不明	指ナテ 一部に損壊	石・灰(1-2) 良	底部 S D 2	
50	壺 (底部)	底径 4.0 底厚 2.6 残高 4.5	平底、肉厚若し上げ底状 底面平面に傾斜状		幅ハテ	良	底部 S D 5	
51	小型 壺 (底部)	底径(2.4) 残高 3.6	小型丸底	磨滅のため不明	ナテ上げ 一部にヨコナテ面 損壊	石・灰(1-3) 良好	底部 裏面 S D 6	
52	壺 (底部)	底径(5.4) 残高 8.3	平底	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石(1-3) 灰・金(1-6) 良好	底部 S D 3	
53	瓶 ?	底径 3.4 残高 2.6	平底、底面×字ヘラ記号 底部中央に円孔 焼成後穿孔	直立上り割のハケ	ナテ	石・灰(1-3) 良好	穿孔は 焼成後 S D 9	78
54	瓶 (底部)	底径 3.5 残高 5.8	平底、底面×字ヘラ記号 底面向上部絞り	磨滅のため不明 一部にハケ痕	磨滅のため不明 凹凸大	石・灰(1-3) 良好	底部 S D 2	78
55	壺 (底部)	底径 6.0 残高 5.2	平底の底面に直線のヘラ 記号	タテナテ	ナテ 一部ハケ目痕	石(1-5) 良	底部 S D 2	
56	壺 (底部)	底径(7.0) 残高 3.8	平底 大型の帯が推定される。 内、外部无染状	(①直上り) 1cm指ナテ (②)ナテハケ(5本/1cm)	ハケタテヨコナテ (4本/1.4cm)	灰(1-4) 石(1-3) 良	S D 7	
57	壺 (底部)	底径(5.2) 残高 3.9	平底、上部絞り	(①直上り) 1cmで器底 ハケでヨコナテ、1cm上 からタテハケ(4本/1cm)	瓶状と指ナテ併用 一部に損壊	石・灰(1-3) 金 良好	底部 S D 5	
58	壺 (底部)	底径(5.0) 残高 4.8	若干上げ底状 底部内面中心部凹部	磨滅のため不明	ハケヨコナテ	石・灰(1-4) 良好	底部 S D 5	
59	壺 (底部)	底径(5.25) 残高 4.5	上げ底、底縁部突出	ツマミ出し→ヨコナテ	ナテ上げ、ヘラ痕 一部 損壊、ナテ	灰(1-4) 石(1-7) 良好	底部 裏面 S D 9	
60	井 (底部)	底径(7.0) 残高 2.4	若干上げ底	(①直上り)ナテ 損壊	割断にて不明 一部損壊	石・灰(1-3) 良	底部 S D 3	
61	陶 ナス(口縁部)	底径 5.3 口径 6.6	美観 板状工具によるタタキし め口縁先縁細く美り状	指ナテ	ナテ、他損壊	金 良好	底部 裏面 S D 1	78
62	壺 (口縁)	口径(33.3) 残高 5.8	口縁面縁線1条 輪郭劣下	口上、下ツマミ出し ヨコナテ 幅ハテ	ヨコナテ ナテ	石・灰(1-2) 良好	口縁部 S D 2	

桑原田中遺跡

●表57 SD3・5・6・8・9・包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	装 飾		胎 土 焼	備考	図版
				外 面	内 面			
63	壺 (口縁)	口径(18.4) 残高 6.5	口唇部1条凹線 腹部中段4条凹線 頸部下段1条凹線	㊦→ヨコナテ 磨滅のため不明	ナテ	石・灰(1-0) 良好	SD3	78
64	鉢 (口縁)	口径(23.0) 残高 5.1	口唇部2条凹線 器内均等がみられる。	㊦(上下)→ヨコナテ ㊦(口) 磨滅 ㊦(口)→1ナテのみみし状	ヨコナテ、横ナテ 指ナテに凹凸有 一部磨滅痕	石(1-5) 灰(1-7) 良	口縁部 SD9	
65	鉢 (口縁)	口径(18.4) 残高 2.4	口唇部凹線2条 口縁内湾外唇段状		ハテ、ナテ、ヘラ	石・灰(1) 良	口縁部 埋込 SD6	
66	鉢 (口縁)	口径(19.4) 残高 4.3	口唇部に線をもち有段状	㊦(口)→横 ヘラ磨き	ヨコナテ ㊦ ツマミ出し	石・灰(1大) 密 良好	口縁部 SDW1	
67	高環 (脚部)	残高 8.0	環部の光沢が顕著高台で ある。	磨滅のため不明	ナテ ㊦ ナテ 台と器部の嵌合あり	石・灰(1-5) 少 良好	口縁部 欠損 SD5	78
68	小型 皿	径径(7.1) 残高 4.3	小型皿	ハテヨコナテ (5本/1cm) 地味多し	㊦→ヨコナテ 一部磨滅痕	灰(1-2) 石(1-2) 良	口縁部 欠損 SD9	
69	内型 鉢	残高 4.0	「ハ」の下高台	一部にナテ痕		石・灰(1-2) 多 良好	口縁部 欠損 SD5	
70	高環 (口縁)	口径(27.4)	口唇部段付4条凹線ヘラ 磨きが施される。	ヨコナテ ㊦(上下) ツマミ出し	一部にナテヘラ痕	全・密 良好	口縁部 口縁部 欠損 SD3	
71	高環 (口縁)	残高 9.3	下部筋部段付器内平均 化。	磨滅のため不明	磨滅のため不明 接合部不明	石・灰(1-2.5) 良好	受部 口縁部 欠損 SD5	
72	高環 (脚部)	残高 10.2	円形穿孔1段ハの手摺状 模刻。	掘込痕あり→ハテ→ナテ	段り板ナテ(上)	石・灰(1-3) 良好	脚部 SD3	79
73	高環 (脚部)	残高 7.5	筋部は非常に薄い、内 面砂粒がみられる。(左 回転)	㊦(脚部)→ヨコナテ ㊦→ナテ	㊦→ナテ ㊦→ヘラ磨り、回転	密 良好	脚部 SD8	79
74	高環 (脚部)	残高 5.5	中央部先端丸み状	磨滅のため不明	㊦→ナテナテ 破りみられない	石・灰(1-3) 粒	口、腕 欠損 SD5	
75	高環 (脚部)	残高 3.0 断面径(18.0)	筋部に3本の管管文と ヘラ刺突文が刻まれる。	磨滅のため不明 ヨコナテ一部に認められ る。	㊦(上下)→横 ㊦→1ガキ	石・灰(2.0) 砂粒 良好	脚部 SD3	
76	高環 (脚部)	残高 6.5	小四孔1段に2穴スリム に仕上がる。土師器への 移行期?	ナテ	削り	石・灰(1-9) 金 良好	脚部 口、腕 欠損 N1E1	79
77	高環 (脚部)	残高 6.4	四孔径2.0mm 四孔何段か不明	タテハケ目	ナテケシ	石・灰(1-3) 良好	口縁部 欠損 SD5	79
78	高環 (口縁)	残高 4.0	環部外部面1条凹線	ナテ ㊦(上下)→磨滅	㊦(上下) ヨコナテ ㊦→ナテ	石・灰(1-3) 良好	口縁部 口縁部 欠損 SD5	
79	高環 (脚部)	残高 7.4	脚上面中に接合痕状	ハテ(5本/1cm)→ナテ	削り→ナテ	石・灰(2) 良	脚部 口、腕 欠損 SD3	

遺物観察表

●表58 SD2・3・SX2・包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
80	器六	残高 8.0	へろ指き残痕。多数不明。内孔3段並列。	ミダキ 葉痕	ナテ上げ	石・灰(1-2) 良好	片 S A2	82
81	器六	残高 5.0	1段4枚痕。2段3枚痕 沈面の下。下に内孔。	磨滅のため不明	磨滅のため不明 一部ナテ残痕	石・灰(1-2) 金良	片 S D2	
82	器六	残高 8.6	円形穿孔(3.5径) 交互並列。	磨滅のため不明	剥離のため不明	密 良好	片 S D2	82
83	器六	残高 9.5	内孔(1.0径) 並列穿孔。	磨滅のため不明	磨滅のため不明 一部ナテ残存	石・灰(1-4) 良好	片 S D2	82
84	支脚 (台形)	底径(8.8) 器高 8.6	台形。舌状支え手1本 中空部貫通孔(1.7径)	ナテ凸面痕	全面ナテ	石・灰(1-5) 銀 良	黒焼 S D3	79
85	支脚 (内形)	残高 8.6	台形。舌状支え手1本 中空部貫通孔	指押痕	ナテ	石・灰(1-2) 良好	N1W2	79
86	支脚 (台形)	器高 6.3 底径 9.0	台形。舌状支え手1本 中空部。貫通孔 中空部上面板痕	ナテ	ナテ 指押痕	石・灰(1-8) 良	中空 への字状 R2W1	79
87	支脚 (円筒)	底径(10.5) 残高 12.5	円筒。1.ド端部開口 叩きしめ板痕	叩き→ナテ。凸凹滑しい 面→ツマミ出しココナテ	下より。指圧痕 ナテ上げ ココハケ	灰(1-2.5) 石(1-3) 金 良好	1枚焼 S D2	79
88	支脚 (円筒)	残高 9.0	円筒。上下端部開口	指押痕	ナテ上げ 一部に板り痕	灰(1-2) 石(1-3) 金 良好	黒焼 1枚。3部 焼 S D2	
89	支脚 (台形)	底径(8.0) 残高 8.0	パナ形を立す。 舌状突起(穴挿)	凸凹滑しい ナテ。一部に指押痕	ナテ 一部に指押痕	石・灰(1-5) 銀 良好	S D3	

●表59 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	品種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
90	紡錘車	直径 3.7 厚さ 1.2 重さ 16.9g	内孔1穴 円盤状	ナテ	ナテ	石・灰(1大) 良好	K2W2	80
91	土玉	直径 2.6 厚さ 2.1 重さ 13.4g	内孔。ソロバン並状 表面金体に凹印がみられる。	手すくね 一部板状叩きしめ	ナテ	石・灰(1-2) 良好	S1W1	80

桑原田中遺跡

●表60 S D5・包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
92	小瑠	欠	チャート	3.2	1.5	0.33-0.20	2.7	N1E1	
93	叩き石	欠	燧石類	12.1	9.3	4.3-4.5	734.5	N1E1	80
94	石斧	欠	粘板岩	7.2	9.2	2.3	284.4	S D 5	80
95	砥石	欠	流紋岩	8.0	6.9	2.0	157.0	S D 5	
96	石斧	欠	地質質	5.8	11.9	5.0	181.1	N2W2	
97	石斧	欠	燧石質	6.0	10.9	4.6	122.5	N2W1	80

●表61 S D3・5・S X2・包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・英文	調 整		胎土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
98	大型碗	口径(8.0) 体径(23) 残高(21.0)	腰表と呼ばれる。中央部と左右に凹溝。凹溝は流紋岩を縦方向帯状に集す。	注口部 側面貼付付	粘土質による凸凹調整にみれる。 ナテ	良好	燧石部 S D 5	81
99	罎	口径(22.0) 残高 11.0	平行叩き目録の深しからみれる。 凹溝がみられる。	クナキ目録ケレ	ココナテ 同心円文	甘い 良	燧石部 S X 2	
100	環	口径 14.2 体高 3.9 底径 8.3	粘土質の組合物 内外面調が多い。	ココナテ(一部) 凹溝	ココナテ(一部)	石(1-3) 不貞	燧石部 S D 5	82
101	台付 椀	高径(5.0) 残高 3.5	貼付高台 厚目、高台厚く外方へ開く。	へう削り ココナテ	ココナテ	石(1) 良好	燧石部 N W 2	
102	罎	残高 4.45	粘土調袋状	ナテ	ココナテ	密 良好	燧石部 H 2E 2 S D 3	
103	環	口径 12.6 体高 3.3 底径 8.6	腰と表がみられる。	ココナテ 凹溝	ココナテ	石(1-2) 良	燧石部 S D 3	82
104	短瓶 壺	口径(11.5) 残高 4.65	胴部以外無袖	施釉口唇残してナテ	ココナテ	砂粒(1-2) 良好	S D 3	
105	土師 罎	口径(6.8) 残高 1.6	底面、凹紙糸切り	磨滅のため不明	磨滅のため不明	密 不貞	S1W2	82
106	土師 罎	口径(7.1) 残高 1.2	平底	磨滅	磨滅	密 不貞	S1W1	82
107	土師 椀	口径(6.4) 残高 2.4	高台	磨滅	磨滅	密 不貞	S1W2	82
108	土師 罎	口径(15.0) 体高 3.4 底径(10.0)	平底 口縁部 肥厚	磨滅	磨滅	密 不貞	S D 5	82

第 9 章

キョウ セキ サン  
経石山古墳



## 1. 調査の経過

### (1) 調査に至る経緯

1990（平成2）年5月、株式会社ホテル茶春（代表取締役川本栄次）より、松山市桑原4丁目410-1におけるマンション建設に当たって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

本調査地は松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地「84経石山古墳」内にあたり、周知の遺跡として知られている。この経石山古墳は、北東方向から延びる東野洪積台地の先端部（海拔40m）に位置し、周辺には、畑守竹ヶ谷古墳〔西尾幸則 1986〕、東野お茶屋台古墳〔森光晴 1986〕や本墳とほぼ同時期の三島神社古墳〔岸・森・長井 1972〕などが存在する。また、前述の如く、近年宅地開発による遺跡発掘調査は桑原地区においても激増しているが、その中でも殊に当該地は、経石山古墳後円部北東帯に当たっているため、本墳との関連する遺構・遺物の確認が期待できた。

これらのことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1990（平成2）年6月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、土師器・須恵器を含む遺物包含層と経石山古墳の周溝と思われる溝状遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課とホテル茶春の両者は、発掘調査についての協議を行った。発掘調査は、南西方向に隣接する経石山古墳の周溝（または空濠）の確認をととして、本墳の規模と構造の解明を主目的とし、松山市埋蔵文化財センターが主体となって、ホテル茶春の協力のもと、1990（平成2）年10月17日に開始した。

### (2) 調査組織

調査地 松山市桑原4丁目410-1

遺跡名 経石山古墳1次調査

調査期間 野外調査 1990（平成2）年10月17日～同年12月19日

調査面積 567㎡

調査委託 株式会社ホテル茶春 代表取締役 川本栄次

調査担当 調査係 主任 田城 武志

調査員補 高尾 和長

” 大森 一成

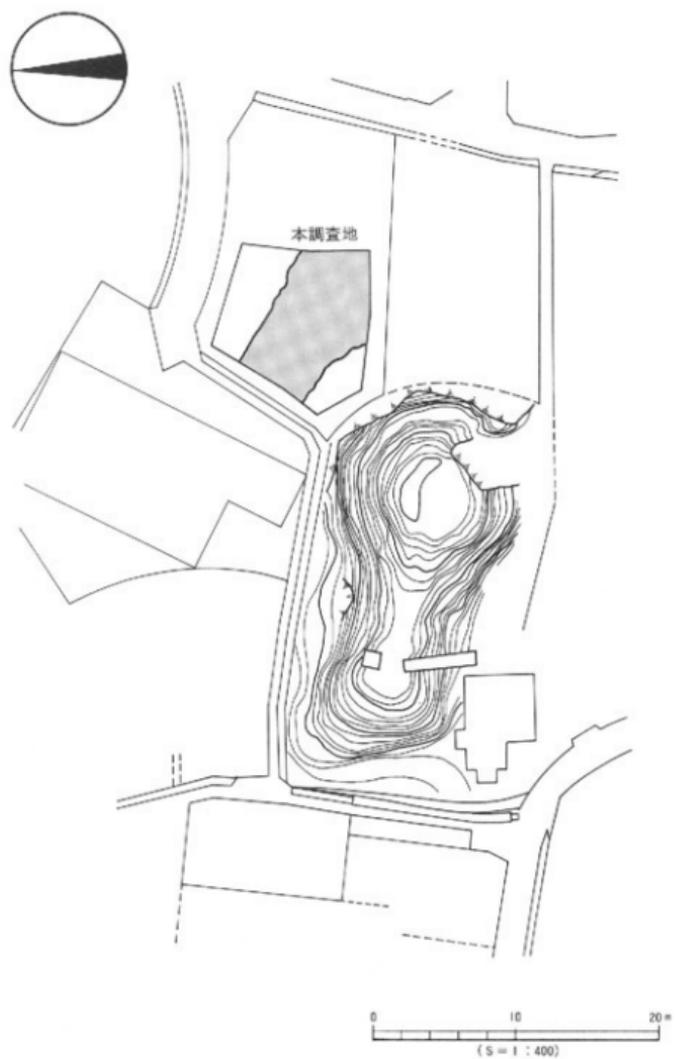
作業員 高市 英治、山邊 進也、福田 宏志、仙波ミリ子、乃万富美子、仙波 千秋、  
高尾 久子、金子 育代、猪森しげ子、池内カヨ子、白井あさ子、田頭 まき

経石山古墳



第120図 調査地位置図 (I) (5=1:2,500)

調査の経過



第121図 調査地位置図(2)

## 2. 層位

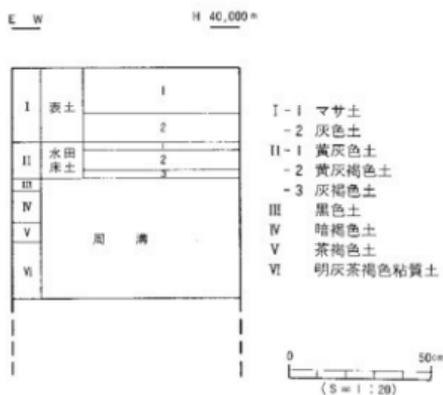
本調査地の基本層位は、第I層表土、第II層黄灰色土、第III層黒色土、第IV層暗褐色土、第V層茶褐色土、第VI層明灰茶褐色土である。第I層は、宅地造成による真砂土と造成以前の耕作時における灰色土で地表下30~40cmを測る。第II層は、厚さ3~10cmの堆積層である。第III層~第VI層は、周溝内埋土となり厚さ40~50cmで各層ともに弥生土器(後期)、須恵器(6~7世紀)、土師器、瓦器片(12~13世紀)を包含しており、墳丘からの流れ込みあるいは墳丘削平時に攪乱されたものと推測される。ただ、第III・IV・V層は周溝内側裾部より約1mに渡って黒色傾向が見受けられ、特にV層より下層は比較的安定した層であるが、遺物を伴っていないのが残念である。

第VI層下層より土塊状遺構2基、ビット状遺構42基、横列状遺構1条(第125図)の遺構を検出している。殊にビット状遺構は、埋土の相違により3つに分類できる。

- ①周溝内部裾部周辺から検出されたビット状遺構——黒色傾向の茶褐色土。(第V層)
- ②周溝中央部で検出されたビット状遺構 —— 暗褐色土。(第IV層)
- ③周溝内北東部の横列状遺構 明灰茶褐色土。(第VI層)

各層位より検出された遺物は、いずれも時期的に大きな広がりがあり、各かくの層位の時期設定は困難であった。

なお、調査に至って調査区中央部に基準杭を施し、3m四方のグリッドに分割した。



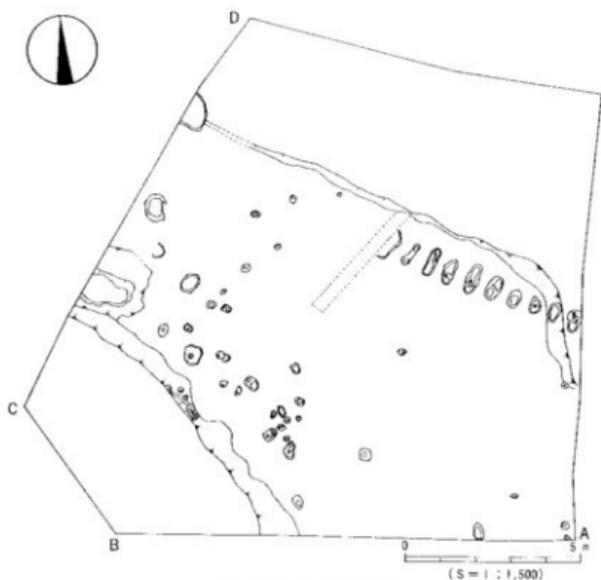
第122図 基本層位図



### 3. 調査の概要 (遺構と遺物)

#### (1) 検出遺構

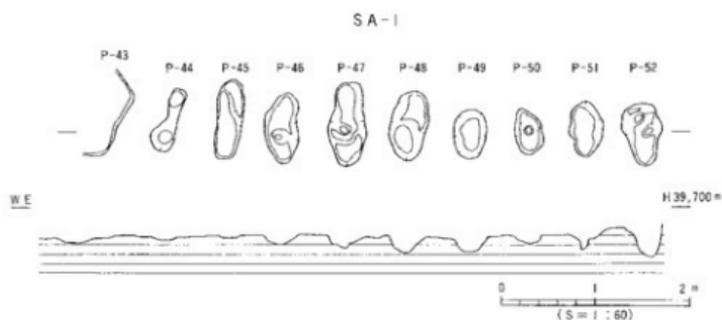
本調査において、経石山古墳の周溝、周溝床面から上檜状遺構2基・ビット状遺構12基・柵列状遺構10基を検出した。周溝の規模は、上端部は調査区西壁において南北に幅7m、南東壁は東西に幅11mと西から東へ向けて広がりを見せ、基底面も東方向へ緩傾斜している。しかし、上端部の幅については、調査区南西部の墳丘が近・現代の耕作時にカットされており、先に述べた数値は、あくまでも現状のものであり、正確な規模とはいえない。因に、下端部最大幅6.5m、最深部0.5mであった。周溝内埋土は暗褐色土が主体であるが、周溝内郭裾部は茶褐色系の黒色傾向にあり、これは墳丘版築からの流れ込みによるものと思われる。また、柵列状遺構を周溝北東部に東西に走る形で一条検出した。平面的には、長軸0.7m、短軸0.4mの楕円形を呈し、0.3mおきに計10基、全長6mにわたっていた。これは第124図に見られるように周溝を切る形で検出されていることから、周溝との関連性は薄いと思われる。ビット状遺構についても、土師器片が含まれていたものの、掘立柱建物に結びつくプランも呈していないことから自然の凹地と考えられ、具体的な時期設定をするための有効な手がか



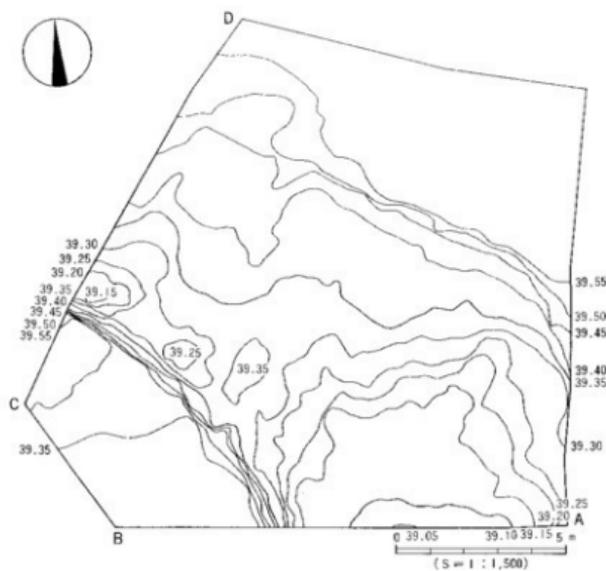
第124図 遺構配置図

調査の概要

りには成り得なかった。



第125図 SA-I 測量図



第126図 地形測量図

(2)出土土器

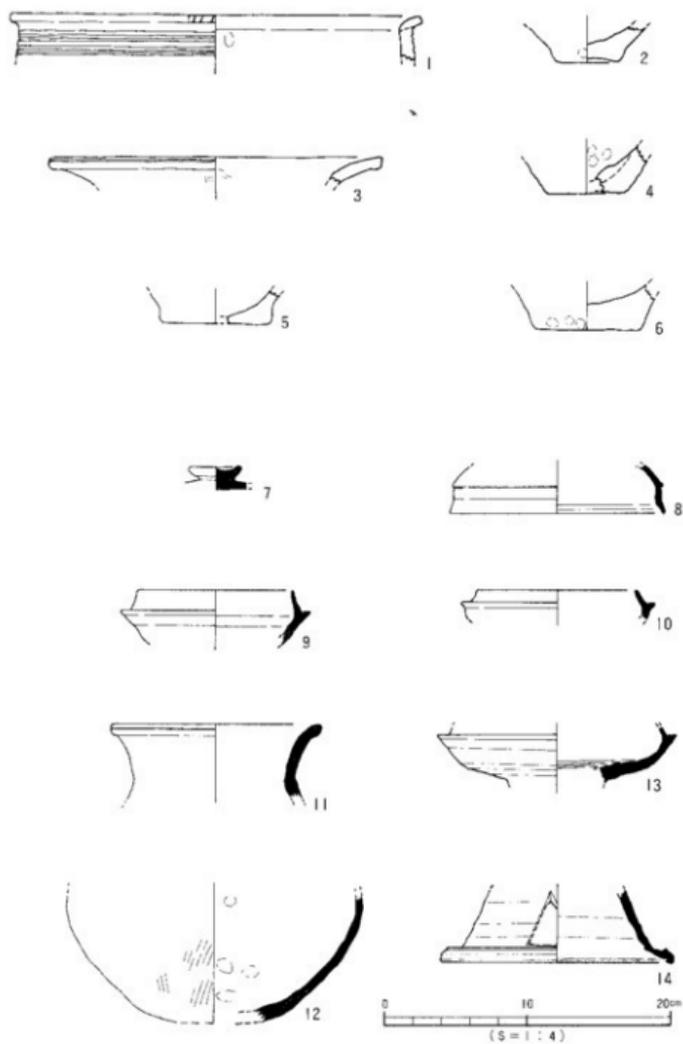
弥生 1は弥生の甕形土器の口縁部片で、口縁端部に刻目、口縁下部に沈線を施す。2は甕の底部片である。やや上げ底で少しくびれて立ち上がる。器表面は内外面ともマメツの為調整は不明である。3は甕の口縁部の小片で、口縁端部は丸く仕上げられ、沈線が一条施されている。4～6は底部片で、いずれも平底である。尚、4は甕、5・6は甕のものである。

須恵器 7は環蓋の宝珠つまみの部分を残しあとは欠損している。つまみ中央部はくぼみ、中央部分が尖っている。8は口縁部片である。口縁は外下し、端部は丸く仕上げられており、口縁部と体部の境界には粘土による継ぎ目が見られた。器厚は口縁端部のみ肉薄である。9・10は環身の口縁端部から体部にかけての残存部である。立ち上がりは長く、やや内傾し、先端は先細りし、丸く仕上げている。受部は外上方にのび丸くおさめらる。10は9に比べ立ち上がりが非常に短く、受部は水平きみである。体部と底部の屈曲部は鈍い稜が見られた。11・12は広口甕片である。11は口端部から口頸部が残存しており、口頸部から外上に緩やかに外反する。口縁端部には沈線を一条施す。12は体部から底部の残存片で、底部はやや扁平になると考えられる。11・12は、双方の出上位置・胎土・焼成の具合いから、同一個体と思われる。13・14は高環片である。13は受部上面に凹線を二条施している。口縁立ち上がりは内傾し、杯部にはヘラ調整がみられた。14は脚部片で三角透かしを施す。脚部全体は内外面ともヨコナデしている。

土師器 15・16は椀である。15は口縁部片で、端部は丸くおさめ、内外面ともヨコナデしている。16も口縁部片で、体部から口縁部にかけてやや屈曲後、外反する。端部は尖りきみである。17～19は土師皿の底部である。17の底部はやや上げ底である。18は平底で、底部の中央部が肉薄になる。19の底部は平底で、口縁端部は丸くおさめられ、外面はマメツの為判別できないが、内面はヨコナデしていた。20～22は高台付椀である。いずれもやや丸底。高台は断面三角形で21はやや外方向にふんばる。

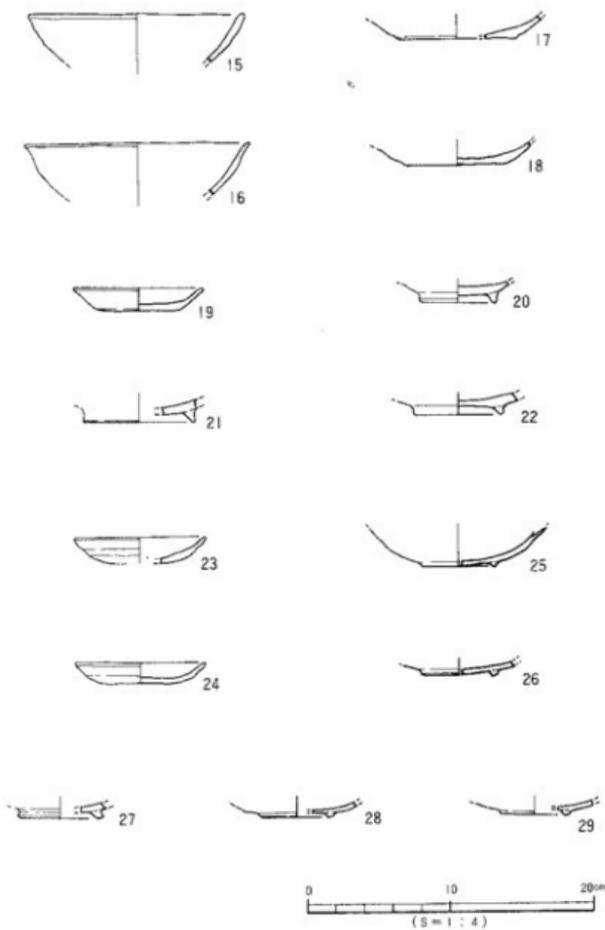
瓦器 23・24は皿である。23は体部は肉厚だが口縁部に向かい肉薄になり再び厚くなる。端部は丸くおさめらる。24は、やや丸底気味の底部から屈曲し、口縁部がやや外上方へ開く。25～29は高台付の椀の底部片である。25はやや丸底。高台は断面三角形。口縁部外面には指押えが見られる。26・28の高台は逆台形である。27は高台の内側が内傾し外方向へふんばる。29も内側が内傾するか27のような外方向への伸びはみられない。

調査の概要

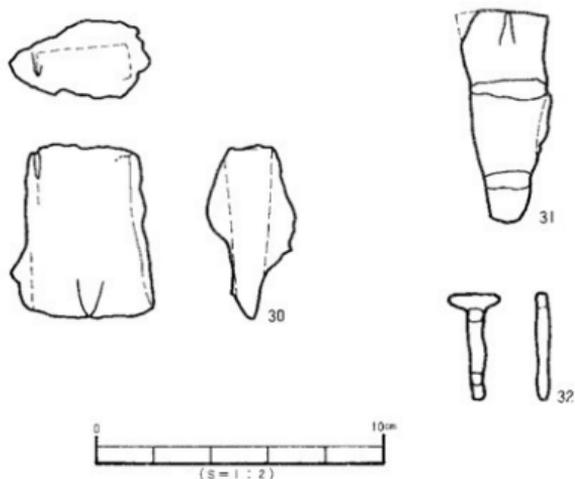


第127図 出土遺物実測図 (I)

経石山古墳



第128図 出土遺物実測図(2)



第129図 出土遺物実測図(3)

#### 4. 小結

松山平野東部松山市桑原4丁目(字名 桑原西新開)に位置する経石山古墳は、周囲を三島神社古墳や溝辺古墳等の古墳群および弥生期の集落に囲まれ、古来松山平野で数少ない前方後円墳として県指定有形文化財となり知られるところである。墳丘は、三島神社古墳同様全面盛り上りによって築造されているが、未調査のため全貌は明らかにされていない。但し、墳丘部の測量については、位置的に不明瞭な点もあるが1972年に発行された報告書『三島神社古墳』に収録された実測図があり、今回の調査では、それを参考にした。

因に、現在まで本墳の規模について、調査した過去のデータを紹介しておくことにする。

1968年発行の正岡睦夫著『愛媛県前期古墳集成』によれば、「全長40m、後円部径22m、同高5.5m、前方部幅16m、同高3.5m、(主軸)方位は前方部を西より20度位北に向けている」とし、また1980年発行の『松山市史料集 第1巻 考古編』によると、「墳丘全長約49m、前方部長さ20m、同高3m、後円高さ5m、(中略)主軸方向はW0.2Nとなっているようにほぼ西向き」と記している。

本調査地は、経石山古墳後円部の北東裾部に当たることから、正岡氏による後円部径22mを基準に後円部のみの調査報告とする。

## 経石山古墳

調査区南西部より、当古墳の周溝と思われる溝状遺構を検出、規模は幅7～11mで西壁より南東壁に向かって広がりを見せており、深さ20～50cm、南東に緩傾斜している。周溝の内側肩部より墳丘裾部までの距離約7mを確認した。ただ、元來墳丘と思われる黄色シルト面のすぐ上層が耕作土となっているため、本墳後円部東部は、近・現代において削平されたものと推測され、周溝幅の正確な復元は困難である。

このことから、本墳後円部の直径はおよそ29m、全長は少なくとも56mあることが確認された。経石山古墳の規模が、一部分ではあるが確かなものとなったことは、今回の調査成果である。

その他の遺構としては、不整形のプランで自然の凹地と思われる土壇状遺構、掘立柱建造物等に関連性の薄いビット状遺構がある中で、特筆すべき欄列状遺構を検出した。周溝内北東部より東西に延び、長軸70cm、短軸40cmと南北に長い楕円形をなし、各ビット間隔約30cmである。同様の遺構が、平成元年度に調査した福音小学校構内遺跡〔武正良浩 1991〕より確認されていることを付記しておく。周溝と欄列については、明確な回答が得られず今後の課題とする。

出土遺物は、各層ともに時期的なまとまりが見られず、また定説とされている本墳築造時期5世紀末～6世紀初を裏付けられるものは確認できなかった。よって周溝内出土土器より本墳の時代設定は困難ではあるが、一方では鉄斧などの鉄器類を検出し本墳との直接関連を伺わせるものも出土しているため、今後、主体部の調査の機会に明確なものとしたい。

### 〔文献〕

- 岸 郁男・森 光晴・長井敬秋 1972『三島神社古墳』松山市教育委員会  
武正良浩 1991『福音小学校構内遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会  
西尾幸則 1986『畑寺竹ノ谷古墳群』『愛媛県史 資料編』愛媛県史編纂委員会  
森 光晴 1986『東野お茶屋台古墳群』『経石山古墳』『愛媛県史 資料編』愛媛県史編纂委員会

### 遺物観察表（作成 大森一成）

#### (1) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎上・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1～4) 多→「1～4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

遺物観察表

●表62 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・造文	調 整		胎 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
1	甕	口径(28.5)	沈没 口縁部にキズミ目。	ココナテ (口縁部)	根端広版 ココナテ (口縁部)	石・長(1-3) ○		88
2	甕	底径 4.5	やや上げ底。	ナテ	磨減のため不明 根端広版	石・長(1-1) ◎		88
3	甕	口径(22.6)	口縁端部に沈没を一乗め くらす。	ココナテ (口縁部)	ココナテ(口縁部-口縁部) ハケ (口縁部)	石・長(1-4) 金 ○		88
4	甕	底径 5.3	平底。	ナテ	根端平底	石・長(1-1) ○	磨減	88
5	甕	底径 (7.2)	平底。	磨減の高調整不明	ナテ	石・長(3) ○		
6	甕	底径 7.35	平底。	磨減の高調整不明	磨減の高調整不明 根端平底	石・長(1-4) ○	出基	88
7	坏蓋 (つよみ)	径 3.5	つまみ中央部分はくぼみ 中心は失っている。	指ナテ へう張り調整		石・長 ◎		88
8	坏蓋	口径 (1.5)	口縁部は外反し、口縁端 部にて向直。	口縁部は丸くナテ上げ ココナテ	ココナテ	石・長(1) ◎		88
9	坏身	口径(10.8)	口縁部内は内湾し先張り する。	口縁部丸くナテ(内外面) 口縁部ココナテ	ココナテ	石・長(1) ◎		88
10	坏身	口径 (8)	受部上面に軸かと思われ るものが付着。	口縁部ココナテ	ココナテ	石・長(1.5) ◎		
11	甕	口径(14.8)	口縁端部に沈没を一乗基 す。	口縁部～口縁端部にココ ナテ (内外面)		石(長1-2) △		88
12	甕	残高 9.0	坏部(片)残存。	ハケ (4本/1cm) ナテ	根端平底調整	石(長1-2) △		88
13	高坏	残高 4.7	受部、上面に凹線2条。	口縁部ココナテ へう張りナテ		石・長(1) ◎		
14	高坏	口径 (16)	二角透かし。	ココナテ	ココナテ	石・長(1) 金 ◎		
15	瓶	口径 (15)	口縁部(片)残存。	口縁部はココナテ 口縁部-体部は縦方向のナテ	口縁部はココナテ 口縁部-体部は縦方向のナテ	表 ◎		
16	瓶	口径(15.8)	口縁部(片)残存。	磨減の角不明	ナテ	石・長 密 ◎		88
17	皿	口径 (8)	底部(片)残存。	磨減のため不明	磨減のため不明	石・長 密 ◎		88

経石山古墳

出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土成	備考	図版
				外面	内面			
18	皿	直径 6.9		磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・長 全 ○		88
19	皿	口径 9	器縁による糸取り	磨滅のため不明	口縁部ココナテ	赤 ○		88
20	皿	直径 5.2	高台 断面三角形	ナテ	磨滅のため不明	石・長(1) 全 ○		88
21	皿	直径 (7.6)	高台 断面三角形	高台 ココナテ	ナテ	赤 ○		
22	皿	直径 6	高台 断面近方形	高台 丸くナテ仕上げ	磨滅のため不明	石・長(1) 全 ○		
23	皿	口径 (9)	口縁部片残存	ナテ	ナテ	赤 ○		
24	皿	口径 9.1 器高 1.4	口縁部片残存	ナテ	ナテ	赤 ○		
25	皿	直径 5	高台 断面三角形	ナテ	ナテ	石・長 全 ○		88
26	皿	直径 (4.6)	高台 断面近方形	指ナテ	ナテ	石・長(1) 全 ○		
27	皿	直径 (5.4)	高台 断面近方形	高台 ココナテ	ナテ	石・長(1) ○		88
28	皿	直径 (4.8)	高台 断面近方形	高台 つまんでナテ	ナテ	赤 ○		88
29	皿	直径 (4.6)	高台 断面近方形	高台 ココナテ	ナテ	石・長(1) ○		88

●表83 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
30	弁		鉄製	6.0	4.0	2.6	107.1		88
31	平根匙		鉄製	7.5	2.6	0.6	24.1		88
32	針		鉄製	5.7		0.4	3.7		88

第 10 章

エダ マツ  
枝 松 遺 跡

— 3 次 調 査 —



## 1. 調査の経過

### (1) 調査に至る経緯

1989（平成元）年6月、株式会社エス・アイ・ビー（柳原敏宣）より松山市枝松3丁目310-1地内における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『83枝松遺物包含地』内にあたり、周知の遺跡として知られている。同包含地内ではこれまでに、弥生時代後期の集落関連遺構と遺物を検出している東本遺跡がある。周辺地域には、本調査地北東約1kmの地点に、弥生時代前期から中世までの集落関連遺構を検出している樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）〔宮本一夫 1989〕や、弥生時代後期から古墳時代の複合遺跡である樽味立派遺跡・樽味高木遺跡〔梅木謙一 1989〕などがある。東接する丘陵地には、本調査地東南東約1kmの地点に経石山古墳（前方後円墳）〔森光晴 1986〕や三島神社古墳〔岸・森・長井 1972〕などがある。また本調査地南西部には釜ノ口遺跡〔岸・長井・大山 1973〕など弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡がある。

1989（平成元）年8月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生土器・土師器を含む遺物包含層と遺構（柱穴3基・落込み1基）を確認した。

この結果を受け、文化教育課・株式会社エス・アイ・ビー二者は遺跡の取扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は弥生時代から古墳時代の当地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、株式会社エス・アイ・ビーの協力のもと1989（平成元）年10月5日に開始した。



第130図 調査地位置図 (S=1:5,000)

## (2)調査組織

調査地 松山市枝松3丁目310-1

遺跡名 枝松遺跡3次調査

調査期間 野外調査 1989(平成元)年10月5日～同年10月28日

調査面積 348㎡

調査委託 株式会社エス・アイ・ピー 柳原敏宣

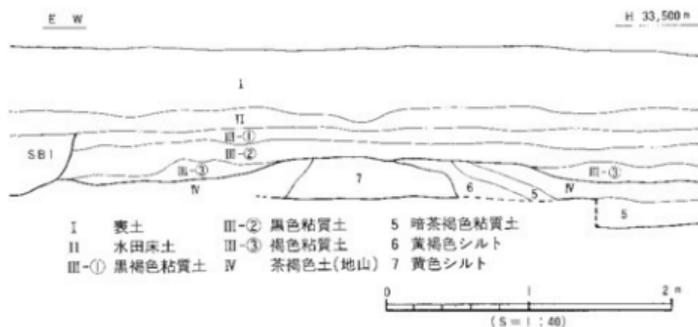
調査担当 調査員 梅木 謙一

調査員補 宮内 慎一

作業員 宮脇 和人、古屋 明寿、梅木 正則、岸 武弘、藤村 英樹、高橋 恒、  
 山本 圭、原田 英則、安永 浩二、志賀 夏行、吉田 智広、山本 好枝、  
 松本美知子

## 2. 層位

本遺跡は石手川扇状地上の標高33.5mに立地している。調査区は調査以前は耕地整備された水田であった。基本層位は、第I層表土、第II層水田床土、第III層黒褐色～黒色粘質土、第IV層茶褐色土である。第I層及び第II層は近現代の造成工事により地表下50～60cmまで開発が行われている。第III層は遺物包含層であり、調査区ほぼ全域でみられる。北から南へ向けて緩傾斜をなし、厚さ50～60cmの堆積で弥生土器・土師器を包含する。第IV層は無遺物層であり地山と呼ばれるものである。第IV層上面の地形測量では調査区北側が高く漸次南側に向けて緩傾斜をなしている。他に、調査区南西隅にて第IV層下に火山灰の堆積がみられた。

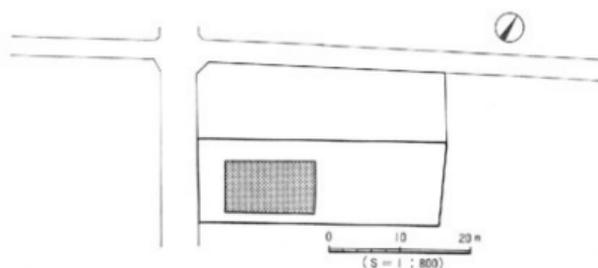


第131図 南壁土層図

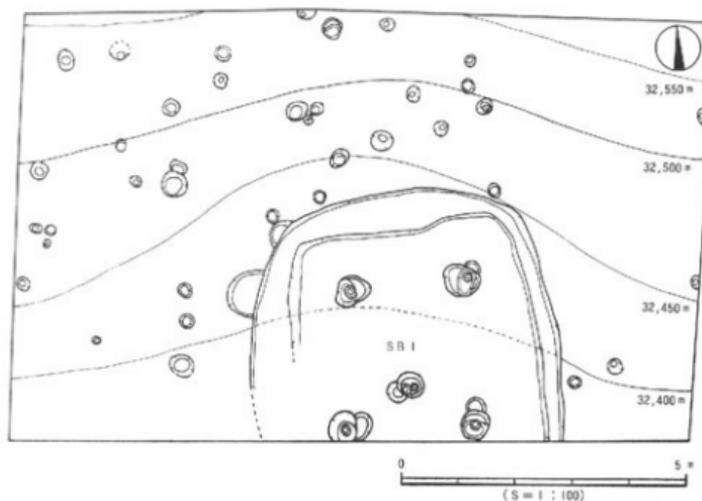
### 3. 調査の概要 (遺構と遺物)

遺構は第Ⅲ層中及び第Ⅳ層上面での検出である。第Ⅲ層中にて竪穴式住居址(ベッド付設)1棟、第Ⅳ層上面にて柱穴49基(住居址内9基を含む)を確認した。

遺物は遺構及び第Ⅲ層包含層からの出土であり、第Ⅲ層内からは弥生土器・土師器が混在して出土した。住居址内からは弥生土器のほか石器類として石庖丁が出土したが、各柱穴内からは遺物の出土はほとんどみられなかった。



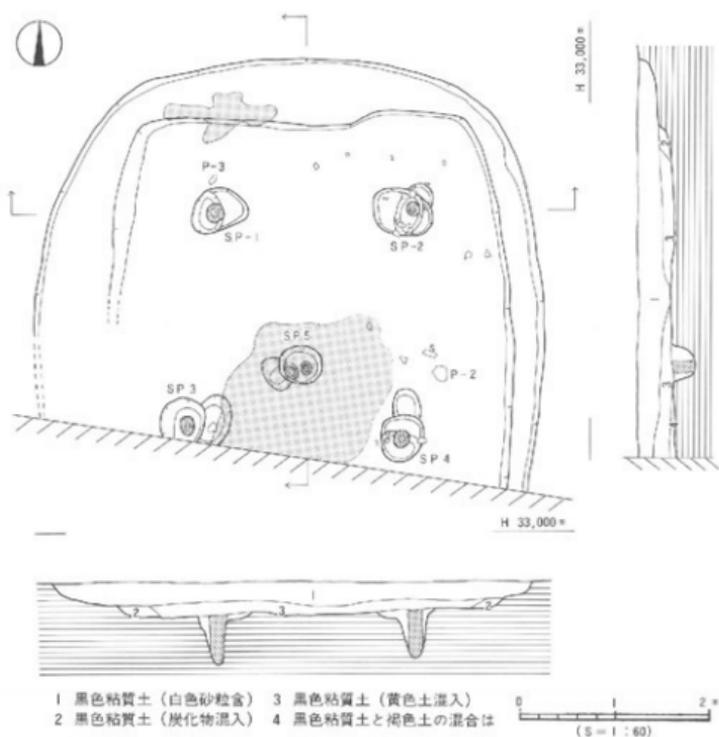
第132図 調査地測量図



第133図 遺構配置図

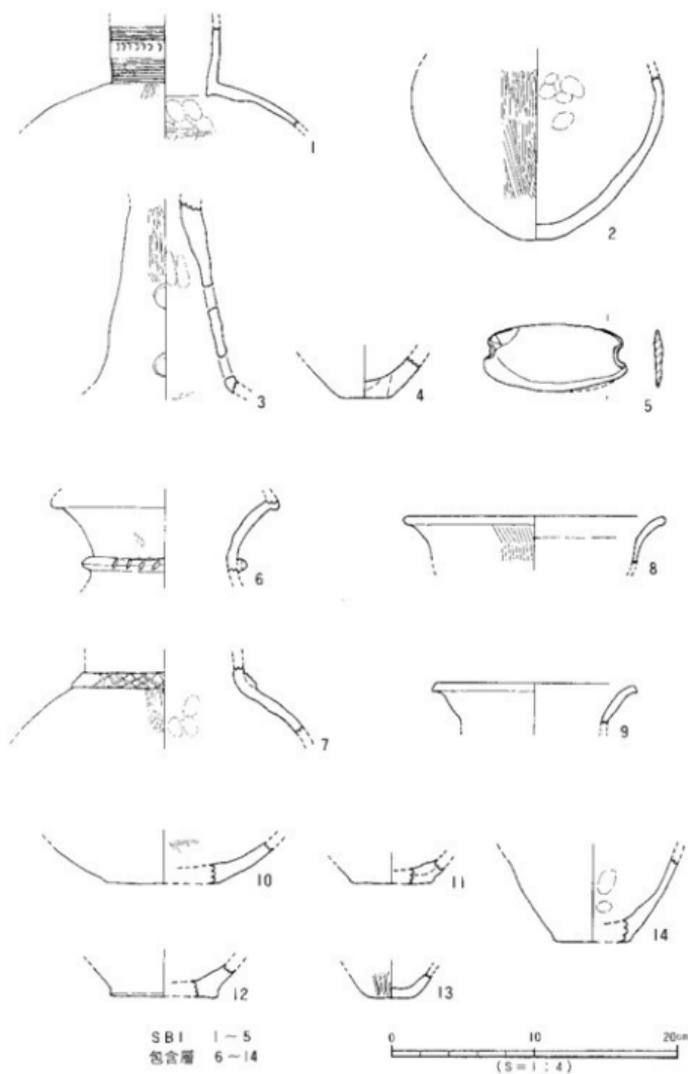
## SB1号住居址 (第134図)

調査区南側中央部に位置し、住居址南半部は調査区外へ続く。平面形は検出面から想定すると隅丸方形を呈すると考えられ、規模は現存東西幅5.4m、南北幅4.2m、壁高は検出面から約30cmを測る。床面は平坦で比較的硬質である。覆土は黒色粘質土であるが、床面付近にて一部黄色土の混入がみられる地点がある。主柱穴はSP1・2・3・4の4本を確認したが、住居址内に同規模の柱穴SP5があり、5本柱の可能性も考えられる。各主柱穴は円～楕円形で径40～70cm、深さ40～50cm、柱穴間は220～230cmを測り、柱痕径は12～15cmを測る。また各主柱穴とも深さ5～7cm程度の円～楕円形の柱穴を伴っている。内部施設としては、周壁に沿って幅65～70cm、厚さ15cm程度の貼り付け（一部削り出し）のベット状施設を付設している。掘り込みの炉は未検出ではあるが、住居址南側柱穴間の中央部床面付近にて、徑



第134図 SB1 測量図

調査の概要



第135図 出土遺物実測図

150cmの範囲に炭化物の集中がみられた。

遺物は床面付近及び覆土中からの出土であり、床面にて甕の底部（P2）や、円孔のある高環の脚部片（P3）を、覆土中より弥生土器片と石燈丁1点を検出した。出土遺物等から本住居址は弥生時代後期後葉に位置づけられるものである。

第135図の1～5はS B 1号住居址、6～14は第Ⅲ層包含層からの出土遺物である。

#### 4. 小 結

今回の調査において弥生時代後期の竪穴住居址1棟、柱穴49基、他に弥生土器・土師器を含む遺物包含層と火山灰を確認することができた。S B 1号住居址は、4本柱を持った1辺約4mの方形住居址にベット状の造り出しを設けた構造となっている。本調査区周辺においては、桑原高井遺跡や東木遺跡で検出された住居址に、時期や規模・規格等で関連性が強く、当地及び周辺地域の弥生時代後期における集落の広がりや、同集落の継続性を裏付けする好資料であるといえるだろう。

また、当地周辺において火山灰は、樽味四反地遺跡や桑原西稲葉遺跡1次調査（梅木謙一1989）で確認されており、本調査検出の火山灰は、その出土状況や色調より同様のA T火山灰であると考えられる。石子川扇状地左岸には、このA T火山灰が広く分布しているようである。

#### 〔文献〕

梅木謙一 1989「樽味四反地遺跡」「樽味立浜遺跡」「樽味高木遺跡」「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ」

松山市教育委員会

岸 郁男・森 光晴・長井数秋 1972『三島神社古墳』松山市教育委員会

岸 郁男・長井数秋・大山正風 1973『釜ノ口遺跡』松山市教育委員会

宮本一夫 1989『樽味・鷹子遺跡の調査』愛媛大学考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室

森 光晴 1986『鉢石山古墳』『愛媛県史 資料編』愛媛県史編纂室

#### 遺物観察表（作成：水口あをい）

(1) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( )：復元推定値

形態・施文欄 上器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( )中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1～4)多→「1～4mm程度の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

調査の概要

●表64 S B1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
1	壺	胴径 7.5	胴部に縞筋文を6条以上と9条筋しその間に半数竹葉文を一列施す。	㊦ 施文 ㊧ ヘラミダキ	㊨ ナデ ㊩(上) ナデ ㊪(下) ハケ	密(長1-2) ○	黒底	91
2	壺	底径 2.3	胴部の最大径に上部にあり、底部は不安定なものである。	㊫(上) ハケ ㊬(下) ヘラミダキ ㊭ 木炭粉	ナデ	石・長(1-2) 全 ○		91
3	高杯	残高 13.6	中空の円柱形で1.6cm大の内孔を2段有。	ハケ ヘラミダキ	㊮ ナデ ㊯ ハケ	密 ○		91
4	壺	底径 3.0	不安定な平底。	ナデ	ナデ	石・長(1-2) ○		

●表65 S B1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
5	石地丁	ほぼ完形	緑泥片岩	9.8	4.7	0.6	47.1		91

●表66 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土成	備考	図版
				外 面	内 面			
6	壺	胴径 11.0	胴部に断面二角形の凸部を貼付け割目を施す。	㊰ ナデハケ	磨減のため不明	石・長(1-2) ○		
7	壺	胴径 11.8	底部に内径長の凸部を貼付け割傷文字状に押圧文を施す。	㊱ ナデハケ ㊲ 凸部文 ㊳ ナデハケ	ナデ	石・長(1-2) ○		
8	鉢	11径 18	胴部内面に横をもち、口縁部は丸く仕上げる。	㊴(上) ヨコナデ ㊵(下) タテハケ (1本/1cm)	㊶(上) ヨコナデ ㊷(下) ナデ	密・全 ○		
9	壺	口径 13.7	口縁部はナデによりわずかに縮製され下方に張り出す。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1-6) ○		
10	壺	底径 7.4	安定した平底。体部へは大きく外反しながら立ち上がる。	磨減のため不明	ハケ (9本/1cm)	石・長(1-3) ○		
11	壺	底径 5	平底。外反して立ち上がる。	磨減のため不明	ナデ	石・長(1-3) ○		
12	壺	底径 7.2	やや上げ底状の底状。	磨減のため不明	磨減のため不明	石・長(1-2) ○		
13	壺	底径 3.0	不安定な平底。体部へは内湾ぎみに立ち上がる。	ヘラミダキ	ナデ	石・長(1-3) ○	黒底	
14	壺	底径 5.2	平底。体部へはやや内湾ぎみに斜上方へ立ち上がる。	磨減のため不明	ナデ	石・長(1-2) ○		

# 第11章 松山市桑原地区におけるテフラ分析調査

古環境研究所 早田 勉

## 1. 分析の目的

松山市とその周辺では、ガラス質火山灰の堆積が認められる。ここでは、遺跡の発掘調査で認められた火山灰層について、テフラ検出分析を行ってその特徴を明らかにする。そして特徴から、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラとの対比を行い、テフラの起源を明らかにする。分析の対象とした資料は、樽味四反地遺跡、西稲葉遺跡1次調査、枝松遺跡3次調査(以上各1点)、釜ノ口遺跡7次調査(2点)で採取された合計5点の試料である。

## 2. 分析方法

分析は、次の手順で行われた。

- (1) 試料20gを秤量。
- (2) 超音波洗浄装置により、泥分を除去。
- (3) 80°Cで恒温乾燥。
- (4) 実体顕微鏡下で、特徴を観察。

## 3. 分析結果

### (1)樽味四反地遺跡

火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは透明で、平板状のバブル型ガラスに富む。バブル型火山ガラスには、ごく少量であるが褐色がかかったバブル型ガラスも認められる。また軽石型ガラスも認められる。含まれるガラスの最大径は、0.72mmである。最大4mmの岩片も、少量含まれる。さらにごく少量であるが、重鉱物として黒雲母が含まれている。

### (2)桑原西稲葉遺跡1次調査

火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは透明で、平板状のバブル型ガラスに富む。バブル型火山ガラスには、ごく少量であるが褐色がかかったバブル型ガラスも認められる。また軽石型ガラスも認められる。含まれるガラスの最大径は、0.62mmである。さらにごく少量であるが、重鉱物として黒雲母が含まれている。

### (3)枝松遺跡3次調査

火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは透明で、平板状のバブル型ガラスに富む。バブル型火山ガラスには、ごく少量であるが褐色がかかったバブル型ガラスも認められる。また軽石型ガラスも認められる。含まれるガラスの最大径は、0.53mmである。重鉱物として、

黒雲母や斜方輝石がごく少量含まれている。なお、ほかに最大径 8 mm の岩片が認められる。

#### (4) 釜ノ口遺跡 7 次調査 [高尾・真木 1991]

11層には、火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは透明で、平板状のバブル型ガラスに富む。バブル型火山ガラスには、ごく少量であるが褐色がかったバブル型ガラスも認められる。また軽石型ガラスも認められる。含まれるガラスの最大径は、0.58mmである。重鉱物として、黒雲母がごく少量含まれている。なお、ほかに最大径 9 mm の岩片が認められる。

一方、13層にも火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは透明で、平板状のバブル型ガラスに富む。また軽石型ガラスも認められる。ただし上位の11層に比較して、若干軽石型の占める割合が大きい。バブル型火山ガラスには、ごく少量であるが褐色がかったバブル型ガラスも認められる。含まれるガラスの最大径は、0.62mmである。重鉱物として、黒雲母や角閃石がごく少量含まれている。

## 4. 考 察

樽味四反地遺跡、桑原西稲葉遺跡 1 次調査、枝松遺跡 3 次調査、釜ノ口遺跡 7 次調査で採取された 5 試料には、いずれも透明のバブル型火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの色調および形態から、この火山ガラスは約 2.1-2.2 万年前に南九州の給良カルデラから噴出した始良 Tn 火山灰 [A T 町田・新井 1976] に由来するものと考えられる。火山ガラスが多く含まれることから、特に樽味四反地遺跡、桑原西稲葉遺跡 1 次調査、枝松遺跡 3 次調査、釜ノ口遺跡 7 次調査 11 層の 4 試料はおそらく A T の純層と考えてよいと思われる。また、釜ノ口遺跡 7 次調査 13 層は、後述の大隅降下軽石層に対比される可能性がある。いずれの試料でも認められた黒雲母は、基盤岩からの混入物である可能性が示唆される。ただし斜方輝石や角閃石については、直接マグマに由来する「本質物質」かも知れない。

## 5. おわりに

さて、テフラが 1 次堆積か否か、また純層か否かの最終的な判断には、野外での観察結果が重要な資料となる。たとえば A T については、南九州においての A T の直下に A T に先行して噴出した大隅降下軽石 [Kobayashi et al. 1983] の存在が知られている。この大隅降下軽石の噴火は非常に大規模で、その噴火で噴出したテフラは 93km にも達する。この量は、これまで知られている日本列島における軽石噴火(プリニー式噴火)の中で、支笈第 1 軽石(Spfa-1) に次いで 2 番目の規模である [Hayakawa, 1985]。大隅降下軽石層と入り戸火砕流に作る A T との間には、数ヶ月以下のごく短期間の時間間隙が存在すると考えられている (たとえば、荒牧 1983)。しかし、両者の間に土壌などは認められず、時間指標として考えた場合、この時間間隙はほとんど考慮しないでもよいものと思われる。

大隅降下軽石の層厚は、始良カルデラから約60km離れた宮崎市付近でも50cm程度あり、300kmほど離れた松山市付近でも肉眼で確認できる可能性が大きい。さらに四国地方から中国地方にかけての全域で、このテフラがA Tの下位に認められる可能性も考えられる。このテフラがA Tの下位に存在する場合には、大隅降下軽石およびその上位のA Tが擾乱作用を受けていないと判断できる。これらの条件が整って初めて、1次堆積のテフラの純層と認めることができるのである。以上のことから、試料採取に先だって野外調査を行い、層序や層相について丁寧に記載しておく必要がある。

〔文献〕

- 荒牧重雄 1983 始良カルデラと戸火砕流。月刊地球 5, P.83-92
- Hayakawa Y. 1985 Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. 60, P.567-592.
- Kobayashi T, Hayakawa Y. and Aramaki S. 1983 Thickness and grainsize distribution of the Osumi pumice fall deposit from the Aria caldera. Bull. volcanol. Soc. Japan, Ser.2 28, P.129-139.
- 町田 洋・新井房夫 1976 広域に分布する火山灰 - 始良T n火山灰の発見とその意義 - 科学, 46, P.339-347.
- 高尾和兵・真木 潔 1991 「釜ノ口遺跡7次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報III』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

## 第12章 石手川水系に於ける旧石器文化

重松 佳久

### 1. はじめに

石手川水系に於ける旧石器文化の研究は、現在皆無に等しく流域としての全体把握すら意味を持たない状況にあるかもしれない。

しかしながら、石手川水系は、幾枚かの洪積世河岸段丘をもち松山平野を貫流する主河川流域であることから、文化層の存在は、全く否定されうるべきものではなく洪積台地端部、埋没段丘等に残る旧石器文化の痕跡の確認作業をあらゆる手段を用い進めて行くことに問題解決の方向性が内在されるものとする。

瀬戸内の旧石器文化研究は、喜田貞吉によって国府遺跡の砂礫層下から検出されるとした大型粗石器論争によって始まり、岩宿遺跡発見以後の日本列島各地での旧石器時代遺跡の発見とあまって、全国的風潮の中での鎌木・高橋両氏による石器群の編年の確立がなされた。〔鎌木・高橋 1965〕しかしながら、以後の調査面積の拡大とともに遺跡群の構造的理解の段階に至っては、内在される矛盾が松藤氏らの二上山山麓遺跡群の精力的な調査によって示唆されるに至り、量的保証を持つ原産地遺跡と周辺遺跡群の理解等をはじめ遺跡相互の構造的な研究へと展開されつつある。

このような瀬戸内の旧石器文化研究の動向の中で、当地の旧石器文化研究は散発的資料紹介の域にあり、当時の社会的背景を考える上でも遺跡分布を流域として再考すべき状況にあるといっても過言ではない。あえて絶対的費料の希薄さの中で、平井氏の論功をかりて考察を加えてみたい。

### 2. 石手川水系に於ける旧石器時代遺跡分布

現在、確認されている旧石器時代遺跡は、山地域から沖積低地に至る流域の高位・中位・低位の河岸段丘沿いに検出されている(表67)。こうした遺物群の検出例は、後世の遺構・遺物群中にわずかに混在するといった認識で処理されている状況にあり、遺跡群としての問題意識には至っていない。しかしながら、現在詳細に資料整備を行うに至っていない状況ではあるが、石手川水系左岸の小野川との接点において旧石器時代遺跡群の安定した集中をみる事ができる。

このように集中する遺跡の成立過程を復元すると形式的時間差を持つと考えられる遺物も含まれてはいるが、これらの集中は、単に検出例のみに起因するものではなくこの地域が、安定的な遺跡立地の環境にあつたものと推定される。このような松山平野に於ける旧石器時代遺跡群の集中を仮に水系を軸とした人間集団の行動の起点的立地としてとらえ、同水系上流域に位置する山間部の惣部遺跡に見られる遺跡立地を季節移動に伴う移動的拠点もしくは、

捕獲遺跡として位置づけることも可能と考えられる。

また、同一遺跡において形式的・時間的差異をもつ遺物群の検出は、当遺跡の立地環境が時間を越えて、当時の水系、低地を背景とした人間行動の何等かの視点として活用されたものとする。

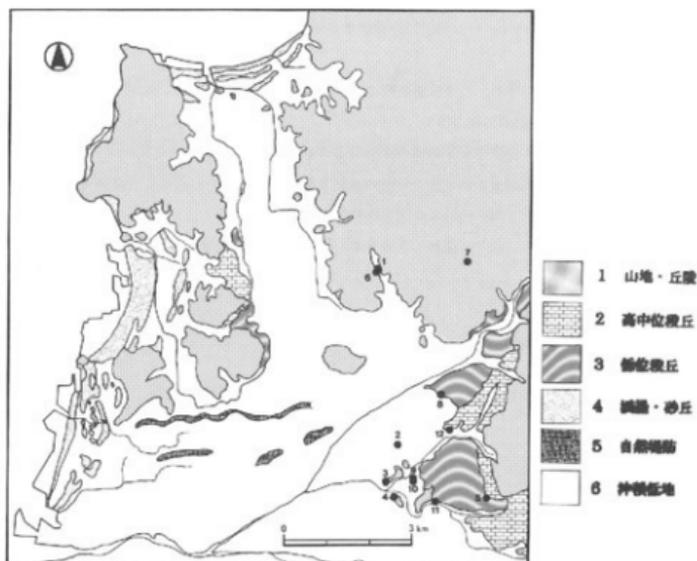
あえて詳細な遺跡・遺物群の検討の中で、処理されるべき内容を立地論のみで、提起することに、大きな問題を内在することになりつつも、こうした集団の把握と空間的生活間の設定は、遺跡立地環境に因るところが大きく先駆的には、稲田(稲田孝司1990)、大泰司(大泰司紀之1990)の旧石器文化研究者らによって取り組まれ石材原産地と消費地関係等、集団の規模、定着度、分散移動の頻度、季節性などさまざまな問題提起がなされており、今後、早急に当地域における旧石器文化研究の視点として詳細な資料の蓄積と資料整備を踏まえ取り組まなければならない問題と考える。

### 3. まとめ

前述したように当地域の旧石器文化の把握は、現在の考古資料では、その社会を復元する事は困難な状況にあり、その方向性として考古学的資料群の実証が、量的な保証を得ていない現在、当地域に於ける地質・地理を踏まえた第四紀研究に大きな成果を見いだす事ができる。

現在、わが国の主要な沖積扇状地の形成時期は、沖積世(完新世)ではなく最終氷河期の最盛期または、それに至る低温期であったことが明らかになりつつあり(井関弘太郎1988)、また第四紀末期における日本の扇状地礫層の堆積期をおおまかに堆積傾度により概観すると約20,000年前、約9,000年前、約3,000年前の3期(斎藤1988)に大きく分かれることが指摘されている。こうした第四紀末期の沖積平野・沖積層の形成期における自然環境の把握は、当地域の遺跡環境を類推するうえで欠くことのできない研究作業であり、まさに平井氏の「松山平野、石手川扇状地の地形と沖積層・追記」[平井幸弘1990]は、当地域における旧石器時代の自然環境のあり方を示唆する作業そのものと考えられる。さらに氏の広域テフラに対する視点は、安定した層位を持たないと考えられていた当地域の旧石器文化研究に、層位学的・形式学的同時性の比較検討の可能性を導き出しているものと考えられ、今後、扇状地地形における基本層序、樹皮遺跡、樹皮凹反地遺跡、桑原西稲葉遺跡、枝松遺跡3次調査地、釜ノ口遺跡7次調査地(高尾・真木1990)に見られるA-T火山灰検出等の多角的なデータの蓄積が期待されるものである。

また、本稿の執筆にあたり小笠原善治氏(松山市立埋蔵文化財センター)の御協力を頂き記して感謝の意としたい。



第136図 石手川扇状地及び周辺の地形分類図と遺跡立地  
〔海津(1982)を一部改変〕

●表67 石手川水系旧石器時代遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	標高	出土遺物
1	丸山遺跡	松山市祝谷町六丁目	90~120m	?細石核、細石刃、掻器、台形様石器、刮片・刮片屑
2	笹ノ口遺跡	松山市小坂四丁目	28m	ナイフ形石器、有舌尖頭器
3	天山天王ヶ森	松山市天山町	30m	ナイフ形石器
4	東山霧ヶ森	松山市東石井町東山	43m	ナイフ形石器(国府形)
5	五郎兵衛遺跡	松山市平井町	73m	ナイフ形石器、他
6	祝谷六丁場遺跡	松山市祝谷六丁目	60m	石核、他
7	伊古惣部遺跡	松山市下伊台町	140m	ナイフ形石器
8	樽味四反地遺跡	松山市樽味四丁目	39.5m	AT火山灰
9	筋違F遺跡	松山市福音寺	30m	ナイフ形石器(国府形)
10	筋違H遺跡	松山市福音寺	30m	ナイフ形石器(縦長刮片素材によるナイフ形石器)
11	久米高畑遺跡5次	松山市南久米町・米住町	35m	細石器
12	緑石山古墳	松山市桑原四丁目	40m	細石器

## 石手川水系に於ける旧石器文化

### (参考文献)

- 井岡弘太郎他 1988 「日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究」
- 平井 幸弘 1990 「松山平野、石手川扇状地の地形と沖積層」『文京遺跡8、9、11次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告書2
- 稲田 孝司 1990 「日本海東西沿岸地域の旧石器文化」『第四紀研究29巻第3号』
- 大森司紀之 1990 「旧石器遺跡の位置と狩獣の季節移動ルートに関する考察」『第四紀研究29巻第3号』
- 鎌木義昌・高橋 護 1965 「瀬戸内地方の先石器時代」『日本の考古学 1』
- 高尾和長・真木 潔 1991 「釜ノ口遺跡7次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

## 第13章 桑原地区の成果と課題

昭和63年～平成元年度の27年間、松山市桑原地区内では8ヶ所の発掘調査が実施され、主として弥生時代～古墳時代の集落関連遺構を多数確認するに至った。

### 旧石器～縄文時代

本書掲載の8遺跡の調査中、4地点においてA T火山灰を確認することができた〔第10章 早田畑〕。いずれの事例も、A T火山灰を包含する土層は、A T火山灰以外に砂粒や一部シルトを含んでいる。検出資料は2次堆積の可能性が極めて高いものである。火山灰層の上・下層には考古遺物が包含される事例はなく、A T火山灰層が桑原地区に堆積した年代を確定するに至らなかった。ただし、桑原地区内におけるA T火山灰の堆積には、石手川が大きく作用していることは確かであり、石手川上流域にA T火山灰の1次堆積層と確認できる可能性は高いと考えられる。

石手川中・下流域における旧石器遺物の出土は、現時点において希薄なれど、A T火山灰の確認事例は全く無視することはできず、石手川上流域の調査が充実すれば、良好な資料が確認されるものと考えられる〔第12章 重松伴久〕。

### 弥生時代

前期 樽味立添遺跡、樽味四反地遺跡の東方50～100mには前期前半の集落関連遺構が確認された樽味遺跡がある。樽味立添遺跡からは1点ではあるが、樽味遺跡出土品よりやや時期が下がる前期後半の遺物が出土した。樽味遺跡の集落が継続していたことを示す資料である。また、樽味立添遺跡、桑原田中遺跡より小片であるが各1点、縄文時代晩期末（～弥生時代前期前葉か）の凸帯文采の深鉢片が出土した。これは、桑原地区の遺物としては最古（旧石器文化遺物を除く）のものであり、同地区の集落経営の出現と樽味遺跡の集落系譜を示すものとして注目される。

中期 前葉～中葉の遺構は未検出である。遺物は、本書では未掲載となったが樽味高木遺跡より頸部に多重凸帯を施す変形土器小片が1点出土している。周辺地に、中葉の遺物・遺構があるものと思われる。後葉になると、時期比定される遺構はないが、遺物の出土事例は分布・量ともやや増加し、桑原地区全域に散見される。この地域の中でも、樽味地域周辺はその分布が濃く、集落経営が行われていたことが想定可能な場所である。

後期 後葉以降の好資料が樽味立添遺跡SX2、桑原田中遺跡SK1で得られた。いずれも、一括性の高い遺物でありかつ日常レベルの祭祀行為が知れる資料である。特に、桑原田中遺跡SK1は、遺構平面は円形で、断面形が有段、基底部に小さな凹みがあり、貯蔵穴ないし井戸の可能性がある。遺物は、一括投棄であり下層に変形土器が、上層に高環形土器が検出される傾向にあり、確認された投棄行為が十分に考えられた。平野内の類似例は、祝谷

アイリ遺跡SK15（後期前半）があげられる。

枝松遺跡3次調査地では、貼り付けにより構築された高床部をもつ竪穴式住居址が検出された。同建築技法は、松山大学構内遺跡SB3（後期前半）、文京遺跡7次調査SB7（後期半）で確認されており、同構築技法認定の追加（認）資料となるものである。

終末～古墳初頭 樽味立添遺跡SB13は、松山平野でも数少ない一括資料を確認した竪穴式住居址となった。桑原地区では、これまでに南部の桑原高井遺跡、桑原稲英遺跡、東本遺跡、枝松遺跡で集落址が確認されている。今回の樽味立添遺跡での事例は、桑原地区内において幾つかの小単位集落が存在することを示唆するものである。

小結 桑原地区の弥生時代は、今回までの調査において、北部域では前期～中期の集落が存在することが、南部では後期後半以降に集落が充実することが明かとなった。

ただし、桑原地内では住居址は検出されるが、墳墓が未検出であり、今後の調査の留意点と研究の課題を提示するものとなった。

#### 古墳時代

前期 樽味立添遺跡SB4出土品は、器種構成・器形が知れる遺物であり、土器編年に使用可能な好資料である。松山平野では、この期の資料は宮前川遺跡、若草町遺跡に確認事例はあるものの土器様相が明確でなく、本資料は平野の土器研究にとって貴重な資料といえる。

中期 樽味立添遺跡、樽味高木遺跡で竪穴式住居址と土壘を確認した。同地点においては、5世紀～6世紀前半にかけて継続的に集落経営が行われていたことが裏付けられた。現在松山平野における須恵器の導入時期と土器様相（器種構成・器形等）は明らかでない。両遺跡の調査では土師器に限りその様相が一部ではあるが明らかとなったものと考えている。今後の同資料の充実を期待するものである。

後期 桑原山中遺跡、樽味立添遺跡を中心に、集落関連の遺構・遺物が確認された。桑原地区内には、前方後円墳である三島神社古墳、経石山古墳、群集墳である東野、畑寺の古墳群が存在する。これ等の古墳と生活址との関係については今回触れなかったが、生活址の資料が充実すると、一地域における集落構造が明らかにできる地域であり、今後の継続的な調査、研究は大いに注目されるものであるといえる。

小結 桑原地区での集落経営が充実していたことを裏付ける資料が得られたことは、北の道後城北地区、南の米住・久米地区の集落動態を考える上で重要な意味をもつと考える。この他、地域における前方後円墳と集落（生活址）の関係が知れる遺跡でもありと考える。

以上、昭和63年～平成元年の27年にわたる桑原地区における埋蔵文化財調査の報告を行った。今回の調査により、弥生～古墳時代の集落址が広域に展開されていることが明らかとなった。道後城北地区、米住・久米地区同様、注意を要する遺跡地域であるといえよう。

松山市文化財調査報告書 第26集

**桑原地区の遺跡** 一本文編一

---

平成4年3月31日 発行

編 集 財団法人 松山市生涯学習振興財団  
発 行 埋蔵文化財センター  
〒791 松山市南斎院町乙67番地6  
TEL (0899) 23-6363  
印 刷 原 印 刷 株 式 会 社  
〒791 松山市山越4丁目8-15  
TEL (0899) 24-8823

---